

ISSN1341-9846

# 語学研究所論集

第21号

2016年

東京外国語大学  
語学研究所

# 語学研究所論集

第21号

2016

## 論文

- ツングース諸語において祖形 \*-ks- が仮定される音対応について  
..... 風間 伸次郎 1

## 特集「情報構造と名詞述語文」

- まえがき ..... 風間 伸次郎 17

## データ：「情報構造と名詞述語文」

- フランス語 ..... 秋廣 尚恵 45  
スペイン語 ..... 川上 茂信, チャビ・アラストゥルエイ 59  
ドイツ語 ..... 成田 節 67  
フィンランド語 ..... 坂田 晴奈 77  
ハンガリー語 ..... 大島 一 91  
トルクメン語 ..... 奥 真裕 101  
アラビア語エジプト会話体 ..... 長渡 陽一 107  
ペルシア語 ..... 吉枝 聡子 117  
ウルドゥー語 ..... 萬宮 健策 125  
ビルマ語 ..... トゥザ ライン, 岡野 賢二 133  
ラワン語マトワン方言 ..... 大西 秀幸 141  
ラオ語 ..... 鈴木 玲子 159  
クメール語 ..... 上田 広美 165  
マレーシア語 .....  
野元 裕樹, アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー 171  
インドネシア語 ..... 降幡 正志 191  
中国語 ..... 加藤 晴子 205  
朝鮮語 ..... 黒島 規史, 崔 正熙 213  
モンゴル語 ..... 山田 洋平 227  
ダグール語 ..... 山田 洋平 237  
ソロン語 ..... 風間 伸次郎 249  
ナーナイ語 ..... 風間 伸次郎 259  
グイ語 ..... 中川 裕 269

## 活動記録

オープンアカデミー教養講座概要 .....	275
定例研究会要旨 .....	279
LUNCHEON LINGUISTICS 要旨 .....	296
語学研究所活動報告 .....	305
所員活動報告 .....	313



### 1.3. 問題の音対応：語中の 2 子音連続 \*-ks-

この節では、本稿で問題とする音対応を示すとともに、本稿の仮説ならびに結論の着地点を示す。

ここで池上 (1989) が次のような語の音対応を基に、祖形 \*-ks- を示している 1 つの音対応がある。

「唾～よだれ」：(Ew) *ǰalsa* || (Ek) *ǰaliksa* || (S) *ǰalikči* || (N) *ǰalsa* || (U) *ǰalehæ* || (Oc) *diloksa* || (Na) *ǰiloksa* || (Ul) *ǰeelčoksa* || (Ut) *ǰeluska*

「走る」：(Ew) *tuus-* || (Ek) *tuksa-* || (N) *toksa-* || (U) *tukeæ-* || (Ut) *tuksa-*

(Ew) *s* || (Ek) *ks* || (S) *kč~tč* || (N) *ks-s* || (U) *k~h* || (Oc) *ks* || (Na) *ks* || (Ul) *ks* || (Ut) *ks~sk* || (M) - 祖語 \*ks  
(池上 (1989:1074-76)より。略号を含め、若干改変した。太字および囲み線は筆者による。なお(M)の対応形については示されていない)

池上 (1989:1074) は、ツングース諸語における語中の 2 子音連続全般を検証しているが、そこで祖形としてあげている  $-C_1C_2-$  の  $C_1$  は、破裂音、鼻音、流音、接近音のいずれかであって、摩擦音はない。他方、 $C_2$  が *s* である祖形には、\*-ls-, \*-ms-, \*-ns- などが再構されている (cf. 風間 (1996))。したがって、-sk- という連続はツングース諸語一般においてきわめて例外的なものであり、\*-ks- > -sk- の転倒が起こったことはおそらく疑いが無い。

ただ、比較言語学の原則から言って、1 つの祖形に対してある言語で 2 つの音形が対応するのは問題だが、ここでは 4 つの言語に 2 様の対応が観察される。特にウイльта語では祖形の \*-ks- から一部の語では -sk- への音位転倒が起き、一部の語では起きなかったと解釈されていることになる。

したがってここでは 3 つの仮説が考えられる：

- ① (何らかの一定の条件下でのみ) 転倒が起きた。
- ② 音変化ではなく、-sk- を持つ語を借用したか、他言語からの影響で -sk- が生じた。
- ③ そもそも祖形は 2 つあって、一部の言語ではそれらは合流した。

先行研究では、①に関して「一定の条件」が提案されているものの、それには問題がある。

本稿では、この音対応およびその祖形について再考する。結論としては、主にニブフ語からの直接の借用、ならびにニブフ語からの影響によってウイльта語およびウルチャ語の -sk- が生じたことを示す。

## 2. 先行研究

Benzing (1955: 29) は、まずこの音対応について次のように述べた。

エウエンキー語及びその他の *-ks-* は一般にウデヘ語では *-k-* もしくは *-h-* と対応し、満洲語では *-ks-* と対応する。ところが一方でウデヘ語では *-k-* ではなく、たいてい *-h-* が対応する一群の単語がある。その際満洲語では *-ŋg-* が対応する (以下で P.T. は Proto-Tungus を示す、筆者註) :

- (1) (P.T.) \**aksa-* 「腹を立てる」, (Ek) *aksa-* (U) *ahæ-* 「追跡する」<sup>1</sup>  
 (2) (P.T.) \**siiksə* 「夕方」, (Ek) *siiksə*, (U) *siikja*, (Oc) *siksə*, (Na) *siksə*, (Ma) *siiksə*;  
 (3) (P.T.) \**suuksa* 「ひも」, (Ek) *suksa*, (U) *sukja*, (Oc) *suksa*, (Na) *suaksə*;  
 (4) (P.T.) \**səksə* (\**səgsə*) 「血」, (Ek) *səksə*, (U) *səkja*, (Na) *səaksə*, (Ma) *sənggi*;  
 (5) (P.T.) \**siləksə* (\**səgsə*) 「露」, (Ek) *siləksə*, (U) *silija*, (Oc) *siləŋsə*, (Na) *siləmsə*,  
 (Ma) *silənggi*;  
 (6) (P.T.) \**jaliksa* 「唾」, (Ek) *jaliksa*, (U) *jalehæ*  
 (7) (P.T.) \**xəəksə* 「そで」, (Ek) *uuksə*, (U) *ukihæ*, (Na) *xuəksə*;  
 (8) (P.T.) \**ximugsə* 「油」, (Ek) *jaliksa*, (U) *imohæ*, (Oc) *imuksə*, (Na) *simuksə*,  
 (Ma) (n) *imənggi*;

(Benzing (1955: 29), 筆者訳による (文字飾り等も), 表記は池上 (1989) のものに統一した)

他方 Benzing (1955) に対する書評である Ikegami (1960) [2001] は、この揺れの原因である条件を音節の位置に求め、次のように述べた。

エウエンキー語及びその他の *-ks-* のうち、第一音節の母音の後のものはウデヘ語で *-k-* と対応する、その際 *-k-* の後の母音 *a, ə* はそれぞれウデヘ語で *æ, iə* となる。ウイルタ語では *-ks-* と対応する。ところが一方で第二音節以降のものはウデヘ語では *-h-* と対応し、後続する母音 *a, ə* はそれぞれ *æ, ə* と対応する。ウイルタ語ではこの場合 *-sk-* が対応する。

(Ikegami (1960) [2001]: 125, 筆者訳による)

Benzing (1955) 自身も「たいてい」としているように、(4) の例において、満洲語が *-ŋg-* を示しているにも関わらず、ウデヘ語で *-k-* で対応していることに注意したい。なおウデヘ語の *-h-* は *-s-* に由来することもわかっている (cf. 「目」(U) *jehæ* || (Oc) *isa(g)* || (Ul) *isal*)。なお Ikegami (1960), Benzing (1955) の両者共に、本稿で問題にするウルチャ語における対応については触れていない。両研究とも、ウルチャ語の語彙等に関する初めてのまとまった資料である Sunik (1985) が刊行されるずっと以前のものであるので、これは致し

<sup>1</sup> これを対応するとみたのは誤りで、(U) *ahæ-* は (Ek) *asa-*, (Na) *xasasi-* などと対応する (cf. Tsintsius et al. (1975: 54))。

方のないところである。ウルチャ語を考察対象に含んでこの対応について考察するのは本稿が最初の論考であると考えられる。

### 3. 研究方法

上記の対応が問題となる語彙を各言語の辞書や語彙集により網羅的に拾い出し、その対応を精査する。さらに系統の異なる近隣諸言語においても、類似した意味の語を検討する。

#### 4. III 群の言語における対応の実際について —アムール下流域と上流域での違い—

先行研究には指摘がないが、アムール下流域のネギダル語 (I 群) およびオロチ語 (II 群) には、きわめて散発的ではあるものの、-sk- の順序の子音連続が観察される：(N 上流方言) *nuksi*, (N 下流方言) *nusku* 「犬橇の中央の引き綱」, (Oc) *diləskə* ~ *duluksa* 「唾」, ともに Tsintsius et al. (1975: 246, 509) より。

次に、III 群の諸言語についてみると、アムール中流域のナーナイ語では -sk- の連続がほとんど存在せず、逆に -sk- > -ks- の転倒が起きたとみられるのに対し、アムール下流域のウルチャ語には -sk- を持つ単語がある程度見いだされる（やはり先行研究に指摘はない）。さらにウイльта語に -sk- のあることは先行研究の指摘の通りだが、このウイльта語は系統的にみてウルチャ語に最も近く (cf. 風間 (1998, 2004)), アムール下流域よりサハリンへ進出したものとみられる。以下では III 群の諸言語における -sk- / -ks- について詳しくみる。

#### 4.1. ナーナイ語

Onenko (1980) は約 12,800 語からなる辞典である。その見出し語において -sk- を持つ語は (ロシア語からの明らかな借用語を除くと) 以下の 7 語しか見いだされなかった (他方 -ks- を持つ語は 240 語ほど見つかるのでここには示さない)。

*bilaaski* 「(ふつう白い木綿の) スカーフ」, *kiriiskə* 「杯」, *maskaala*- (=masal-) 「(水が音を立てる)」, *piskəəl*- 「水を浴びせる」, *xoskaala*- (=xosakaala-) 「引っ掻く」, *əskələ*- (=osisi-) 「嫌がる」

しかも *əskələ*- 「嫌がる」を除く 3 例の動詞は、*xoskaala*- (=xosakaala-) とあるので、母音の無声化によって本来この言語に存在しない -sk- の連続が音声的に生じたものと考えられる。なお現時点ではなお十分に解明できているとは言い難いが、筆者がこれまでツングース諸語の音対応を見てきた限りにおいては、このような無声化による母音の脱落はきわめて珍しい散発的な現象であると思われる。

さらに「猫」 (< 露 *koshka*) は *kuksə* の形で記載されている。したがってこの言語で

は少なくとも一部の語で -sk- > -ks- の転倒が起こったことが考えられる。このようにナーナイ語では、本来的であり圧倒的に現れる -ks- によって、借用語もナーナイ語の音体系に合わせて音変化を起こしたものとみることができる。

#### 4.2. ウルチャ語

Sunik (1985) はウルチャ語に関する現時点で唯一の総合的な記述であり、約 7,000 語の語彙集を含んでいる。この語彙集の見出し語から、-ks- を持つ語 102 語、-sk- を持つ語 19 語が見いだされた。この語彙集の見出し語から、語中に -sk- もしくは -ks- を持つ語をすべて集めると以下のようなものである。なお明らかな派生語は派生元の語 1 語のみを示した。biskə 「～ではないか」(おそらく bi-asi=kəə (-asi は否定) のような構成の要素から i の無声化によって生じた形) などは除いた。転倒の起きていないロシア語からの借用語は除いたが、「猫」は kəskə と記載されている。なお下線の語については、次の 4.3. でウイльта語と比較する際に問題とする。

① -sk- を持つもの (全 19 例) : aska (ačka) 「アチチッ (感嘆詞)」, asko(n) 「(戸の近くの) 古い家の隅」, askon daani 「コイマ村の場所の名」, wəsku(n) 「魚皮の加工に使う台木」, wəskə 「服の袖」, ibiskə 「ツバメの一種」, ibiskə xujuni 「女性の服の飾りのバックルの一種」, mongosko 「襟」, nusku 「犬を繋ぐ真ん中の引き紐」, pusku 「家の第一の壁」, pusku nakani 「竈に隣接したオンドルの一部」, pusku tawa 「家の中の竈」, puskə xooli 「モンゴル村にある湾」, pəsku 「アイロン」, usku 「大型の船」, aska 「ダメだ, 不要だ」, kiskin- 「跳ね返って打つ」, piskiču- 「温める」, pəskə- 「驚く, 不思議に思う」

② -ks- を持つもの

これについては、KS-1 : 「～の皮」の意のもの、KS-2 : KS-1 に準ずる意味のもの、KS-3 : その他の名詞や、形容詞、動詞のもの、の 3 種に分類した。

KS-1. bujuksə 「クマやヘラジカの毛皮」, bočaksa 「アカシカの毛皮」, gasaksama tətua 「(水鳥の頭の毛皮から作った) 子供用の外套の一種」, dawaksa 「サケの皮」, jəlikə 「イトウの皮」, mdaksa 「犬の毛皮」, ɪxaksa 「牛の皮」, koroksa 「カワカマスの皮」, kočokso 「掌のついたキツネやクロテンの毛皮」, mapaksa 「クマの毛皮」, meetaksa 「獣の頭の皮」, muuduksə 「カワウソの毛皮」, monaksa 「スキーに貼る毛皮」, mɔriksa 「馬の皮」, ŋemokso 「コクチマスの皮」, oŋdokso 「クズリの毛皮」, sɔliksa 「キツネの毛皮」, tookso 「ヘラジカの毛皮」, sɪroksa 「野生トナカイの毛皮」, səəpəksə 「クロテンの毛皮」, toksaksa 「ウサギの毛皮」, ənnəksə 「メスの魚の皮」, xɔləksu 「リスの毛皮」, čoolčiksa 「イタチの毛皮」

KS-2. aktaksama「クロテンの皮の外套(古語)」, kočiksa「犬の毛皮製の古いタイプの外套」, meetaksa「革製のベスト」, pərxiksə「ブーツの先端」, saŋmaksə「犬の毛皮製の外套」, juəksə「服の毛皮の縁飾り」, maksə「縄を作るための木の内皮」, saldaksa「古い布の種類」, saŋjaksə「染料にする種類の石」, turəksə「長靴の胴」, tojksə「白樺製のゴザ」, xusəksi「(クマ祭において男が食べる)クマの胴体の前側の部分(古語)」, əəktəksi「(クマ祭において女が食べる)クマの胴体の後ろ側の部分(古語)」,

KS-3. adəlīksə「古い, 使用した網」, aksawo「気を悪くする」, aksačīwo「守ってやる」, aldaksī「無力な, 弱い」, baksī「編んだもの, 束」, dalīksə「袋用布, 雑巾」, aksə(n)「侮辱」, əvdaksə(n)「草原のあまり大きくない部分」, baksə tərənī「古いウルチャの家の真ん中の柱」, belčōksə「ダニ, 小さなクモ」, boksi「偶像」, boorokso「魚の腹肉の干物」, buksə「軟骨」, daksə「くっつける」, duksin-「打つ」, waksə「鼻」, gaksī「片方」, gasaksī「くやしき」, geoksa「アザラシ」, goksī「絹製の女性用服」, guluksə「煤」, dəksu(n)「一つの根からの低木」, enōksə「鼻水」, jaksī=jaksī ta-「歯を見せて笑う」, jaksim nōndosowō「ひどく凍える」, jaksōl「ザクソル氏族」, jēlčōksə「唾」, iwaksə「水の表面の雪」, keeksō「ハチミツ」, ləksəgdə「ちらっと見えて消える様子」, ləksəmdi「房で, 塊で」, ləksər「(毛などが)バサバサの」, muksə「クマ祭用の木の皿」, məksi「バカ」, naksu-「割る」, nīksəja-「(動物が)死ぬ」, nēeksə「膿」, nūuksə「煤, ほこり」, ŋəələksu「臆病な」, oksə「木偶」, oksəkačī-(ōksəkačī-)「侮辱を感じる, 腹を立てる」, puksi(n)「吹雪」, pərgəksu-「試す」, saaksu-「知る」, saksə「霜」, saksī I「カササギ」, saksī II「川や湖の氷の丘」, sīksə「夕方」, sokso「青灰色の水鳥」, suəksə「紐」, səəksə「血」, taksa「魚料理の一種」, toaksa「石灰」, toksa「ウサギ」, təksin-「蒸発する」, təwəksə「黒雲」, təksədək (biwu)「メチャメチャな」, uksu (n)「湿気」, ōksəra(n) (ōksəra(n))「フクロウ」, xoldokso「板」, xumbəksənə-「(シャーマンが)現れる」, čaksī「ハクセキレイ」, čuksə「ベリーの汁」, əksən-「心配する」, əksu (əksu(n))「(霧などの)影」

このようにウルチャ語にも -sk- を持つ語が一定数存在することが分かった。しかも 2 語を除いて大部分が第一音節の母音の後に -sk- を持っている。中には借用語であることが疑われる意味のものもあるが、他方基本的な意味の動詞で次で見るウイльта語の SK-4 に見られた語と対応するものもある。

ここで Ikegami (1960) が示した音節位置の仮説がウルチャ語でも有効であるか検証してみると、3 語を除いて大部分の語が第一音節の母音の後に -sk- を持ち、仮説に合っていないことがわかる(太字の語)。

### 4.3. ウイルタ語

池上編 (1997) は見出し語約 4,500 の辞書であるが、この見出し語から、語中に -sk- もしくは -ks- を持つ語をすべて集めると以下のものであった。明らかな派生語は派生元の語 1 語のみを示した。čaaska 「取っ手のついた茶碗」 (<露: chashka), gumaska 「金」 (<露: bumashka) のようなロシア語からの借用語で、元の音連続の順序を保っているものは除いた (なおその順序は全て保たれており、転倒の起きていたものはなかった)。「猫」は kəskə であった。

さらに下記で、① -sk- を持つものについては、第一音節の母音のあとのものを、② -ks- を持つものについては、第二音節の母音のあとのものを太字で示した。すなわち、太字の語は Ikegami 1960[2001] の示した規則の例外ということになる。

#### ① -sk- を持つもの

これについては後述するように、意味的観点から SK-1: 「～の皮」の意のもの、SK-2: 液体や粉状、雲状のもの、SK-3: 民俗的なもの・やや特殊な意味のもの、SK-4: 一般的な意味のもの、の 4 種に分類した。

SK-1. aminaska 「おすのさかなの皮」, bejšəkə 「くまの皮」, dawaska 1 「さけの皮」, əninəskə 「めすのさかなの皮」, kəerbeskə 「去勢してないおすのとなかいの皮」, məədəeskə ~ məədəeskə 「かわうその(毛)皮」, meetaska 「となかいの頭の毛皮」, munəskə 「スキーのうらににかわではりつけたあざらしの皮やとなかいの皮」, namaska 「めすのとなかいの皮」, ŋindaska 「いぬの皮」, əerəskə 「ますの皮」, pəətəskə 「あざらしの皮」, pəriskə 「くつの底(あごひげあざらしの皮を用いる)」, səpəskə 「てんの(毛)皮」, sireškə 「野生となかいの皮」, suliska 「きつねの(毛)皮」, ulaaska 「飼育のとなかいの皮」, xəjšəkə 「あめますの皮」, tuksaska 「うさぎの(毛)皮」, xaiska 「どんな動物の皮」,

SK-2. siləskə 「露」, indumuska 「なみだ」, jəluska 「よだれ」, paltuska 「かたまつた血」, tamnaska 「霧のけむり, きれぎれの霧」, təwəskə 「雲」, xuməskə 「たばこの灰」

SK-3. askuttu 「いか, たこ(軟体動物)」, əskə 「かわいい」, əskə 「人名(男), 俗称」, laskarja 「かじか」, ŋəskui kəələ 「ごまふあざらしの四歳のもの」, morisku~murisku 「がんじ(川・海にいる魚)」, piskii 「なきうさぎ」, esku 「くしゃみ」, buskə 「軟骨(けだものの)」, dawaska 2 「さけ・ますの孵化場」, ebuski illau(ni) 「先端に木質部をあたまのように残して棒を削り削り花をつけた木幣」, gajaska 「もも(腿)(の肉)」, muskəri 「樹木の種類(どろやなぎ)」, nusku 「いぬやとなかいがそりを引くつな」, ojosko 「移動の際そりやふねにつむためにまとめた家財(きもの・ふとんなど)のにも

つ」, silčiskə 「木に生ずる菌類の一種, ほぐち」, sinaska 「やなぎなどの樹木の内皮(樹皮の内側の皮)」, təskəkta 「手くびの突起, 足くびの突起(くるぶし)」, turəskə 「長ぐつの胴(ごまふあざらしの当歳のものの皮を用いる)」, uriski 「ほしいい(干飯)」, usku 「玄関(丸太組み家屋の)」, wəskə 「そで(きものの)」, wəsku 「木製のつち(たとえば家屋の外被にする魚皮を打つ)」, xapuska 「うきぶくろ(魚の)」, xoldosko 「棺」, **Waaska** 「人名(男)」,

SK-4. **kiska** 「少ない(多くない)」, xijosko 「あながたくさんあいている」,  
**askala-** 「腰に小刀をさげる」, **dəskərə-** 「はさまる」, **peski-** 「からだの発熱をひやす」,  
**peskiči-** 「体のうしろ側を火にあててあたためる」, **pəskə-** 「たまげる, おどろく」, **puskuči-**  
「ほらをふく, 自慢ばなしをする」, **puskudə-** 「ふくれつらする, むくれる」,

## ② -ks- を持つもの

これについてもやはり後述するように, 意味的観点から KS-1: 液体状のもの, KS-2: 民俗的なもの・やや特殊な意味の名詞, KS-4: 一般的な意味の動詞・形容詞, の4種に分類した。

KS-1. **saaksa** 「霜」, **naaksa** 「はな(漬), うみ(膿)」, **səəksə** 「血」, **simuksə** 「油」, **tuuksə** 「液果の汁」

KS-2. **səksə** 「宵, 晩」, **səksə** 「(天にあるという架空の)nikəə(となかいなどが歩きまわって地や雪が踏んであるところ)」, **səəksə** 「皮ひも」, **suksu~səksə** 「鷹, はやぶさ」, **tuksa** 「うさぎ」, **čeeksa** 「となかいぞりの台木の前部が上の方へ反っている部分」, **dəəksə** 「かわうそ」, **gaksee** 「片方」, **gaksi(n)** 「胎盤」, **geuksa** 「ごまふあざらしの当歳のもの」, **kəkə(n)** 「鳥の胸」, **nuksa** 「溪谷」, **nuuksə** 「煤」, **oksoo** 「となかいぞり(となかい一頭で引く, ウイルタの昔からのそり)」, **tuksə** 「通訳」, **tuksərəji** 「他人の悪口を言いふらす人」, **uksara** 「しまふくろう」, **uksi(n)** 「はれもの, できもの」, **xoksigə** 「病気の種類(海の神にとがめられてなる)」, **xuksu** 「となかいの前後足のすね」, **Boksiiri** 「人名(男)」, **Dəksəəŋgu** 「人名(男)」, **Naaksauna** 「人名(男)」, **Nəəksinnə** 「人名(女)」, **Səkəənu** 「昔話に出る強い視力をもつ人物」, **Təəksəə** 「南カラフトの内陸の地名」

KS-3. **əksəm** 「もりあがって高く」, **aksa-** 「気を悪くする」, **daksa-** 「貼りつく」, **dəksi-** 「いそがしい」, **eksuma-** 「借りたい」, **əksə-** 「置く, しまっておく」, **əksən-** 「気にする, 心配する」, **jakside-** 「ばかにして声を立てて笑う, 嘲笑する」, **kaksi-** 「つないであるいぬがはなれて行こうとする」, **kiraksi-** 「気むずかしくておこってばかりいる」, **laksuman-** 「近づく」, **luksuda-** 「ほらをたててだまっている」, **piksi-** 「退屈する」, **puksi-** 「音がなく放屁する」, **saaksi-**

「たずねる, 聞き出す」, tuksa- 「走る」, uksi- 「湿る」

まず -sk- を持つ語のほうが多いことがわかる。Ikegami (1960) による音節位置の仮説について検証すると, ① [-sk-] には 62 語中に 22 語の例外があることが分かる。SK-1, SK-2 には例外がないが, SK-3, SK-4 には例外が多く, 特に SK-4 の動詞は全て例外である。他方, ② [-ks-] に例外は少なく, 49 語中にわずかに 2 語のみである。

次に意味に注目すると, まず SK-1 は「～の毛皮」のような意の接辞によって形成されたものである。SK-2 は液体状, もしくは雲状のもの, という共通点を持っている。しかし② [-ks-] にも液体を示す語はいくつも見いだされる。これらはウルチャ語では全て -ks- で現れていたが, ウイルタ語では -sk- で現れることが分かる。なおこれらの接辞および接辞を伴った語との対応を示す例は他のツングース諸語にも多く見いだされるので, これらが借用である可能性はほとんどない。

SK-3 の例外の名詞には, 海の魚など, ツングースが本来知らなかったとみられる事が見いだされ, しかも他のツングースに対応語が見いだされないものが多いので, これらは借用語である可能性が強く疑われる。ただし現時点ではなお具体的な言語からの借用としての同定はできていない。

ウルチャ語で -sk- を持っていた語と重なる語もある (下線の語)。したがってこれらの語はウルチャ語とウイルタ語が分岐する以前にすでにこの順序であったものと考えられる。他方 SK-1 や SK-2 と同源の語は, ウルチャ語では全て -ks- で現れている。これらの語はツングース諸語に広く対応語が見出されるので, 祖語に遡る語であり, 両言語の分岐後にウイルタ語で転倒が起きたとみななければならない。

#### 4.4. III 群の言語における対応のまとめ

以下に III 群において対応し, -ks- ~ -sk- の転倒に関して相違を見せる例をまとめておく。このように隣接する子音間での転倒であるため, 無声化による説明はまったく難しいものとみななければならない。液体状の物体を示す何らかの接辞 \*ksa etc. があつたとすれば, やはり無声化による説明は難しい (表中の意味に下線を付した語を参照)。

表 1: III 群における -ks- ~ -sk- の対応に関する代表的な例

意味	ナーナイ語	ウルチャ語	ウイルタ語
魚皮加工の道具	wəksun	wəsku(n)	wəsku
袖	xuəksə	wəskə	wəskə
櫓の引き紐	luksur	nusku	nusku
温める	pikiči-	piskiču-	peskiči-

驚く	pəksə-	pəskə-	pəskə-
サケの皮	dawaksa	dawaksa	dawaska
クロテンの毛皮	səəpəksə	səəpəksə	səəpəskə
キツネの毛皮	soliksa	soliksa	suliska
露	siləmsə	siləmsə	siləskə
よだれ	ʃiloksa	ʃelčoksa	ʃeluska
霜	saaksa	saksa	saaksa
血	səəksə	səəksə	səəksə
夕方	siksə	siksə	səksə
ウサギ	toksa	toksa	tuksa
気を悪くする	aksa-	aksa-	aksa-

意味を太字で示した表の上部の5つの語は、Ikegami (1960) が提示した音節位置の仮説に合致しないので、その条件や原因について何らかの別の説明を考える必要がある。

## 5. 系統の異なる近隣言語：ニブフ語からの影響

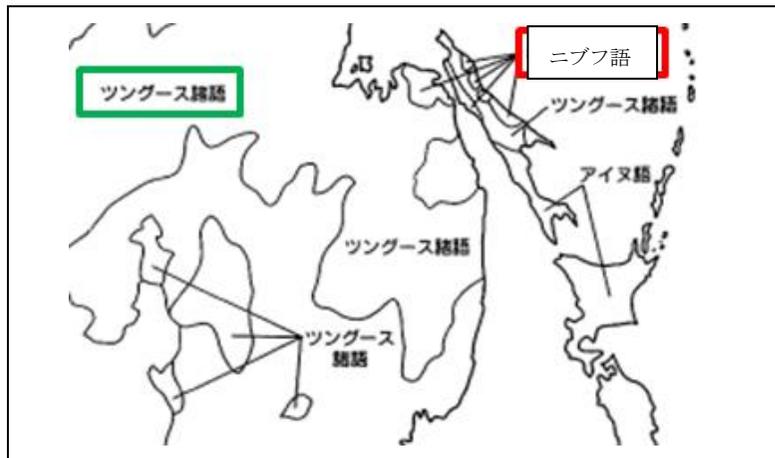


図 2: 近隣諸言語の分布

白石 (2010) によれば、ニブフ語の語中の子音連続 ( $-C_1C_2-$ ) 一般において、-摩擦音-破裂音- の組み合わせは高頻度であるが、逆の -破裂音-摩擦音- の組み合わせは希少である<sup>2</sup> という。そもそも  $-ks-$  に限らず、語中語末の子音に破裂音があること自体まれで、語末でも派生形を除けば多いとは言えないという (白石 (p.c.))。したがってウイルタ語では基層

<sup>2</sup> ただし絶対語末では  $-ks$  もあるという (cf. p<sup>h</sup>uks 「手綱」, tuks 「ヒメイワタデ」, 白石 (2010: 51))。

言語ニブフ語からの影響によって -ks- > -sk- の転倒が起きた可能性が考えられる。しかも実際に、ニブフ語から借用したと思われる語が見いだされる<sup>3</sup>。

(Nvx) lasq 「かじか」 (Savel'eva i Taksami (1970: 157), Tsintsius et al. (1975: 495)) > (Ut) laskarja 「かじか」

(Nvx) askud 「少ない」 (丹菊 (編)・丹菊他 (2008: 64)) > (Ut) kiska 「少ない」

(Nvx) faskad 「おどろく」 (丹菊 (編)・丹菊他 (2008: 49)) > (Ul), (Ut) paskə- 「驚く」

(Nvx) askaska 「痛い! (強い痛みを感じた時の感嘆詞)」 (Panfilov (1968: 429)) > (Ul) aska 「アチチッ」

この語「おどろく」は(Ut)のみならず他のツングース諸語にも見いだされるが、それはアムール中流・下流域のツングース諸語にのみ存在する。

「おどろく」: (N) paskə- || (Oc) paksi- ~ paksə- || (Na) paksə- || (Na K-U) faksə- || (Ul) paksi- ~ paskə- || (Ut) paskə-

## 6. さらなる問題 — ウデヘ語と満洲語における 2 様の対応

以上にみたように、アムール下流およびサハリンのツングース諸語にみられる不規則な転倒の一部は、主にニブフ語からの影響および借用によって説明することができた。しかしウデヘ語と満洲語における 2 様の対応についてさらに検討する必要がある。

満洲語の逆引き辞典である Rozycki (1981) により -ngi に終わる語をみると 59 語ある。しかしその大部分の語には他のツングース諸語に対応する語が見いだせない。ウデヘ語については、語数約 3,500 の Shnejder (1936) により、① -k- (-keə / -kia / -kyə) および② VhV を収集した。これらを総合し、Tsintsius et al. (1975, 1977) によって問題となる語の対応を整理すると下記のようなになる (祖語の再構形は筆者による、cf. 風間 (1996))。

①ウデヘ語で -k- が現れる語<sup>4</sup>

(9) 「血」 (Ek) səksə || (U) sakə || (Oc) səksə || (Na) səksə || (Ut) səksə || (Ma) səngi

(10) 「雲」 (Ek) tuuksu || (U) tokə || (Oc) tokso || (Na) təwəksə || (Ut) təwəskə || (Ma) tugi

(11) 「宵」 (Ek) siksə || (U) sikiə || (Oc) siksə || (Na) siksə || (Ut) səksə || (Ma) \*siksə 「昨日」

(12) 「内皮」 (Ek) ilaaksə etc. || (U) ilae ~ ilakə || (Oc) ilaksa || (Na) inaksa || (Ut) sinaska || (Ma) ilaxa

<sup>3</sup> Tsintsius et al. (1975: 509) は、(Nvx) nuxt' 「櫓の引き綱」も取り上げているが、これはどちらの方向への借用か現時点では判断できない。(Ut) askuttu 「いか、たこ」は、(Ainu) at-kor-kamuy 「タコ」(萱野 1996: 21) との関連が疑われる。

<sup>4</sup> 他に、①には「ひも」(U) sukia, 「犬の引き綱」(U) nuki, 「液果の汁」(U) čüenki があり、②には「霜」(U) sarjuhæ, 「唾」(U) jālehæ, 「鼻」(U) jüihæ, 「長靴の胴」(U) tiähæ, 「火口」(U) siktihæ があったが、満洲語の対応形が見出されなかったため上では取り上げていない。

②ウデへ語で -h<sup>l</sup>- が現れる語彙

(13) 「露」(Ek) silæksə || **(U) silihə** || **(Oc) siləŋsə** || (Na) siləmsə || (Ut) silæskə || **(Ma) siləŋgi**

(14) 「油」(Ek) imuuksə etc. || **(U) imoho** || (Oc) imuksə || (Na) simuksə || (Ut) simurə ~ simuksə || **(Ma) iməŋgi**

(15) 「霧」(Ek) tamnaksə || **(U) tamnehə** || (Oc) tamna || (Na) tamnaksə || (Ut) tamnaska || **(Ma) talman**

(16) 「長靴の胴」(Ek) tiræksə || **(U) tiəha** || (Oc) tijəksə || (Na) turæksə || (Ut) turæskə || **(Ma) tura**

(17) 「そで」(Ek) uuksə || **(U) ukihə** || (Oc) uksə || (Na) xuæksə || (Ut) wæskə || **(Ma) ulxi**

(18) 「ブドウ」 **(U) sinehə** || **(Ma) siinagan**

(19) 「炭 etc.」(Ek) eella || **(U) jalaha** || (Oc) (i)jakta || (Na) sialta || **(Ma) yalməŋgi** || (P.T.) \*xialsa,

(20) 「骨 etc.」(Ek) giramna || **(U) geəmahə** || (Oc) giamsa || (Na) girmaksə || **(Ma) girəŋgi** || (P.T.) \*giramsa

結局 \*ks- が仮定されている対応で、ウデへ語の -h<sup>l</sup>- に満洲語の -ŋg<sup>l</sup>- が対応するのは Benzing (1955: 29) があげている(5) (=13) 「露」と(8) (=14) 「油」だけであり、他方、反例も(4) (=9) 「血」の1例のみである。Ikegami (1960) の音節位置の仮説からみると、①の(12) 「内皮」のみ例外となる。ウデへ語の① -k<sup>l</sup>- に満洲語では -gi-, -ks-, -x- の対応する例もあり、② -h<sup>l</sup>- には -x-, -ga- の対応する例もあって、満洲語の示す対応はきわめて不規則である。なおウイルタ語の -sk- / -ks- がウデへ語とも満洲語とも対応していないことが確認できる。

(19) 「炭 etc.」と(20) 「骨 etc.」では、満洲語の -ŋg<sup>l</sup>- にウデへ語の -h- が対応しているが、祖形は \*ks- ではなく、\*ls-, \*ms- である (cf. 風間 (1996)). ここで(5) (=13) 「露」の対応に (Oc) siləŋsə があるので、ウデへ語の -h<sup>l</sup>- に対応する祖形は \*ŋs- だった可能性が考えられる。すると、これに (Ma) では \*ŋs- > -ŋz- > -ŋj- > -ŋg<sup>l</sup>- のような変化が、(U) では \*ŋs- > -s- > -h- のような変化が (cf. \*ns- > -s-), I 群・III 群の言語では基本的に、\*ŋs- > -ks- のような変化が起きたと仮定できる。ただ残念ながらこのような語例は今のところ1例しか見つかっていないためなお推測の域を出ない。この仮説が正しければ(8) (=14) 「油」にも(Oc)に \*imuŋsə のような形が期待されるが、そうはなっていない。この点については、今後のさらなる調査と研究を必要とする。

## 7. まとめと今後の課題

そもそも音位転倒は他の一般的な音対応に比べて例外が多く現れ、歴史的な推移を完全に明らかにするのは難しい面があるようだ (風間 (1996: 128-130) も参照されたい)。

この -ks- ~ -sk- の転倒に関して、本稿では下記のような諸点を指摘しておく。

- ・ -ks- の順が祖語の順序である。ナーナイ語などではもっぱらこの順序が保たれており、借用語などではむしろ -sk- > -ks- の方向への転倒が観察される。
- ・ 特にウルチャ語とウイльта語が分岐する前の段階で、これらの祖語にはおそらくはニブフ語からの影響が働き、多くの語で -ks- > -sk- の方向への転倒が起きた。この傾向は両者の分岐後にウイльта語でさらに強く働き、さらに多くの語で転倒が起きた。海の魚の名など、ウイльта語およびウルチャ語で -sk- の順序を持つ語の中にはニブフ語から語自体を借用したものもある。
- ・ 借用や影響による要素を排除すると、ウイльта語の多くの語における2様の順序の現れはおおよそ Ikegami (1960) による音節位置の仮説にしたがっている。
- ・ 「露」(U) *siliħə* || (Oc) *siləŋsə* || (Ma) *siləŋgi* の祖形は *\*siləŋsə* であったと考えられる。しかしこのような対応を示す語は、現在のところこれ1語しか見いだされていない。
- ・ 他の言語の -ks- に対し、ウデへ語と満洲語では2様の対立を見せるが、そのそれぞれはウデへ語と満洲語の間で対応しない。つまり Benzing (1955) の推定は正しくない。
- ・ 他方、ウデへ語での2様の対立は、1例を除き Ikegami (1960) による音節位置の仮説にしたがっている。

しかしなぜ音節位置によってこのような違いが現れるのかはなお不明である。満洲語での2様の現れについてもまだ説明ができていない。以上のような点を今後の課題とする。

なお査読の先生方からは読み手にわかりやすくする工夫をはじめ、いくつもの貴重なアドバイスをいただいた。これによりより良い論考へと推敲することができたと思う。末筆ながらここに記して深く感謝申し上げたい。

## 参考文献

欧文

- Bemzing, J. 1955. Die tungusischen sprachen. Versuch einer vergleichenden Grammatik. *Abhandlungen der Akademie der Geistes- und Sozialwissenschaftliche Klasse, Jahrgang 1955, Nr. 11.* Wiesbaden, 151S.
- Ikegami, J. 1960. [2001]. Versuch einer vergleichenden Grammatik der tungusischen Sprachen (Besprechungen). *Ural-Altäische Jahrbücher*. 32, 1-2. [『ツングース語研究』東京：汲古書院 446-452. 所収]
- Ikegami, J. 1979. [2001]. Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen, *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*, Berlin: Akademie-Verlag. [『ツングース語研

- 究』東京：汲古書院 395-396. 所収]
- Onenko, S. N. 1980. *Nanajsko-Ruskij slovar'*. Moskva: Izd. Ruskij jazyk.
- Rozycki, W. 1981. *A reverse index of Manchu*. Indiana University Uralic and Altaic series vol. 140. Bloomington: Research institute for inner Asian studies, Indiana university.
- Savel'eva, V. i C. Taksami 1970. *Nivkhsko-ruskij slovar'*. Moskva: Sovetskaja entsiklopedija.
- Shnejder, E. P. 1936. *Kratkij udjsko-ruskij slovar'*. Moskva-Leningrad: Gosudarstvennoe uchebno-pedagogicheskoe izdatel'stvo.
- Sunik, O. P. 1985. *Ul'chskij jazyk*. Leningrad: AN SSSR.
- Tsintsius, V. I. et al. 1975, 1977. *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskikh jazykov, Materily k etimologicheskomu slovarju*, tom 1, 2. Leningrad: Nauka.

#### 和文

- 池上二良 1989. 「ツングース諸語」『言語学大辞典 世界言語編 第2巻』, 1058-1083 東京：三省堂.
- 池上二良編 1989. 『ウイльта語辞典』札幌：北海道大学図書刊行会.
- 風間伸次郎 1996. 「ヘジェン語の系統的位罫について」『言語研究』第109号：117-139, 日本言語学会.
- 風間伸次郎 1998. 「ツングース諸語におけるウルチャ語の位罫について」角田太作（編）『少数民族言語調査報告1998』67-82.
- 萱野茂 1996. 『萱野茂のアイヌ語辞典』東京：三省堂
- 白石英才 2010. 「ソノリティから見たニヴフ語の子音連続」呉人恵（編）『環北太平洋の言語』15号, 45-58. 富山大学人文学部.
- 丹菊逸治（編）, 丹菊逸治・N. Ya. タンジナ・N. V. ニトクク 2008. 『ニヴフ語サハリン方言基礎語彙集（ノグリキ周辺地域）』. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

## On the phonetic correspondence of \*-ks- in Tungusic languages

Shinjiro KAZAMA

In this paper I investigate the phonetic correspondence in Tungusic languages of which \*-ks- is reconstructed in the Proto-Tungusic. In some Tungusic languages this correspondence show two-way correspondences. I point out that one of the reasons of that two-way correspondence is the inflection from the other neighboring languages such as Nivkh and Ainu. Further, I examine the condition of the metathesis which had occurred in Uilta and Udihe.

The conclusions of this paper are as follows:

1. The original order is not -sk- but \*-ks-. The order is preserved in Nanay, Ewenki etc. In Nanay, however, the metathesis of another direction (-sk- > -ks- (in loan words), e.g. *kuksə* < Rus. *koshka* “cat”) is observed.
2. In the stage before the diversion into Ulcha and Uilta, the metathesis (\*-ks- > -sk-) of many words had occurred in the proto-language of Ulcha and Uilta by the influence of neighbouring Nivkh language. After the division into Ulcha and Uilta this tendency functioned stronger in Uilta, and the metathesis had occurred in many more words in Uilta than in Ulcha. Among the words with -sk- there are some loan words such as marine fish from Nivkh to Ulcha or Uilta (e.g. (Ut) *laskaŋa* < (Nvx) *lasq* “bullhead”).
3. The distribution of -sk- and -ks- in the words of Uilta (excluding the loan words and words with metathesis caused by the influence from Nivkh) conforms with the hypothesis conditioned by syllable structure in Ikegami (1960).
4. The proto-form of “dew” (U) *silihə* || (Oc) *siləŋsə* || (Ma) *siləŋgi* is thought to be \**siləŋsə*. This kind of correspondence is attested only by this word.
5. The corresponding words with those of other languages in Manchu and Udihe show two-way correspondence. But each groups of these two-way corresponding words in these languages do not coincide. Therefore the hypothesis by Benzing (1955) is not correct. On the other hand, the distribution of two-way correspondence in Udihe can almost be explained by the hypothesis conditioned by syllable structure in Ikegami (1960).

This not clear yet why such a difference is caused by the difference of the syllable structure: furthermore the distribution of two-way correspondence in Manchu has also not been explained yet. These points need further investigation.



[テーマ企画：特集 情報構造と名詞述語文]  
まえがき

風間 伸次郎

### 1. 企画に至った経緯

これまでの語研特集では、ヴォイス(含む「受動表現」)、アスペクト、モダリティ、他動性、連用修飾複文、と、もっぱら動詞述語文を中心に扱って来た。唯一「所有・存在表現」は静的述語および名詞句を扱った点でこれらとは若干異なっていた。

残る課題の1つは、名詞述語文(ノコピュラ文)であり、そこには指示性や文の情報構造が大きく関わって来る。したがって今回の特集ではこれを中心にとりあげて特集のアンケート例文を構成した。

まず、日本語による20の例文からなるアンケートを作成し、これに答えていただくことによって、各言語のデータを収集することにした。アンケートの構成や意図については、本稿稿末のアンケート本体も参照されたい。

こうして22の言語に関するデータが集まった。これは東京外国語大学にある27専攻語のうちの14言語にフィンランド語、ハンガリー語、ダグール語、ナーナイ語、ソロン語、ラワン語、トルクメン語、グイ語を加えたものとなっている。なおウルドゥー語のデータはヒンディー語のデータとしても活用できるものであり、モンゴル語のデータはハルハ方言とホルチン方言の2つ、ダグール語のデータはチチハル方言、ブトハ方言、ハイラル方言の3つの方言のデータからなっている。

これらの言語を語族別に見ると、まずドイツ語、フランス語、スペイン語、ペルシア語、ウルドゥー語は印欧語族の言語である。ソロン語、ナーナイ語はツングース諸語、ダグール語、モンゴル語はモンゴル諸語、トルクメン語はチュルク諸語に属するが、これらは(系統ではなく)構造的な類似などの点からアルタイ諸言語としてまとめられることのある言語群である。フィンランド語とハンガリー語はウラル語族、アラビア語はアフロ・アジア語族、グイ語はコイサン語族の言語である。クメール語はオーストロアジア語族、マレーシア語、インドネシア語はオーストロネシア語族、ラワン語、ビルマ語とともに、中国語は(異論もあるが)シナ・チベット語族、とされている。朝鮮語、日本語は系統的に孤立した言語とされている。今回、アフリカ大陸の言語(グイ語)のデータが加わったことは、これまでの語研特集で初めてのことであり、真の類型的研究を目指す上での大きな一歩であるといえよう。ただし、なおオセアニア、カフカース、新大陸などの諸言語のデータを欠いているため、本稿での以下に展開される類型論的考察はなおきわめて不十分なものであることは否めない。

## 2. 焦点標示

下地 (2015) では、Lambrecht (1994) (筆者未見) の枠組みを参考に、焦点を対比焦点、WH 応答焦点、WH 焦点の3つに分け、琉球諸方言における焦点標識の出現可能性を調査しこれを次の表のようにまとめている。

表 1: 下地 (2015)による琉球諸方言における焦点タイプと焦点標識の出現可能性(なおスラッシュの前後は、動詞述語文/非動詞述語文、であることを示している)

	対比焦点	WH 応答焦点	WH 焦点
宮古伊良部	D/D	D/D	D/D
与那国	D/D	D/D	(D/D)
奄美 (湯湾)	D/D	D/	
奄美 (浦)	D/D		

D は上記の諸方言における焦点形式で、表 1 は D が対比焦点において最も現れやすく、これに次いで WH 応答焦点、WH 焦点の順に現れにくくなっていくことを示しているものである。このことから下地 (2015) は、次のような階層を提案している。

1) 焦点化階層①: 階層のある地点で焦点標識を使えるなら、その左側の焦点タイプでも使える。

**対比焦点 > WH 応答焦点 > WH 焦点**

2) 焦点化階層②: 動詞述語文のほうが非動詞述語文よりも焦点標示されやすい (=非動詞述語文で D が出現するなら動詞述語文でも出現する)。 **動詞述語文 > 非動詞述語文**

このことを検証する目的で、今回のアンケートに使用した例文が下記の [1]-[10] である (上記に加え、さらに文焦点の例も加えた)。

[1] 「えっ、一郎 [ / 固有名詞なら何でもよい ] が来たの?」「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」【対比焦点 (主語)】 (例えば、昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

[2] 「誰が来た (の)?」「一郎が来たよ。」【WH 焦点 (主語)・WH 応答焦点 (主語)】

[3] 「一郎の方が大きいんじゃないの?」「いや、一郎じゃなくて、次郎の方が大きいんだよ。」【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】

[4] [電話で]「どうした (の)?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」【文焦点 (自動詞文)】

[5] 「あの子供が一郎を叩いたんだって!」「いや、一郎じゃなくて、次郎を叩いたんだよ。」【対比焦点 (目的語)】

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う (の)?」「青い袋を買うよ。」【対比焦点 (目的語、特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)】

[7] 「一郎はどうした?」「一郎は朝からどっかへでかけたよ。」【述語焦点】 (例えば、朝少し遅

く起きて来た一郎の父親が、姿の见えない一郎について母親に尋ねている場面で)

[8] 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

【WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)】

[9] [電話で]「どうした (の)?」「うん、一郎が (自分の) 弟を叩いたんだ。」

【文焦点 (他動詞文)】(例えば、電話の向こうで子供の泣き声 that 起きたのを聞いての発話)

[10] 「あのケーキ、どうした?」「ああ、(あれは) 一郎が食べちゃったよ。」

【目的語主題化、主題 (目的語) の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

## 2.1. 項焦点の標示

アンケートによる諸言語のデータをみていくと、一般に[7]の述語焦点でもっともデフォルトな文が現れやすく、項焦点や文焦点となると何らかの有標な構文や要素を用いる言語が多いことが分かる (マレーシア語においてのみ、年配者が好んで用いる構文で、焦点部分である動詞句を前置した表現があるとの報告があるぐらいである)。欧米の言語学において伝統的に長らく「主語＝主題」であり、ともに“subject”と呼ばれてきたことを考えれば、[7]の述語焦点が一般にデフォルトであるのは納得がいく。意味的にも行為の発信源である「行為者」であり、名詞句階層の左側に位置するものが主語にも主題にもなりやすいことから、やはりそれは納得がいく。Lambrecht (1994) でも述語焦点がデフォルトであるとされている。

そこでまず、これに対する項焦点の方の文の述語に何らかの有標の形式が現れる言語を見てゆく。そこで用いられる手法は、(日本語のノダ文や係り結びとも関連する) 述語の名詞化、もしくは語順の逆転、もしくはその両方である。問題となる例文は、対比主語焦点の[1][3]、対比目的語焦点の[5][6]、Wh 主語焦点の[2]、Wh 目的語焦点の[8]である。

ビルマ語では、動詞の名詞化によるノダ文を用いる。Wh 焦点の[2]と[8]では質問文応答文とも、対比焦点では[1]のみ応答文でノダ文となっている。ラワン語では、[2]の応答文においては分裂文の方が自然であるという。

アラビア語では、対比主語焦点[1]の応答文で、述語動詞句を定冠詞 *lī* で名詞化し名詞述語文「ハナーン(こそ)が、来た者だ」としている。Wh 焦点[2]では質問文応答文とも名詞化し語順も転倒させている。対比目的語焦点の[5]では *da* 「それ」を主題とし、「それは、ホセインを叩いたのだ」という文になっている。

中国語では対比主語焦点[1]の応答文で、是 (コピュラ) を用いて節を補語の位置に用いた文を作ることができる。対比目的語焦点の[5]では分裂文を用いた方が自然であるという。

ダグール語では対比目的語焦点[5]で、チチハル方言およびブトハ方言では分裂文、ハイラル方言ではコピュラを用いたノダ文に似た文が現れている。

インドネシア語では、対比主語焦点の[1]の応答文で、Wh 主語焦点の[2]では質問文応答文の両方において、*yang* により節名詞化したものを主語/主題にし、項焦点を述語化している (疑似分裂文)。対比主語焦点の[5]の目的語では応答文で *yang* により選別 (「～の方」という意味、

以下「選別」という用語で呼ぶ)を示し、語順も逆転した文が可能である。対比目的語焦点[6]の目的語では質問文応答文とも、yangにより選別を示すものの、普通の語順の他動詞文を用いる。

マレーシア語はインドネシア語と類似の状況を示し、さらに Wh 目的語焦点の[8]の疑問文・応答文でも疑似分裂文が可能であることが示されている。

スペイン語では対比主語焦点の[1]、および対比目的語焦点の[5]の応答文で分裂文を用いる。Wh 主語焦点の[2]の応答文では語順を VS に転倒している。

ハンガリー語は情報構造の標示に関して敏感であり、独特のシステムを持つ言語だが、ここでは特に、動詞直前位置に焦点を置くという語順の規則と連動した動詞接頭辞の分離／非分離という形式の違いが働く。[1], [2], [5], [6]の質問文、および[3]の疑問文応答文において、焦点である項は動詞直前位置を占める。[1], [5]の質問文ではさらにこの位置を空けるため動詞接頭辞の分離も起きている。

以上が項焦点に際して述語の名詞化等を要求する言語だが、地域や類型に関して特に偏りは見られない。強いて言えば、逆にこれらの言語はデフォルトの動詞形式の動詞性が強く、情報構造に沿った語順の展開を必要とするタイプの言語で、それがために項焦点に際して述語の名詞化等を使用しなければならないという制約を伴っているタイプの言語であるとみることができだろう。インドネシア語／マレーシア語はそうした性格の最も強い言語であるように見受けられる。

特に主語と目的語の違いによって、述語の名詞化等の違いが出るかどうかを見るために、上記の記述の内容を表に整理してみたのが次の表 2 である。なおインドネシア語とマレーシア語では、インドネシア語の記述の内容のみを反映している。

表 2: 項焦点において述語に有標な形式の現れる言語の数 —主語と目的語での違い—

	主語 ([1][2][3])	目的語 ([5][6][8])
動詞・対比質問文 [1] vs [5][6]	2	3
動詞・対比応答文 [1] vs [5][6]	5	4
形容詞・対比質問文 [3]	1	
形容詞・対比応答文 [3]	1	
Wh 質問文 [2] vs [8]	5	1
Wh 応答文 [2] vs [8]	5	2

まず、下地 (2015) が名詞句側につく焦点標識で観察したような、**対比焦点**>**WH 応答焦点**>**WH 焦点**の階層については、これに類するようなはっきりとした傾向は観察できない。次に、主語と目的語の違いについては、特に Wh 質問文と Wh 応答文のデータにおいて、はっきりと

した違いが見られる。やはり既知の主題主語に関して、目的語が何であるかを尋ねたり答えたりすることの方が、主語が何であるかを尋ねたり答えたりすることよりもはるかに一般的であり、頻度も高く、それがためにデフォルトの述語が用いられるのではないだろうか。

次に、述語の方ではなく、名詞項の方に何らかの標示を行う言語を見てゆく。

明示的な焦点形式を有し、これを用いている言語は朝鮮語のみである。朝鮮語では対比焦点の[1]および Wh 焦点の[2]で質問文応答文とも主題形式でなく主格形式を用いる。これにより項焦点が示される。

朝鮮語以外の SOV 語順の言語には、定対格と不定対格の対立をもつものが多くあり、対比目的語焦点の[5][6]および Wh 目的語焦点の[8]では、定の目的語の形式が用いられる。この定の形式は、主題とも焦点ともなりうるものであるが、さらにおそらくはプロミネンスを伴うことによって、焦点を示しているものと考えられる。特に対比の[5][6]においては、名詞の側に何らかの選別形式を用いている言語が多く存在する。

このようなタイプの言語は、ペルシア語、トルクメン語、ダグール語、モンゴル語、ナーナイ語、ソロン語であり、これらはもっぱら SOV 語順を示すアルタイ型言語である。

ペルシア語では[5], [6], [8]の質問文応答文とも、定対格を用いる ([5]の応答文では任意)。[6]の質問文の疑問詞に接尾辞形人称代名詞 (必須) を付して選別を示している。トルクメン語では[5], [6], [8]の応答文で定対格をとる。「どちら」は3人称の所属をとるが、これには選別的機能があると思われる。ダグール語では、[6]において質問文応答文とも、疑問詞とその答えの焦点に3人称所属を付して選別を示している。モンゴル語では[6]において質問文応答文とも、疑問詞とその答えの焦点に3人称所属を付して選別を示している (ホルチン方言の[6]の応答文を除く)。[6], [8]の質問文応答文とも、動詞直前の位置であっても定対格や再帰などの形式を用いる (ホルチン方言の[6]の質問文を除く)。ただし[5]のハルハ方言の応答文では対格が用いられていない。ナーナイ語では[5], [6], [8]の応答文で対格や再帰人称をとる。

ソロン語では[6]において3人称所属接辞によって選別が示されている。[8]では再帰要素が定の目的語であることを示す。

上記の言語群は、述語の側にせよ、名詞の側にせよ、何らかの積極的な表示により、項焦点を示そうとするタイプの言語であった。これに対し、いわば消極的な方法として、応答文において焦点の名詞項のみを発話する言語がある。

フランス語では対比焦点の[1]の応答文では主語のみ、Wh 焦点の[2]の応答文でも主語のみもしくは It is Ichiro 型となる。スペイン語では Wh 焦点の[2]および[8]の応答文は主語のみ、目的語のみでもよい。フィンランド語では[1]の応答文では It is not A but B 型の表現で述語は非出現であり、[2]の応答文でも述語は非出現である。ラオ語とハンガリー語では[1], [2], [5], [6], [8]の応答文はどれも主語/目的語のみでよく、クメール語では[1]の応答文は主語のみでよい。ウルドゥー語では[8]の応答文において主語が非出現で、[6]の応答文は主語も動詞も非出現でよい。ダグール語プトハ方言では[1]や[8]の応答文が主語のみであり、ナーナイ語では[2]の応答文が主語

のみでよいという（ただし媒介言語のロシア語に誘導された可能性がある）。

このように、述語の方を非出現（省略とは考えたくないで、「省略」という用語の使用を避けている）にできる言語は、名詞の持つ述語的な性格が強く、亀井・河野・千野（編）（1996）がいうところの両肢型言語であると考えられる。上記の言語にはウラル語族の言語を含むヨーロッパの諸言語および東南アジアの孤立語が多く現れていることがわかる（なお、スペイン語、ラオ語など、主題主語が現れない言語もあるが、これもヨーロッパの印欧語と東南アジアの孤立語の組み合わせとなっている）。これに対し、述語の名詞化や名詞側での定対格の表示を用いる言語は、述語の非出現が許容されないタイプであり、亀井・河野・千野（編）（1996）がいうところの単肢型言語であると考えられる。

このことについて、日本語を例に少し考察してみたい。日本語で[1]の調査例文における「えっ、一郎 [／固有名詞なら何でもよい] が来たの？」という質問文に対し、「いや、一郎じゃなくて次郎（だ）。」と答えると、また[9]の「どうした（の）？」に対して、「うん、一郎が（自分の）弟（だ）。」とコピュラ文によって答えるのはきわめて不自然である。もしくは述語を非出現にして名詞項のみを残し、「いや、一郎じゃなくて次郎が。」もしくは「うん、一郎が（自分の）弟を。」などと答えるのはきわめて舌足らずな、何か途中で発話をやめたような印象を伴う。なお名詞項のみで答えられる言語の場合、それが *Jiro (came)* の（ ）部分の省略を通じて生じたのか、*(It is) Jiro* の（ ）部分の省略を通じて生じたのかという問題がある。おそらく *(It is) Jiro* から生じたものと考えたいが、今後の研究によりさらに下位の類型を立てるべきものかもしれない。

以上に見てきたように、項焦点の表現に関しては、大きく分けて3つの類型（述語有標型、項有標型、述語非出現型）があるものと考えたい。

## 2.2. 項焦点における動詞述語文と非動詞述語文の違い

先に提示した2つの問題点のうち、1) 焦点化階層①（階層のある地点で焦点標識を使えるなら、その左側の焦点タイプでも使える。対比焦点>WH 応答焦点>WH 焦点）については、名詞側にはっきりとした焦点標識を用いる言語が朝鮮語のみであったため、残念ながら今回のデータでは十分に検証することができなかった。

そこでここでは、もう1つの仮説である2) 焦点化階層②（動詞述語文[1]>非動詞述語文[3]）について検証してみることにする。動詞述語文と非動詞述語文で違いがあるという記述があったのは下記の3言語である。

インドネシア語：疑似分裂文は形容詞述語では不自然

マレーシア語：形容詞述語では疑似分裂文を用いなくともよい。

スペイン語：形容詞述語では分裂文は自然ではなく、逆転した語順も用いられない。

このようにどの言語でも、形容詞述語文の方が情報構造の違いに無頓着である。形容詞の方

がアスペクト的に恒常的であって、すでに名詞述語文に近い性質を持っているために述語の名詞化が不必要なのだろうか？ともあれ、この結果は「焦点化階層②：動詞述語文のほうが非動詞述語文よりも焦点標示されやすい」という上記の仮説に沿ったものとなった。

### 2.3. 文焦点の標示

文焦点に関する諸言語のデータ（調査例文の[4], [9]）をみると、全体的にどの言語でも存在文のストラテジーを用いて文焦点であることを表現しようとする傾向が観察される。基本語順の類型論的なタイプによってもこのストラテジーには大きな違いがあり、基本語順がSVO語順の言語においては、文焦点の文がかなり有標な形態を示すことがわかった。

まず存在文のストラテジーをとるのは下記の諸言語である。中国語は厳密には存在動詞を用いていないが、VS語順は中国語学でいう「存現文」で用いられるので、ここで取り上げる。ドイツ語もスペイン語やフランス語と対照すればよくわかるが、存在文とのつながりを持った構文として位置づけることができるだろう。

アラビア語：[4]の問いで不定の主語のみを取る *fi*：「在る」を用い、主語は後置する。応答文でも不定の名詞「客」は後置される。ただし[9]の答えはSVO語順のままである。

インドネシア語／マレーシア語：[4]の問いでも答えでも *ada* 「在る」を用いて主語は後置する（複雑存在文と呼ばれる）。インドネシア語で[9]の答えはSVO語順のままだが、*itu...*、「その」などで文を始める（つまり「状況的な主題」を伴う）。

ラオ語、クメール語：[4]応答では「在る」を文頭に用いるが、その後は「客 来る」とSV語順。ただし「客」は「在る」の目的語をも兼ねているのかもしれない。

中国語：[4]の応答文ではVS語順である。Sは「一」を伴わない類別詞とともに用いられている。[9]では是（コピュラ）の後に節を続けるか、回想を示す来着を後続させている。

スペイン語：[4]の応答文では *ha ~ (has ~)* を文頭に用い、後続する節全体を新情報にしている。*que* をさらにその前に用いて理由の説明としている。

フランス語：[4]の応答文では *Il y a ~ (It is ~)* を文頭に用い、後続する節全体を新情報にすることを可能にしている。[9]ではSVOのままだが、導入句を用いている。なお *Il y a ~* は存在文に用いられる形式であるが、このような応答文でのそれは *It is ~* のようなグロスによって解釈されている。

ドイツ語：[4]の応答文では *Es ist ~ (It is ~)* を文頭に用い、後続する節全体を新情報にすることを可能にしている（ただしドイツ語の存在文は *Es gibt ~* のような形式となる）。[9]ではSVOのままだが、主語に第2アクセントを置き、全体が新情報であることを示している。

このように存在文もしくはそれに準ずる構文要素によって文焦点を表現する言語は、アラビア語を除けば東南アジアの本来的な孤立語、もしくは屈折を失って孤立語化してきた印欧語で

ある。孤立語的な特徴は SVO 語順を要求すると言われている。SVO 語順では、V の前の位置が主題のおかれる位置となっており（ただしドイツ語では定形第 2 の規則があるように V の前は主語とは限らないが）、そのためにデフォルトの文では文焦点が表現できず、存在文もしくはそれに準ずる構文要素の使用が必要になるものと考えられる。またこれらの言語群は先の項焦点の節で、述語の非出現が可能であった言語群と大きく重なっており、両肢型の言語という観点から説明することもできよう。

これに対し、特に特別な構文要素や語順を何も必要とすることなく文焦点を表現できる言語は、下記のようにどれも SOV 語順のアルタイ型言語である（ハンガリー語（語順自由）、フィンランド語（SVO 語順）を除く）。ただここでもやはり文焦点にするため、存在文に観察されるような特徴が現れている。すなわち、時や時間を示す名詞項が主語項に先行するという特徴である。朝鮮語、モンゴル語ハルハ方言、ペルシア語、ハンガリー語、ウルドゥー語では、[4]の応答文の文頭に「今」が現れている。フィンランド語でも、nyt「今」に節を後続させると「事実を強調する」という。トルクメン語では「家に」、ダグール語では「うちに」が主語に先行し、文頭に現れている。ただしハンガリー語は先に述べた接頭辞の非分離も文焦点の標示の役に立っている点に注意する必要がある。これらの言語は、時や時間を示す名詞項を主題とすることによって、それ以降の文全体を焦点にすることを可能にしているものと説明できよう。さらに言えば、これらの言語は単肢言語であり、主語項や目的語項と時や時間を示す名詞項などは全て等価であることがこうした表現形態の後ろ盾となっているとみることができよう。

他に、文焦点を示すため存在文的なストラテジーを用いる以外に、主語が新情報であることを示す要素が観察される言語がある。まず朝鮮語では、[4], [9]とも主語には -i「が」がつき、主題を示す -(n)um はつかない。ラワン語でも、[4], [9]いずれにも主題化の要素は現れない。ウルドゥー語では、[4]の応答文において、ek「1」を「客」につけている。ハンガリー語でも[4]で「1」に由来する不定冠詞が現れている。やはり不定であることを示すためか、ナーナイ語やグイ語では[4]の「客」を示すのに「人」を用いている。これらは文焦点を示すために補助的に機能しているものと考えられる。

#### 2.4. [10]の応答文における目的語主題化の手法

項焦点の節で考察したように、デフォルトな文はおそらく[7]の述語焦点であり、これがもっともデフォルトな文形式で現れるが、次いで目的語焦点の文もかなりふつうにデフォルトの文形式で現れる。これは裏を返せば、目的語焦点は情報構造的には一般的なものであることを示していると考えられる。

これに対し、[10]の調査例文では目的語が主題となっているので、情報構造的には有標の文となることが考えられる。この節では目的語主題化に際し、諸言語がどのような表現を取っているかを観察する。

まず態の転換を行う言語がある。態の転換には形態的に明示的な標示要素が現れ、構文も変

わるという点でもっともドラスティックな手法であるといえよう。態の転換が見られたのは、インドネシア語（動詞接頭辞 *di-* による）、ソロン語（使役、ただし媒介言語の漢語に誘導された可能性がある）であった。インドネシア語は、項の焦点化でも疑似分裂文を要求し、目的語主題化においても態の転換を要求するので、何より情報構造を第一に構文を組み立てる言語であるといえるだろう。言い換えると、**topic-comment** もしくは **topic-focus** の順に従う語順の制約がきわめて強く、そのために種々の手法を用いなければならない言語ということになる。裏を返せばこの言語の態は、情報構造の標示としての機能を強く持っていると言うことができるだろう。

次に、（代名詞化なども伴って）語順を転換するタイプの言語には次のようなものがあった：ドイツ語（OVS に）、フランス語（付属語の代名詞にして SOV に、もしくは左方転移して主題化し、その後に *ce* で受けて分裂文を続ける）、スペイン語（弱勢代名詞にして SOV に）、中国語（OSV に）、モンゴル語ハルハ方言（O, SV に）、ペルシア語（代名詞接尾辞形にして SVO に）、ナーナイ語（OSV に）、トルクメン語（OSV に）。

イタロ諸語などは、付属語の代名詞などによって、代名詞を形態的にみてより軽い形にすることによって、基本語順とは異なる語順を実現していることがわかる。全般に主題の目的語を文頭へ、そうでなくとも SVO から SOV へと、目的語をより前へと移動しようとするが、ペルシア語だけは文末に移動している。なおハンガリー語では、接頭辞を分離せず、目的語は非出現になっている。ハンガリー語には定活用というものがあり、動詞が定活用になっていることによって、定の目的語が存在することが明らかになる。ここでもこの定活用の存在が機能していると考えられる。

名詞の側に特別な要素を用いる言語には次のようなものがあった：ダグール語チチハル方言（定対格?の使用）、朝鮮語（主語に *i* 「が」を用いることによって、非出現の主題の存在を暗示）、ウルドゥー語（完了の文の主語に能格を用いることによって、非出現の主題の存在を暗示）、トルクメン語（定対格の使用）。これらは名詞の側に文法要素を標示しようとする従属部表示型（*dependent-marking*）の言語である。

なお[10]の応答文で、主題化した目的語は現れない言語もあった。これは主題の継続性の問題である。これについては 4 節で取り扱う。

## 2.5. 分裂文

[11] 「私が昨日お店から買って来たのはこのリンゴだ。」【分裂文】

まずこの調査例文だけではやや不自然で、もう少し工夫すべきではなかったかという点が反省される。ドイツ語のデータには、この調査例文では自然な文が得られなかったという報告があった。2つ以上のリンゴがあり、「こっちの方が～」などという文にして、もう少しこうした文が発話される状況をていねいに規定しておくべきだったかもしれない。

さて、分裂文に関しては次のようなタイプの諸言語が観察された：

- ①分裂文を使用するタイプの言語群. ヨーロッパの印欧語族の言語に多く観察される.
- ②疑似分裂文を使用するタイプの言語群. 東北・東南アジアの言語に多く観察される.
- ③分裂文を嫌うタイプの言語群. アルタイ諸言語に多く観察される.
- ④分裂文およびそれに類する操作をほとんど必要としないタイプの言語群.

①に属する言語は、ドイツ語、フランス語、フィンランド語で、英語と同様に長い主語を避け仮主語を置くことによって分裂文を作っている。スペイン語は仮主語が不要で、いきなりコピュラから始まっているが、同じタイプと考えてよいだろう。ハンガリー語でも関係代名詞が用いられている。ここには統語的な要請から、SVO 語順への制約がある言語が主に属するものと考えられる（ただしハンガリー語は語順自由）。

これに対し、②に属する言語はウルドゥー語、ペルシア語、ビルマ語、ラワン語、ラオ語、クメール語、インドネシア語／マレーシア語、中国語、朝鮮語である。

ウルドゥー語の疑似分裂文は、主要部が不要の、物主代名詞型関係節で、ポーズの後、指示詞で受けなおしている。中国語でも主要部の本は関係節に同格で繰り返され、コピュラの後にも現れている。

インドネシア語／マレーシア語も同様であるが、イントネーションによってコピュラが不要になっている。これらの言語ではさらに語順を倒置した文も可能である。ビルマ語、ラワン語では名詞化標識（データ中のグロスではNC）によって節全体を名詞化し主語としている。

ペルシア語では、「物」という名詞に関係節を後続させて形成する。朝鮮語も、日本語に似ているが、形式名詞でなく *kes* 「もの、こと」を用いている。

ラオ語では孤立型の言語らしく、名詞化や関係節化がなく、節はいきなり主語名詞としてコピュラの前に現れている。クメール語は「1」に関係節を後置した疑似分裂文である。

少し変わっているのがアラビア語で、特に名詞化や関係節化を必要とせず、節に冠詞をつけるだけで全体が主語となり、単なる名詞述語文で分裂文相当の文を形成できる。

③に属する言語はトルクメン語、ダグール語、モンゴル語、ナーナイ語、ソロン語である。トルクメン語で分裂文は嫌われ、連体節を「本」に使用し、「これは私が・買って来た本だ。」のように表現する。ダグール語とモンゴル語も分裂文は作りにくく、話者は作らないという。分裂文における表現意図は、ふつうの動詞文にプロミネンスを用いることによって表現される。ダグール語ハイラル方言およびモンゴル語ハルハ方言で調査者が作文して確認した文も「～した本はこれだ」型の文になっている。ナーナイ語でもやはり分裂文は嫌われるが、作文すれば許容される。ソロン語で話者が最初に作例したのは、やはり動詞文で、焦点要素を右方転移し

た文であった。分裂文も作例したが、その際形動詞には3人称の所属人称が用いられて分断（以下では、情報構造における主題（topic）と題述（comment）の切れ目を「分断」と呼ぶことにする）を示している。

これらの言語の形動詞には名詞的機能があるが、これによって節を主語にするのは難しいようだ。これは、形動詞には修飾的（／連体的な）な機能もあるために、後続する要素があるとそれに係っていこうとするためであると考えられる。

なおグイ語において関係節は使われているが、「これは私が～買って来たオレンジだ」のような文になっている。もしくはふつうの動詞文が用いられるという。グイ語をどのグループに位置づけるべきかの判断は筆者には難しいが、暫定的に②のグループの言語とすることを提案しておく。

④に属する言語はロシア語である。今回の調査対象の言語には含まれていないが、ナーナイ語を調査するための媒介言語としてネイティブに作成していただいた調査例文を見ると、この言語では分裂文が不要であることがわかる。これは豊富な形態変化が可能にしたこの言語の自由な語順によって、情報構造が示されるためであると考えられる。逆に言えばこの言語で語順はもっぱら情報構造の表示に用いられるといってもよいだろう。

### 3. コピュラ文における諸問題

西山 (2003) は意味論および語用論に基づいたコピュラ文の包括的な研究である。そこでは、指示性・非指示性、および飽和性／非飽和性という観点から、日本語のコピュラ文を下記のよう

表3：日本語のコピュラ文の分類（西山 (2003: 122)による）

	「AはBだ」	「BがAだ」
1.	措定文「あいつは馬鹿だ」	／
2.	倒置指定文「幹事は田中だ」	指定文「田中が幹事だ」
3.	倒置同定文「こいつは山田村長の次男だ」	同定文「山田村長の次男がこいつだ」
4.	倒置同一性文「ジキル博士はハイド氏だ」	同一性文「ハイド氏がジキル博士だ」
5.	定義文「眼科医（と）は目のお医者さんのことだ」	／
6.	／	提示文「特におすすめなのがこのワインです」

コピュラ文の分析に用いる例文は下記である。

[12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」【措定文 主題（名詞述語文の主語）の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」【倒置同定文】

[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」【同定文】

[15] 「あさってってというのはね、あしたの次の日のことだよ。」【定義文】

ここではまず、措定文と同定文において、コンピュータや文の構造が同じであるのか異なっているのか、に注目する。

今回の調査対象の言語には含まれていないが、例えばハワイ語では措定文と同定文において、異なったコンピュータを用いることが知られている。今回の調査対象となった言語では、ラオ語、クメール語で異なったコンピュータが用いられることがわかった。ラオ語では、おおざっぱに言うと同定文に *pɛn*, 同定文に *mɛɛn* が用いられる。この調査例文では、[13]には *mɛɛn* のみ、[12], [14]では上記のどちらを意図しているかについての「話し手の発話意図」に拠って使い分けられるようである。クメール語では *cəə* と *kuuŋ cəə* が[12]に対する[13]と[14]という形で、明確に使い分けられている。なおスペイン語では[12]-[15]のような名詞述語文ではすべて同じであるものの、形容詞述語文ではそのアスペクト的な違い（すなわち、一時的か恒常的か）によってコンピュータの使い分けられることが知られている。今後のさらなる研究を必要とするが、こうした違いは、言語によって線を引く位置に違いはあっても、最終的にはアスペクトなどに関する連続した線上に位置づけられるものではないかと考える。

次に、コンピュータ以外の違いについてみると、まず措定文のほうが有標であるのはインドネシア語であり、*seorang* 「1」による不定化が行われる。他方、同定文のほうが有標であるのはアラビア語、ビルマ語、ペルシア語で、冠詞などによって違いが現れる。

上記以外の言語では、措定文と同定文に明確な違いは観察されなかった。

次に、同定文がどのような形式で成立しているかに注目する。今回の調査で使用した同定文[14]は、焦点が前に来ているという点でやや特殊な（有標な）文であると考えられる。したがって、こうした文はデフォルトの文形式では表現しない（もしくはできない）言語があると考えられる。

この点に関してもその対処の仕方は言語のタイプによって異なるようだ。まずアラビア語において、同定文では代名詞が分断する形をとっている。インドネシア語／マレーシア語では語順が逆転し、旧情報が前に移動している。グイ語でも逆転した語順を用いるようだ。

これらの言語に対し、従属部表示型（dependent-marking）のいわゆるアルタイ型の言語では、格など名詞側に現れる要素により有標なものを用いている。朝鮮語では主題助詞でなく主格助詞 *-i-ga* を用い、ビルマ語では主格助詞 *ká* が必須となる。ダグール語では *utkaa* 「すなわち」

や3人称所属により分断を行っている。

上記以外の言語では、特に特別な形式は現れていないように見えるので、プロミネンスによってその表現意図を達成しているものと考えられる。特に中国語のデータにはその点についての（プロミネンスについての）記述がある。

#### 4. 主題の継続性(すなわち, pro-drop 言語の可能性)

ここでは、[12]および[10]の例文のもう一つの意図である、主題の継続性についてみる。

以下にその結果によって言語を分類して示す。

・[12]で主題主語が継続可能で、現れなくともよい言語：インドネシア語（口語で）／マレーシア語、ダグール語、ビルマ語、朝鮮語、モンゴル語、ラオ語、ソロン語、ラワン語、ペルシア語（動詞には一致）、ナーナイ語（動詞には一致あり）、トルクメン語（動詞には一致あり）、ウルドゥー語（動詞には一致あり）、スペイン語（動詞には一致あり）、ハンガリー語（動詞には一致あり）、グイ語

・[12]で主題主語が継続不可能で、その出現が必須な言語：中国語、ドイツ語、フィンランド語、クメール語（?）

・[12]で2文目が別主語で判定が不能な言語：アラビア語（動詞に一致）、フランス語（節内にはあり）

・[10]で主題目的語が継続可能で現れなくともよい言語（もしくは少なくとも現れていない言語）：ハンガリー語、インドネシア語（-nya をつけ、定で現れてもよい）／マレーシア語、ダグール語（プトハ、ハイラル方言）、ビルマ語、朝鮮語、モンゴル語ホルチン方言、ウルドゥー語、ラワン語、ラオ語、クメール語

・[10]で主題目的語が継続不可能で、その出現が必須な言語／（少なくとも例文で）出現している言語：アラビア語、ドイツ語、フランス語、中国語（「省略しにくい」と記されている）、トルクメン語、[以下は非出現不可であるかは明らかではないが、少なくとも出現している言語]フィンランド語、ペルシア語、ナーナイ語、モンゴル語ハルハ方言、スペイン語、ソロン語、グイ語

上記の[12], [10]の結果を見ると、主語目的語に関わらず、その継続可能性は言語によって一貫した傾向を示すことが分かる。アジアの言語は継続可能なのが一般的であり、ドイツ語やフィンランド語は一貫して継続不可能である。ただしフィンランド語と同じウラル語族の言語であっても、ハンガリー語では一貫して継続可能・非出現である。

なお主語の場合と目的語の場合で若干条件が異なっている点に注意しておく必要がある。目的語の主題では、疑問文の主題としての目的語を引き継ぐかどうかであり、主語の主題では同じ話者の連続する発話間で主語を引き継ぐかどうかである。

## 5. 定義文

日本語で、定義文が「眼科医（と）は目のお医者さんのことだ。」や「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」となっているのをみるとわかるが、形式的な面からみても、若干単純なコピュラ文とは異なっていることが分かる（単純なコピュラ文なら、「眼科医は目のお医者さんだ.」、「あさってはあしたの次の日だ.」となる）。まず①述語が「～のことだ」となっていて、「～を意味する」に近い意味を実現している、次に②「～とは」「～っていうのは」などの引用形式によって主題を提示している。①に関して、筆者の内省では、「眼科医とは目のお医者さんだ.」としても成り立つが、若干文語的で、説明的な感じ、もしくは当然であるという感じがする。②については、ふつうのコピュラ文とは違い、定義文の主題は聞き手にとって意味不明のものであるため、上記のような引用形式は、その音形を問題にしているということを示すとともに、聞き手の注意を引く働きをしているように思われる。

他の言語における状況を整理するため、①–②の順でみていく。

まず①については、(A) コピュラ文がそのまま使える言語、(B) 「意味する」という動詞を使う言語、(C) 「言う」という動詞を使う言語、(D) 「なる」という動詞を使う言語、が観察された。なお（ ）内に示した言語は、データの文はそうになっていないが、コピュラ文で表現できるとの記述があった言語である。

(A) コピュラ文がそのまま使える言語：ドイツ語、ダゲール語チチハル方言、ナーナイ語、クメール語、グイ語、ハンガリー語、(アラビア語)、(フィンランド語)、(朝鮮語)、(スペイン語)

(B) 「意味する」という動詞を使う言語：アラビア語、フィンランド語、スペイン語、グイ語

(C) 「(～のことを) 言う」という動詞を使う言語：中国語、フランス語、朝鮮語、トルクメン語、ラワン語

(D) 「(～に) なる」という動詞を使う言語：ペルシア語

この①に関して、特に際立った地域的、もしくは系統的偏りは見られない。強いて言えば、フランス語を除き、「言う」という動詞を使う言語はアジア側に多いように思われる程度である。

アラビア語の「意味する」という動詞が不変化であることは興味深い。そこで問題となる語はアラビア語を理解する聞き手にとっても何しろ意味も分からない語であるので、その名詞の性や可算/不可算といった性質も分からないケースが多いだろう。相手が子供などでない限り、外来語や、新語である可能性も高いだろう。したがってこれに応じる語は不変化とならざるを得ないということが考えられる。

次に②についてみると、(P) 「言う」の類で主題化するタイプ、(Q) 指示詞を用いるタイプ、(R) 副詞を用いるタイプ、(S) その他、が観察された。(Q) のタイプのインドネシア語/マレー

シア語とラオ語のものは、地域的にも近いが、その機能もよく似ているように思われる。

(P) 「言う」の類で主題化するタイプ

朝鮮語：-lan mal-i-ci 「という言葉だが」を用いる。

モンゴル語：ge-dAg 「～というもの」を用いる。

ダグール語ハイラル方言：gel-g-sini 「～というもの」を用いる。

ビルマ語：shò-tà節「～というの」で主題化する。

グイ語：「～というの」とする。

ラワン語：「～というの」とする。

(Q) 指示詞を用いるタイプ

インドネシア語/マレーシア語：itu を用いて「(その) ～というの」(先行する名詞句の指示対象を発話行為参加者に何らかの関係があるものとして扱う) とする。

ラオ語：とりたて機能の指示詞 hàn を用いる。

フランス語：ça を用いて「その～ (というものは)」とする。

なお①の言語だが、ハンガリー語でも指示詞が用いられている。

(R) 副詞を用いるタイプ

中国語：「是」に副詞を用いて「就是」とする。「就」が無くてもよいかは不明。

ダグール語プトハ方言：副詞 utkai を用いる。utkai が無くてもよいかは不明。

(S) その他

ソロン語、モンゴル語ホルチン方言：「なら」を用いる。

ウルドゥー語：「～の意味 (であるのは)」とする。

モンゴル語やダグール語では、主題化に2人称起源の要素が用いられるが、これも聞き手の注意を引くという機能、もしくはマレーシア語で「先行する名詞句の指示対象を発話行為参加者に何らかの関係があるものとして扱う」として説明されている機能と関連があるのではないかと思われる。

## 6. ウナギ文

時崎 (2002) は英語でも補語が定であればうなぎ文が成立することを述べ (A: Let's see, sir. You're the black coffee with sugar? B: Right. C: I'm the coffee with cream and sugar, Beetle), さらに逆行うなぎ文 (I'm the ham sandwich: the quiche is my friend.) も取り上げている。冠詞のないロシア語でうなぎ文が成立しにくいことにも触れている。

それ以外の言語について、うなぎ文の成立の可否を通言語的に広く調べたものは管見の限りない。うなぎ文に関する調査例文は下記である。

[16] [何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて] 「私はコーヒーだ。」【ウナギ文】

[17] [注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに]  
「コーヒーは私だ。」【逆行ウナギ文】

以下に諸言語のデータの分析結果を示す。

最も自然に（逆行）ウナギ文が用いられるというデータが得られたのはインドネシア語／マレーシア語と朝鮮語，さらにモンゴル語ハルハ方言である。Kalau saya, copi. (if I, coffee)のような文が得られ，if にあたる要素が主題提示に用いられるとされていることも興味深い。日本語のハトバの起源的なつながりやモンゴル語の bol (<「ならば」のような形式から，条件にも主題提示にも用いられる)などとの関連からも注目される。Haiman (1978) は Conditionals are topics というタイトルの論文であり，条件と主題の関連が指摘されている。インドネシア語では逆行ウナギ文についても類似の文が提示されているが，イントネーションは異なるという。たしかに日本語でも，「ご注文は？」「私（は） コーヒー。」「私は紅茶。」のようなウナギ文のケースと，「コーヒーはどなた？」「**コーヒーは私**。」というような逆行ウナギ文のケースを考えると，両者（太字の部分）には違いがあるように思われる。すなわち，前者では対比を強く意識して発話しない限り全体が新情報のようなイントネーションで発話され，その場合ハは現れない方が自然であるような気がする。他方，逆行ウナギ文の方は，対比のニュアンスがあり，ウナギ文のケースにおける二人目の発話（「私は紅茶。」）と同じイントネーションになるように思われる（以上は内省による思弁的な考察に過ぎず，今後の実証的研究による適切な裏付けが必要である）。

なお朝鮮語の場合，名詞止めにより表現され，コンピュータを用いると「わたしはいつも／今日もコーヒーだ」のように習慣や反復を表す文になるという。日本語でも上記のように「私コーヒー」のような無助詞でダもない方が自然であるように思われる。やはり筆者の内省によると，「私はコーヒーだ。」は中年以上の男性ならウナギ文で通じそうであるが，「私はコーヒーです。」という，上記の朝鮮語のコンピュータ文のようなニュアンスが生じかねないように思われる（「私はコーヒーなんです。」とすればはっきりする）。フランス語の記述にある「je suis très café 私はかなりのカフェ愛好者だ」という表現と合わせて興味深い。コンピュータ文が本来持っているアスペクトの恒常的な性格の問題と考えられる。マレーシア語やモンゴル語ハルハ方言でも，（逆行）ウナギ文は成立するものの，コンピュータ (adalah/ialah, baj) は用いることができないという。

次に，ウナギ文は成立しないが，逆行ウナギ文に限っては成立する，とされた言語がいくつか見られた。まずラオ語では「(コーヒーは) 私だ。」のような文が可能であるという。インドネシア語でも逆行ウナギ文で自然な文とされていたのはこれ (Saya. 「私だ。」) であった。ペルシア語およびラワン語も逆行ウナギ文の方は可能であるという。なおこの時ペルシア語で，述語の man 「私」が 1 人称の接辞を取ることは興味深い。なおラワン語の逆行ウナギ文では明示的なコンピュータが現れている点に注意したい。フランス語の Le café, c'est moi. も逆行ウナギ文

に近い文とみることができよう。

反対に、ナーナイ語では逆行ウナギ文は使えないが、ウナギ文は可能であるとのことであった。これは補語の方に主格の形式が現れることが問題であるのかもしれない。

ビルマ語ではいちおう（逆行）ウナギ文が用いられるが、「自然な表現とは言いがたい」とのことである。グイ語はウナギ文のデータはないが、逆行ウナギ文について、それに近い文が成立しているようである。

次に特に（逆行）ウナギ文が成立しない言語について、その代わりにどのような文が使われるのか、をみると次のような2つの表現が用いられている：①動詞文を用いる、②前置詞句（特に for me のような）／格変化形を用いる、である。さらに特に逆行ウナギ文の方では、③属格等を用いた「私の（もの／ところ）」のような表現を用いる言語も多くみられた。

- ① 動詞文による：アラビア語、中国語、ダグール語、フィンランド語、ハンガリー語、ドイツ語、ラオ語、ナーナイ語、ペルシア語、ソロン語、トルクメン語、ウルドゥー語、モンゴル語ホルチン方言、ラワン語、クメール語
- ② 前置詞句（特に for me）／格変化形を用いる：フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ナーナイ語、スペイン語、トルクメン語
- ③ （特に逆行ウナギ文の方で）私の（もの／ところ）：アラビア語、ハンガリー語、中国語、ダグール語ブトハ方言、ソロン語、トルクメン語、ウルドゥー語

フィンランド語を含むヨーロッパの言語で、前置詞句（特に for me）／格変化形を用いた表現の使用が顕著であることが分かる。

## 7. 内心構造と外心構造

風間 (2012) はコピュラ文の諸相を通言語的に概観した1つの試みである。

以下は引用である。

具体的には形容詞的意味の語に関して、内心構造と外心構造の文の表現形式を扱う。内心構造を表示する要素を「リンカー」、外心構造を表示する要素を「コピュラ」と呼ぶと、世界の言語は下記のいずれかに分類できる。①リンカーもコピュラもない、②リンカーはあるがコピュラはない、③コピュラはあるがリンカーはない、④リンカーもコピュラもある。「線条性」の桎梏ゆえに、連続を断ち切るためもしくは不連続を繋げるため、どの言語も一定の方略を留意しており、各言語はその言語全体の体系に応じて各々独自の手法を用いていることがわかる。

まずリンカーもコピュラも持たないタイプでは、修飾語と被修飾語の語順が基本的に決まっている。イントネーションも重要な役割を果たしている。次にリンカーやコピュラを持つ言語についてみれば次のようなことがいえるだろう。

コピュラに対してリンカーが言語によってきわめて多様な有様を示すことがわかる。

コピュラが十分に発達していない言語の場合、修飾構造の連続を断つために人称代名詞（モンゴル語など）、指示詞（インドネシア語）、程度副詞（漢語）、などが機能している例がみられた。これらは歴史的にコピュラに文法化し得る要素であると考えられる。またこれらは限定度の問題と深く関わっていることをみた。他方リンカーは、タガログ語のリンカーやペルシア語のエザーフェ、日本語の連体形、アラビア語の冠詞の一致、ロシア語の性・数・格の一致、エスキモー語の語彙的接辞、コリヤーク語の抱合などきわめて多様である。この中にはロシア語やアラビア語など、基本的に一致による同格をその統制原理とする言語と、そうでない言語の2つがあることにも注意したい。

並置の使用という観点からみれば、インドネシア語とペルシア語がもっとも対極的であるといえよう。すなわちインドネシア語ではある2つの要素を並置すれば修飾関係になりこれを断って外心構造にするためには指示詞が必要である。逆にペルシア語では並置すれば外心構造になるので、連結するためにはエザーフェが必要となる。

上記の検証に用いる文は下記である。スペイン語などでは、アスペクト的な違いによって2つのコピュラが使い分けられるが、形容詞述語文と名詞述語文の両方を訊くことはこの点の解明にもつながるものと考えている。なおラオ語の修飾構造において、形容詞の重複が観察された点が興味深い。

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

- ① リンカーもコピュラもない：ダグール語、モンゴル語、ソロン語、ナーナイ語、ビルマ語、ラオ語、クメール語、ハンガリー語
- ② リンカーはあるがコピュラはない：アラビア語、ペルシア語、インドネシア語／マレーシア語、中国語、朝鮮語、グイ語、ラワン語
- ③ コピュラはあるがリンカーはない：フランス語、スペイン語、ウルドゥー語、トルクメン語
- ④ リンカーもコピュラもある：ドイツ語、フィンランド語

ここで2つの形容詞が1つの同じ名詞を修飾する際には、2つの方法が考えられるだろう。すなわち上記の例の「[新しくて厚い]本」のように、①連用形や **and** のような要素を用いて修飾句を形成し、これ全体で連体修飾を行うものと、②「[新しい [厚い本]]」のようにそのような要素を介さず、少なくとも見かけ上は2つの形容詞が重層的に修飾しているもの、である。ここで前者を一括修飾型、後者を累積修飾型と呼ぶことにする。この点について分類してみた結果は以下のものであった（なお太字の言語は形容詞動詞型の言語、そうでないのは形容詞名詞型の言語である）。

- ① 一括修飾型：インドネシア語／マレーシア語，中国語，ラワン語，朝鮮語，グイ語，フィンランド語，モンゴル語ホルチン方言，ウルドゥー語，スペイン語，ソロン語，トルクメン語
- ② 累積修飾型：ビルマ語，ラオ語，クメール語，アラビア語，ドイツ語，ダグール語，フランス語（ただし前後から），モンゴル語ハルハ方言，ハンガリー語
- ③ 両方可：ペルシア語

残念ながら特にこのように分類された言語群の間に，系統的もしくは地域的な偏りは見いだせなかった。

次に，リンカーもしくはそれに代わる要素によって示されるべき「修飾」と，コピュラもしくはそれに代わるべき要素によって示されるべき「分断」について，諸言語がどのような要素を用いていたかを整理しておく。

- ・アラビア語：冠詞の一致による修飾，冠詞不使用による分断
- ・インドネシア語／マレーシア語：まとめてから関係節により修飾，指示詞（さらにコピュラ）による分断
- ・中国語：「又」により並列し「的」により同格前置，「很」による分断
- ・ドイツ語：語尾による修飾，コピュラによる分断
- ・ダグール語：前置修飾，「とても」による分断（媒介言語の漢語の影響？）
- ・フランス語：後置修飾，コピュラによる分断
- ・フィンランド語：格の一致による修飾，コピュラによる分断
- ・ハンガリー語：前置および格の一致による修飾，イントネーションによる分断
- ・ビルマ語：名詞化したものを同格で並列，形容詞は動詞として動詞の語尾をとる
- ・朝鮮語：連体形による修飾，陳述形による分断
- ・モンゴル語：前置による修飾，イントネーションもしくは3人称所属形による分断：
- ・ウルドゥー語，トルクメン語：前置修飾，後置のコピュラによる述語化
- ・スペイン語：後置修飾，コピュラによる分断
- ・ペルシア語：エザーフェによる連結，その不使用による分断
- ・ソロン語，ナーナイ語：前置修飾，イントネーションによる分断
- ・ラオ語：重複による修飾，指示詞やイントネーションによる分断
- ・クメール語：後置修飾，指示詞による分断
- ・グイ語：関係節による修飾，格付属語による分断
- ・ラワン語：前置修飾，形容詞は動詞として動詞の語尾をとる

## 8. 意外性

児倉 (2015: 118) は証拠性と意外性の関連について，以下のように記している。

証拠性とされる対立には文の表わす情報と話し手の持つ既存の知識との関係が関わる場合もある。トルコ語において、**-miş** は間接経験を表す一方、話し手の既存の知識（あるいは予測）に反する情報であれば、直接経験に基づく情報にも使用することができる。そのとき **-miş** は、意外性 (mirativity) を表す。

意外性に関しては、下記の例文を用いる。なお意外性に現れる形式と、証拠性の関連についてみるためには当然証拠性に関する例文、特に間接経験の例文がなければならないが、これは本論集 16 号のモダリティ特集の例文に多く含まれているので、これに拠ることとする。

[19] [砂糖の入れ物を開けて]「あっ、砂糖が無くなっているよ！」【意外性 (mirativity)】

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！ 田中君だったな。」  
【思い出し】

諸言語のデータを見てみると、[20]に対して過去形等が用いられる言語は多いが、[19]に対して過去形等が用いられる言語は少ないことが分かる。これに対し、【思い出し】では過去にそのことを思考した時点が話者の念頭にのぼるので、過去形が使われやすいのではないかと考えられる。

[19]に過去形等を用いていたのは次の言語である：ペルシア語（「なる」の過去分詞形）、トルクメン語、ウルドゥー語、ダグール語、ラワン語、ハンガリー語（完了形だが、現状の確認の意味がある）

このように【意外性 (mirativity)】に過去形等を用いる言語は、認識の時点よりもデキゴトの生起の方が先であったことを問題にする言語（言い換えれば、デキゴトより後からの認識であることを明示する）であり、その数はあまり多くないことが分かる。後からの認識は、伝聞などにも用いられる言語があり（トルコ語など）、証拠性 (evidentiality) の問題とされている。こうした証拠性が問題になる言語としては、先行研究においてアルタイ諸言語やチベット・ビルマ語族の言語、西アジアの言語などがよく取り上げられているのを目にするが、上記の言語群はまさしくそのような系統や地域の言語となっている。

その他、意外性を示す何らかの明示的要素として特筆すべきものを示しておく。

ビルマ語：終助詞 **ha**、ノダ文不使用

朝鮮語：詠嘆や気付きなどの意味がある終止形語尾の **-ney**

マレーシア語：話者の予測に反することを示す **pula(k)**

ナーナイ語：意外性を示すとりたての付属語と文末表現

ラワン語：文末小辞

次に、[20]【思い出し】における過去形等の使用をみる。

- ・「誰かに会うはずだったなあ。」の文における使用：ダグール語、フィンランド語、朝鮮語、モンゴル語、ペルシア語（接続法）、トルクメン語、ウルドゥー語、スペイン語、ハンガリー語
  - ・「誰だったっけ。」の文における使用：フィンランド語、朝鮮語、モンゴル語、ペルシア語、トルクメン語、ウルドゥー語、スペイン語、ソロン語、ラワン語
  - ・「あっ、そうだ！」の文における使用：トルクメン語、ウルドゥー語、ラワン語
  - ・「田中君だったな。」の文における使用：アラビア語、ダグール語、フランス語、フィンランド語、朝鮮語、モンゴル語、ペルシア語、トルクメン語、スペイン語、ソロン語、ラワン語
- 過去形等の使用が全く観察されなかった言語：インドネシア語／マレーシア語、中国語、ラオ語、ドイツ語、クメール語

まず過去形等の使用が見られなかった言語には、孤立型の類型を持つ言語が多く現れていることが分かる。これはこれらの言語には一般的にテンスのカテゴリーがないことから説明できるだろう。ただし中国語、ラオ語には状況の変化を示す文末形式が用いられている

他方過去形等の使用が見られた言語は、先の証拠性が問題になる言語、すなわちアルタイ諸言語やチベット・ビルマ語族の言語、西アジアの言語に加え、ヨーロッパの印欧語族の言語やフィンランド語などが現れている。ただし、これは今回調査対象となった言語の大部分でもあるので、地域や系統に偏りがあると言することは難しいだろう。

さらに特筆すべきこととしては、朝鮮語において、「誰だったっけ」の文に目撃法が使われている点である。日本語共通語の文にも古文のケリに遡るツケが使われているが、目撃から思い出しにまたがる機能的範囲を持っている点で、青森南部方言など日本の東北方言に広くみられるツキヤなどの形式と類似していることが注目される。さらにナーナイ語で「誰かに会うはずだった」の文に仮定法が用いられていることも興味深い。

今回考察した過去形等の形式に関して、それらの言語の間接経験の例文でのテンス形式と比べた考察を行うべきであるが、今回そこまで検討が進められなかった。今後の課題としたい。

## 9. 今後の課題や注意点

アンケートには、次の2点を特に記して注意喚起を促した。

- 1) 今回調査する諸要素の中には、言語によっては明示的な形式を持たない、あるいはイントネーションによってのみ区別される（特に焦点など）、というケースが考えられる。調査者はイントネーションにも注意し、必要と思われる場合にはできればそれについても記述する必要がある。
- 2) 疑問文も今回の調査の1つの目的である。否定疑問文の答も、英語とは異なり、ドイツ語やフランス語では Yes No のいずれの対応要素でもないものが用いられるが、こうした要素はとりたてとも関連が深いと考えられる。そのような要素にも注目したい。

マレーシア語のデータには特にピッチ曲線も示され、貴重なデータが得られたが、私（風間）自身が調査したデータも含め、イントネーションやプロミネンスの調査は不十分であり、結果の分析にも特に反映することができなかった。情報構造の研究は形態・統語と音声の研究境界領域（研究重複領域!?!）であることが、今回の諸言語のデータからもよくわかった。今後はできれば音声データも収集することや、前後の文脈等をさらに丁寧に設定することが一つの課題と言えるだろう。

2)については、[3]に否定疑問文とその答えを用意したつもりだったが、フランス語においてもドイツ語においても、予想していた *Si* や *Doch* は現れなかった。他の言語においても特に特別な形式は現れなかった。この点に関してはその出現条件を見極めるために、さらなる調査研究が必要であろう。

全般にわたって、対象とする言語データをさらに増やすとともに、情報構造全般に関しても、コンピュータ文に関してもさらなる調査・研究の必要なことは言うまでもない。

#### 参考文献

- Haiman, J. (1978) Conditionals are Topics. *Language* 54, 565-589.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（1996）『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂。
- 風間伸次郎（2012）「コンピュータ文の諸相」影山太郎・沈力（編）『日中理論言語学の新展望 2 意味と構文』85-106. 東京：くろしお出版。
- 児倉徳和（2015）「証拠性」斎藤純男・田口善久・西村義樹（編）『明解言語学辞典』118. 東京：三省堂。
- Lambrecht, Knud (1994) Information structure and sentence form. Topic, focus, and the mental representations of discourse referents. Cambridge: Cambridge University Press.
- 西山祐司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論 —指示的名詞句と非指示的名詞句—』東京：ひつじ書房
- 下地理則（2015）「焦点化と格標示」（WS「日本語方言のケースマーキングのとりたて性と分裂自動詞性」）『日本言語学会 第151回大会予稿集』396-401.
- 時崎久夫（2002）「日英語のうなぎ文」『日本言語学会 第124回大会 予稿集』84-89.

## 特集：「情報構造と名詞述語文」調査例文

風間 伸次郎

### 0. はじめに

これまでの語研特集では、ヴォイス (含む「受動表現」)、アスペクト、モダリティ、他動性、連用修飾複文、と、もっぱら動詞述語文を中心に扱って来た。唯一「所有・存在表現」は静的述語および名詞句を扱った点でこれらとは若干異なっていた。

残る課題の1つは、名詞述語文 (ノコピュラ文) であり、そこには指示性や文の情報構造が大きく関わって来る。したがって今回の特集ではこれを取りあげて特集のアンケート例文を構成した。

まずいったんアンケート例文を全て示し、しかるのちに個々の例文について、その狙いや理論的背景を述べて行くことにする。

- [1] 「えっ、一郎 [ノ固有名詞なら何でもよい、以下も] が来たの？」「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」【対比焦点 (主語)】 (例えば、昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)
- [2] 「誰が来た (の) ?」「一郎が来たよ。」【WH 焦点 (主語)・WH 応答焦点 (主語)】
- [3] 「一郎の方が大きいんじゃないの？」「いや、一郎じゃなくて、次郎の方が大きいんだよ。」【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】 (一郎と次郎の背について話している状況で)
- [4] [電話で]「どうした (の) ?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」【文焦点 (自動詞文)】
- [5] 「あの子供が一郎を叩いたんだって!」「いや、一郎じゃなくて、次郎を叩いたんだよ。」【対比焦点 (目的語)】
- [6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う (の) ?」「(私は) 青い袋を買うよ。」【対比焦点 (目的語、特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)】
- [7] 「一郎はどうした?」「一郎は朝からどっかへでかけたよ。」【述語焦点】 (例えば、朝少し遅く起きて来た一郎の父親が、姿の見えない一郎について母親に尋ねている場面で)
- [8] 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」【WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)】
- [9] [電話で]「どうした (の) ?」「うん、一郎が (自分の) 弟を叩いたんだ。」【文焦点 (他動詞文)】 (例えば、電話の向こうで子供の泣き声が上がったのを聞いての発話)
- [10] 「あのケーキ、どうした?」「ああ、(あれは) 一郎が食べちゃったよ。」【目的語主題化、主題 (目的語) の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】
- [11] 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」【分裂文】

- [12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」【**措定文 主題** (名詞述語文の主語)の継続性 いわゆる **pro-drop** 言語の可能性】
- [13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」【**倒置指定文**】
- [14] 「あの人が彼のお父さんだ。」【**指定文**】
- [15] 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」【**定義文**】
- [16] 「何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて」 「私はコーヒーだ。」【**ウナギ文**】
- [17] 「注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに」「コーヒーは私だ。」【**逆行ウナギ文**】
- [18] 「その新しくて厚い本は(値段が)高い。」【**形容詞述語文 修飾・並列・述語**】
- [19] 「砂糖の入れ物を開けて」「あっ、砂糖が無くなっているよ!」【**意外性 (mirativity)**】
- [20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ! 田中君だったな。」【**思い出し**】

#### 1. 焦点に関する類型論的研究 (下地 (2015))

下地 (2015) では, Lambrecht (1994) (筆者未見) の枠組みを参考に, 焦点を対比焦点, WH 応答焦点, WH 焦点の3つに分け, 琉球諸方言における焦点標識の出現可能性を調査しこれを次の表のようにまとめている。

表1: 下地 (2015)による琉球諸方言における焦点タイプと焦点標識の出現可能性

	対比焦点	WH 応答焦点	WH 焦点
宮古伊良部	D/D	D/D	D/D
与那国	D/D	D/D	(D/D)
奄美 (湯湾)	D/D	D/	
奄美 (浦)	D/D		

動詞述語文/非動詞述語文

すなわち, ここでのDは上記の諸方言における焦点形式で, これは対比焦点において最も現れやすく, これに次いでWH 応答焦点, WH 焦点の順になっている。このことから下地 (2015) は, 次のような階層を提案している。

- 1) 焦点化階層①: 階層のある地点で焦点標識を使えるなら, その左側の焦点タイプでも使える。**対比焦点 > WH 応答焦点 > WH 焦点**
- 2) 焦点化階層②: 動詞述語文のほうが非動詞述語文よりも焦点標示されやすい (=非動詞述語文でDが出現するなら動詞述語文でも出現する)。**動詞述語文 > 非動詞述語文**

このことの検証に使用する例文は下記である (上記に加え, さらに文焦点や分裂文の例も加えた)。

- [1] 「えっ, 一郎 [ / 固有名詞なら何でもよい ] が来たの?」 「いや, 一郎じゃなくて次郎が来

- たんだ。【対比焦点（主語）】（例えば、昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で）
- [2] 「誰が来た（の）？」「一郎が来たよ。」【WH 焦点（主語）・WH 応答焦点（主語）】
- [3] 「一郎の方が大きいんじゃないの？」「いや、一郎じゃなくて、次郎の方が大きいんだよ。」  
【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】
- [4] [電話で]「どうした（の）？」「うん、今、お客さんが来たんだ。」【文焦点（自動詞文）】
- [5] 「あの子供が一郎を叩いたんだって!？」「いや、一郎じゃなくて、次郎を叩いたんだよ。」【対比焦点（目的語）】
- [6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う（の）？」「青い袋を買うよ。」【対比焦点（目的語、特に「どっち」という対比的な疑問語の場合）】
- [7] 「一郎はどうした？」「一郎は朝からどっかへでかけたよ。」【述語焦点】（例えば、朝少し遅く起きて来た一郎の父親が、姿の見えない一郎について母親に尋ねている場面で）
- [8] 「（あの子供は）誰を叩いたの？」「（あの子供は）自分の弟を叩いたんだ。」  
【WH 焦点（目的語）・WH 応答焦点（目的語）】
- [9] [電話で]「どうした（の）？」「うん、一郎が（自分の）弟を叩いたんだ。」  
【文焦点（他動詞文）】（例えば、電話の向こうで子供の泣き声が起きたのを聞いての発話）
- [10] 「あのケーキ、どうした？」「ああ、（あれは）一郎が食べちゃったよ。」  
【目的語主題化、主題（目的語）の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】
- [11] 「私が昨日お店から買って来たのはこのリンゴだ。」【分裂文】

## 2. コピュラ文に関する研究

### 2.1. 西山 (2003)

西山 (2003) は意味論および語用論に基づいたコピュラ文の包括的な研究である。そこでは、指示性・非指示性、および飽和性／非飽和性という観点から、日本語のコピュラ文を下記のように分類している。

表 2：日本語のコピュラ文の分類（西山 (2003: 122)による）

	「AはBだ」	「BがAだ」
1.	指定文「あいつは馬鹿だ」	/
2.	倒置指定文「幹事は田中だ」	指定文「田中が幹事だ」
3.	倒置同定文「こいつは山田村長の次男だ」	同定文「山田村長の次男がこいつだ」
4.	倒置同一性文「ジキル博士はハイド氏だ」	同一性文「ハイド氏がジキル博士だ」
5.	定義文「眼科医（と）は目のお医者さんのことだ」	/
6.	/	提示文「特におすすめなのがこのワインです」

コピュラ文の分析に用いる例文は下記である。

- [12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」【指定文 主題 (名詞述語文の主語)の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】  
[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」【倒置指定文】  
[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」【指定文】  
[15] 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」【定義文】

## 2.2. うなぎ文に関する対照研究 (時崎 (2002))

時崎 (2002) は英語でも補語が定であればうなぎ文が成立することを述べ (A: Let's see, sir. You're the black coffee with sugar? B: Right. C: I'm the coffee with cream and sugar, Beetle), さらに逆行うなぎ文 (I'm the ham sandwich: the quiche is my friend.) も取り上げている。冠詞のないロシア語でうなぎ文が成立しにくいことにも触れている。

それ以外の言語について、うなぎ文の成立の可否を通言語的に広く調べたものは管見の限りない。うなぎ文に関する調査例文は下記である。

- [16] 「何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて」 「私はコーヒーだ。」【ウナギ文】  
[17] 「注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに」 「コーヒーは私だ。」【逆行ウナギ文】

## 2.3. 風間 (2012)

風間はコピュラ文の諸相を通言語的に概観した1つの試みである。

以下は引用である。

具体的には形容詞的意味の語に関して、内心構造と外心構造の文の表現形式を扱う。内心構造を表示する要素を「リンカー」、外心構造を表示する要素を「コピュラ」と呼ぶと、世界の言語は下記のいずれかに分類できる。①リンカーもコピュラもない、②リンカーはあるがコピュラはない、③コピュラはあるがリンカーはない、④リンカーもコピュラもある。「線条性」の桎梏ゆえに、連続を断ち切るためもしくは不連続を繋げるため、どの言語も一定の方略を用意しており、各言語はその言語全体の体系に応じて各々独自の手法を用いていることがわかる。

まずリンカーもコピュラも持たないタイプでは、修飾語と被修飾語の語順が基本的に決まっている。イントネーションも重要な役割を果たしている。次にリンカーやコピュラを持つ言語についてみれば、次のようなことがいえるだろう。

コピュラに対してリンカーが言語によってきわめて多様な有様を示すことがわかる。コ

ピュラが十分に発達していない言語の場合、修飾構造の連続を断つために人称代名詞（モンゴル語など）、指示詞（インドネシア語）、程度副詞（漢語）、などが機能している例がみられた。これらは歴史的にコピュラに文法化し得る要素であると考えられる。またこれらは限定度の問題と深く関わっていることをみた。他方リンカーは、タガログ語のリンカーやペルシャ語のエザーフェ、日本語の連体形、アラビア語の冠詞の一致、ロシア語の性・数・格の一致、エスキモー語の語彙的接辞、コリヤーク語の抱合などきわめて多様である。この中にはロシア語やアラビア語など、基本的に一致による同格をその統制原理とする言語と、そうでない言語の2つがあることにも注意したい。

並置の使用という観点からみればインドネシア語とペルシア語がもっとも対極的であるといえよう。すなわちインドネシア語ではある2つの要素を並置すれば修飾関係になりこれを断って外心構造にするためには指示詞が必要である。逆にペルシア語では並置すれば外心構造になるので、連結するためにはエザーフェが必要となる。

上記の検証に用いる文は下記である。スペイン語などでは、アスペク的な違いによって2つのコピュラが使い分けられるが、形容詞述語文と名詞述語文の両方を訊くことはこの点の解明にもつながるものと考えている。

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

### 3. 意外性に関して（児倉 (2015)）

児倉 (2015: 118) は証拠性と意外性の関連について、以下のように記している。

証拠性とされる対立には文の表わす情報と話し手の持つ既存の知識との関係が関わる場合もある。トルコ語において、*-miş* は間接経験を表す一方、話し手の既存の知識（あるいは予測）に反する情報であれば、直接経験に基づく情報にも使用することができる。そのとき *-miş* は、意外性 (*mirativity*) を表す。

意外性に関しては、下記の例文を用いる。なお意外性に現れる形式と、証拠性の関連についてみるためには当然証拠性に関する例文がなければならないが、これは本論集 16 号のモダリティ特集の例文に多く含まれているので、これを活用する。

[19] [砂糖の入れ物を開けて]「あつ、砂糖が無くなっているよ！」【意外性 (*mirativity*)】

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あつ、そうだ！ 田中君だったな。」【思い出し】

#### 4. 課題や注意点

今回調査する諸要素の中には、言語によっては明示的な形式を持たない、あるいはイントネーションによってのみ区別される(特に焦点など)、というケースが考えられる。調査者はイントネーションにも注意し、必要と思われる場合にはできればそれについても記述する必要がある。

疑問文も今回の調査の1つの目的である。否定疑問文の答も、英語とは異なり、ドイツ語やフランス語では Yes No のいずれの対応要素でもないものが用いられるが、こうした要素はとりたてとも関連が深いと考えられる。そのような要素にも注目したい。

#### 参考文献

- 風間伸次郎 (2012) 「コピュラ文の諸相」 影山太郎・沈力 (編) 『日中理論言語学の新展望2 意味と構文』 85-106. 東京: くろしお出版.
- 児倉徳和 (2015) 「証拠性」 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』 118. 東京: 三省堂.
- Lambrecht, Knud (1994) Information structure and sentence form. Topic, focus, and the mental representations of discourse referents. Cambridge: Cambridge University Press.
- 西山祐司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論 —指示的名詞句と非指示的名詞句—』 東京: ひつじ書房
- 下地理則 (2015) 「焦点化と格標示」 (WS「日本語方言のケースマーキングのとりたて性と分裂自動詞性」) 『日本言語学会 第151回大会予稿集』 396-401.
- 時崎久夫 (2002) 「日英語のうなぎ文」 『日本言語学会 第124回大会 予稿集』 84-89.

## フランス語における情報構造と名詞述語文

秋廣 尚恵

## 1. はじめに

今回のデータ提供にあたっては、フランス人のインフォーマント2名に協力をお願いした。インフォーマントは、フランスの大学において、高等教育を受けた後、数年以来、日本に在住しており、日本語の能力も上級レベルに達している。ここでは、インフォーマントAとインフォーマントBと記しておく。調査方法としては、例文の日本語を出来るだけ自然なフランス語に訳してもらった。

本稿では、まず、第2段落において、インフォーマントから提供された訳文を提示する。インフォーマントAの訳文(例文番号の後にaを記しておく)、Bの訳文(例文番号の後にbを記しておく)の順に掲載する。

次いで、第3段落において、データの分析を元に、フランス語における情報構造と名詞述語文の特徴について考察を述べる。

## 2. 訳文データ

## 2.1. 対比焦点(主語)

(1.a) 「えっ、一郎が来たの?」「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」

*Hein? Ichiro est venu? Non, pas Ichiro, c'est Jiro qui est venu.*  
eh Ichiro come.PST no NEG Ichiro PRST Jiro REL.N come.PST

(1.b) 「えっ、一郎が来たの?」「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」

*Hein? Ichiro est venu? Non, pas Ichiro, Jiro.*  
eh Ichiro come.PST no NEG Ichiro Jiro

## 2.2. WH焦点(主語)・WH応答焦点(主語)

(2.a) 「誰が来た(の)?」「一郎が来たよ。」

*Qui c'est qui est venu? C'est Ichiro.*  
PINT.H PRST REL.NOM come.PST PRST Ichiro

(2.b) 「誰が来た(の)?」「一郎が来たよ。」

*Qui est-ce qui est venu? Ichiro.*  
PINT.H PRST.REL.NOM come.PST Ichiro

### 2.3. Yes・No 疑問・形容詞述語応答焦点

(3.a) 「一郎の方が大きいんじゃないの？」 n

*Ichiro ne serait pas un peu plus grand?*

Ichiro NEG be-COND NEG a little more big

「いや、一郎じゃなくて、次郎の方が大きいんだよ。」

*Non, Ichiro n' est pas plus grand, c'est Jiro qui est*

no Ichiro NEG be.PRS NEG more big PRST Jiro REL.NOM be.PRS

*plus grand*

more big

(3.b) 「一郎の方が大きいんじゃないの？」

*Ichiro n' est pas plus grand?*

Ichiro NEG be.PRS NEG More big

「いや、一郎じゃなくて、次郎の方が大きいんだよ。」

*Non, pas Ichiro. Jiro est plus grand*

no NEG Ichiro Jiro be.PRS more big

### 2.4. 文焦点（自動詞文）

(4.a) (電話で) 「どうした (の) ?」

*Qu' est-ce qui se passe?*

PINT.NH PRST REL.NOM happen.PRS

「うん、今、お客さんが来たんだ。」

*Non, rien. Il y a un client qui est arrivé*

no nothing there-is a client REL.NOM arrive-PST

(4.b) (電話で) 「どうした (の) ?」

*Qu' est-ce qui t' arrive?*

PINT.NH PRST REL.N you.DAT arrive.PRS

「うん、今、お客さんが来たんだ。」

*Non, rien. Un client vient d'arriver*

no nothing a client arrive-RCNTPST

## 2.5. 対比焦点（目的語）

(5.a) 「あの子供が一郎を叩いたんだって!？」

*C'est cet enfant qui aurait tapé Ichiro!?*

PRST DEM child REL.NOM hit.COND.PST Ichiro

「いや、一郎じゃなくて、次郎を叩いたんだよ。」

*Non, il n'a pas tapé Ichiro, il a tapé Jiro!*

no he hit.NEG.PST Ichiro he hit.PST Jiro

(5.b) 「あの子供が一郎を叩いたんだって!？」

*A ce qu'il paraît cet enfant aurait frappé Ichiro?!*

it would appear DEM child hit.COND.PST Ichiro

「いや、一郎じゃなくて、次郎を叩いたんだよ。」

*Pas Ichiro, mais Jiro.*

NEG Ichiro but Jiro

## 2.6. 対比焦点（目的語，特に「どっち」という対比的な疑問語の場合）

(6.a) 「赤い袋と青い袋があるけど，どっちを買う（の）？」

*Il y a un sac rouge et un sac bleu.*

there-is a bag red and a bag blue

*Vous voulez lequel?*

you want PINT.SG.M

「(私は) 青い袋を買うよ。」

*Je vais prendre le bleu.*

I take.NRFUT the blue

(6.b) 「赤い袋と青い袋があるけど，どっちを買う（の）？」

*Lequel tu achètes,*

PINT.SG.M you buy.PRS

*le sac rouge ou le sac bleu?*

the bag red or The bag blue

「(私は) 青い袋を買うよ。」

*Je prendrai le bleu.*

I take.FUT the Blue

## 2.7. 述語焦点

(7.a) 「一郎はどうした？」

*Il est passé où, Ichiro?*

he pass.PST PINT.LOC Ichiro

「一郎は朝からどっかへでかけたよ。」

*Ichiro? Il est parti quelque part ce matin.*

Ichiro he leave.PST somewhere DEM morning

(7.b) 「一郎はどうした？」

*Qu' est-ce qui est arrivé à Ichiro?*

PINT.NH PRST REL.N arrive.PST to Ichiro

「一郎は朝からどっかへでかけたよ。」

*Il est allé quelque part ce matin.*

he go.PST Somewhere DEM morning

## 2.8. WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)

(8.a) 「(あの子供は) 誰を叩いたの？」

*Il a tapé qui?*

he hit.PST PINT.H

「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

*Il a tapé son Petit frère.*

he hit.PST his Young brother

(8.b) 「(あの子供は) 誰を叩いたの？」

*Cet enfant a tapé qui?*

this child hit.PST PINT.H

「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

*Il a tapé son Petit frère.*

he hit.PST his young brother

## 2.9. 文焦点 (他動詞文)

(9.a) 「どうした (の) ?」

*Qu' est-ce qui se passe?*

PINT.NH PRST REL.NOM happen

「うん、一郎が（自分の）弟を叩いたんだ。」

*Eh ben, Ichiro a tapé son petit frère.*  
 eh well, Ichiro hit.PST his young brother.

(9.b) 「どうした（の）？」

*Qu' est-ce qui se passe?*  
 PINT.NH PRST REL.NOM happen

「うん、一郎が（自分の）弟を叩いたんだ。」

*Rien Ichiro a juste frappé son petit frère.*  
 nothing Ichiro just hit.PST his young brother

## 2.10. 目的語主題化, 主題（目的語）の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性

(10.a) 「あのケーキ, どうした？」

*Il est passé où, le gâteau?*  
 PIMP pass.PST where the cake

「ああ, (あれは) 一郎が食べちゃったよ。」

*Ah Ichiro l' a mangé.*  
 ah Ichiro it.ACC eat.PST

(10.b) 「あのケーキ, どうした？」

*Il est passé où, le gâteau?*  
 PIMP pass.PST where the cake

「ああ, (あれは) 一郎が食べちゃったよ。」

*Ah, le gâteau, c'est Ichiro qui l' a mangé*  
 ah the cake PRST Ichiro REL.NOM it.ACC eat.PST

## 2.11. 分裂文

(11.a) 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」

*C'est ce livre que j' ai acheté hier*  
 PRST DEM book REL.ACC I buy.PST yesterday  
*à la librairie*  
 in the bookshop

(11.b) 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」

*C'est ce livre que j'ai acheté*  
PRST DEM book REL.ACC I buy.PST  
*hier à la librairie*  
yesterday in the bookshop

## 2.12. 指定文 主題（名詞述語文の主語）の継続性

(12.a) 「あの人は先生だ.この学校でもう3年働いている。」

*Ce monsieur est professeur.*  
DEM man be.PRS teacher  
*Ça fait déjà trois ans*  
DEM make already 3 years  
*qu'il travaille dans cette école.*  
COMPL he work.PRS in DEM school

(12.b) 「あの人は先生だ.この学校でもう3年働いている。」

*Cette personne est professeur.*  
DEM person is teacher  
*Cela fait trois ans qu'elle travaille dans cette école.*  
DEM make 3 years COMPL he work.PRS in DEM school

## 2.13. 倒置指定文

(13.a) 「彼のお父さんは、あの人だ。」

*Son père, c'est ce monsieur*  
his father PRST DEM man

(13.b) 「彼のお父さんは、あの人だ。」

*Son père, c'est cette personne.*  
his father PRST DEM person

## 2.14. 指定文

(14.a) 「あの人が彼のお父さんだ。」

*Ce monsieur, c'est son père*  
DEM man PRST his father

(14.b) 「あの人が彼のお父さんだ。」

*Cette personne, c'est son père*  
 DEM person PRST his father

## 2.15. 定義文

(15.a) 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

*Après demain ça veut dire le jour après demain*  
 after tomorrow DEM want.PRS say.INF the day after tomorrow

(15.b) 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

*Après demain ça veut dire que*  
 after tomorrow DEM want.PRS say.INF COMPL  
*c'est le jour qui arrive après demain*  
 PRST the day REL.N come.PRS after tomorrow

## 2.16. ウナギ文

(16.a) (何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて)

「私はコーヒーだ。」

*Pour moi, ce sera un café.*  
 for me DEM be.FUT a coffee

(16.b) 「私はコーヒーだ。」

*Un café pour moi.*  
 a coffee for me

## 2.17. 逆行ウナギ文

(17.a) (注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに)

「コーヒーは私だ。」

*Le café, c'est pour moi*  
 the coffee PRST for me

(17.b) 「コーヒーは私だ。」

*Le café, c'est moi*  
 the coffee PRST me

## 2.18. 形容詞述語文 修飾・並列・述語

(18.a) 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」

*Ce nouveau livre, qui est épais, est cher.*  
this new book REL.NOM be.PRS thic be.PRS expensive

(18.b) 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」

*Ce nouveau livre épais, est cher.*  
this new book thic be.PRS expensive

## 2.19. 意外性 (mirativity)

(19.a) (砂糖の入れ物を開けて) 「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

*Ah! Il n'y a plus de sucre!*  
oh there-is-no more suger

(19.b) (砂糖の入れ物を開けて) 「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

*Ah! il en reste pas beaucoup!*  
oh PIMP it.ABL remain.PRS NEG a lot

## 2.20. 思い出し

(20.a) 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！田中君だったな。」

*Cet après-midi il me semble que je devais voir quelqu'un.*  
this afternoon PIMP me seem.PRS COMPL I should see someone  
*C'est qui déjà? Ah, oui! C'était Tanaka.*  
PRST REL.NOM already oh yes PRST-IMPAST Tanaka

(20.b) 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！田中君だったな。」

*Je suis sûr que j' avais un rendez-vous cet après-midi.*  
I am sure COMPL I have.PST a appointment this afternoon  
*Mais avec qui? Ah! oui! avec Tanaka.*  
but with PINT.H ah yes with Tanaka

## 3. 考察

### 3.1. フランス語における焦点化のマーカ―

Cappeau and Hanote (2012: 10) や Khalifa (2004:223) によると、フランス語において、焦点化を表現するのに用いられるのは、イントネーションと統語的手段、語彙的手段などが

あるが、「英語などに比べて、アクセントのバラエティが少ないフランス語では、とりわけ遊離構文や分裂文などの統語的手段が際立った役割を果たしている」(Khalifa, 2004:223 筆者訳) という特徴があると指摘している。

Rossi (2011:124) や, Morel and Danon-Boileau (1998:64) などでも示されているように, 対比的な効果を持って焦点化された語は, 上昇イントネーションを伴って発音される傾向があるとされている。

一方, 統語的手段としては, 分裂文や左方遊離構文などが挙げられる。

分裂文では, 焦点化される部分を文中から取り出して, 提示詞 *c'est* の後に置く。一方, その要素を支配する動詞とその動詞によって支配されるその他の要素は全て, それに続く関係詞 (*qui/que/dont* など) によって導かれ, 文末にレーマ化された形で示される。例えば, 例 11.a では, *c'est* によって導かれる要素 *ce livre* が焦点化されており, その要素を支配する述語, 及びその述語によって支配される他の要素 *j'ai acheté hier* は, 全て *que* 以下にレーマ化された形で表されている。

ただし, フランス語では, 短い文脈内に, 特に情報的に重要でないような述語要素を繰り返すことを嫌うので, 関係詞節以下が省略されてしまうことが往々にしてある。例えば, 例 2 では, 質問の中で既に現われている *qui est venu* の部分とその答えの中では省略されてしまっている。

話し言葉で定型句的に用いられている疑問文の *est-ce que...?* の形式や, *wh* 疑問文の, *qui est-ce qui/que, qu'est-ce qui/que* などの形式にも, 提示詞 *c'est* が入った形式が見られるが, これを単純に疑問文焦点とみなすべきかどうかは, 検討の余地があるかもしれない。

さて, 分裂文を使った焦点化には, 統語的な制約がある。述語によって統語的な支配を受ける要素でなければ, 焦点化されない。例えば, 副詞 *franchement* 「率直に」は, 文脈によって, 動詞の様態を修飾する用法と, 発話者の態度を示すいわゆるモダリティの副詞の用法を持つ。前者の用法において, *franchement* は焦点化が可能であるが, 後者の用法においては, *franchement* は動詞の支配下には置かれないので, 焦点化ができない。

(21) *Il a parlé franchement.*

He speak.PST frankly.

「彼は率直に話した。」

(22) *C'est franchement qu' il a parlé.*

PRST frankly REL he speak.PST

「率直に, 彼は話した。」

(23) *Franchement, ce livre n' est pas intéressant.*

frankly DEM book NEG be.PRS NEG interesting

「率直に言えば, この本は面白くない。」

- (24) \**C'est franchement que ce livre n' est pas intéressant.*  
 PRST frankly REL DEM book NEG be.PRS NEG interesting.  
 「率直に言えば、この本は面白くない。」

また、左方遊離構文では、焦点化される情報を文頭に遊離する。この際、主語や目的語などは、それに続く述語の部分で、焦点化された要素を代名詞によって受け直す場合が多い（例えば、例 10.b の中の *I* (it.ACC) など）。しかし、その規則は絶対的なものではなく、話し言葉の中では、例 25 のように、全く、受け直しが行われない例を見かけることがある。

- (25) *Deux cigarettes, j' ai fumé.*  
 two cigarettes I smoke.PST  
 「2本の煙草なんだ。吸ったのは」

受け直しをする場合と、そうでない場合の違いについては、談話文法上、非常に興味深い違いがあるのだが、紙面の都合上ここでは言及しない。

また、左方に遊離される焦点化は、非動詞文における焦点化にも適用されることが、Tanguy (2010)により指摘されている。

- (26) *Très bien, ta vie.* (Tanguy, 2010 :2)  
 very well your life  
 「とてもいいね。あんたの生活」
- (27) *En sa possession, hein, le chèque* (Tanguy, 2010 :4)  
 in his possession eh the cheque  
 「自分のもの（にしちまったんだよ。）ね。その小切手（を）」

以上が統語的手段による焦点化である。焦点化はイントネーションによっても、あるいは、統語的手段によっても、また、両者の組み合わせによっても行われることも指摘しておく。

さて、以上が、フランス語の焦点化のマーカーについての簡潔な説明である。ここで、今回の焦点化についてのアンケート結果をここでまとめておく。インフォーマントのいずれかが焦点化をした形式をとっていれば「○」とする。いずれのインフォーマントも焦点化を行っていない場合については「×」とする。

①対比焦点（主語）	○	
②wh 疑問文焦点・wh 応答文焦点：	○	
③Yes・No 疑問・形容詞述語応答焦点	○	
④文焦点（自動詞文）		×
⑤対比焦点(目的語)		×
⑥対比焦点(目的語, 特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)		×
⑦述語焦点		×
⑧WH 焦点（目的語）・WH 応答焦点（目的語）	○	
⑨文焦点（他動詞文）		×
⑩目的語主題化, 主題（目的語）の継続性・pro-drop 言語の可能性	○	
⑪分裂文		×

フランス語において、焦点化は、文中に現れる、ある一つの要素を際立たせ、他の要素と対比させるために用いられる手段であると考えられている。従って、文全体が焦点化される例や、述語そのものが焦点化される例は、考えられにくいのではないかと考えられる。

今回の調査では目的語の対比焦点が×という結果であった。ただし、先に述べたように、述語に支配される要素であれば分裂文の形式による焦点化が基本的にはフランス語では可能であるから、おそらく、談話的な文脈を変えることで、目的語の対比焦点は不可能ではないだろう。例えば、

- (28) *Vous préférez le rouge? Non, c'est le bleu que je préfère.*  
 you prefer the red no PRST the blue REL.ACC I prefer  
 「赤い方が好きですか？」 「いいえ、好きなのは青い方です。」

### 3.2. フランス語のコピュラ文について

まず「措定文」についてよく言われていることは、主語の属性を表す名詞は非指示的であり、基本的には、無冠詞名詞であることが多いということである。例 12 の *professeur* 「先生」も無冠詞で現れている。ただし、その名詞句に形容詞が付く場合には、その限りではない。

- (29) *Ce monsieur est un bon professeur.*  
 DEM man be.PRS a good teacher  
 「この人はいい先生だ。」

次いで、「倒置指定文」と「指定文」であるが、インフォーマントの回答にも表れているように、主語の名詞句がいずれも、ce という指示代名詞によって受け直されていることに注意したい。フランス語において、ce という代名詞は、先行詞として現れる名詞句の指示対象を非個別化したり、非指示化したりしてとらえ直すという機能を持っていることが指摘されてきた。つまり、そうすることによって、son père の指示対象を「変項」化し、それに新たな指示対象を付与する「倒置指定文」や「指定文」が構成されるのである。

「ウナギ文」も「逆ウナギ文」も、フランス語では難しい。ただし、Je 「私」を主語として直接、名詞述語 café に結び付ける例は皆無ではなく、例えば、「je suis très café 私はかなりのカフェ愛好者だ」という例がある。ただし、これはアンケートで要求されるウナギ文とはかけ離れた例である。

#### 4. 形容詞述語の列挙、並列

関係節を用いて形容詞述語を列挙することも可能であろうが、形容詞を名詞に修飾させる形で行えるのであれば、そちらが好まれる。

#### 5. 意外性

間投詞の挿入以外に、特に「意外性」をマークすることに特化した統語的手段があるかどうかについては今回のアンケートでははっきり明示されなかった。しかし、いわゆる感嘆文などは、意外性を表す統語手段として機能するものとして考えられるだろう。

#### 6. 思い出し

思い出した内容を表す場合に、例 20.a の C'était Tanaka「田中君だった」に示したように、半過去形が現われる場合がある。このような半過去形の用い方は、日本語の「た」の持つモーダルな用法に似ていると思われる。

#### 7. 略記号

ACC	対格
ABL	奪格
COND	条件法
COMPL	補足節導入詞
DAT	与格
DEM	指示詞
F	女性
FUT	未来形
H	人

INF	不定法
IMPAST	半過去形
LOC	場所格
M	男性
NOM	主格
NEG	否定辞
NH	非人
NRFUT	近接未来形
PL	複数
PST	過去形
PIMP	非人称主語代名詞
PINT	疑問代名詞
PRST	提示詞
PRS	現在形
REL	関係詞
SG	単数

#### 参考文献

- Capeau, P. and S., Hanote (eds.) (2012). *Focalisation(s)*, Rennes, Presse Université de Rennes.
- Kalifa, J.-C. (2004). *Syntaxe de l'anglais : théories et pratiques de l'énoncé complexe*, Gap-Paris, Ophrys.
- Morel, M.-A. and L., Danon-Boileau (1998). *Grammaire de l'intonation, l'exemple du français oral*, Faits de Langue,
- Noalig, T. (2016). Focalisation averbale vs. focalisation verbale en français parlé, le cas des constructions binaires. *Discours*, 6, URL : <http://discours.revues.org/7726> 2016年3月閲覧.
- Rossi, M. (2011). L'intonation modale, *Modèles linguistiques*, 63, pp.117-129.
- 坂原茂.2012.『フランス語学の最前線1』ひつじ書房



## スペイン語

川上 茂信, チャビ・アラストゥルエイ

今回のアンケートに対しては、まずアラストゥルエイが例文をスペイン語に訳し、訳文を 2 人で検討した上で川上が回答を文章化した。

(1) 「えっ、一郎が来たの?」「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」(例えば、昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

- a. ¿Eh? ¿Vino Ichiro?—No, es Jiro el que vino, no Ichiro.  
eh? came ichiro?—no, is jiro the REL. came, not ichiro<sup>1</sup>

まず質問部分では主語の Ichiro が動詞 vino (不定詞 venir) に対して後置されており、焦点的情報を担っている。それに対する答えでは、コピュラ es (不定詞 ser) と関係節 el que... を用いたいわゆる強調構文によって Jiro が焦点化されている。

この(擬似)分裂文的な構文では定冠詞 el を伴った関係代名詞 que が使われている(定冠詞は男性単数形で, Jiro に性数一致している。来たのが花子であれば la になる)。この定冠詞の機能については諸説あるが、少なくとも言えることは、定冠詞のない関係節 que vino が形容詞的に働くのに対し、定冠詞つきの el que vino は名詞的に機能するということである。

なお、強調構文には定冠詞を伴わない que によるバリエント es Jiro que vino もある。この場合の que については関係詞という説と接続詞という説がある(RAE & ASALE 2009: §40.10.a)。こちらのバリエントは長らく規範的には正しくないとされていた。外国人向けの参考書には、未だにこれを間違いとしているものもある<sup>2</sup>。今回のアラストゥルエイによる訳には現れていない。

(2) 「誰が来た(の)?」「一郎が来たよ。」

- a. ¿Quién ha venido?—(Ha venido) Ichiro.  
who has come(pp)?—(has come(pp)) ichiro

スペイン語の疑問詞つき疑問文では、疑問詞が文頭に来るのが通常の語順。¿Ha venido

<sup>1</sup> REL. は関係代名詞を表す。

<sup>2</sup> たとえば Butt & Benjamin (2013: 517): «Foreign student tend not to use nominalizers in cleft sentences. This produces bad Spanish like \*fue él que me dijo for fue él quien/el que me dijo ‘it was he who told me’».

quién? の語順が現れるのは *Ha venido Ichiro* 「一郎が来た」の *Ichiro* の部分が聞きとれなかったような場合だろう。

答えでは、後置主語による焦点化がなされている。

(3) 「一郎の方が大きいんじゃないの?」「いや、一郎じゃなくて、次郎の方が大きいんだよ。」(一郎と次郎の背について話している状況で)

a. *¿No es Ichiro más alto? –No, Jiro es más alto.*

*not is ichiro more tall? –no, jiro is more tall*

この例では、アラストゥルエイの内省によれば (1) と異なり強調構文は自然に響かない。しかも (2) の答えのように *Jiro* を後置する (*es Jiro más alto / es más alto Jiro*) のもしっくり来ない。これは動詞 *ser* を使ったコピュラ文であることが関係していそうである。

焦点が *Jiro* であることはアクセントによって示される。

(4) [電話で]「どうした(の)?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

a. *¿Qué pasa? –Nada, que ha venido un cliente.*

*what happens? nothing, CONJ. has come(pp) a client<sup>3</sup>*

この例のように、主語と動詞のみからなる構成で、かつ主語が不定名詞句である場合、「動詞+主語」以外の語順は難しい<sup>4</sup>。文焦点ということで、主語が主題化されてもいないので、これが考えられる唯一の回答だろう。

なお、この訳文では、まず「どうしたの?」に対して *nada* 「何でもない」と返すことから始めている。次の *que* は接続詞で、日本語の「んだ」の「ん(の)」のように、先行する文脈に対して説明を加える働きをしていると考えられる。

(5) 「あの子供が一郎を叩いたんだって!」「いや、一郎じゃなくて、次郎を叩いたんだよ。」

a. *¿Que ese niño ha pegado a Ichiro? –No, a Ichiro no; ha sido a Jiro (al que ha pegado).*

*CONJ. that boy has hit(pp) A ichiro? no, A ichiro not; has been A jiro (A+the REL. has hit(pp))<sup>5</sup>*

<sup>3</sup> CONJ. は接続詞を表す。

<sup>4</sup> この文脈では原文にある「今」を独立した要素として訳出するのは難しい。

<sup>5</sup> A は前置詞 *a* で、ここでは間接目的語のマーカとして働いている。特定の人を表す直接目的語につくマーカという解釈も可能だが、「叩いた」の訳に使われている *ha pegado* (不定詞 *pegar*) は元来直接目的語に「叩き」を意味する名詞を取り、叩く対象が間接目的語となる (*pegar una bofetada a Ichiro* 「一郎に平手打ち *bofetada* を食らわす」)。直接目的

前半は接続詞 *que* で始まっているが、これは原文の「って」に相当する。それに続く部分は「主語＋動詞＋目的語」という無標の語順になっている。それを承けた後半では、まず修正すべき情報だけが取り出されて否定されている。その後の *Jiro* の導入は *ser* を使った強調構文だが、*Jiro* で終わることも可能である。

また、強調構文を使わずに次のように言うこともできる。

- b. No, a Ichiro no; ha pegado a Jiro.  
no, A ichiro not; has hit A jiro

この場合は文末焦点ということになる。

(6) 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う (の) ?」 「(私は) 青い袋を買うよ。」

- a. Hay una bolsa roja y otra azul; ¿cuál vas a comprar? –Voy a comprar la azul.  
there-is a bag red and other blue; which go(you) to buy? go(I) to buy the blue

原文の「どっち」にあたるのは *cuál* で、この疑問詞は、想定される集合の中から要素を選び出すことを求める。答えは単純な文末焦点文。

焦点をぼかさないので一役買っているのが *otra azul* 「ほかの青い (の)」と *la azul* 「青い (の)」で、*bolsa* 「袋」を繰り返さないことで、色が問題になっているということが明確になっている。

(7) 「一郎はどうした?」「一郎は朝からどっかへでかけたよ。」(例えば、朝少し遅く起きて来た一郎の父親が、姿の見えない一郎について母親に尋ねている場面で)

- a. ¿Dónde está Ichiro? –Ha salido a algún sitio esta mañana.  
where is ichiro? has gone-out to some place this morning

設定に合わせて前半は「どこにいる?」と訳してあるが、後半はほぼ直訳である。ほぼ、と言うのは「一郎」が現れていないことで、このようなやり取りでは *Ichiro* を言わないのが普通である。実は、川上はアラストゥルエイの訳文を見たときに *Ichiro* が欠けていることに気づけなかった。述語焦点の例だが、焦点以外の部分を表現しないことでそれが明確になっているとも言える。仮に *Ichiro* を言うとしたら文頭に置くことになるだろう。

---

語が現れないことも多いが、その場合でも叩かれる人は間接目的語であり続けるという (RAE 2005: s. v. *pegar*).

(8) 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

a. ¿A quién ha pegado? –(Ha pegado) a su propio hermano.

A who has hit(pp)? (has hit(pp)) A his own brother

WH焦点については、例文 (2) と同様疑問詞が文頭に置かれている。答えは焦点になる間接目的語だけでも成り立つし、動詞+目的語の語順でも良い。

(9) [電話で]「どうした(の)?」「うん、一郎が(自分の) 弟を叩いたんだ。」(例えば、電話の向こうで子供の泣き声起きたのを聞いての発話)

a. ¿Qué ha pasado? –Que Ichiro ha pegado a su propio hermano.

what has happened(pp)? CONJ. ichiro has hit A his own brother

この例では (4) と同様、答えが接続詞の *que* で始まっていて、その後は「主語+動詞+目的語」という無標の語順になっている。同じ文焦点の (4) との違いは、こちらには主語・動詞以外の要素があることと、主語が定であること。

(10) 「あのケーキ、どうした?」「ああ、(あれは) 一郎が食べちゃったよ。」

a. ¿Qué ha pasado con ese pastel? –Ah, que Ichiro se lo ha comido.

what has happened with that cake? ah, CONJ. ichiro SE it(ac.) has eaten<sup>6</sup>

訳の前半は「そのケーキに何が起きた?」で、「ケーキに」の部分 *con ese pastel* を主題化して前に置くことは不可能ではないが、自然には響かない。一方、後半では目的語の弱勢代名詞 *lo* が *ese pastel* を承けている。当然予想されるように、弱勢代名詞は焦点になり得ない。

(11) 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」

a. Este libro es el que compré ayer en la tienda.

this book is the REL. bought(I) yesterday in the shop

スペイン語の強調構文には (1) と (5) のように「Ser+焦点+関係節」という語順の他に、ここに見られる「焦点+ser+関係節」のパタンもある。

---

<sup>6</sup> SE は再帰代名詞で、ここでは動詞 *comer* (過去分詞 *comido*) 「食べる」にアスペクト的なニュアンスを付け加えて「食べ切る」のような意味を作っている。

強調構文ではないが、よく似た次のようなパターンも考えられる。

- b. Este es el libro que compré ayer en la tienda.  
this is the book REL. bought(I) yesterday in the shop

この例では関係節が名詞を修飾していて、直訳すれば「これが私が昨日お店から買って来た本だ」となる。見ようによっては、名詞が明示される位置が強調構文と異なるだけで、情報構造的には大きな違いはないと言える。

また、日本語の語順に近い、以下の

- c. El libro que compré ayer es este.  
the book REL. bought(I) yesterday is this

も可能だが、これはネットで買った本と店で買った本が並んでいて、というような対比的状況が相応しい。

(12) 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

- a. Ese hombre es profesor. Lleva ya tres años trabajando en esta escuela.  
that man is teacher. TAKES already three years working in this school<sup>7</sup>

2つ目の文は主語が明示されていないが、1文目の主語 *ese hombre* が理解される。

(13) 「彼のお父さんは、あの人だ。」

- a. Su padre es ese hombre.  
his father is that man

(14) 「あの人が彼のお父さんだ。」

- a. Ese hombre es su padre.  
that man is his father

(13) と (14) については文脈を補って考えてみる。川上の語感では、(13) は「あの人」

---

<sup>7</sup> TAKES をあてた *lleva* (不定詞 *llevar*) は期間を表わす語句と動作を表わす語句 (この例では動詞 *trabajar* 「働く」の現在分詞 *trabajando* 以下) とともに、これまで動作が継続し、今も続いていることを表す。

が視界に入っている状態で「彼のお父さんはどの人・どこですか」と聞かれた場合が思い浮かぶ。それに対して (14) は質問されて辺りを見回し、彼の父親を見つけて発した言葉のように聞こえる。単なる印象であり、考え続けると変わってくるかもしれないが、この印象に基いて訳文を検討した。その結果、アラストゥルエイの語感では (13) で可能なのは *su padre* で始める語順のみだが、(14) については (13a) と同じ語順もありうる。いずれの場合も *ese hombre* が焦点であることに変わりはなく、アクセントの位置とイントネーションで区別がつくが、焦点を前に置いたパタンの使用範囲が限られているということになる。

(15) 「あさってってというのはね、あしたの次の日のことだよ。」

- a. *Pasado mañana significa (es) el día después de mañana.*  
*passed tomorrow means (is) the day after of tomorrow*

アラストゥルエイは最初 *significa* (不定詞 *significar* 「意味する」) を使って訳したが、コピュラ文でも普通に表現できる。

(16) 「何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて」 「私はコーヒーだ。」

- a. *Para mí, un café.*  
*for me, a coffee*

スペイン語では、この文脈で「私」を主語にしたコピュラ文は使われない。上の例では「私」は前置詞とともに現れていて、「私には、コーヒーを(下さい)」のような構造になっている。1人称単数代名詞の主格を使った次のような言い方

- b. *Yo, un café.*  
*I, a coffee*

も可能だが、この場合も動詞は「注文する」や「欲しい」といったものが理解される。

(17) 「注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに」 「コーヒーは私だ。」

- a. *Para mí. / El café es para mí.*  
*for me / the coffee is for me*

前の (16) から予想されるように、人称代名詞が前置詞 *para* を伴った形が普通である。

このパタンの「無標度」を示す、定番の言葉遊びがある。

b. La paella es pa ella.  
the paella is for her

これは「パエリアは彼女だ」に当たるが, *paella* は代表的なスペイン料理, *pa* は *para* のくだけた発音で, *pa ella* は完全に *paella* と同じ音になる. 川上もレストランの客の口から聞いたことが何度かある.

(18) 「その新しくて厚い本は (値段が) 高い。」

a. Ese libro nuevo y grueso es caro.  
that book new and thick is expensive

指示形容詞は名詞の前に置かれるのが普通で, 物を分類する形容詞は後置される. 並列された形容詞は接続詞でつながれる. 形容詞が 3つ以上であれば接続詞は最後の形容詞の前だけで良い (*ese libro nuevo, grueso y caro* 「その新しくて厚くて高い本」).

名詞を修飾する形容詞も述語の形容詞も名詞に性数一致するが, 述語の形容詞は例文のように動詞をはさんで明確に区別される.

(19) [砂糖の入れ物を開けて] 「あっ, 砂糖が無くなっているよ!」

a. ¡Ah, se ha acabado el azúcar!  
Ah, SE has ended the sugar<sup>8</sup>

ここでは (4) と同様, 「動詞+主語」の文焦点的語順が用いられている。

(20) 「午後, 誰かに会うはずだったなあ. 誰だったっけ. あっ, そうだ! 田中君だったな。」

a. Por la tarde tenía que ver a alguien... ¿Quién era? ¡Ah, sí! Era Tanaka.  
in the afternoon had(I) QUE see A somebody... who was? ah, yes! was tanaka<sup>9</sup>

文中の *tenía* と *era* は, それぞれ *tener* と *ser* の直説法未完了過去形<sup>10</sup>. スペイン語が持つ 2つの過去形のうち, この思い出しの用法があるのは未完了過去の方で, もう一方の

<sup>8</sup> SE は再帰代名詞で, *ha acabado* (不定詞 *acabar*) 「終える」を自動詞化している.

<sup>9</sup> *tenía* (不定詞 *tener*) *que*+不定詞で「・・・しなければいけない」を表す.

<sup>10</sup> 「線過去」という言い方もよく使われる.

単純過去<sup>11</sup>にはない。

#### 参考文献

欧文

Butt, John & Benjamin, Carmen. 2013. *A New Reference Grammar of Modern Spanish*. 5th edition, New York: Routledge.

Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española. 2009. *Nueva gramática de la lengua española*. Madrid: Espasa Libros.

---

<sup>11</sup> 「点過去」という言い方もよく使われる。

## 「情報構造と名詞述語文」調査例文（ドイツ語）

成田 節

特集「情報構造と名詞述語文」のアンケートに沿って、ドイツ語の例文を挙げながら簡単な説明を付ける。<sup>1</sup>

(1) 「えっ、ハンスが来たの?」「いや、ハンスじゃなくてペーターが来たんだ。」

M: Was? War Hans da?

N: Nein, nicht Hans, sondern **Peter** war da.<sup>2</sup>

what was<sub>3SG</sub> Hans<sub>NOM</sub> there

no not Hans<sub>NOM</sub> but Peter<sub>NOM</sub> was<sub>3SG</sub> there<sup>3</sup>

何?ハンスがその場にいたの?

いや、ハンスではなくペーターがその場にいた。

【対比焦点（主語）】昨日の集まりに珍しくやって来た人について話していて、Mが明確に聞き取れずに問いただし、Nが訂正しながら答えるという設定。「AではなくてBが」という対比は、英語の not A, but B に相当する nicht A, sondern B で表現する。Bに当たる Peter にアクセントが置かれる。

(2) 「誰が来た(の)?」「ハンスが来たよ。」

M: **Wer** war da?

N: **Hans** war da.

who<sub>NOM</sub> was<sub>3SG</sub> there

Hans<sub>NOM</sub> was<sub>3SG</sub> there

誰がそこにいた?

ハンスがそこにいたよ。

【WH焦点（主語）・WH応答焦点（主語）】(1)と同様、昨日の集まりに誰が来たかを話しているという想定。Mの疑問文では疑問詞 wer に、Nの答えの文では主語の Hans にアクセントが置かれる。なお、複数の人物を念頭に置いて「そもそも誰々が」というように疑問の気持ちを強めるには、たとえば定動詞 war の後に alles (<all「すべて」に中性・単数・主格の語尾-es を付けた形) を添えて Wer war alles da? とすることもできる。<sup>4</sup> この場合ア

<sup>1</sup> 例文の容認度判定に際して、本学のディアナ・バイヤー=タグチ特任講師の協力を得ることができた。例文の容認度は当然インフォーマントによっても異なる場合があるので、本稿では文法書などの事例で適宜補った。

<sup>2</sup> それぞれの【 】で示されたポイントに関連してアクセントの置かれる語は太字で示す。

<sup>3</sup> 本稿ではグロスに以下の略号を使う。ACC:対格, ADJ:形容詞, COMP:比較級, EXP:虚辞, IMP:命令形, INF:不定形, NOM:主格, PART:不変化詞(心態詞など), PAST:過去形, PP:過去分詞, PRES:現在形, REFL:再帰代名詞, REL:関係代名詞, 3PL:3人称複数, 3SG:3人称単数。

<sup>4</sup> 匿名の査読者から、alles を添えた Wer war alles da? は疑問文ではなく感嘆文ではないかとの指摘があった。確かに疑問詞と alles (特に nicht alles) を用いた感嘆文の存在は一般

クセントは最後の **da** に置かれるとのことである。

- (3) 「ハンスの方が大きいんじゃないの?」「いや、ハンスじゃなくて、ペーターの方が大きいんだよ。」

M: Ist nicht Hans größer?

N: Nein, nicht Hans, sondern **Peter** ist größer.

is<sub>3SG</sub> not Hans<sub>NOM</sub> taller<sub>COMP</sub>

no not Hans<sub>NOM</sub> but Peter<sub>NOM</sub> is taller<sub>COMP</sub>

より大きいのはハンスじゃないの?

いや、ハンスじゃなく、ペーターがより大きい。

【Yes No 疑問・形容詞述語応答焦点】ハンスとペーターの背の高さについて話している状況での会話。答えの文の「A ではなくて B (の方) が」は(1)と同様に **nicht A, sondern B** で表し、**B** にアクセントが置かれる。なお、問いの文の **nicht** (英: not) は文字通りの否定ではなく、相手の同意を期待する気持ちを表している。この **nicht** は **größer** の直前に置くこともできる。両者の差は微妙なものだが、敢えて区別するならば、**Ist nicht Hans größer?** は「(より大きいのは) ハンスじゃないの?」、**Ist Hans nicht größer?** は「(ハンスが) より大きいんじゃないの?」とでもなるだろう。また平叙文の語順で **Hans ist nicht größer?** と上昇イントネーションで発話すると、想定が外れていたことについての話者の驚きの気持ちが表され、感嘆文に近づく。

- (4) (電話で)「どうした (の) ?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

M: Was ist denn los?

N: Es ist gerade **jemand** gekommen.

what<sub>NOM</sub> is<sub>3SG</sub> PART going.on

it<sub>EXP</sub> is<sub>3SG</sub> just someone<sub>NOM</sub> come<sub>PP</sub>

何が起こったの?

ちょうど誰かが来た。

【文焦点 (自動詞文)】電話の向こうで物音あるいは話し声が聞こえて M が「どうしたのか」と尋ねるという設定。疑問文の **denn** は、質問の調子を和らげる働きをしている。<sup>5</sup> N の応答の「うん」は特に表現しない方が自然とのこと。定動詞 **ist** と文末の **gekommen** で現在完了形になっている。文頭の **es** (英: it) は虚辞 (expletive) で、主語の **jemand** (someone)

---

に知られている。例: **Was lag da nicht alles auf dem Tisch!** 「テーブルには何から何まで (ごちそうが) あったなあ」(Duden 2009: 304)。特に定動詞が後置される場合は感嘆文と見て間違いないだろう。例: **Was du nicht alles kannst!** 「君はまあ何だってできるんだね」(小学館大独和辞典)。しかし、**wer** (who) や **was** (what) などの疑問詞に **alles** を添えた疑問文も問題なく容認される。例: **Was steht alles im Bericht?** 「報告書にはそもそも何が書いてある?」(Duden 2009: 305), **Was hast du alles gesagt?** 「君はどんなことをいろいろとしゃべったのか」(小学館大独和辞典)。

<sup>5</sup> 場面によっては、**denn** で話し手の〈驚き〉〈疑問〉〈いらだち〉〈不快〉〈非難〉などの気持ちが表されることもある。(岩崎 1998: 257)

をはじめとする実質的な情報を担う語句を文頭に出さずに、定動詞 *ist* を第 2 位に置くことを可能にしており、文全体が新情報になるような表現によく用いられる。アクセントは *jemand* に置かれる。

- (5) 「あの子がハンスを叩いたんだって!」「いや、ハンスじゃなくて、ペーターを叩いたんだよ。」

M: Hat der Kleine Hans gehauen?            N: Nein, er hat nicht Hans, sondern **Peter** gehauen.  
 has<sub>3SG</sub> the little.boy<sub>NOM</sub> Hans<sub>ACC</sub> hit<sub>PP</sub>      no he<sub>NOM</sub> has<sub>3SG</sub> not Hans<sub>ACC</sub> but Peter<sub>ACC</sub> hit<sub>PP</sub>  
 あの小さな男の子がハンスを叩いた?      いや、彼はハンスではなくペーターを叩いた。

【対比焦点（目的語）】「A ではなく B」は(1)や(3)と同様 *nicht A, sondern B* で表される。ただしこの場合は *hauen* 「叩く」の目的語なので A も B も対格である。B に当たる Peter にアクセントが置かれる。

- (6) 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う（の）?」「（私は）青い袋を買うよ。」

M: Guck mal, hier ist eine rote und eine blaue Tasche. **Welche** möchtest du?  
 look<sub>IMP PART</sub> here is<sub>3SG</sub> a red and a blue bag<sub>NOM</sub>            which<sub>ACC</sub> want<sub>2SG</sub> you<sub>NOM</sub>  
 ほら見て、ここに赤と青のバッグがある。            どっちをあなたは欲しい?  
 N: Ich möchte die **blaue**.  
 I<sub>NOM</sub> want<sub>1SG</sub> the blue<sub>ACC</sub>  
 私は青いのを欲しい。

【対比焦点（目的語、特に「どっち」という対比的な疑問語の場合）】M の *Guck mal* は「ほら見て」と相手の注意を引く表現。Tasche 「バッグ」が女性名詞・単数形なので、M の 2 文目の *Welche* 「どっち」も女性・単数・対格の語尾 *-e* が付いている。N の答えでは *blaue* の後に *Tasche* を繰り返すこともできる。アクセントは M では *Welche* に、N では *blaue* に置かれる。

- (7) 「ハンスはどうした?」「ハンスは朝からどっかへでかけたよ。」

M: Wo ist Hans?            あるいは Was macht Hans?  
 where is<sub>3SG</sub> Hans<sub>NOM</sub>            what<sub>ACC</sub> does<sub>3SG</sub> Hans<sub>NOM</sub>  
 ハンスはどこにいる?            ハンスは何をしている?  
 N: Er ist heute schon früh **los**. （または schon **früh los**）  
 he<sub>NOM</sub> is<sub>3SG</sub> today already early away  
 彼は今日すでに早く出かけている。

【述語焦点】朝少し遅く起きて来たハンスの父親が、姿の見えないハンスについて母親に尋ねるといふ設定. Nの答えでは *ist* と *los* の2語で「出かけている」という意味. 述語に焦点が置かれるといふ設定なので *los* にアクセントを置くことも可能だが, 文中に *schon früh* 「すでに朝早く」があり, こちらが焦点になることも十分にあり得る. インフォーマントによれば, この文脈では *früh* にアクセントを置く方が自然とのことである.

(8) 「(あの子は) 誰を叩いたの?」「(あの子は) 自分の弟を叩いたんだ.」

M: <b>Wen</b> hat der Kleine gehauen?	N: Er hat seinen kleinen <b>Bruder</b> gehauen.
whom <sub>-ACC</sub> has <sub>-3SG</sub> the little.boy <sub>-NOM</sub> hit <sub>-PP</sub>	he <sub>-NOM</sub> has <sub>-3SG</sub> his little brother <sub>-ACC</sub> hit <sub>-PP</sub>
あの小さな男の子は誰を叩いた?	彼は自分の弟を叩いた.

【WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)】どちらの文でも定動詞 *hat* と文末の過去分詞 *gehauen* で現在完了形となっている. (2)と同様, 疑問文では疑問詞 *wen* に, 返答ではそれに対応する名詞句 (の主要部 *Bruder*) にアクセントが置かれる. どちらも対格である.

(9) (電話で)「どうした (の)?」「うん, ハンスが (自分の) 弟を叩いたんだ.」

M: Was ist denn los?	N: <b>Hans</b> hat seinen kleinen <b>Bruder</b> gehauen.
what <sub>-NOM</sub> is <sub>-3SG</sub> PART going.on	Hans <sub>-NOM</sub> has <sub>-3SG</sub> his little brother <sub>-ACC</sub> hit <sub>-PP</sub>
何が起こったの?	ハンスが自分の弟を叩いた.

【文焦点 (他動詞文)】電話の向こうで子供の泣き声がかきたのを聞いて M がどうしたのかと尋ね, N が状況を伝えるといふ設定. M の問いでは *ist* と *los* の2語で「起こった」という意味. 応答文は(8)の主語が人称代名詞 *er*, (9)の主語が固有名詞 *Hans* という点だけが異なるが, (9)では「ハンスが弟を叩いた」全体が新情報なので, アクセントの置き方も異なる. (9)ではまず *Hans* に第二アクセントが, そして *Bruder* に第1アクセントが置かれる.

(10) 「あのケーキ, どうした?」「ああ, (あれは) ハンスが食べちゃったよ.」

M: <b>Wo</b> ist denn das Stück Torte hin?	N: Ach, das hat <b>Hans</b> schon gegessen.
where is <sub>-3SG</sub> PART the piece cake <sub>-NOM</sub> off	oh that <sub>-ACC</sub> has <sub>-3SG</sub> Hans <sub>-NOM</sub> already eaten <sub>-PP</sub>
あの一切れのケーキはどこにいったの?	ああ, あれはハンスがもう食べた.

【目的語主題化, 主題 (目的語) の継続性, いわゆる *pro-drop* 言語の可能性】Nの応答文では, Mの疑問文中の *das Stück Torte* 「あの一切れのケーキ」を指示代名詞 *das* で再提示し, 主題として文頭に置いている. この *das* を省くことはできない. 応答文では *Hans* にアクセントが置かれる. なおMの疑問文の *denn* は, 質問の調子を和らげる(8)の *denn* とは異なり, 話し手の〈疑問〉の気持ちを表している.

(11) 「私が昨日お店から買って来たのはこのりんごだ。」

a. <sup>??</sup>Es sind **diese/die** Äpfel, die ich gestern in dem Geschäft gekauft habe.

it<sub>NOM</sub> are<sub>3PL</sub> these/the apples<sub>NOM</sub> that<sub>REL-ACC</sub> I<sub>NOM</sub> yesterday in the shop bought<sub>PP</sub> have<sub>1SG</sub>  
この/そのりんごだ, (それを) 私が昨日その店で買ったのは。

b. **Das** sind die Äpfel, die ich gestern in dem Geschäft gekauft habe.

that<sub>NOM</sub> are<sub>3PL</sub> the apples<sub>NOM</sub> that<sub>REL</sub> I<sub>NOM</sub> yesterday in the shop bought<sub>PP</sub> have<sub>1SG</sub>

これが昨日お店で買ったりんごだ。(これがそのりんごだ, (それを) 私が昨日その店で買ったのは。)

(11-2) 「私が昨日お店から買って来たのはりんごだ。」

Es sind **Äpfel**, die ich gestern in dem Geschäft gekauft habe.

it<sub>NOM</sub> are<sub>3PL</sub> apples<sub>NOM</sub> that<sub>REL-ACC</sub> I<sub>NOM</sub> yesterday in the shop bought<sub>PP</sub> have<sub>1SG</sub>

りんごだ, (それを) 私が昨日その店で買ったのは。

【分裂文】ドイツ語には一般に [Es ist/sind X + 関係文] というパターンの分裂文が認められ, X を強調するために用いられるとされている (Duden 2009: 1035f.).<sup>6</sup> このパターンに従うと(11)の日本語に対応するドイツ語文は a のようになる。この文は文法的には正しいが, インフォーマントによれば, 目の前に **diese** で指示するようなりんごがあるのならばまずそれを **das** などで指し示して, b のように「これが昨日あの店で買ったりんごだ」とする方が自然だとのことである。**diese** を定冠詞 **die** に代えても容認度はあまり変わらない。匿名の査読者からの「11a の不自然さの理由は強調構文なのか?」という指摘を受けて再調査したところ, (11-2)のように **diese** 「このりんご」ではなく, 不特定の「りんご」とすれば容認される文となった。<sup>7</sup>

(12) 「あの人 (女性) は先生だ。この学校でもう 3 年働いている。」

Die da ist unsere Lehrerin. Sie ist schon seit drei Jahren an unserer Schule tätig.

that.woman<sub>NOM</sub> there is<sub>3SG</sub> our teacher<sub>NOM</sub> she<sub>NOM</sub> is<sub>3SG</sub> already for three years at our school working<sub>ADJ</sub>

<sup>6</sup> 例えば Duden (2009: 1035f.) には下のような例文が挙げられている。

Es war die Sonne, die mir am meisten fehlte.

it was<sub>3SG</sub> the sun<sub>NOM</sub>, that<sub>REL-NOM</sub> me<sub>DAT</sub> the most lacked<sub>3SG</sub>

私に最も足りなかったのは陽光だった。(それは陽光だった, 私に最も不足していたのは)

<sup>7</sup> もっとも [Es ist/sind X + 関係文] という構文の X に dies-「この」が絶対に付かないわけではない。

Immerhin jeder 3. Bundesbürger ist Mitglied in den Verbänden des Deutschen Sportbundes. Wahrscheinlich sind es auch diese Menschen, die — nach der Statistik — mindestens zweimal pro Woche Sport treiben. (Uta Matecki, Dreimal Deutsch) ともかくドイツ国民の 3 人に 1 人はドイツスポーツ連盟参加のクラブのメンバーだ。統計上, 週に最低 2 回はスポーツをしているのもおそらくこの人たちだ。

あそこのあの女性は私たちの先生だ。彼女はすでに3年前から私たちの学校に勤めている。

【指定文、主題（名詞述語文の主語）の継続性、いわゆる **pro-drop** 言語の可能性】第1文の主語は指示代名詞（女性・単数）**die** に場所の副詞 **da** が添えられており、発話の場面に居る人物を指す。これを主題として固定したまま第2文でこの人物についての叙述を続ける場合でも、新たに文を始める場合は第2文の人称代名詞を省くことはできない。

(13) 「彼のお父さんはあの人だ。」

Sein Vater ist der **Mann** da.

his father<sub>NOM</sub> is<sub>3SG</sub> the man<sub>NOM</sub> there

彼のお父さんはあそこのあの男性だ。

(14) 「あの人が彼のお父さんだ。」

Der **Mann** da ist sein Vater.

the man<sub>NOM</sub> there is<sub>3SG</sub> his father<sub>NOM</sub>

あそこのあの男性が彼のお父さんだ。

(13)の【倒置指定文】も(14)の【指定文】も英語の **be** に当たる **sein** を用いて **A ist B** あるいは **B ist A** の形になる。どちらも新情報を担う **der Mann da** 「あそこのあの人」の方にアクセントが置かれる。一応、日本語の例文にドイツ語の語順を合わせてはみたが、語順によって(13)と(14)の違いが表されるというわけではない。(14)も **Vater** にアクセントを置けば「あの方は彼のお父さんだよ」と、また **sein** にアクセントを置けば「あの方は彼のお父さんだよ」と解釈され得る。

(15) 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

„**Übermorgen**“ ist der **Tag** nach **morgen**.

the.day.after.tomorrow is<sub>3SG</sub> the day<sub>NOM</sub> after tomorrow

明後日は明日の後の日だ。

【定義文】「A というのは B のことだ」という定義文も基本的には(13)(14)同様 **sein** を用いて **A ist B** の形で表せる。文末の **morgen** に第1アクセントが、文頭の **übermorgen** と中ほどの **Tag** に第2アクセントが置かれる。なお、**übermorgen** 「明後日」も **morgen** 「明日」も副詞なので、辞書では **an dem Tag, der auf morgen folgt** 「明日に続く日に」あるいは **in zwei Tagen** 「二日後に」などと前置詞句でパラフレーズしているが、(15)の定義文では副詞の **übermorgen** をそのまま主語にして、名詞 **Tag** 「日」と **ist** で結び付けても問題ないとのことだった。引用符に入れることで品詞を捨象して「明後日」の概念のみが前面に出ていると

感じられるのかもしれない。

(16) (何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて)「私はコーヒーだ。」

a. Für mich einen **Kaffee**, bitte. あるいは b. Ich nehme einen **Kaffee**, bitte.

for me a coffee<sub>ACC</sub> please

I<sub>NOM</sub> take<sub>1SG</sub> a coffee<sub>ACC</sub> please

わたしにはコーヒーを、お願いします。

私はコーヒーをもらいます、お願いします。

【ウナギ文】日本語のような「ウナギ文」\*Ich bin ein Kaffee. (=I am a coffee)は不可能。aの「私にはコーヒーを」のような表現か、bの「私はコーヒーをもらう」のような文を用いるのが普通。

(17) (注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに「どなたがコーヒーですか?」「コーヒーは私だ。」)

a. M: Für wen ist der Kaffee?

N: Der Kaffee ist für mich.

for whom is<sub>3SG</sub> the coffee<sub>NOM</sub>

the coffee<sub>NOM</sub> is<sub>3SG</sub> for me

コーヒーは誰のですか?

コーヒーは私のです。

b. M: Wer bekommt den Kaffee?

N: Den Kaffee bekomme ich.

who<sub>NOM</sub> gets<sub>3SG</sub> the coffee<sub>ACC</sub>

the coffee<sub>ACC</sub> get<sub>1SG</sub> I<sub>NOM</sub>

誰がコーヒーを受け取りますか?

コーヒーは私が受け取ります。

【逆行ウナギ文】日本語の表現に対応するような \*Wer ist der Kaffee? (Who is the coffee?)と \*Ich bin der Kaffee. (I am the coffee.)は不可能。(17)の状況では、aの「コーヒーは誰のためのものか/私のためのものだ」あるいはbの「誰がコーヒーを受け取るか/コーヒーは私が受け取る」のような表現を用いる。

(18) 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」

Das neue dicke Buch ist teuer.

the new thick book<sub>NOM</sub> is expensive

【形容詞述語文 修飾・並列・述語】ドイツ語では名詞修飾の形容詞には語尾を付け、述語形容詞は語尾を付けないのが原則である。(18)では Buch「本」を修飾する neue「新しくて」にも dicke「厚い」にも同じ -e という語尾が付いているが、述語形容詞 teuer には語尾は付いていない。

(19) (砂糖の入れ物を開けて)「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

a. Oh, der Zucker ist alle/leer.

oh the sugar<sub>NOM</sub> is<sub>3SG</sub> all.gone/empty

あっ、砂糖が無い/空だ。

b. Oh, wir haben keinen Zucker mehr.

oh we<sub>NOM</sub> have<sub>1PL</sub> no sugar<sub>ACC</sub> more

あっ、私たちはもう砂糖をもっていない。

【意外性 (mirativity)】ドイツ語には「意外性」を表す接辞はない。予想外の事態に出くわしたときの気持ちの動きは **oh** などの間投詞で表すか、**Du bist aber groß geworden!**「きみも、ずいぶん大きくなったなあ」の **aber** などの心態詞で表す。(19)の状況は、**oh** などの感嘆詞の後に「砂糖は無い/空だ」あるいは「私たちはもう砂糖を持っていない」という叙述文を続けるしかない。

(20) 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！田中君だったな。」

a. Ich glaube, ich wollte mich heute Nachmittag mit jemandem treffen.

I<sub>NOM</sub> think<sub>1SG</sub> I<sub>NOM</sub> wanted.to<sub>1SG REFL</sub> today afternoon with someone meet<sub>INF</sub>

私は思う、私は今日の午後誰かと会うつもりだったと。

b. Wen wollte ich denn treffen?

c. Ach ja, das war bestimmt Herr Tanaka.

whom<sub>ACC</sub> wanted.to<sub>1SG</sub> I<sub>1SG PART</sub> meet<sub>INF</sub> oh yes that<sub>NOM</sub> was<sub>3SG</sub> certainly Mr. Tanaka<sub>NOM</sub>

誰に私は会うつもりだったかな？ ああそうだ、それはきっと田中さんだった。

【思い出し】ドイツ語の過去形に(20)の「あっ、そうだ！田中君だったな。」や「あっ、今日は会議だった。」のような「想起の過去形」に当たる用法はない。cでは **das war bestimmt Herr Tanaka**。「それはきっと田中さんだった」と過去形が用いられているが、これは前の文bの時制が **wollte**「(誰に会う)つもりだった(か)」と過去形であるのを受けて話しを続けているからであり、**Ach ja, das \*ist bestimmt Herr Tanaka**。「ああそうだ、それはきっと田中さんだ」と現在形で続けると不自然になる。このような文脈なしで **Das war Herr Tanaka**。だけで「それは田中さんだった」ということで、今思い出したという意味にはならない。

なお、(20)の第1文はa'のように「今日の午後約束があると思う」と補文の時制を現在形で表すこともできるが、これを過去形 **hatte** にした a'' だと、約束の時間を過ぎてから思い出したことになる。このことから、日本語の「あっ、今日は約束があった≒今日は約束がある」に相当する「想起の過去形」の用法がないことがわかる。

a'. Ich denke, ich habe heute Nachmittag einen Termin.

I<sub>NOM</sub> think<sub>1SG</sub> I<sub>NOM</sub> have<sub>1SG</sub> today afternoon an appointment<sub>ACC</sub>

私は思う、私は今日の午後約束があると。

a''. Ich denke, ich hatte heute Nachmittag einen Termin.

I<sub>NOM</sub> think<sub>1SG</sub> I<sub>NOM</sub> had<sub>1SG</sub> today afternoon an appointment<sub>ACC</sub>

私は思う、私は今日の午後約束があったと。

尤も、現在のことを表す過去形の用法がないわけではない。d は料理を運んできたウェイターの発話として、e は教授に証明書のサインをもらいにきた学生の発話として用いられ得る。d は「すでに情報を得たはずだが、念のため確認しておきたい」と質問に丁寧さを与えるために（Hentschel/Vogel 2009: 352）、e は「あたかも現時点のことではないかのよように表すことで、要望の直接さを緩和する」ために（Boettcher 2009: 52）過去形が用いられている。

d. Wer bekam das Schnitzel?

who<sub>NOM</sub> got the escalpe<sub>ACC</sub>

誰がカツレツをもらいましたか？（＝カツレツはどなたでしたか？）

e. Ich wollte Sie (nur kurz) fragen, ob Sie mir den Schein unterschreiben.

I<sub>NOM</sub> wanted.to you<sub>ACC</sub> (only briefly) ask<sub>INF</sub>, if you<sub>NOM</sub> me<sub>DAT</sub> the certificate<sub>ACC</sub> sign<sub>2SG</sub>

私は（手短に）お尋ねしたかった、あなたが私に証明書にサインをするかを。（＝証明書にサインをいただけるかお尋ねしたいのですが。）

### 参考文献

Boettcher, Wolfgang. 2009. Grammatik verstehen I – Wort. Berlin/New York (Walter de Gruyter)

Duden. 2009. Die Grammatik. Herausgegeben von der Dudenredaktion. 8. überarbeitete Auflage. Mannheim/Zürich (Dudenverlag)

Hentschel, Elke/Petra M. Vogel. 2009. Lexikon Deutsche Morphologie. Berlin/New York (Walter de Gruyter)



## フィンランド語

坂田 晴奈

## 0. フィンランド語の概要

本稿では、フィンランド語の情報構造と名詞述語文相当の表現に関して、コンサルタントから得た例文を分析する。その前段階として、本節ではフィンランド語について概要を示す。概要は、Hakulinen 他(2004)と松村(1992)を基にまとめる。なお、本稿で扱うフィンランド語は、首都ヘルシンキを中心に話されている共通語である。

## 0.1. 系統と類型

フィンランド語はウラル語族、フィン・ウゴル語派、バルト・フィン諸語に属する膠着語である。基本語順はSVOで、修飾部先行型である。前置詞・後置詞ともに使用されるが、後置詞の方が数が多い。

## 0.2. 表記

本稿での表記は、全て正書法に基づく。フィンランド語の正書法はIPAの表記とほぼ同じであるが、aは[a], äは[æ], öは[ø], nkは[ŋ]の発音である。

## 0.3. 音声・音韻

フィンランド語の母音音素は、a, e, i, o, u, y, ä, öの8つである。母音調和があり、前母音のä, ö, yと後母音のa, o, uは同一形態素内に共起しえない。残りの中立母音と言われるi, eはどちらの母音とも共起できる。全ての母音に長短の区別がある。

子音は、p, (b), t, d, k, (g), m, n, ŋ, (f), s, (š), h, l, r, v, jである。( )内の音声は外来語のみに見られる音素である。ŋは短音の場合、後続するkと共にnkと表記され、長音の場合は後続するgと共にngと表記される。p, (b), t, k, (g), m, n, ŋ, s, l, rには、長短の区別がある。

## 0.4. 形態

## 0.4.1. 名詞

名詞の格は15種類である。以下に名詞の格変化の例をあげる。

表1 一般名詞の格変化 (talo「家」を例として)

格の名称	単数形	複数形	意味
主格 (nominative)	talo	talo-t	「家(が)」
属格 (genitive)	talo-n	talo-j-en	「家の」
分格 (partitive)	talo-a	talo-j-a	「家(を)」
対格 (accusative)	talo-n	talo-t	「家を」
様格 (essive)	talo-na	talo-i-na	「家として」
変格 (translative)	talo-ksi	talo-i-ksi	「家になる)」
内格 (inessive)	talo-ssa	talo-i-ssa	「家の中で」
出格 (elative)	talo-sta	talo-i-sta	「家の中から」
入格 (illative)	talo-on	talo-i-hin	「家の中へ」
接格 (adessive)	talo-lla	talo-i-lla	「家(の表面)で」
奪格 (ablativ)	talo-lta	talo-i-lta	「家(の表面)から」
向格 (allative)	talo-lle	talo-i-lle	「家(の表面)へ」
欠格 (abessive)	talo-tta	talo-i-tta	「家なしで」
共格 (comitative)	talo-i-ne		「家とともに」
具格 (instructive)	talo-i-n		「家によって」

(Hakulinen 他(2004: 108) を基に筆者作成)

共格と具格は、単複共通の形態である。対格固有の形式は、人称代名詞と疑問代名詞 *kuka*「誰」にのみ現れる。それ以外の語の場合、単数形ならば属格と同形で、複数形ならば主格と同形である。対格と分格は主に直接目的語に付属する格である。対格が直接目的語として用いられるには、以下のような条件が必要である。

- ①肯定文における直接目的語であること
- ②行為（現象）が完結（完了）していること
- ③行為（現象）が、直接目的語の表す対象の全体に及ぶものであること

これら3つの条件に1つでも当てはまらない状況があれば、目的語には分格が用いられる。

#### 0.4.2. 指示詞

指示詞は *tämä*「これ」、*se*「それ」、*tuo*「あれ」の3系列が存在し、後続する名詞がある場合はその名詞に応じて格変化する。

- 1) Ost-i-n            tämä-n      kirja-n.  
 buy-IMP-1SG    this-ACC    book-ACC  
 「私はこの本を買った。」

(作例<sup>1)</sup>)

#### 0.4.3. 動詞

動詞は人称（単数，複数の 1～3 人称の他に受動形という不定人称形がある），時制（現在，過去，現在完了，過去完了），法（直説法，条件法，可能法，命令法）によって語形変化する。4 つの時制が区別されるのは直説法のみで，他の法では現在と過去の区別がされるのみである。動詞は，語幹（過去標識）-（法標識）-人称接辞のように活用するが，直説法以外の法においては過去標識はつかず，動詞 olla 「ある，いる」を用いて分析的に表される。以下の表 2 と表 3 で，puhua 「話す」を例に，動詞の現在形と過去形の活用パターンをまとめる。直説法以外の法については現在形のみ示す。

**表 2 動詞の活用（人称と時制）**

	現在形	過去形
1 人称単数	puhu-n	puhu-i-n
2 人称単数	puhu-t	puhu-i-t
3 人称単数	puhu-u	puhu-i
1 人称複数	puhu-mme	puhu-i-mme
2 人称複数	puhu-tte	puhu-i-tte
3 人称複数	puhu-vat	puhu-i-vat
受動形	puhu-ta-an	puhu-tt-i-in

(松村 (1992: 677) を基に筆者作成)

<sup>1</sup> 例文のグロスと訳は全て筆者による。なお，全ての作例はコンサルタント（1.で示す人物と同一）のチェックを受けている。

表3 動詞の活用 (法)

	条件法	可能法	命令法
1 人称単数	puhu-isi-n	puhu-ne-n	φ
2 人称単数	puhu-isi-t	puhu-ne-t	puhu
3 人称単数	puhu-isi	puhu-ne-e	puhu-koon
1 人称複数	puhu-isi-mme	puhu-ne-mme	puhu-kaa-mme
2 人称複数	puhu-isi-tte	puhu-ne-tte	puhu-kaa
3 人称複数	puhu-isi-vat	puhu-ne-vat	puhu-koot
受動形	puhu-tta-isi-in	puhu-tta-ne-en	puhu-tta-koon

(松村 (1992: 677) を基に筆者作成)

フィンランド語には、否定を表す否定動詞という形式があり、人称活用を伴う。肯定文において主動詞に付属していた人称接辞は否定動詞につき、主動詞は人称接辞を欠いた形式になる。

- 2) E-n            puhu        japani-a.  
 NEG.V-1SG      speak:PR   Japanese-PAR  
 「私は日本語を話さない。」

(作例)

過去形や完了形が否定文に含まれる場合、主動詞は NUT 分詞 (過去分詞) の形になる。以下の3)は過去形の否定文である。

- 3) Olli        ei                käyttä-nyt        tietokone-tta.  
 Olli:NOM   NEG.V.3SG    use-NUTP        computer-PAR  
 「Olli はコンピュータを使わなかった。」

(作例)

なお、フィンランド語には10種の不定詞および6種の分詞が存在する。いわゆる辞書形はA不定詞基本形と呼ばれる。本稿における例文には、A不定詞基本形以外の不定詞は現れないため、他の不定詞や分詞の概要は割愛する。

## 1. コンサルタント情報

コンサルタントは以下の1名である。

氏名: Sinikka Kurosawa (シニッカ・黒澤)  
 性別: 女性  
 生年月日: 1964年8月21日  
 出身地: フィンランド・ピュフター (Finland, Pyhtää)  
 母語: フィンランド語ヘルシンキ方言  
 備考: 日本に20年以上在住 (配偶者は日本人)

媒介言語は日本語である。例文を提示していただく際は、日本語文を示しながらその文が表す状況を説明して調査した。

## 2. 情報構造と名詞述語文相当の表現に関する調査結果

この節では調査の結果を示す。グロスに関しては Hakulinen 他(2004)の術語を参考にした。グロス中のフィンランド語の英語訳はインターネット上の辞書“EUdict” (<http://eudict.com/>) のフィンランド語・英語辞書を参照した。例文中の重要な要素には下線を引いた。

### 2.1. 焦点

#### 2.1.1. 対比焦点 (主語)

(1) 「えっ, Tommi が来たの?」「いや, Tommi じゃなくて Tomi が来たんだ。」

Hei tul-i-ko Tommi?  
 INJ come-IMP.3SG-QP Tommi:NOM

Ei, ei se ol-lut Tommi vaan Tomi.  
 NEG.3SG NEG.3SG it:NOM be-NUTP Tommi:NOM but Tomi:NOM

主語が対比焦点となっている場合、「A でなく B」という構造は“ei A vaan B”と表現されるのが普通である。この時、「A でない」という否定形式は単独での否定形式と同じである。(1)において、2つ目の文頭にある ei は、Yes/No 疑問文に対する返答「いいえ」に当たる語であり、否定動詞の重複ではない。vaan は「A でなく B」という構造に用いられる接続詞で、肯定文にはほとんど用いられない。

#### 2.1.2. WH 焦点 (主語)・WH 応答焦点 (主語)

(2) 「誰が来た (の)?」「Tomi が来たよ。」

Kuka tul-i?  
 who:NOM come-IMP.3SG

Tomi.

Tomi:NOM

フィンランド語には、WH 焦点や WH 応答焦点を表す特別な形式は存在しない。イントネーションは下降調が原則であるため、上昇調にすることもほとんどない。強調したい語のアクセントをより強く発音することはありうる。回答の「Tomi が来たよ」の文は、動詞が省略されている。

### 2.1.3. Yes/No 疑問・形容詞述語応答焦点

(3) 「Tomi の方が大きいんじゃないの？」

「いや、Tomi じゃなくて、Jussi の方が大きいんだよ。」

Ei-kö	Tomi	ole	pide-mpi?		
NEG.3SG-QP	Tomi:NOM	be:PR	long-COMP:NOM		

Tomi	ei	ole	pide-mpi,	vaan	Jussi.
Tomi:NOM	NEG.3SG	be:PR	long-COMP:NOM	but	Jussi:NOM

形容詞述語の応答焦点の場合も、(1)と同様に「A でなく B」という構造に用いられる vaan が現れる。特殊な構文は見られない。

### 2.1.4. 文焦点（自動詞文）

(4) [電話で]「どうした(の)？」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

Mitä	tapahtu-i?
what:PAR	happen-IMP.3SG

Joo, asiakas	tul-i	nyt. /	Joo, nyt	tul-i	asiakas.
yes client:NOM	come-IMP.3SG	now	yes now	come-IMP.3SG	client:NOM

文焦点の場合にも、特殊な構文はない。「今お客さんが来た」という文の語順は二通りある。前者は中立的な返答で、後者は「お客さんが来た」という事実を強調するニュアンスがある。後者の返答の方が文焦点に近い意味合いを持つと考えられる。

### 2.1.5. 対比焦点 (目的語)

- (5) 「あの子供が Tomi を叩いたんだって？」

「いや, Tomi じゃなくて, Tommi を叩いたんだよ。」

Lö-i-kö                    tuo            lapsi                    Tomi-a?  
hit-IMP.3SG-QP            that:NOM   child:NOM            Tomi-PAR

Ei,            hän                    ei            lyö-nyt            Tomi-a    vaan            Tommi-a.  
NEG.3SG   PRO.3SG.NOM   NEG.3SG   hit-NUTP   Tomi-PAR   but            Tommi-PAR

目的語の対比焦点の場合も, *vaan* が用いられる.

- (6) 「赤い袋と青い袋があるけど, どっちを買う (の) ?」 「青い袋を買うよ。」

On                    punainen ja sininen pussi.            Kumma-n            osta-t?  
be:PR.3SG            red:NOM   and   blue:NOM   bag:NOM   which-ACC            buy:PR-2SG

Osta-n                    sinisen.  
buy:PR-1SG            blue:ACC

対比される目的語が形容詞を伴う場合, 「青い袋」を二度繰り返すのではなく, 「青いを買う」のような文になり, 名詞「袋」は省略されることが多い. フィンランド語は修飾語も被修飾語にしたがって格変化するため, 被修飾語を省略しても, 残された修飾語によって被修飾語の文法役割を表すことができる.

### 2.1.6. 述語焦点

- (7) 「Tomi はどうした?」 「Tomi は朝からどっかへでかけたよ。」

Missä            Tomi                    on?  
what:INE   Tomi:NOM            be:PR.3SG

Hän                    läht-i                    aamu-lla                    jonnekin.  
PRO.3SG.NOM   leave-IMP.3SG   morning-ADE            something:ILL

日本語では「～はどうした?」のように述語を焦点にした疑問文が可能である. しかし, フィンランド語にはこのような表現はなく, 具体的に「どこにいるのか」という疑問文を用いる.

### 2.1.7. WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)

- (8) 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

Ketä tuo lapsi lö-i?  
who:PAR that:NOM child:NOM hit-IMP.3SG

Hän lö-i oma-a velje-ä-än.  
PRO.3SG.NOM hit-IMP.3SG own-PAR brother-PAR-POSS.3

フィンランド語は疑問詞も格変化する。目的語の場合は、分格 (あるいは対格) の形になる。通常の疑問文で疑問詞は文頭に置かれる。疑問詞が焦点の対象になる場合も語順には変化がない。

### 2.1.8. 文焦点 (他動詞文)

- (9) [電話で]「どうした (の)?」「うん, Tomi が (自分の) 弟を叩いたんだ。」

Mitä tapahtu-i?  
what:PAR happen-IMP.3SG

No, Tomi lö-i velje-ä-än.  
INJ Tomi:NOM hit-IMP.3SG brother-PAR-POSS.3

他動詞文の文焦点の場合、日本語の「ノダ」に当たるような特殊な表現はなく、「叩いた」という他動詞にも、焦点に関わる表現は存在しない。「どうした (の)?」という質問は、「何が起こったの?」という意味になる文で表す。

### 2.1.9. 目的語主題化

- (10) 「あのケーキ, どうした?」「ああ, (あれは) Tomi が食べちゃったよ。」

Missä kakku on?  
what:INE cake:NOM be:PR.3SG

Voi, Tomi sö-i se-n.  
INJ Tomi:NOM eat-IMP.3SG it-ACC

日本語では、その場にはない事物・人物を「あれ (あの)」という指示詞で表すことができる。しかし、フィンランド語で「あれ」に当たる指示詞を用いた場合、遠方に存在するものを指す意味でしか解釈できない。そのため、日本語で言う「あのケーキ, どうした?」というニュア

ンスを直接伝えられる表現は存在せず、「ケーキはどこにあるの？」という質問をする以外に方法はないと思われる。フィンランド語には冠詞がないため、「ケーキはどこにあるの？」という質問中の「ケーキ」の定性も明示できない。回答における「あれ」は、質問文に既に出てきているケーキであるため、指示詞 *se* 「それ」を用いて表現できる。

### 2.1.10. 分裂文

(11) 「私が昨日お店から買って来たのはこのリンゴだ。」

- a. *Se on tämä omena, jonka ost-i-n*  
*it:NOM be:PR.3SG this:NOM apple:NOM REL.ACC buy-IMP-1SG*  
*kaupa-sta eilen.*  
*shop-ELA yesterday*
- b. *Eilen ost-i-n tämä-n omena-n kaupa-sta.*  
*yesterday buy-IMP-1SG this-ACC apple-ACC shop-ELA*

いわゆる分裂文は、フィンランド語の場合は関係節で表すのが通常である。上記の(11a)が関係節を用いた文である。ただし、(11b)のように単に「昨日私はこのリンゴをお店から買った」という文でも表せる。(11b)の場合は、*tämän omenan* 「このリンゴを」という部分にプロミネンスが置かれる。

## 2.2. コピュラ文

### 2.2.1. 措定文 (主題)

(12) 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

*Tuo ihminen on opettaja. Hän on*  
*that:NOM human:NOM be:PR.3SG teacher:NOM PRO.3SG.NOM be:PR.3SG*  
*ol-lut jo 3 vuo-tta tä-ssä koulu-ssa tö-i-ssä.*  
*be-NUTP already 3 year-PAR this-INE school-INE job-PL-INE*

「AはBだ」という措定文の場合、コピュラ動詞に相当する *olla* 「ある、いる」が用いられる。Aが3人称単数の場合は“A on B”という構造になる。日本語の場合、2つ目の文には主語がないが、フィンランド語では最初の文を受けて人称代名詞 *hän* 「彼 (彼女)」を用いる。措定文でなくても、フィンランド語は3人称主語を省略できない。

### 2.2.2. 倒置指定文

(13) 「彼のお父さんは、あの人だ。」

Häne-n	isä-nsä	on	tu	mies.
PRO.3SG-GEN	father:NOM-POSS.3	be:PR.3SG	that:NOM	man:NOM

倒置指定文の場合も、(12)と同様にコンピュータ文となる。倒置という概念が明確になるような構文はない。

### 2.2.3. 指定文

(14) 「あの人が彼のお父さんだ。」

Tuo	mies	on	häne-n	isä-nsä.
that:NOM	man:NOM	be:PR.3SG	PRO.3SG-GEN	father:NOM-POSS.3

倒置指定文(13)に対する指定文が(14)であるが、助詞「ハ」と「ガ」の使い分けのような違いは存在しない。主語・述語の格の違いもない。

### 2.2.4. 定義文

(15) 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

Ylihuominen	<u>tarkoittaa</u>	huomisen	seuraava-a	päivä-ä.
the.day.after.tomorrow:NOM	mean:PR-3SG	tomorrow:GEN	next-PAR	day-PAR

定義を表す場合、(12)～(14)で用いた olla 「ある、いる」を用いたコンピュータ文で表すこともありうるが、定義を示すニュアンスがかなり薄れてしまう。(15)のような場合は、意味の説明をする時に用いる動詞 tarkoittaa 「意味する」を用いることが多いようである。

### 2.2.5. ウナギ文

(16) [何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて] 「私はコーヒーだ。」

- a. Ota-n                    kahvi-a / kahvi-n.  
take:PR-1SG            coffee-PAR / coffee-ACC
- b. Minu-lle                kahvi. / kahvi-a.  
PRO.1SG-ALL            coffee:NOM / coffee-PAR

日本語で言うウナギ文は、フィンランド語には存在しない。(16a)のように「私はコーヒーを飲む」のような表現をするか、(16b)のように「私にはコーヒーを」のような文を用いる。動詞

がないという点では、(16b)がウナギ文にやや近いが、名詞の格は主語に用いる格ではないので、日本語とは文構造が異なる。

### 2.2.6. 逆行ウナギ文

(17) [注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに]  
「コーヒーは私だ。」

Minu-lle kahvi.  
PRO.1SG-ALL coffee:NOM

日本語の場合、(16)と(17)では明らかに表現が異なっているが、フィンランド語には逆行ウナギ文のような表現はない。

### 2.2.7. 形容詞述語文

(18) 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」

Se uusi ja paksu kirja on kallis.  
it:NOM new:NOM and thick:NOM book:NOM be:PR.3SG expensive:NOM

「新しくて厚い」のように、形容詞が連続する場合、間に接続詞 ja 「と」を挟むことが多い。形容詞連結のための特別な形式は存在しない。ただし、形容詞は被修飾名詞に伴って格変化するので、どの要素が名詞を修飾しているのかが明確になる。以下に例をあげる。

(18') 「私はその新しくて厚い本を買った。」

Ost-i-n se-n uude-n ja paksu-n kirja-n.  
buy-PST-1SG it-ACC new-ACC and thick-ACC book-ACC

## 3. 意外性・思い出し

(19) [砂糖の入れ物を開けて]「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

a. Oho, sokeri on loppu!  
INJ sugar:NOM be:PR.3SG end:NOM

b. Oho, ei ole sokeri-a!  
INJ NEG.3SG be:PR sugar-PAR

意外な事実を発見した場合に、特別な表現は用いられない。文字通りに「砂糖がない」という事実を直説法で述べるのみである。意外性の表現は、イントネーションや文頭の間投詞に頼

るところが大きい。

(20) 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あつ、そうだ！

Tomi だったな。」

Iltapäivä-llä	minu-n <sup>2</sup>	<u>pit-i</u>	tava-ta	joku.
afternoon-ADE	PRO.1SG-GEN	must-IMP.3SG	meet-AINF	somebody:NOM
Kuka	se	<u>ol-i</u> ?	Oo, nyt	muista-n,
who:NOM	it:NOM	be-IMP.3SG	INJ now	remember:PR-1SG
se	<u>ol-i</u>	Tomi.		
it:NOM	be-IMP.3SG	Tomi:NOM		

日本語の場合、「～だった！」という、いわゆる思い出しの表現に過去形を使うことは多い。フィンランド語にも、同様の表現が見られる。(20)の状況は過去形を使うべき時制ではないが、「会うはずだった」という表現には動詞 *pitää* の過去形が、「誰だったっけ」、「Tomi だったな」という表現には動詞 *olla* 「ある、いる」の過去形が用いられている。これまでのデータにおいては、日本語とフィンランド語は共通点があまり見られなかったが、過去形によりモダリティを表すという現象は、両言語に見られる。

### 略号一覧

グロスに関しては基本的に Hakulinen 他(2004)の術語とその日本語訳に従う（日本語訳は筆者による）。日本語における（ ）内の表記はその他の文献等での呼称である。

	英語	フィンランド語	日本語
-			形態素境界
./:			形態素内の意味境界
1	1 <sup>st</sup> person	1. persoona	1 人称
2	2 <sup>nd</sup> person	2. persoona	2 人称
3	3 <sup>rd</sup> person	3. persoona	3 人称
ACC	accusative	akkusatiivi	対格
ADE	adessive	adessiivi	接格
AINF	A-infinitive	A-infinitiivi	A 不定詞（基本形）
ALL	allative	allatiivi 向格	

<sup>2</sup> (20)において1人称代名詞「私」が属格形になっているのは、義務を表す構文の特殊性による。フィンランド語学では義務構文とも呼ばれる。意味上の主語は属格形になり、直接目的語は主格形になる。

COMP	comparative	komparatiivi	比較級
ELA	elative	elatiivi	出格
GEN	genitive	genetiivi	属格
ILL	illative	illatiivi	入格
IMP	imperfect	imperfekti	過去 <sup>3</sup>
INE	inessive	inessiivi	内格
INJ	interjection	interjektio	間投詞
NEG	negative	negatiivi	否定
NOM	nominative	nominatiivi	主格
NUTP	NUT-participle	NUT-partisiippi	NUT 分詞 (能動過去分詞)
PAR	partitive	partitiivi	分格
PL	plural	monikko	複数
POSS	possesive	possessiivi	所有接辞
PR	present	preesens	現在
PRO	pronoun	pronomini	代名詞
QP	question particle	kysymyspartikkeli	疑問小辞
REL	relative	relatiivi	関係詞
SG	singular	yksikkö	単数

### 参考文献

- Hakulinen, Auli, Maria Vilkuna, Riitta Korhonen, Vesa Koivisto, Tarja Riitta Heinonen, Irja Alho. 2004. *Iso suomen kielioppi*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- 松村一登. 1992. 「フィンランド語」(亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典第3巻 世界言語編』: 673-688) 東京:三省堂.

### 参考資料

EUdict <http://eudict.com/>

<sup>3</sup> フィンランド語学では、いわゆる過去形は imperfekti (未完了形) と呼ばれ、現在完了・過去完了を表す perfektii (完了形) と対立する位置づけになっている。厳密には日本語訳と合致しないが、本稿では便宜上 imperfekti を「過去」とした。



情報構造：ハンガリー語<sup>1</sup>

大島 一

## 1. コンサルタント情報

ハンガリー語対応例文の作例は大島が、それをハンガリー語話者コンサルタントに確認した上で記載した。以下、コンサルタントの情報である。

氏名：BILIK Éva (ビリク・エーヴァ)<sup>2</sup>

性別：女性

生年月日：1971年3月13日

出身地：ハンガリー、ブダペスト (Hungary, Budapest)

母語：ハンガリー語ブダペスト方言

## 2. ハンガリー語の主題(トピック)・評言(コメント)構造とその語順

ハンガリー語の語順であるが、情報構造の観点から、文頭に主題(トピック)、その後に評言(コメント)が続く。É. Kiss(1981)は「ヤーノシュはマリを愛する」という他動詞文において、以下に見るような意味解釈がありうると説明する。主題(トピック)のあとにはイントネーションの区切れ目「|」が置かれ、その後ろが評言(コメント)部である。動詞項の直前には焦点(フォーカス、以下ではスモールキャピタルで表示)が配置される。このように、ハンガリー語は情報構造を語順にて表現する言語であると言える。

(イ)	szere <i>t</i> -i	János- <i>φ</i>	Mari- <i>t</i>			
	愛する-3SG.DEF	ヤーノシュ-NOM	マリ-ACC			
				<b>主題</b>	<b> </b>	<b>焦点 動詞項</b>
a.						Szereti Marit János.
						Szereti János Marit.
						「ヤーノシュはマリを愛している」
b.						JÁNOS szereti Marit.

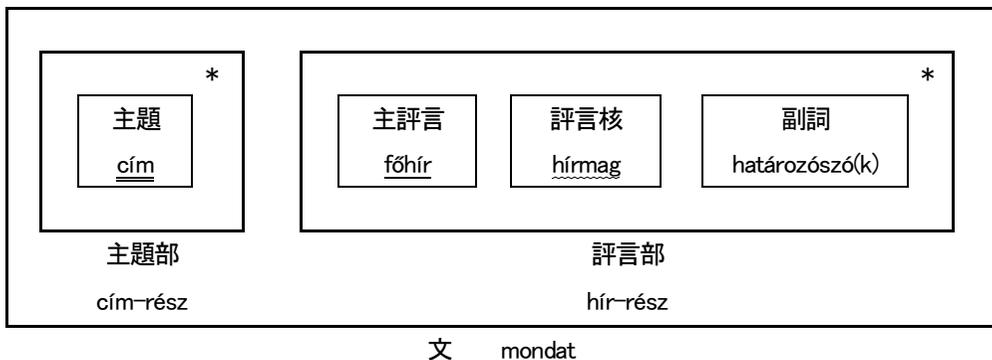
<sup>1</sup> ハンガリー語は中央ヨーロッパのハンガリーおよび周辺国で話されている言語(ウラル語族フィン・ウゴル語派に属する)であり、話者数は約1,300万人である。その言語的特徴は膠着語、後置詞言語であり、豊富な動詞活用を持つ。特に、他動詞における対格目的語が定まったものかそうでないかにより活用が変わる不定/定活用(例文グロスでは(φ)/DEF)はハンガリー語の大きな特徴の一つである。

<sup>2</sup> ハンガリー語は日本語と同じく、「姓・名」の順番で表記する。

- 「マリを愛しているのはヤーノシュである」  
 |  
 MARIT szereti János.  
 「ヤーノシュが愛しているのはマリである」
- c. János | szereti Marit.  
 「ヤーノシュといえば、彼はマリを愛している」  
 Marit | szereti János.  
 「マリといえば、ヤーノシュが愛している」
- d. János | MARIT szereti.  
 「ヤーノシュといえば、彼が愛しているのはマリである」  
 Marit | JÁNOS szereti.  
 「マリといえば、彼女を愛しているのはヤーノシュである」
- e. János Marit | szereti.  
 「ヤーノシュとマリといえば、彼は彼女を愛している」  
 Marit János | szereti  
 「マリとヤーノシュといえば、彼は彼女を愛している」

ハンガリー語の語順の研究では、他に、Fukaya (1988)などがある。そこでは、ハンガリー語の文を解釈するに $\phi$ 動詞接頭辞<sup>3</sup>、および $\phi$ 繫辞( $\phi$ -kopula)を導入することにより、同語文における情報構造的な意味の違いを区別できると主張する。

ハンガリー語の文は原則として次の構造をもつ。右肩の\*はそれが何度くり返されても良いことを示す(深谷, 1982)。



<sup>3</sup> 原典(深谷志寿・深谷ベルタ 1982 『昭和 57 年度言語研修 ハンガリー語テキスト2 ハンガリー語 II』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)では「接動詞」。以下、これを「動詞接頭辞」と表記する。

ここで評言核とは動詞（繫辞・ $\phi$  繫辞を含む）、主評言は焦点（フォーカス）を指す。[ $\phi$  動詞接頭辞を  $\phi_{ik}$ 、 $\phi$  繫辞を  $\phi_{kp}$  と表示することにする.]

以下の例では、二重下線が主題（トピック）、一重下線が焦点（フォーカス）である。

- (ロ) a. A lány meg-csokol-t-a a fiú-t.  
the 少女 PRV [完了] -キスする-PST-DEF.3SG the 少年-ACC  
「娘は少年に口付けをした。」
- b. A fiú-t a lány csokol-t-a meg.  
the 少年-ACC the 少女 キスする-PST.DEF.3SG PRV [完了]  
「少年は娘が口付けをした。」
- c. A lány a fiú-t csokol-t-a meg.  
the 少女 the 少年-ACC キスする-PST-DEF.3SG PRV [完了]  
「娘は少年に口付けをしたのだ。」

また以下の例（ハ）と（ニ）とを比較することによって、同音異義文，Sándor az apám の二通りの解釈が説明できる。

- (ハ) a. Sándor az apá-m vol-t  $\phi_{ik}$ .  
シャーンドル the 父-POSS.1SG BE-PST.3SG (PRV)  
「シャーンドルは父でした。」
- b. Sándor vol-t  $\phi_{ik}$  az apá-m.  
シャーンドル BE-PST.3SG (PRV) the 父-POSS.1SG  
「シャーンドルが父でした。」
- (ニ) a. Sándor az apá-m  $\phi_{kp}$   $\phi_{ik}$ .  
シャーンドル the 父-POSS.1SG (BE) (PRV)  
「シャーンドルは父です。」
- b. Sándor  $\phi_{kp}$   $\phi_{ik}$  az apá-m.  
シャーンドル (BE) (PRV) the 父-POSS.1SG  
「シャーンドルが父です。」

### 3. 調査結果

(1) (昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

「えっ、ヤーノシュが来たの？」

「いや、ヤーノシュじゃなくて、タマーシュが来たんだ」

„Tényleg	JÁNOS	jö-tt	el?”	
本当に	ヤーノシュ	来る-PST.3SG	PRV (離れて)	
„Nem,	nem	János,	hanem	Tamás.”
いいえ	NEG	ヤーノシュ	ではなく	タマーシュ <sup>4</sup>

ハンガリー語の語順では、焦点要素<sup>5</sup>は動詞直前の位置を占めなければならないという規則のとおり、この例における焦点要素 János「ヤーノシュ」を動詞の直前に配置させる。この場合、動詞は el-jön「(家から離れて) 出かける」という el-「～から離れて」という動詞接頭辞が付いた動詞（以下、「接頭辞付き動詞」と呼ぶ）であるため、動詞接頭辞は動詞本体（以下、「基動詞」と呼ぶ）から分離・後置することになる。

(2) 「誰が来た (の) ?」 「ヤーノシュが来たよ」

„Ki	jö-tt?”	„János.”
誰が	来る-PST.3SG	ヤーノシュ

疑問詞 ki「誰が」も焦点要素となるため、必ず動詞の直前を占める。

(3) (ヤーノシュとタマーシュの背について話している状況で)

「ヤーノシュの方が大きいんじゃないの？」

「いや、ヤーノシュじゃなくて、タマーシュの方が大きいんだよ」

„János	magas-abb	Tamás-nál,	ugye?”		
ヤーノシュ	高い\COMPR	タマーシュ-ADE	ですよ?		
„Nem,	nem	János,	hanem	Tamás	magas-abb.”
いいえ	NEG	ヤーノシュ	ではなく	タマーシュ	高い\COMPR

<sup>4</sup> グロスに使用する略号は基本的に Leipzig Crossing Rules

(<https://www.eva.mpg.de/lingua/pdf/LGR08.02.05.pdf>) に従った。その中に記載のないものは以下。 ADE : adessive「接格」、ALL : allative「向格」、COMPR : comparative「比較級」、DEF : definitive conjugation「定活用」、ILL : illative「入格」、INE : inessive「内格」、PRV : preverb「動詞接頭辞」、SUP : superlative「上格」、SUB : sublative「着格」

<sup>5</sup> 例文では焦点要素 (Focus)はスモールキャピタルで示した。

ハンガリー語の比較級は形容詞に *-abb/-ebb* を付け、比較する対象を接格 *-nál/-nél* で示す<sup>6</sup>。なお、叙述文「A は～である」における3人称（現在時制のみ）ではコピュラは示されない（*János magas*。「ヤーノシュは背が高い」）<sup>7</sup>。そして、例文にあるように「～でなく、…である」は、*„nem ~, hanem …”*のように表現する。

- (4) (電話で)「どうした(の)?」「うん、今、お客さんが来たんだ」

<i>„Mi</i>	<i>van</i>	<i>vel-ed?</i> ”			
何が	BE	INST-2SG			
<i>„Na,</i>	<i>most</i>	<i>egy</i>	<i>vendég</i>	<i>jö-tt.</i> ”	
ええ	今	a	お客	来る-PST3SG	

焦点要素と同じく、この例文における新情報である「お客さん (*egy vendég*)」は、ふつう動詞の直前に配置される。

- (5) 「あの子供がヤーノシュを叩いたんだって？」

「いや、ヤーノシュじゃなくて、タマーシュを叩いたんだよ」

<i>„JÁNOS-T</i>	<i>üt-ött-e</i>	<i>meg</i>	<i>az</i>	<i>a</i>	<i>gyerek?</i> ”
ヤーノシュ-ACC	たたく-PST-DEF3SG	PRV [完了]	that	the	子供
<i>„Nem,</i>	<i>nem</i>	<i>János-t,</i>	<i>hanem</i>	<i>Tamás-t.</i> ”	
いや	NEG	ヤーノシュ-ACC	ではなく	タマーシュ-ACC	

この例文では、目的語「ヤーノシュを」が対比焦点であるため、必ず動詞の直前の位置を占めなければならない。そのため、接頭辞つき動詞 *meg-üt*「たたく」の接頭辞 *meg-* は基動詞の直後に配置されている。

- (6) 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う(の)?」

「(私は) 青い袋を買うよ」

<sup>6</sup> なお、ハンガリー語は母音調和という現象のため、それぞれの母音のグループ（後舌母音 (u, o, a) / 前舌母音 (i, e) / 円唇母音 (ü, ö)）に応じた異形態を持つ。この比較級マーカ―では、後舌母音系には *-abb* が、前舌および円唇母音系には *-ebb* が付くことを意味する。同様に、接格では、後舌母音系には *-nál* が、前舌および円唇母音系には *-nél* が付く。

<sup>7</sup> 2節の例文(二)にある  $\phi$  繫辞の説明も参照のこと。

„ <i>Piros</i>	<i>táska</i>	<i>is,</i>	<i>kék</i>	<i>táska</i>	<i>is</i>	<i>van,</i>
赤い	かばん (袋)	も	青い	かばん (袋)	も	BE
<i>MELYIK-ET</i>	<i>vesz-ed?</i> ”					
どれ-ACC	買う-DEF2SG					
„( <i>Én</i>	<i>pedig)</i>	<i>A</i>	<i>kék-et.</i> ”			
(私	は一方) the		青い-ACC			

疑問詞 *melyik* 「どちら」の対格形 *melyiket* 「どちらを」が焦点要素である。なお、*melyiket* はすでに選択するモノが既知であるから定まった目的語となり、動詞 *vesz* 「買う」はこのように定活用となる。

- (7) (例えば、朝少し遅く起きて来たヤーノシュの父親が、姿の見えないヤーノシュについて  
母親に尋ねている場面で)

「ヤーノシュはどうした？」

「ヤーノシュは朝からどっかへでかけたよ」

„ <i>Hol</i>	<i>van</i>	<i>János?</i> ”		
どこに	BE	ヤーノシュ		
„ <i>Már</i>	<i>reggel</i>	<i>valahova</i>	<i>el-men-t.</i> ”	
すでに	朝	どこかへ	PRV (離れて) 行く-PST.3SG	

「どうした？」に対応する述語焦点の文であるので、その答えでは述語以外のものに焦点をあてる必要がない。その証拠に、動詞は *el-ment* と接頭辞 *el-* は動詞から分離せず、動詞直前の位置 (=焦点) のままである。

- (8) 「(あの子供は) 誰を叩いたの？」

「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ」

„ <i>Az</i>	<i>a</i>	<i>gyerek)</i>	<i>Ki-T</i>	<i>üt-ött</i>	<i>meg?</i> ”
that	the	子供	誰-ACC	たたく-PST	PRV [完了]
„ <i>A saját</i>	<i>öccsé-t.</i> ”				
the 自身の	弟-ACC				

疑問詞 *ki* 「誰」に対格語尾が付いた *kit* 「誰を」だが、すでに述べたとおり、疑問詞は焦点

要素であるため、かならず動詞直前の位置を占める。そのため、接頭辞 *meg-* が動詞直後の位置に移動させられる。

(9) [電話で]「どうした (の) ?」

「うん、ヤーノシュが (自分の) 弟を叩いたんだ」

„ <i>Mi</i>	<i>történ-t?</i> ”					
何	起こる-PST.3SG					
„ <i>Igen,</i>	<i>János</i>	<i>meg-üt-ött-e</i>	<i>a</i>	<i>saját</i>	<i>öccsé-t.</i> ”	
はい	ヤーノシュ	PRV [完了] -たたく-PST.DEF.3SG	the	自身の	弟-ACC	

(10) 「あのケーキ、どうした？」

「ああ、(あれは) ヤーノシュが食べちゃったよ」

„ <i>Mi</i>	<i>van</i>	<i>az-zal</i>	<i>a</i>	<i>sütemén-nyel?</i> ”
何	BE	that-INST	the	ケーキ-INST
„ <i>Ja,</i>	<i>János</i>	<i>meg-e-tt-e.</i> ”		
ああ	ヤーノシュ	PRV [完了] -食べる-PST.DEF.3SG		

上例 (9), (10)とも例 (7)と同様, 「どうした？」に対応する文焦点の例であるため, 接頭辞 *meg-* は動詞から離れず, 付加されたまま動詞直前の位置 (=焦点) を占める。

(11) 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ」

<i>Ez a</i>	<i>könyv,</i>	<i>ami-t</i>	<i>tegnap</i>	<i>ab-ban</i>	<i>a</i>	<i>bolt-ban</i>	<i>ve-tt-em.</i>
this the	本	REL-ACC	昨日	that-INE	the	店-INE	買う-PST.1SG

(12) 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている」

<i>Az az</i>	<i>ember</i>	<i>tanár.</i>	<i>Már</i>	<i>3</i>	<i>év-e</i>	<i>dolgoz-ik</i>
that the	人	先生	すでに	3	年-POSS.3SG <sup>8</sup>	働く-3SG

<sup>8</sup> 「3年 (間)」という, 期間を表す場合, ハンガリー語では“時”を表す語彙を所有形にして表すことが一般的である。この場合, *év* 「年」の所有形 (3人称単数) にした, *éve* で「~年 (間)」「~年前から」となる (なぜ所有形でこの意味が得られるのかは不明)。

<i>eb-ben</i>	<i>az</i>	<i>iskola-ban.</i>
this-INE	the	学校-INE

ハンガリー語では動詞の活用により主語人称が表わされるので、ふつう人称代名詞は表示されない。

(13) 「彼のお父さんは、あの人」

<i>Az ő</i>	<i>ap-ja</i>	<i>az</i>	<i>az</i>	<i>ember.</i>
the 彼	父-POSS.3SG	that	the	人

(14) 「あの人がある彼のお父さんだ」

<i>Az az</i>	<i>ember</i>	<i>az</i>	<i>ő</i>	<i>ap-ja.</i>
that the	人	the	彼	父-POSS.3SG

例 (13), (14)とも、仮に人称代名詞 *ő* 「彼 (女)」がなくとも、*ap-ja* 「父-3 人称所有」で「彼 (女) の」が意味されるが、この場合、「彼の」を明示するために *ő* が必要であると思われる。

(15) 「あさってってというのはね、あしたの次の日のことだよ」

<i>A holnapután</i>	<i>az,</i>	<i>ami</i>	<i>követ-i</i>	<i>a</i>	<i>holnap-ot.</i>
the あさって	that	REL	続く-DEF.3SG	the	あした-ACC

直訳すると、「明後日はそれ、すなわち明日に続くもの」となる。

(16) 「何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて」「私はコーヒーだ」

<i>„Kávé-t</i>	<i>kér-ek?”</i>
コーヒー-ACC	お願いする-1SG

「私はコーヒーをお願いする」という表現で言うのが一般的である。日本語のウナギ文のように \**Én kávé vagyok.* 「私はコーヒーです」とは言えない (*én* 「私」, *vagyok* 「～です (1 人称単数のコピュラ)」)。

(17) 「注文した数人分のお茶が運ばれてきて「どなたがコーヒーですか？」の問いに  
「コーヒーは私だ」

„A kávé az enyém!”<sup>9</sup>  
 the コーヒー the 私のもの

(18) 「その新しくて厚い本は（値段が）高い」

„Az az új vastag könyv drága.”  
 that the 新しい 厚い 本 (値段が) 高い

「新しくて厚い」は、その語順のまま形容詞 új「新しい」と vastag「厚い」を並べればよい。なお、例 (3)でも説明したとおり、この例も「A は～である」といった叙述文であり、現在時制で3人称が主語であるため、コピュラは必要ない。

(19) 「砂糖の入れ物を開けて」 「あつ、砂糖がなくなっているよ！」

„Hoppá, el-fogy-ott a cukor!”  
 おっと! PRV [完了] -なくなる-PST.3SG the 砂糖

突然のこと、発見という意味で間投詞 hoppá「おっと」が使われている。動詞は el-fogy「使いはたす、なくなってしまう」で、fogy「減る、少なくなる」に接頭辞 el- が付くことで完了の意味が付加される。同時に、現存の状況の確認の意味もあり、それが発見に繋がると思われる。

(20) 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あ、そうだ！田中くんだったな」

„Ma délután találkoz-t-am volna valaki-vel.”  
 今日 午後 会う-PST-1SG COND 誰か-INST

<sup>9</sup> この(17)の例だが、Fukaya (1988:43) (または、深谷 (1986:106)) では、同様の状況で以下のよ  
 うに、すなわち、“(逆)ウナギ文”で答えられるとある (Fukaya (1988)ではハンガリー人 Réz Ádám  
 に私信にて確認したとある)：

- (i) a. „A kávé?”  
           the コーヒー  
           「コーヒーは？」  
       b. „Én vagyok a kávé?”  
           私 BE.1SG the コーヒー  
           「コーヒーは私です」

しかし、当調査におけるコンサルタントに確認したところ、「言えないことはないが、とても奇妙な感じがする」ということで、彼女はこうした表現は使わないとのことであった。

<i>Ki-vel</i>	<i>is?</i>	<i>Jaj,</i>	<i>Tanaka-val,</i>	<i>az-t</i>	<i>hisz-em.</i> ”
誰-INST	も	ああ	田中-INST	that-ACC	思う-DEF:1SG

直訳すると、「今日の午後、私は誰かと会っていたはずだったのに（実際には会わなかった）。  
いったい誰だったのか？ ああ（しまった）、田中くんとか、私が思うに」である。「会うはずだ  
ったなあ」という思い出しは仮定法過去で表現されている<sup>10</sup>。

### 参考文献

- 深谷志寿・深谷ベルタ (1982) 『昭和 57 年度言語研修 ハンガリー語テキスト 2 ハンガリー語 II』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 深谷志寿 (1986) 「ハンガリー語のすすめ③」 『月刊 言語』 vol. 15, No. 7, 大修館書店.
- Fukaya, Shitoshi. (1988) A functional analysis of topic-comment structure of Hungarian-contrasted with Japanese, In Hidas, Judit (ed) *Contrastive Studies Hungarian-Japanese*, Akadémiai kiadó, Budapest.
- Kenesei, István, Robert M. Vago, and Anna Fenyevesi. (1998) *Hungarian: Descriptive Grammars*, Routledge.
- É. Kiss, Katalin. (1981a) Structural relations in Hungarian, a “Free” word order language, *Linguistic Inquiry* 12, 185-239.
- É. Kiss, Katalin. (1981b) Topic and focus: the operations of the Hungarian sentence, *Folia Linguistica* 15, 305-330.
- É. Kiss, Katalin. (2002) *The Syntax of Hungarian*, Cambridge University Press.
- 大島 一 (2015) 「(連用修飾的) 複文：ハンガリー語」 『語学研究所論集』 第 20 号, 東京外国語大学語学研究所.

<sup>10</sup> ハンガリー語の仮定法過去は、直説法の過去形の直後に *volna* を置く。 *találkoztam* 「私は会った」 + *volna* (コピュラ動詞 *van* 「ある」の仮定法 3 人称単数形) となる。詳しくは、大島 (2015:138) を参照。

トルクメン語<sup>1</sup>の情報構造と名詞述語文<sup>2</sup>

奥 真裕

- (1) 「えっ、ムラットが来たの?」「いや、ムラットじゃなくてラフマンが来たんだ。」(昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

Wi, Myrat gel-ipdir-mi?!

えっ ムラット 来る-SUB.PAST-Q

Ýok, Myrat däl de, Rahman gel-ipdir.

いいえ ムラット NEG.COP CONJ ラフマン 来る-SUB.PAST

肯定文においてはトルクメン語では一般に焦点を表すマーカがない。

疑問文において、トルクメン語と近い関係にあるトルコ語で Göksel and Kerslake (2005) などにも指摘があるように焦点によって疑問の小辞の位置が変わることはよく知られているが、トルクメン語においては -m<sup>3</sup> の位置は述語の後から動くことはできない。しかし、音調の変化によって焦点を表す。

- (2) 「誰が来た (の) ?」「ムラットが来たよ。」

Kim gel-di?

誰 来る-PAST

Myrat gel-di.

ムラット 来る-PAST

疑問詞を含む疑問文では疑問詞が焦点であり、それに対する応答の文では疑問詞に対する答えが焦点である。

<sup>1</sup> トルクメン語はトルクメニスタン、イラン、アフガニスタンなどで話されている言語である。チュルク諸語の南西語群（オグズ語群とも呼ばれる）に分類され、トルコ語やアゼルバイジャン語と近い関係にあるとされる。部族ごとの方言が色濃く残っていること、チュルク語祖語の母音の長短の区別を保っていることが特徴として挙げられる。言語類型論的にはいわゆるアルタイ型であり、SOV の語順をとる言語である。本稿における表記は正書法を採用している。

<sup>2</sup> 本稿の作成にあたり、東京外国語大学研究生のトルクメン人 Jennet Rozykulyýewa さん（Lebap 州出身、24 歳、女性）のご協力を得た。また、指導教官である菅原睦先生からコメントをいただいた。この場を借りて感謝を述べたい。なお、誤りはすべて執筆者の責任である。調査にあたっては、筆者の作例を修正してもらった。また、実際の使用の場面をそれぞれ想定しながら自然な使用が可能な文を採用した。

<sup>3</sup> 以下、大文字は子音の同化や母音調和による交替をしめす。(A=a/ä; E=e/a; I=i/y/ü/u)

(3) 「ムラットの方が大きいんじゃないの?」「いや、ムラットじゃなくて、ラフマンの方が大きいんだよ。」(ムラットとラフマンの背について話している状況で)

Myrad-yň boý-y uzyn däl-mi?  
ムラット-GEN 身長-3.POSS 高い NEG.COP-Q  
Ýok, Myrad-a garanyňda Rahman-yň-ky uzyn-rak.  
いいえ ムラット-DAT 比べると ラフマン-GEN-N.DER 高い-COMP

(4) [電話で]「どうした(の)?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

Näme bol-dy?  
何 ある-PAST  
「何があったの?」  
Öý-e häzir adam gel-di.  
家-DAT 今 人 来る-PAST  
「家に今人が来たんだ。」

(5) 「あの子供がムラットを叩いたんだって?!」「いや、ムラットじゃなくて、ラフマンを叩いたんだよ。」

Ol çaga Myrad-y ur-updyr-my?!  
あの 子供 ムラット-ACC 叩く-SUB.PAST-Q  
Ýok, Myrad-y däl de Rahman-y ur-updyr.  
いいえ ムラット-ACC NEG-COP CONJ ラフマン-ACC 叩く-SUB.PAST

(6) 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う(の)?」「(私は)青い袋を買うよ。」

(6a) Bärde<sup>4</sup> gyzyl we gök torba-lar bar. Haýsy-sy-ny  
ここに 赤い と 青い 袋-PL ある どちら-3.POSS-ACC  
al-jak?  
買う-DEF.FUT  
Gög-i al-jak.  
青-ACC 買う-DEF.FUT

2人以上の人が買う場合は2人目はMen-äという対比の表現をつかうことができる。

---

<sup>4</sup> bärde「ここで」の-deは位格接尾辞と考えられるがbärという語彙はないため、ここでは分析的に解釈しないことにする。

(6b) Haýsy-sy-ny al-jak? Gög-i al-jak.  
 どちら-3.POSS-ACC 買う-DEF.FUT 青い-ACC 買う-DEF.FUT  
 Men-ä gyzył.  
 わたし-といえ 赤い

(7) 「ムラットはどうした?」「ムラットは朝からどっかへでかけたよ。」(朝少し遅く起きて来たムラットの父親が、姿の見えないムラットについて母親に尋ねている場面で)

Myrat hany?  
 ムラット どうした  
 Myrat ir-den bir ýer-e git-di.  
 ムラット 朝-ABL ある 場所-DAT 行く-PAST

(8) 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」  
 Ol kim-i ur-dy?  
 彼 誰-ACC 叩く-PAST  
 Öz jigi-si-ni ur-dy.  
 自分 弟-3.POSS-ACC 叩く-PAST

(9) [電話で]「どうした(の)?」「うん、一郎が(自分の)弟を叩いたんだ。」  
 Näme bol-dy?  
 何 ある-PAST  
 Neme, Myrat jigi-si-ni ur-dy.  
 ええと ムラット 弟-3.POSS-ACC 叩く-PAST

(10) 「あのケーキ、どうした?」「ああ、(あれは)ムラットが食べちゃったよ。」  
 Düyň-ki tort nire-de?  
 昨日-の ケーキ どこ-LOC  
 On-y Myrat iý-ipdir.  
 それ-ACC ムラット 食べる-SUB.PAST

前の文では主格であったケーキが次の文では代名詞となり、対格を伴っている。主格ではうけられず、onyを省略することはできない。

(11) 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」

\* (11a) Düyñ meniñ<sup>5</sup> dükan-dan al-yp gel-en-im bu kitap-dyr.  
昨日 私の 店-ABL 買う-CONV 来る-PAST.PART-1.POSS この 本-COP

(11b) Bu düyñ meniñ dükan-dan al-yp gel-en kitab-ym.  
これ 昨日 私の 店-ABL 買う-CONV 来る-PAST.PART 本-1.POSS

「これは昨日私がお店で買ってきた本だ。」

(11a)は非文となり、(11)の例において分裂文を作ることができない。(11b)のように関係節を用いて表される。関係節の主語は属格で表される。

(12) 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

Ol mugallym. Üç ýyl-dan bäri bu mekdep-de işle-ýär  
彼は 先生 3 年-ABL 以来 この 学校-LOC 働く-PRES

(13) 「彼のお父さんは、あの人だ。」

Myrad-yn kaka-sy ol adam.  
ムラット-GEN 父-3.POSS あの 人

(14) 「あの人が彼のお父さんだ。」

Ol adam onuñ kaka-sy.  
あの 人 彼の 父-3.POSS

(15) 「あさってってというのはね、あしたの次の日のことだよ。」

Birigün bol-an-da etir-den soñ-ky gün diý-mek-dir.  
あさって ある-PAST.PART-LOC 明日-ABL 次の 日 言う-VN-COP  
「あさってというと、明日から次の日と言う意味だ。」

(16) [何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて] 「私はコーヒーだ。」

(16a) Men-ä kofe al-jak.  
私-といえば コーヒー 買う-DEF.FUT

---

<sup>5</sup> meniñ は men-iñ (私-GEN) と分析できそうであるが、3人称代名詞の属格 onuñ は主格が ol であり、語幹部分の形が異なるため、代名詞の属格形全体を考慮して分析的な記述をしていない。

(16b) Maña kofe.

私に コーヒー

\*(16c) Men kofe.

私 コーヒー

(16a)のように動詞を伴うか、(16b)代名詞の与格形(分析不可のためグロスは「わたしに」としている)を用いなければ表すことができない。ただし、(6b)では *Men-ä gyzył*。「私は赤」と言えているので条件によってはウナギ文を作ることができるようであるが、詳しい検討が必要である。

(17) [注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか?」との問いに]「コーヒーは私だ。」

(17a) Kofe maña.

コーヒー 私に

(17b) Kofe meniň-ki.

コーヒー 私の-N.DER

(17a)のように代名詞の与格形を伴うか、(17b)のように「コーヒーは私のものだ」と言う必要がある。

(18) 「その新しくて厚い本は(値段が)高い。」

Ol täze we galyn kitap gymmat-dyr.

その 新しい そして 厚い 本 高い-COP

トルクメン語では形容詞を名詞の前に置くことで、名詞を修飾する。複数の形容詞が名詞を修飾してもその形態は変わらない。

(19) [砂糖の入れ物を開けて]「あっ、砂糖が無くなっているよ!」

Wi, şeker gutar-aý-ydyr.

INT 砂糖 終わる-aý<sup>6</sup>-SUB.PAST

<sup>6</sup> Clark (1998: 297-300)で *Suffix of Permission* と呼ばれているものだが、(19)の-aý ここでの記述に当てはまるものはない。調査協力者によるとここでは話者の落ち込んだ気持ちを表しているという。

動詞述語の場合、意外性を表すのに推定過去-IpdIr が用いられる。Wi/wi/は調査協力者によると、驚きを表す感嘆詞である。(20)の wi/wi/とは異なる。

(20) 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あつ、そうだ！ ムラットだったな。」

Öýlän biri bilen duşuş-maly-dy-m. Kim-di aý şo!  
午後 だれか と 会う-OBL-PAST.COP-1.SG だれ-PAST.COP INT それ  
Wi, ýad-ym-a düş-di. Hä, Myrat-dy.  
INT 記憶-1.POSS-DAT 落ちる-PAST INT ムラット-PAST.COP

名詞述語の場合は過去のコピュラ-di がもちいられている。

aý は Söyegow et al.(1999: 573)によると疑惑や信用のなさを表す感嘆詞である。hä は Söyegow et al.(1999: 571)によると思考が特定の物事の結果にいたったことを表す感嘆詞である。wi は調査協力者によると、気づきや驚きを表す感嘆詞である。

#### 略号

ABL 奪格 / ACC 対格 / COMP 比較 / CONJ 接続詞 / CONV 副動詞 / COP コピュラ /  
DAT 与格 / DEF.FUT 定未来 / GEN 属格 / INT 感嘆詞 / LOC 位格 / N.DER 名詞化接  
辞 / NEG 否定 / PART 形動詞 / PAST 過去 / PL 複数 / POSS 所有接尾辞 / PRES 現在  
/ Q 疑問 / SG 単数 / SUB.PAST 推定過去 / VN 動名詞/1 一人称 /3 三人称

#### 参考文献

- Clark, Larry. 1998. *Turkmen Reference Grammar*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.  
Göksel, Aslı and Kerslake, Celia. 2005 *Turkish. A Comprehensive Grammar*, London: Routledge  
Söyegow, M., Borjakow, A., Sarhanow, M., Hojaýew, B., Ämazarow, S.(eds.). 1999 *Türkmen Diliniň Grammatikasy*, Aşgabat: Ruh

## アラビア語エジプト会話体の情報構造と名詞述語文

長渡 陽一

## 1. はじめに

エジプトのカイロ市を中心としたアラビア語の会話体による文例を提示する。会話体は書かれることがあまりなく正書法もないが、文章体との対比がしやすいようにアラビア文字でも表記した。文例作成にあたって、カイロ市出身の20代の女性、ゼイナブ・アル・アズィーズィ氏からの協力を得た。

## 1.1. エジプト会話体の品詞

**名詞** 名詞は格変化しない。格関係は前置詞で示すが、主格(動詞に前置)、対格(動詞に後置)、属格(後置)は語順で示す。また、男性名詞と女性名詞に分かれ、代名詞や形容詞、それを主語とする動詞の活用として照合される。

**代名詞** 人称代名詞は独立形と接尾形がある。対格、属格、前置詞に支配されるなど、別の語に後置されるとき接尾形になる：(11) *fiare:t-o*「それを買った(対格)」, (8) *ʔaxu:-h*「彼の兄弟(属格)」, (4) *ga:-l-i*「私に来た(*l*:前置詞)」。

[表 1] 人称代名詞 ( )は母音おわりの単語につけるととき。

	独立形		接尾形	
	男性	女性	男性	女性
1 人称	<i>ana</i>		<i>-i (-ja)</i>	
2 人称	<i>enta</i>	<i>enti</i>	<i>-ak (-k)</i>	<i>-ek (-ki)</i>
3 人称	<i>howwa</i>	<i>hejja</i>	<i>-o (-h)</i>	<i>-ha</i>

指示代名詞は遠近の区別がなく、男性名詞には *da*, 女性名詞には *di* を使う。「この、あの」を表すには、定冠詞をつけた名詞句に後置する。(11) *\*k-kita:b da* 「この本」, (12) *ʔ-faxs ʔlli hna:k da* 「あそこにいるその人」。3 人称代名詞(*howwa*, *hejja*)は前件照合に使い、初出では *da*, *di* を使う。

**動詞の時制** 過去形, 現在形, 状態形(完了)の3つがある。欧米のセム語学では過去形と現在形をそれぞれ完了形, 未完了形と呼ぶのが一般的であるが、現代アラビア語では時制であり、アスペクトではない。文例のグロスには、「来た」「買う」のように時制を訳語で示した。状態形は今回の文例には登場しない。現在形には、接頭辞 *ha-* (未来)と *bi-* (進行・習慣)がつく。過去形と現在形は、主語の性・数と人称にしたがって活用する。

[表 2] 動詞「叩く」の活用形(単数形)

	過去形		現在形	
	男性	女性	男性	女性
1 人称	<i>ḡarab-t</i>		<i>a-ḡrab</i>	
2 人称	<i>ḡarab-t</i>	<i>ḡarab-ti</i>	<i>ti-ḡrab</i>	<i>ti-ḡrab-i</i>
3 人称	<i>ḡarab</i>	<i>ḡarab-et</i>	<i>ji-ḡrab</i>	<i>ti-ḡrab</i>

またコンピュータ動詞 *ka:n* を使った複合時制がある：(4) *ka:n ga:-l-i*「私のところに来ていた」(過去+過去)，(20) *kunt haḡa:bi:l*「会う予定だった」(過去+未来，*kunt* は *ka:n* の 1 人称単数)。

**定冠詞** 定冠詞があり，不定冠詞はない。名詞や形容詞につける定冠詞は *l-*であり，次にきた歯茎音，軟口蓋音に同化する：(6) *f-faṅṭa*「袋」，(10) *k-ke:ka*「ケーキ」。「定」状態の名詞であっても，別の「定」状態の名詞によって修飾されているときは定冠詞がつかない：(9) *ḡaḡu:-ha*「彼女の弟」，(14) *wa:lid ʔ-walad*「その男の子の父親」。名詞と形容詞以外につける定冠詞は *lli* である。head 名詞なしで「～なもの，～する物」としても使われる：(1) *lli gat*「来た者」，(11) *ʔlli fiare:t-o*「買った物」。

名詞が定であるときは，その名詞を修飾する成分にも，それが形容詞(*zarḡa*「青い」)であれ(下記文 b 参照)，副詞(*hna:k*「そこ(にいる)」)であれ(文 c)，動詞であれ(文 e)，定冠詞をつけなければならない。不定であれば定冠詞をつけず単に名詞に後置されるだけであり(文 a, d)，関係詞のような標示はない。定・不定が照合されるのみである。ただし，その名詞が，関係節内で主語以外であれば関係節内で人称代名詞(-*o* (男性)，-*ha* (女性)など)として現われ，照合される(文 e)。

- |    |                           |   |                 |
|----|---------------------------|---|-----------------|
| a. | <i>f-ṅṅa</i><br>袋         | <i>zarḡa</i><br>青い                      | 「青い袋」(不定)(6)    |
| b. | <i>ʔ-f-ṅṅa</i><br>(定) 袋   | <i>z-zarḡa</i><br>(定) 青い                | 「青い袋」(定)(6)     |
| c. | <i>ʔ-f-ḡaḡs</i><br>(定) 人  | <i>ʔlli hna:k</i><br>(定) そこ             | 「その人」(定)(12)    |
| d. | <i>ḡa:ga</i><br>事         | <i>ḡaṣalet</i><br>起きた(は単女)              | 「起きた事」(不定)(4)   |
| e. | <i>ʔk-kita:b</i><br>(定) 本 | <i>ʔlli fiare:t-o</i><br>(定) 買った(私) それを | 「私が買った本」(定)(作例) |

## 1.2. エジプト会話体の語順

焦点化には語順の操作が関わってくるので，前提としての基本語順を確認する。

動詞述語文は SVO である。主語は任意であるが，動詞の活用形で主語の人称・性・数が特定できる。VSO もあるが，これは焦点化と関わっている可能性がある。ただし今回のデータにはない。

名詞述語文の語順は，SC (S: 主語，C: 名詞述語)であり，現在時制ではコンピュータは使わ

れないが、過去、未来ではコンピュータ動詞(*ka:n*)の活用形が使われ、統語上は SVO と同じくなる。SC は現在時制において、連続を断つために代名詞 3 人称独立形(*howwa* (男性), *hejja* (女性))が使われることがある(文例 13 は使われていない例, 14 は使われた例)。

また SVO や SC の文頭に、さらに主題を置くことが可能である(文例 18 参照)。このとき標示は何もない。

疑問詞は、エジプト会話体では、元の位置、あるいは文の後の方に置かれる。(6) *ha-tiftiri ʔanhi?* 「どれを買うか?」の *ʔanhi* 「どれ」、(9) *fi: e:?* 「何があるか? どうしたのか?」の *e:* 「何」は倒置ではなく基本的な位置である。SC 文の疑問文では、疑問詞が C であるとき、その疑問詞が文頭に来る: (1) *e: da?* 「これは何?」、(7) *fe:n ri:m?* 「リームはどこ?」。

## 2. 焦点

(1) えっ、リーム(女性)が来たの?

*e: da?! ri:m gat?* (إيه دا! ريم جت؟)  
何 これ(男) リーム(女) 来た(彼女)

いや、リームじゃなくてハナーン(女性)が来たんだ。 【対比焦点(主語)】

*laʔ, mif ri:m. di hana:n hejja lli gat.*  
いいえ 否 リーム(女) (小詞) ハナーン 指示詞 3 単女 定 来た(彼女)

(لا، مش ريم. دي حنان هي اللي جت.)

*hana:n gat* 「ハナーンが来た」の「ハナーン」が焦点化されて、構文が変えられている。文頭の *di* は、代名詞「これ、あれ」(女性)と同形であるが、SC 構文の S と C を断ち切るための代名詞(*hejja*)が *hana:n* の後に入っているため、*di* 自身は主語ではなく、主語を焦点化する働きをしている小詞である。また、名詞に後置されていないので、「この」でもない。

(1)は、「来たのはハナーンだ」のようないわゆる分裂文ではなく、SV 構文の V (述語動詞句)に定冠詞 *lli* をつけることで名詞化した、「ハナーン(こそ)が、来た者だ」という名詞述語文と思われる。同じ名詞述語文が、次の(2)、(3)でも使われている。

質問の *ri:m gat?* 「リームが来たの?」には、「~の?」に当たる焦点化はされていない。

(2) 誰が来たの? — ホサームが来たよ。 【WH 焦点(主語)・WH 応答焦点(主語)】

*mi:n elli geh? — da hosa:m elli geh.* (مين اللي جه؟ — دا حسام اللي جه.)  
誰 定 来た(彼) (小詞) ホサーム 定 来た(彼)

質問は、「来たのは誰か?」という名詞述語文であり、述語である疑問詞 *mi:n* が文頭にくる。主語である「来たのは」は定であるため定冠詞 *lli* がつけられている。また「だれが来たか?」という SV の疑問文であっても、*mi:n* 「だれ」は主語であるため文頭にきて *mi:n*

geh?となる。

(2)の応答の構文については(1), (3)の応答と同じく, 「ホサームが来た」を, 述語動詞を名詞句にして, 「ホサームこそが, 来た者だ」としている。ここではコピュラのように使われる代名詞(*howwa*)はない。

(3) リームの方が背が高いんじゃないの? 【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】

*mif ri:m hejja l-ḡaṭwal?* (مش ريم هي الأطول؟)  
否 リーム 指示詞3単女 定- 最も長い

いや, リームじゃなくて, アミーラの方が高いんだよ。

*la?, mif ri:m. di ami:ra hejja l-ḡaṭwal.* (لا، مش ريم. دي اميرة هي الأطول.)  
いいえ 否 リーム (小詞) アミーラ 彼女 定- より長い(比較形)

質問は名詞述語文 *hejja mif ri:m* 「それはリームではない」を倒置したものであり, 述語 *mif ri:m* 「リームではない」が文頭に置かれている。応答において主語 *ami:ra* 「アミーラ」に焦点が置かれており, 述語「高い」に焦点は置かれていない。構文は(1), (2)と共通であるが, もともと述語が定である名詞述語文であるので構文の転換はない。*ḡaṭwal* は形容詞の比較・最大形であるが, 定冠詞がつくときは最大の意味であり, 名詞化している。ここでは代名詞 (*hejja*)がコピュラとして使われている。

(4) どうしたの? — 今, お客さんが来たんだ。 【文焦点(自動詞文)】

*fī: ḥa:ga ḥaṣalet?* — *ka:n ga:-l-i bass ḡuju:f.*  
ある 事(女) 起きた(3単女) (コピュラ過彼) 来た(彼)-に-私 過ぎない 客(複数)  
(فيه حاجه حصلت؟ --- كان جالي بس ضيوف.)

応答において, 主語 *ḡuju:f* 「客」が後置されているが, *ḡuju:f* の焦点化のためではなく, 「不定」の名詞が文頭に立ちにくいいためである。一方, *bass* 「過ぎない」をつけることで *ḡuju:f* 「客」が「客に過ぎない」のように焦点化されている。また, *ka:n ga:-l-i* 「私に来たのは」が主語と考えられないのは, *lli* がついて定になっていないからである。

また, 質問の *ḥa:ga ḥaṣalet* 「起きたこと」は主語であるが, 不定であるため後置されている。*fī:* 「ある」は不定の主語しかとれない。

(5) あの子供がムハンマドを叩いたんだって!?! 【対比焦点(目的語)】

*ḡa:l ʔ-l- walad da ḡarab meḥammad?* (قال الولد دا ضرب محمد؟)  
ですって? 定- 男の子 その(男) 叩いた(彼) ムハンマド

— いや、ムハンマドじゃなくて、ホセインを叩いたんだよ。

*la?, ma-ḡarab-f ʿmḥammad, da ḡarab ḥose:n.*

いいえ 叩かなかった(彼) ムハンマド それ(男) 叩いた(彼) ホセイン

(لا ماضريش محمد دا ضرب حسين.)

応答にある *da* は指示詞「それ」であり、(1), (2), (3)の小詞とは異なる。この *da* 「それ」が主題、VO の *ḡarab ḥose:n* 「ホセインを叩いた」がコメントであり、「それは、ホセインを叩いたのだ」という文になっている。

<i>da</i>	<i>ḡarab</i>	<i>ḥose:n.</i>
[主題]	[コメント]	
それは	叩いた	ホセイン

(6) 赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買うの?

*fi: fanṭa ḥamra w fanṭa zarḡa, ha-tiftiri ḡanhi?*

ある 袋 赤い(女) と 袋 青い(女) 未-買う(君) どれ(女)

(فيه شنطة حمراء و شنطة زرقاء, هتشتري أنني؟)

青い袋を買うよ。【対比焦点(目的語、特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)】

*ha-ftiri f-fanṭa z-zarḡa.* (هاشتري الشنطة الزرقاء.)

未-買う(私) 定-袋 定-青い(女)

この応答文は基本語順のままであり、焦点化の操作はなされていない。目的語が動詞に後置されて文末に来ると、焦点化のために文末に置かれているのと同じ語順になる。質問の *ḡanhi* 「どれ」は基本的な位置にある。

(7) リームはどうした?

*fe:n ri:m?* (فين ريم?)

どこ リーム

リームは朝からどっかへでかけたよ。【述語焦点】

*ri:m min ʿṣ-ṣubḥ ḡaraget fi hitta.* (ريم من الصبح معرفش خرجت راحت فين.)

リーム から 定-朝 出た(彼女) どこか

*min ʿṣ-ṣubḥ* 「朝から」が動詞より前に置かれているのは、*ḡaraget fi hitta* 「どこかへに出かけた」を文末に置いて焦点化するためであろう。

(8) あの子供は誰を叩いたの？ — 自分の弟を叩いたんだ。

*ʔ-walad da ɖarab mi:n ? — ɖarab ʔaxu: -h ʕs-ʂuʂajjar .*  
 定- 男の子 この(男) 叩いた(彼) だれ 叩いた(3 単男) 兄弟 -彼 定- 小さい  
 (الولد دا ضرب مين ؟) (ضرب أخوه الصغير)

【WH 焦点(目的語)・WH 応答焦点(目的語)】

(5), (6), 次の(9)と同じように、目的語を焦点化していると考えられるが、基本語順の VO のままである。

(9) どうしたの？ — うん、リームが自分の弟を叩いたんだ。(電話で)

*fi: e: ? — ri:m ɖarabet ʔaxu: -ha ʕ- ʂuʂajjar .*  
 ある 何 リーム 叩いた(3 単女) 兄弟 -彼女 定- 小さい  
 (فيه ايه ؟ -- ريم ضربت اخوها الصغير)

【文焦点(他動詞文)】

(5), (6), (8)と同じく基本語順の SVO のままである。

(10) あのケーキ、どうした？ — ああ、リームが食べちゃったよ。

*hejja fe:n<sup>e</sup> k-ke:ka ? — ri:m ʔakalet-ha .* (هي فين الكيكة ؟ -- ريم أكلتها.)  
 代名詞(3 単女) ある 定- ケーキ リーム 食べた(彼)-それ(女)

【目的語主題化、主題(目的語)の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

応答における目的語は省略できず、代名詞-*ha* で現れている。質問の *hejja*(代名詞 3 単女) は、主題や主語ではなく、主語(ここでは *k-ke:ka*)を予め導入するものである。「introductory signal to a subject referent」(Badawi 1986: 918)を参照。

(11) 私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。 【分裂文】

*ʔli ʃtare:t-o mba:reħ min ʔ-maħall ʕ-kita:b da .*  
 定 買った(私)-それ(男) 昨日 から 定- 店 定- 本(男) この(男)  
 (اللي اشتريته امبارح من المحل الكتاب دا)

これは名詞述語文になっており、*ʕ-kita:b da*「この本」が述語で、その前の部分が主語である。文頭の *ʔli* は「私が昨日お店から買って来た」につけられた定冠詞である。

## 3. コピュラ文

(12) あの人は先生だ.

*f-faxs<sup>e</sup> lli hna:k da mudarris.* (الشخص اللي هناك دا مدرس.)  
 定-人 定 あそこ その 教師(男)

この学校でもう3年働いている.

*baʔa:-l-o talat sini:n bejiftaval fi l-madrasa di.*  
 なった(3単男)-に-彼 3 年(複数) 働いている(進行3単男) で 定-学校(女) その(女)  
 (بقاله 3 سنين بيشتغل في المدرسة دي.)

【措定文 主題(名詞述語文の主語)の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

*f-faxs<sup>e</sup> lli hna:k da* 「あそこにいるその人」が主語, *mudarris* 「教師」が述語の, 名詞述語文である. 応答は, *baʔa:* 「なった」(不変化)の主語は *talat sini:n* 「3年」で「3年が彼に(とって)なった」である. *bejiftaval* 「働いている」以降は副詞句「働いていて」とみることができる.

(13) 彼女のお父さんは, あの人だ. 【倒置指定文】

*wa:lid ʔ-l-bint<sup>e</sup> di f-faxs ʔlli hna:k da.* (والد البنت دي الشخص اللي هناك دا.)  
 父親 定-女の子 その(女) 定-人 定 そこ その(男)

主語が *wa:lid ʔ-l-bint<sup>e</sup> di* 「その女の子の父親」, 述語が *f-faxs ʔlli hna:k da* 「そこにいるその人」である. 述語も定である.

(14) あの人が彼のお父さんだ. 【指定文】

*f-faxs<sup>e</sup> da howwa wa:lid ʔ-walad da* (الشخص دا هو والد الولد دا.)  
 定-人 その(男) 彼 父親 定-男の子 その(男)

主語 *f-faxs<sup>e</sup> da* 「あの人」と述語 *wa:lid ʔ-walad da* 「その男の子の父親」の間を, *howwa* (代名詞3単男)が断ち切っている.

(15) あさってっていうのはね, あしたの次の日のことだよ. 【定義文】

“ASATTE” *jaʕni baʕd<sup>e</sup> bokra.* (“اساتيه” يعني بعد بكره.)  
 意味する(不変化) 後 明日 (=明後日)

定義文では, 単純な名詞述語文も使われるが, *jaʕni* がよく使われる. 元来は「意味する」という動詞だが, 主語の性・数によっても不変化である.

(16) 私はコーヒーだ。(何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて) 【ウナギ文】

*ana ha-aḡod ʔahwa.* (أنا هاخذ قهوة.)  
私 未-取る(私) コーヒー

ウナギ文(\**ana ʔahwa*)は非文とのことである。

(17) コーヒーは私だ。(「どなたがコーヒーですか？」との問いに) 【逆行ウナギ文】

a. *ana lli ʔalabt ʔahwa.* (أنا اللي طلبت قهوة.)  
私 定 頼んだ(1 単) コーヒー

b. *ʔ-ʔahwa ʕand-i hna.* (القهوه عندي هنا.)  
定-コーヒー 私の許に ここ

ウナギ文(\**ʔ-ʔahwa ana*)は非文とのことである。文 a は、「私が、コーヒーを頼んだ者だ」、あるいは「コーヒーを頼んだ者は、私だ」のどちらかは特定しがたい。文 b は、「そのコーヒーは、ここ、私の許のものである」という構造になっている。

(18) その新しくて厚い本は、値段が高い。 【形容詞述語文修飾・並列・述語】

*ʕ-k-kita:b ʕ-g-gidi:d ʕ-d-ḡaḡm ʕ da siʕr-o ʕa:li.*  
定-本(男) 定-新しい 定-でかい その(男) 値段-その(男) 高い  
(الكتاب الجديد الضخم دا سعره غالي.)

主題+SC の文になっている。主題が *ʕ-k-kita:b ʕ-g-gidi:d ʕ-d-ḡaḡm ʕ da* 「その新しくて厚い本」で、それに対するコメントが *siʕr-o ʕa:li* 「その値段が高い」である。コメント部分は *siʕr-o* 「その値段」が主語、*ʕa:li* 「高い」が形容詞述語となっている。*-o* (人称代名詞 3 単男)は主題の名詞句を指している。名詞述語文と形容詞述語文はコンピュータに違いはなく、現在時制ではコンピュータを使わず、過去や未来ではコンピュータ動詞 *ka:n* の活用形を使う。

#### 4. 意外性

(19) あっ、砂糖が無くなっているよ！(砂糖の入れ物を開けて) 【意外性(mirativity)】

*e: da, s-sukkar ʕiliʕ!* (ايه دا السكر خلص.)  
何 これ(男) 定-砂糖 終わった

*s-sukkar ʕiliʕ* 「砂糖が終わった」の部分には、意外性を表す標示はない。*e: da* 「これは何？」で談話的に表している。

(20) あっ、そうだ！ 田中君だったな。(午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。)

*aiwa, ṣaḥḥ, kunt haʔa:bił tanaka.* (ايوه صح كنت هقابل تانكا.)  
 はい そう コピュラ(私) 未-会う(私) 田中

【思い出し】

「会う」ことは未来の予定であるが、忘れる以前の状態への回帰であり、*haʔa:bił* (未来接辞 *ha-* + *aʔa:bił*「私が会う」)を *kunt* (コピュラ動詞 *ka:n* の過去形)で過去時制にしている。

## 5. おわりに

主語を対比させ、焦点化するためには、名詞述語文にしている。ただ、(1)、(2)のように主語は主語のまま、述語動詞句だけを定冠詞をつけて定名詞句にしている。また、もともと名詞述語文の(3)や、目的語の焦点化の(5)では構文転換はなく、文頭で小詞 *da, di* を使って焦点化をしているようである。とくに目的語の対比焦点では、(6)のように基本文と何も変わらないこともある。

コピュラ文では、措定文(12)、倒置指定文(13)、指定文(14)には統語上、形態上の区別はない。定義文(15)では動詞が使われるが、不変化であり、特殊なコピュラのようになっている。ウナギ文、逆ウナギ文ともに非文であり、別の言い回しをする。

また、思い出しを表すのには過去時制を使う。

## 参考文献

Badawi, El-Said and Martin Hinds. 1986. *A Dictionary of Egyptian Arabic*, Librarie du Liban: Beirut.



ペルシア語の名詞述語文と情報構造<sup>1</sup>

吉枝 聡子

[1] 「えっ、アリーが来たの?」「いや、アリーじゃなくてレザーが来たんだ。」

e?	'ali	umad?			
	アリー	来る IND.PAST.3SG			
na,	rezā	umad	na	'ali.	
	レザー	来る IND.PAST.3SG(COL)	ADV.NEG	アリー	

[2] 「誰が来た (の) ?」「アリーが来たよ。」

ki	umad?		
誰	来る IND.PAST.3SG(COL)		
'ali	umad.		
アリー	来る IND.PAST.3SG(COL)		

[3] 「アリー (の方) が大きいんじゃないの?」「いや、アリーじゃなくて、レザーの方が大きいんだよ。」

'ali	bozorgtar	nist?		
アリー	大きい-COMP	COP.NEGPRES.3SG		
na,	rezā	bozorgtar-e	na	'ali.
	レザー	大きい-COMP-COP.PRES.3SG	ADV.NEG	アリー
または				
na,	rezā	az	'ali	bozorgtar-e.
	レザー	PREP	アリー	大きい-COMP-COP.PRES.3SG(COL)

\* az は比較構文における比較の対象を表す。

[4] [電話で] 「どうした (の) ?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

či	šode?	
何(COL)	～になる PAST.PTCPL	

<sup>1</sup>本稿の作成にあたり、Kāve Maqsudi (本学大学院博士後期課程在学、男性、テヘラン出身) に協力いただいた。記して感謝したい。なお、口語的ニュアンスを含む例文については、対応するペルシア語も口語体 (グロス中 COL で示す) とした。

\* 現在完了形 *či šode ast* の補助動詞 *ast* が口語体で省略された形。以下 [5][8][9]等も同様。

*al'ān moštari umad.*  
今 客 来る IND.PAST.3SG(COL)

[5] 「あの子供がアリーを叩いたんだって!」「いや、アリーじゃなくて、レザーを叩いたんだよ。」

*un pesar-e 'ali ro zade?*  
あの(COL) 少年-DEF.SUF アリー POSTP(COL) 殴る PAST.PTCPL

\* ペルシア語には焦点標識に関する明示的な形式はないが、[1]や[5]のように対比して述べられる場合には、焦点があたる事物が若干強めに発音されることもある。

\* *pesar-e* の *-e* は定を表す接尾辞。口語文中に限定して用いられる。後置詞 *ā* (口語発音は *ro*) は定の直接目的語に付加する。

*na, rezā ro zade, na 'ali(ro).*  
いいえ レザー POSTP(COL) 殴る PAST.PTCPL ADV.NEG アリー(POSTP, COL)

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う(の)?」「(私は)青い袋を買うよ。」

*pākat-e qermez va pākat-e ābi dārim/hast.*  
袋-EZ 赤い CONJ 袋-EZ 青い 持つ IND.PRES.1PL/COP.PRES.3SG  
*kodum-eš ro mixari?*  
どちら(COL)-PRON.SUF.3SG POSTP(COL) 買う IND.PRES.2SG

\* 「どっち」には、「そのどちら」を意味する接尾辞形人称代名詞を付加することが必要。この人称代名詞がなければ非文に近い。

*pākat-e ābi ro mixaram.*  
袋-EZ 青い POSTP(COL) 買う IND.PRES.1SG

[7] 「アリーはどうした?」「アリーは朝からどっかへでかけたよ。」

*'ali kojā-st?*  
アリー どこ-COP.PRES.3SG

'ali az sobh rafte birun.  
アリー PREP 朝 行く PAST.PTCPL 外

[8] 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

(un pesar-e) ki ro zade?  
あの(COL) 少年-DEF.SUF 誰 POSTP(COL) 叩く PAST.PTCPL

barādar-e kučak-eš ro zade.  
兄弟-EZ 小さい-PRON.SUF.3SG POSTP(COL) 叩く PAST.PTCPL

[9] [電話で]「どうした(の)?」「うん, アリーが(自分の)弟を叩いたんだ。」

či šode?  
何(COL) ~になる PAST.PTCPL

'ali barādar-e kučak-eš ro zade.  
アリー 兄弟-EZ 小さい-PRON.SUF.3SG POSTP(COL) 叩く PAST.PTCPL

[10] 「あのケーキ、どうした?」「ああ, (あれは) アリーが食べちゃったよ。」

un keyk-e, či šod?  
あの(COL) ケーキ(-DEF.SUF) 何(COL) ~になる IND.PAST.3SG

\*直訳は「あのケーキ, どうなった?」の意.

'ali xord-eš.  
アリー 食べる IND.PAST.3SG-PRON.SUF.3SG

\*「食べる」の活用形に「ケーキ」を表す人称代名詞接尾辞形が接続した形.

[11] 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」

a) čiz-i ke diruz az maqāze xaridam  
物-SUF REL 昨日 PREP 店 買う IND.PAST.1SG

in ketāb-e.  
この 本-COP.PRES.3SG(COL)

または

b) ketāb-i ke diruz az maqāze xaridam.  
本-SUF REL 昨日 PREP 店 買う IND.PAST.1SG

in-e / in ast.

これ-COP.PRES.3SG

\* [11b]は直訳すると「私が昨日店から買ってきた本はこれだ」で、いずれも強調のための、コピュラを用いた分裂文をとっている。

\* 先行詞に付加する接尾辞-iについては[20]を参照のこと。

[12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

u mo'alle-m-e.

彼 先生-COP.PRES.3SG(COL)

se sāl-e ke tu in madrese kār mikone.

3年-COP.PRES.3SG(COL) CONJ PREP この 学校 働く IND.PRES.3SG(COL)

\* 主題が継続される場合（この場合は ke 節内）、ペルシア語では人称代名詞は通常省略される。

[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」

pedar-e u / pedar-eš, ān mard-e ast.

父-EZ 彼 / 父-PRON.SUF.3SG あの 男性-DEF.SUF COP.PRES.3SG /

/ un-e.

あれ(COL)-COP.PRES.3SG(COL)

[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」

u, pedar-eš-e.

彼 父-PRON.SUF.3SG-COP.PRES.3SG(COL)

[15] 「あさってってというのはね、あしたの次の日のことだよ。」

pas fardā, miše ruz-e ba'd-e fardā dige.

明後日 ～になる-IND.PRES.3SG(COL) 日-EZ 後-EZ 明日 ADV(COL)

\* digar（口語発音は dige）はここでは念押しをするニュアンスで用いられている。

[16] [何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて]「私はコーヒーだ。」

man qahve mixām / mixoram.  
私 コーヒー 欲する IND.PRES.1SG(COL) / 飲む IND.PRES.1SG

[17] [注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに]  
「コーヒーは私だ。」

qahve māl-e kiye?  
コーヒー もの-EZ 誰-COP.PRES.3SG(COL)  
qahve māl-e man-e.  
コーヒー もの-EZ 私-COP.PRES.3SG(COL)  
または  
qahve ki bud?  
コーヒー 誰 COP.PAST.3SG  
qahve man-am.  
コーヒー 私-COP.PRES.1SG

\*ペルシア語では日本語のいわゆるウナギ文「僕はコーヒーだ」に相当する qahve man-am は非文となり、「僕はコーヒーを飲む」または「僕はコーヒーが欲しい」等の動詞を用いて表す必要がある。ただし、「コーヒーは僕だ」のような逆行ウナギ文は使用することが可能である。この文ではコピュラは man「私」に一致する。

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」

un ketāb-e tāze va za xim, gerun-e.  
あの 本-EZ 新しい CONJ 厚い 高価な(COL)-COP.PRES.3SG(COL)

\*エザーフェとは、先行語に後続語詞・語句を文法的に関連づける前接小辞-e（母音に接続する場合は-ye）。ペルシア語では、被修飾語は修飾語（句）に先行し、エザーフェで連結するのが通常の語順である。建て前上は、二語以上の修飾語句を、数に無制限に連結することができる。複数の修飾語句を結ぶ際は、間をエザーフェまたは接続詞-o/vaで結ぶ。エザーフェの詳しい用法については吉枝(2011)、上岡(1990)等を参照。

[19] [砂糖の入れ物を開けて]「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

e! šekar tamum šode.  
砂糖 終わった(COL) ~になる PAST.PTCPL

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あつ、そうだ！ 田中君だったな。」

ba'd az zohr, qarār bud yek-i ro bebinam.  
午後 決定 COP.3SG 1 -SUF POSTP(COL) 見る, 会う SUBJ.PRES.1SG  
ki bud?  
誰 COP.PAST.3SG

āhā! yād-am umad, tānākā bud.  
記憶-PRON.SUF.1SG 来る IND.PAST.3SG(COL) COP.PAST.3SG

\*不定を表すとされる「無強勢の-i」と、定の直接目的語を表す後置詞-rāが共起した例。この-iはペルシア語文法書では一般的に「不定の-i」と呼ばれ、不定のマーカーとして説明される。しかしながらこの接尾辞には、この文のように、必ずしも定・不定の観点では分析できない用法も確認されており、その機能について見解の一致を見るに至っていない。ここではペルシア語の強勢をとる他の接尾辞-iと区別するために、音声上の特徴から単に「無強勢の-i」としておく。

#### 参考文献

上岡弘二.1995.「エザーフェ」『言語学大辞典：術語編』（千野栄一他編），三省堂, pp.115-20.  
吉枝聡子 .2011.『ペルシア語文法ハンドブック』白水社.  
Perry R. and Windfuhr GL. 2009. Persian and Tajik, *The Iranian Languages* (Windfuhr GL. ed.). London/New York, Routledge. pp.416-515.

#### ■略語

ADV 副詞  
CONJ 接続詞  
COP コピュラ  
DEF 定  
EZ エザーフェ  
IND 直説法  
NEG 否定  
PAST 過去  
PERF 完了

PL	複数
POSTP	後置詞
PREP	前置詞
PRES	現在
PRON.SUF	接尾辞形人称代名詞
PTCPL	分詞
REL	関係詞
SG	単数
SUBJ	接続法
SUF	接尾辞
COL	口語体



## ウルドゥー語の名詞述語文・情報構造 —アンケートの分析—

萬宮 健策

### 1. ウルドゥー語とは

本稿では、ウルドゥー語の文例を挙げ、その特徴を考察する。なお、本稿でウルドゥー語という場合、特に断らない限り、ヒンディー語も同一言語と考える。その根拠として、ウルドゥー語とヒンディー語は、本稿で扱う会話文のレベルでは、相互理解が可能である点が挙げられる。本稿における固有名詞はウルドゥー語の話者に多いムスリム（イスラーム教徒）の名前を用いているが、文意はヒンディー語を第一言語として用いるものにも、全く問題なく通用するためである。

ウルドゥー語は、パキスタンおよび北インドを中心に母語話者約 6000 万人を有する。ヒンディー語は北インドを中心に母語話者約 4 億人を有する。ともに新期インド・アーリヤ諸語(New Indo-Aryan)に属するインド語派の 1 つである。SOV 形式をとる屈折語であり、南アジア地域における言語の壁を越えた共通語としての役割を果たしている。

### 2. ウルドゥー語の文例と考察

以下、例文の分析を行う<sup>1</sup>。例文には、必要に応じてチェックを行っていただいたインフォーマントとやりとりで気付きの点を付してある。

[1] 「えっ、アフマドが来たの?」「いや、アフマドじゃなくてアーミルが来たんだ。」

hain,	kyā	ahmad	āyā thā?	nahīn,	ahmad
えっ	虚辞	アフマド NOM.	来る PST-PFV.m.sg.	否定辞	アフマド NOM.
to	nahīn,	āmīr	āyā thā		
強調	否定辞	アーミル NOM.	来る PST-PFV.m.sg.		

[2] 「誰が来た (の)?」「アフマドが来たよ。」

kaun	kaun	āyā?	ahmad	āyā
誰 NOM.	誰 NOM.	来る PST.m.sg.	アフマド NOM.	来る PST.m.sg.

話の流れを考えると、「(何らかの集団の中で) 誰が来たのか」という表現をするのが

<sup>1</sup> 本稿で挙げた例文は、スハイル・アッパーズ東京外国語大学客員教授（40代男性。第一言語がウルドゥー語（母語はバンジャールビー語）。日本滞在歴5年目）によるネイティブ・チェックを行っている。記して謝意を表す。

一般的で、その場合疑問代名詞「誰」kaun を繰り返す方が自然である。誰と誰が来たのか、という意味である。

[3] 「アフマドの方が大きいんじゃないの?」「いや、アフマドじゃなくて、アーミルの方が大きいんだよ。」

ahmad	ka	qad	āmir	ke	
アフマド OBL.m.sg.	GEN.m.sg.	身長 NOM.m.sg.	アーミル OBL.m.sg.	GEN.OBL.m.sg. <sup>2</sup>	
qad	se	lambā	to	nahīn?	
身長 OBL.m.sg.	ABL.	高い ADJ.m.sg.	強調	否定辞	
nahīn,	ahmad	se	āmir	ka	qad
否定辞	アフマド OBL.m.sg.	ABL.	アーミル OBL.m.sg.	GEN.m.sg.	身長 NOM.m.sg.
zyāda	lambā	hai			
より ADV.	高い ADJ.m.sg.	COP.Pres.sg.			

[4] [電話で]「どうした(の)?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

(fon	par)	xairiyat	hai?	
電話 OBL.m.sg.	LOC.	無事 NOM.f.sg.	COP.Pres.sg.	
jī,	ab	ēk	gāhak	āyā
はい	今 ADV.	1	客 NOM.m.sg.	来る PST.m.sg.

「どうしたの」の直訳と言える“kyā huā (疑問詞「何」+ある PST.m.sg.)”は、何か目の前にいつもと違う状況が広がっていて「これはどうしたの」という意味で用いられる。例文の「どうしたの」は、直訳すれば、「大丈夫か?」に近い。

[5] 「あの子供がアフマドを叩いたんだって!?!」「いや、アフマドじゃなくて、アーミルを叩いたんだよ。」

sunā hai	ke	us	baccē	ne
聞く Pres-PFV.m.sg.	接続詞	あれ OBL.sg.	子ども OBL.m.sg.	ERG
ahmad	ko	mārā hai.	jī nahīn,	ahmad
アフマド OBL.m.sg.	DAT.	たたく Pres-PFV.m.sg.	否定	アフマド OBL.m.sg.
ko	nahīn,	āmir	ko	mārā hai
DAT.	否定	アーミル OBL.m.sg.	DAT.	たたく Pres-PFV.m.sg.

<sup>2</sup> グロス中、GEN.OBL.は、属格後置詞 ka の後置格形を示す。属格後置詞主格男性複数形と同形であるため、後置格形の場合のみ OBL.を付加した。

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う (の) ?」「(私は) 青い袋を買うよ。」

lāl	aur	nīlē	thailē	meṇ	se
赤 ADJ.OBL.	と	青 ADJ.OBL.sg.	袋 OBL.m.sg.	LOC.	ABL.
tum	kaunsā	lo ge?	nīlē wālā	(lūṅ gā)	
君 NOM.	どちら NOM.m.sg.	買う FUT.m.2.pl.	青 ADJ.OBL.-PTCP	(買う FUT.1.m.sg.)	

話し手, 聞き手ともに誤解がない場合, 主語および動詞の省略が可能となる. この会話では, 2人のみがいると仮定する場合, 聞かれたことへの返事の部分のみで十分に会話が成立する.

[7] 「アフマドはどうした?」「アフマドは朝からどっかへでかけたよ。」

ahmad	kidhar	hai?			
アフマド NOM.m.sg.	どちら ADJ.	COP.Pres.sg.			
ahmad	subah	se	kahīṅ	bāhar	
アフマド NOM.m.sg.	朝 OBL.f.sg.	ABL.	どこか	外 ADV.	
gayā hai					
行く Pres-PFV.m.sg.					

[4]と同様の理由で, 「どうした」という表現は用いられず, 「どこだ」という疑問文になる.

[8] 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

(us	baccē	ne)	kis	ko	
(あの OBL.sg.	子供 OBL.m.sg.	ERG)	誰 OBL.sg.	DAT.	
mārā hai?					
叩く Pres-PFV.m.sg.					
(us	baccē	ne)	apnē	bhāī	
(あの OBL.sg.	子供 OBL.m.sg.	ERG)	自分の OBL.m.sg.	弟 OBL.m.sg.	
ko	mārā hai				
DAT.	叩く Pres-PFV.m.sg.				

[6]と同様の理由で, ( )内の部分は省略が可能となる.

[9] [電話で] 「どうした (の) ?」「うん, アフマドが (自分の) 弟を叩いたんだ。」

(fon	par)	kyā	huā?		
(電話 OBL.m.sg.	LOC.)	何 NOM.	ある PST.m.sg.		
hāṅ,	ahmad	ne	apnē	bhāī	ko
うん	アフマド OBL.m.sg.	ERG	自分の OBL.m.sg.	弟 OBL.m.sg.	DAT.

mārā hai

叩く Pres-PFV.m.sg.

この場合は、電話である程度状況が把握できていると考えられるため、「どうしたの」という表現が用いられる。

[10] 「あのケーキ， どうした？」 「ああ， (あれは) アフマドが食べちゃったよ。」

vō	kēk	kahān	hai?	
あの NOM.sg.	ケーキ NOM.m.sg.	どこ ADV.	ある Pres.sg.	
acchā,	(vō	to)	ahmad	ne
ああ	(あれ NOM.sg.	強調)	アフマド OBL.m.sg.	ERG

khā liyā hai

食べる STEM-PTCP.Pres.PFTV.m.sg.

kyā hō gayā は、そこにケーキがあって、思っていた状況と違う場合（たとえば、腐ってしまっていた場合、つぶされてしまっていた場合など）に「どうした？」と聞けるが、食べてなくなってしまう場合は「どこへいった」という言い方が適切である。

[11] 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」

jō	kal	main	dukān	se	lāyā thā,
関代 NOM.	昨日 ADV.	私 NOM.	店 OBL.f.sg.	ABL.	得る PST-PFV.m.sg.
vō	yē	kitāb	hai		
それ	この	本 NOM.f.sg.	COP.Pres.sg.		

vō yē kitāb hai は、文頭に持ってくるか、上記例文どおり文末に持ってくるかで表現に差が出る。文頭に持ってきた方が、他でもないまさにこの本、という点が強調される。

[12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

vo	ādmī	ustād	hai.		
あの	人 NOM.m.sg.	先生 NOM.m.sg.	COP.Pres.sg.		
(vo)	is	iskūl	meṅ	tīn sāl	se
(彼)	この OBL.sg.	学校 OBL.m.sg.	LOC.	3年 ADV.	ABL.
kām	kar rahā hai				
仕事 NOM.m.sg.	する STEM.-Pres.Prog.m.sg.				

同一人物を指している場合、2回目の人称代名詞は通常省略される。

[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」

[13-1] us ke wālid vō haiṅ  
 彼 OBL.sg. GEN.m.pl. 父 NOM.m.pl. 彼 NOM.pl. COP.Pres.pl.

[13-2] us ke vō wālid haiṅ  
 彼 OBL.sg. GEN.m.pl. 彼 NOM.pl. 父 NOM.m.pl. COP.Pres.pl.

[13-2]の方が、「あの人」により力点を置く表現となる。

[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」

vō us ke wālid haiṅ  
 彼 NOM.pl. 彼 OBL.sg. GEN.m.pl. 父 NOM.pl. COP.Pres.pl.

[13][14]ともに、父親は自分の家族であっても尊敬の対象となるため、指示代名詞、コピュラともに複数形を用いることで敬意を表現している。

[15] 「あさってってというのはね、あしたの次の日のことだよ。」

parsōṅ ka matlab hai, ānē wālē  
 あさって ADV. GEN.m.sg. 意味 NOM.m.sg. COP.Pres.sg. 来る OBL.-PTCP.

kal ka aglā din  
 翌日 ADV. GEN.m.sg. 次の ADJ.m.sg. 日 NOM.m.sg.

[16] 「何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて」 「私はコーヒーだ。」

kāfi  
 コーヒー-NOM.f.sg.

口語の場合は、「コーヒー」の語彙だけで十分だが、ウルドゥー語では、いわゆる「ウナギ文」は許されないため、文にする場合は、「私はコーヒーを飲む」「コーヒーをください」など、動詞を補う必要がある。

[17] 「注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに」 「コーヒーは私だ。」

kāfi kis kī hai?  
 コーヒー-NOM.f.sg. 誰 OBL. GEN.f. COP.Pres.sg.

kāfi mērī hai  
 コーヒー-NOM.f.sg. 私 GEN.f.sg. COP.Pres.sg.

[16]に加え、逆ウナギ文も許されないため、「コーヒーは私のだ」と補う必要がある。

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」

vo	naī	aur	moḥ	kitāb
その	新しい ADJ.f.	そして	厚い ADJ.f.	本 NOM.f.sg.
mahangī	hai			
高い ADJ.f.	COP.Pres.sg.			

[19] [砂糖の入れ物を開けて]「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

arē,	cīnī	xatam hō gāī
あっ、	砂糖 NOM.f.sg.	終わる PST.f.sg.

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！ アフマドだったな。」

āj	dō pahr	ke	bād	kisī
今日 ADV.	昼 ADV.	GEN.OBL.m.sg.	あと ADV.	誰か OBL.sg.
se	milnā	thā?	kis	se?
ABL.	会う INF.	COP.PST.m.sg.	誰 OBL.sg.	ABL.
hān,	yād	āyā!	ahmad	se
あっ、	記憶 NOM.f.sg.	来る PST.m.sg.	アフマド OBL.m.sg.	ABL.

### 3. ウルドゥー語における省略

ウルドゥー語は、口語レベルで、その話題の参加者が誤解なく理解できると話者が判断すれば、主語の省略はよく見られる。たとえば、例文[12]では、2つ目の文の主語が（ ）で囲まれているが、1つ目の文の主語と同一人物であり、どちらの文も主語は主格で表されるため、口語レベルでは通常省略される。しかし、複数の文の主語が同一であっても、複数の文でその格が異なる場合、たとえば、与格構文や能格構文となる場合は、あらためて表示される。

コピュラ文におけるコピュラの省略は、口語表現の例文[16]など限定された状況でのみ確認され、通常はおきない。例文[15]は、一見体言止めのような表現となっているが、口語表現によく見られる倒置であり、学校文法では、コピュラ以降の部分が、「意味」をあらわす語彙の後に続く語順となる。

### 4. 否定疑問

ウルドゥー語における否定疑問文の答え方は、学校文法では疑問文が肯定であれ否定であれ、事実がどうかを判断して答えるという説明である。しかし実際の会話では、聞かれたことに答える人も少なからず見受けられる。統計があるわけではないが、筆者の印象で

は、若年層ほど聞かれたことに答える割合が高い。

#### 4. 略語一覧

本稿におけるグロスの略語は、The Leipzig Glossing Rules<sup>3</sup>に従っている。

ABL.	奪格
ADJ.	形容詞
ADV.	副詞
COP.	コピュラ
DAT.	与格
ERG.	能格
f.	女性
FUT.	未来
INF.	不定詞
LOC.	位置格
GEN.	属格
m.	男性
NOM.	主格
OBL.	後置格
PFV.	完了
pl.	複数
Pres.	現在
Prog.	進行形
PST.	過去
PTCP.	分詞
sg.	単数
STEM.	語幹

#### 参考文献

英文

Barker, Muhammad Abd-al-Rahman. et al. 1975. *Spoken Urdu: A course in Urdu (3 vols.)* New York: Spoken Language Services, (Inc.).

和文

鈴木斌. 1996. *ウルドゥー語文法の要点*, 大学書林.

<sup>3</sup> 詳細は、<https://www.eva.mpg.de/lingua/pdf/Glossing-Rules.pdf> を参照されたい。



## 「情報構造と名詞述語文」ビルマ語データ

トゥザ ライン, 岡野 賢二

本稿はアンケート「情報構造と名詞述語文」に答える形でビルマ語の例文を列挙し、簡単な解説を加える。<sup>1</sup>

[1] 「えっ, コーコー [／固有名詞なら何でもよい, 以下も] が来たの?」「いや, コーコーじゃなくてニーニーが来たんだ。」<sup>2</sup>【対比焦点 (主語)】(例えば, 昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

A-1<sup>3</sup> hìn, kòkò là(=tʰwá)=tè.  
EXCL NAME come(=go)=VS:RLS

A-2 (hou?=lá)  
(right=Q)

B-1 mǎ-hou?=p<sup>h</sup>ú, mǎ-hou?=p<sup>h</sup>ú, kòkò mǎ-hou?=p<sup>h</sup>ú.  
NEG-right = VS:NEG NEG-right = VS:NEG NAME NEG-right = VS:NEG

B-2 jìjì là(=tʰwá)=tə.  
NAME come(=go)=NC:RLS

A-1 は形式的には平叙文でありながら, 文末が上昇調になり (普通は低平調で自然下降する) 疑問文相当となる. 上昇調になる場合は疑問であることが分かるため, A-2 hou?=lá “is it right?”は発話されなくてもよい. なおビルマ語では統語的に疑問が表示された場合, 決して上昇調にはならない.

B-1 で mǎ-hou?=p<sup>h</sup>ú “it is not right (≡ “No”)”は繰り返されて強く否定された後で, kòkò mǎ-hou?=p<sup>h</sup>ú “it is not Ko Ko”と焦点否定される. B-2 は述語が名詞化標識=tə<sup>4</sup>となる, いわゆるノダ文 (stand-alone nominalization) となる.

<sup>1</sup>本稿は日本語例文をトゥザラインがビルマ語訳をし, 音声表記とグロスを付加した (岡野が監修). 解説は岡野がトゥザラインと協議の上, 主として岡野が執筆した. 本学大学院博士後期課程. 女性, 37 歳, バゴー管区ミインフラ市生まれ, 5 歳からヤンゴン在住, 在日歴 7 年, 日本語能力試験 1 級 (旧) および N1 に合格している.

<sup>2</sup> コーコー kòkò, ニーニー jìjì は斜格形 (oblique case form, OBL) をとり得る人物指示名詞 (personal referent (Okell 1969)) である.

<sup>3</sup> 本稿では話者をそれぞれ A, B とし, 枝番はその中の発話の番号とする. 例: A-1 (第 1 話者の第 1 発話)

<sup>4</sup> 名詞化標識=tə は〈確定〉の動詞文標識=tè と形式名詞=hà 「(もの)の」が融合した形式. (未確定) のムードでは動詞文標識=mè, 名詞化標識=hmà となる.

なお「来る」がビルマ語で là(=ṭwá) ‘come(=go)’となっているが、ṭwá ‘go’が現れない場合は単に「来た」というイベントのみを表し、ṭwá ‘go’が現れた場合は「来てその後立ち去った(この場にはいない)」というイベントを表す。この ṭwá ‘go’は随意的に有声化する。

[2] 「誰が来た(の)?」「コーコーが来たよ。」【WH 焦点(主語)・WH 応答焦点(主語)】

- A-1    bǎḍù        là = ṭà = lé.  
           who        come=NC:RLS=Q
- B-1    kòkò        là = ṭà.  
           NAME        come=NC:RLS

A-1, B-1 ともノダ文を用いている。ノダ文は通常、発話の前提として当該の命題が真である。

[3] 「コーコーの方が大きいんじゃないの?」「いや、コーコーじゃなくて、ニーニーの方が大きいんだよ。」【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】(コーコーとニーニーの背について話している状況で)

- A-1    kòkò = k̄â        pò = cí = ṭà        mǎ-hou? = p<sup>h</sup>ú = lá.  
           NAME=NOM    more=big=NC:RLS    NEG-right=VS:NEG=Q
- B-1    mǎ-hou? = p<sup>h</sup>ú,        (kòkò    mǎ-hou? = p<sup>h</sup>ú.)  
           NEG-right=VS:NEG    NAME    NEG-right=VS:NEG
- B-2    nìjì = k̄â        pò = cí = ṭà.  
           NAME=NOM    more=big=NC:RLS

やはり A-1, B-2 ともノダ文を用いている。

[4] [電話で]「どうした(の)?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」【文焦点(自動詞文)】

- A-1    bà        p<sup>h</sup>yi? = lô = lé.  
           what        occur=*because*=Q
- B-1    bà = hmâ        mǎ-p<sup>h</sup>yi? = p<sup>h</sup>ú.  
           what=*any*        NEG-occur=VS:NEG
- B-2    (?ǎḡû)    ?êḍê        yau? = là = lô.  
           (now)        guest        arrive=come=*because*

A-1 の bà p<sup>h</sup>yi? = lô は単独なら「なぜ」を表す疑問語であるが、ここでは構成的に「何が起きた故にか?」という意味。電話中に前触れなしに会話が一方的に中断されたような状況を想定している。B-2 はこれに対応する形で、単純接続・理由節標識 lô によって導かれる節が述語となっている。大西(2014)が指摘した、いわゆる「言いさし文」と見てよい

だろう。

[5] 「あの子供がコーコーを叩いたんだって!？」「いや、コーコーじゃなくて、ニーニーを叩いたんだよ。」【対比焦点 (目的語)】

- A-1a. ?ê=k<sup>h</sup>älé=kâ      kòkò=kò      yai?(=lai?)=té.  
 DEM=child=NOM      NAME:OBL=ACC      hit(=*thoroughly*)=VS:RLS
- A-1b. ?ê=k<sup>h</sup>älé=kâ      kòkò=kò      yai?(=lai?)=lô.  
 DEM=child=NOM      NAME:OBL=ACC      hit(=*thoroughly*)=*because*
- B-1    mǎ-hou?=p<sup>h</sup>ú,      mǎ-hou?=p<sup>h</sup>ú,      kòkò=kò      mǎ-hou?=p<sup>h</sup>ú.  
 NEG-right=VS:NEG    NEG-right=VS:NEG    NAME:OBL=ACC    NEG-right=VS:NEG
- B-2    nìjní=kò      yai?(=lai?)=tà.  
 NAME:OBL=ACC      hit(=*thoroughly*)=NC:RLS

A-1a, A-1b はいずれも上昇調になる。A-1b は単純接続・理由節標識 lôによって導かれる節が述語である。ただしこれは理由を表している訳ではない。

B-2 はやはりノダ文。

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う (の) ?」「(私は) 青い袋を買うよ。」【対比焦点 (目的語, 特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)】

- A-1    ?āni-<sup>?</sup>ei?=nê      ?āpyà-<sup>?</sup>ei?      hyî=tè.  
 red-bag=COM      blue-bag      exist=VS:RLS
- A-2    bè=<sup>?</sup>ei?      wè/yù=mǎ=lé.  
 which=bag      buy/take=VS:IRR=Q
- B-1    (ŋà=kâdô)      ?āpyà-<sup>?</sup>ei?      wè/yù=mè.  
 I=contrast      blue-bag      buy/take=VS:IRR

目的語の対比焦点となる B-1 は、主語要素の脱落も含め、ビルマ語の最も一般的な語順と変わることがない。

[7] 「コーコーはどうした?」「コーコーは朝からどっかへでかけたよ。」【述語焦点】(例えば、朝少し遅く起きて来た一郎の父親が、姿の見えない一郎について母親に尋ねている場面で)

- A-1    kòkò      (tǎ-yau?)      bè      pyau?=nè=lé.  
 NAME      (one-CLF)      where      disappear=stay=Q
- B-1    kòkò      mǎnɛ?=téǵâ      ?āpyìN      t<sup>h</sup>wɛ?=t<sup>h</sup>wá=tè  
 NAME      morning=since      outside      go.out=go=VS:RLS

A-1 の(tǎ-yau?)「ひとり」はあった方が自然。bè「どこ(へ)」はこの文の中でどのような

統語的な位置を占めているのか不明。bèは無標で現れると通常は着点を表すが、動詞連続 pyau?=nè「消えている」は着点を取らない動詞と考えられるからである。<sup>5</sup> B-1 はビルマ語の最も一般的な語順と変わらない。

[8] 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

【WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)】

A-1	(hò=k <sup>h</sup> ǎlé)	bǎđú=ḵò	yai?=lai?=tà=lé.
	(that=child)	who.OLB=ACC	hit= <i>thoroughly</i> =NC:RLS=Q
B-1	(??hò=k <sup>h</sup> ǎlé)	tû=jì-lé=ḵò	yai?=lai?=tà.
	(that=child)	3.OBL=y.brother=ACC	hit= <i>thoroughly</i> =NC:RLS

A-1, B-1 ともノダ文である。B-1 に「(あの子供は)」が現れるのは自然ではない。

[9] [電話で]「どうした(の)?」「うん、一郎が(自分の)弟を叩いたんだ。」

【文焦点 (他動詞文)】(例えば、電話の向こうで子供の泣き声が起きたのを聞いての発話)

A-1	bà=ṭwè	p <sup>h</sup> yi?=nè=tà=lé.	
	what=PL	occur=stay=NC:RLS=Q	
B-1	bà=hmâ	mǎ-hou?=pà=p <sup>h</sup> ú.	
	what= <i>any</i>	NEG-right=PLT=VS:NEG	
B-2	kòkò=ḵâ	(tû=jì)-lé=ḵò	yai?=lai?=lô.
	NAME=NOM	([3']=y.brother-DIM=ACC	hit= <i>thoroughly</i> = <i>because</i>

A-1 は[4]とよく似た状況だが、進行相を表す補助動詞 nè「いる」が現れている。[4]が瞬間的な出来事について述べているのに対し、ここは子供の泣き声が継続的に聞こえているためである。B-2 は理由節が述語となっている点で[4]と同じ。A-1 の質問文が事実上、理由を訊ねるものであるからであろう。

[10] 「あのケーキ、どうした?」「ああ、(あれは)一郎が食べちゃったよ。」

【目的語主題化、主題 (目的語) の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

A-1	hò=kei?môun	bè	yau?=ṭwá=lé.
	that=cake	where	arrive=go=Q

<sup>5</sup> 査読者から pyau?=nè「消えている」が「(別の場所に)行く」という意味である可能性はないか?との指摘を受けた。これは二つの動詞 pyau?「消える」と nè「居る」からなる動詞連続だが、前者の用法として着点を取る例は今のところ(本例文のような例を除き)見つかっていない。また後者は移動動詞ではないので着点を取ることはない。よって動詞連続全体であっても、着点の項を取ることは考えにくい。

B-1    ?á,            (kei?môun = lá.)    kòkò            sá = pyi? = lai? = pì.  
          INTER    (cake=Q)            NAME            eat=*quickly=thoroughly*=VS:INC

繰り返して述べているように、文脈等から復元可能な要素は脱落してよい。

[11] 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」【分裂文】

          nà            mǎnêgá            sà?ou?-s<sup>h</sup>àin = kâ            wè = là = tà            dī = sà<sup>o</sup>ou? = lè.  
           1            yesterday            book-shop=ABL            buy=come=NC:RLS            this=book=SFP

ビルマ語の分裂文は擬似分裂文となる。擬似分裂文の前提は名詞化節によって導かれる。

[12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」【措定文 主題（名詞述語文の主語）の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

          ?édī = lù = kâ            s<sup>h</sup>ǎyà = lè.            dī = cáun = hmà            lou? = nè = tà  
           DEM=person=NOM    teacher=SFP            DEM=school=LOC            work=stay=NC:RLS  
           tóun-hni?            hyí = pì  
           three-CLF            exist=VS:INC

第二文は経過時間を表す構文。[elapsed-time]には経過時間を表す数表現が入るが、主動詞が cà- “to elapse”の場合はなにも現れず「随分と時が経った」という意味になる。

...    (mǎ-)V = tà            [elapsed-time]            hyí = pì./cà = pì.  
   ...    (NEG-)V = NC:RLS            exist=VS:INC/elapse=VS:INC  
   ... V して (V せずに) [elapsed-time]になる/随分と時が経った。

第二文は「(～が)...V したこと/...V しないこと」という命題が名詞節として文全体の主題になっている。つまり第二文に現れていない「あの人は先生」は第二文の補文の主語ということになる。

[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」【倒置指定文】

A-1    tû = ?ǎp<sup>h</sup>è = kâ            hò = tǎ-yau? = lè            tû = ?ǎp<sup>h</sup>è = kâ            ?édī = lù = lè  
          3:OBL=father=NOM    DEM=one-CLF=SFP            3:OBL=father=NOM    DEM=person=SFP

倒置指定文の主語は主格助詞 kâが必須となるようだ。

[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」【指定文】

A-1    hò = tǎ-yau? = kâ            tû = ?ǎp<sup>h</sup>è = lè            /    ?édī = lù = kâ            tû = ?ǎp<sup>h</sup>è = lè.  
          DEM=one-CLF=NOM    3:OBL=father=SFP            DEM=person=NOM    3:OBL=father=SFP

[15] 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」【定義文】

däbe?k<sup>h</sup>ä                      s<sup>h</sup>ò = t̃à                      mǎne?p<sup>h</sup>àn = yê                      nau? = t̃ă-nê = k̃ò  
 the.day.after.tomorrow    say=NC:RLS                      tomorrow=GEN                      next=one-CLF=ACC  
 pyó = t̃à = lè  
 speak=NC:RLS=SFP

定義文は定義される対象の語句を s<sup>h</sup>ò = t̃à 節「～というの」で取って文の主題となり、定義内容が題述部分に現れる。動詞 s<sup>h</sup>ò 「云う」には通常、引用節標識 l̃ə が現れない。

[16] 「何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて」「私はコーヒーだ。」【ウナギ文】

cǎnò = k̃â                      k̃òfi = p̃à.  
 1m<sup>6</sup>=NOM                      coffee=PLT

日本語と同じくウナギ文を用いるが、自然な表現とは言いがたい。主格助詞=k̃âの生起はほぼ必須である。

[17] 「注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに」「コーヒーは私だ。」【逆行ウナギ文】

k̃òfi = k̃â                      cǎnò = p̃à.  
 coffee=NOM                      1m=PLT

日本語と同じく逆行ウナギ文を用いるが、自然な表現とは言いがたい。主格助詞=k̃âの生起はほぼ必須である。

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

- a.                      ?édí = sà<sup>3</sup>ou? - ?ǎti? - ?ǎt<sup>h</sup>ù-čí = k̃â                      zé + cí = t̃è.  
                          that=book-new-thick-AUG=NOM                      expensive=VS:RLS
- b.                      ?édí                      ?ǎti?                      t<sup>h</sup>we? = t̃è                      sà<sup>3</sup>ou? - ?ǎt<sup>h</sup>ù-čí = k̃â                      zé + cí = t̃è.  
                          that                      new                      go.out=ATTR:RLS                      book-thick-AUG=NOM                      expensive=VS:RLS

a. は sà<sup>3</sup>ou? 「本」、?ǎti? 「新しいの」、?ǎt<sup>h</sup>ù-čí 「分厚いの」が同格名詞として並列されていると考えられる。ただし指示詞?édí 「その」は sà<sup>3</sup>ou? - ?ǎti? - ?ǎt<sup>h</sup>ù-čí 「新しくて分厚い本」全体を限定しているように思われる。

一方 b. は sà<sup>3</sup>ou? 「本」と?ǎt<sup>h</sup>ù-čí 「分厚いの」のみが同格名詞として並列されていて、それに指示詞?édí 「その」と限定節 ?ǎti? t<sup>h</sup>we? = t̃è 「新しく出た」のいずれもが同格名詞全体を限定していると思われる。

<sup>6</sup> 1m の m 男性話者 (male speaker) を表す。

[19] [砂糖の入れ物を開けて]「あっ、砂糖が無くなっているよ！」【意外性 (mirativity)】

A-1    ʔè,              ɖǎjá              kòun = nè = t̚è = há.  
          INTER        sugar            run.out=stay=VS:RLS=SFP

意外性は終助詞 háによって表されていると思われる。発見にはノダ文は用いられないかも知れない。

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！ 田中君だったな。」【思い出し】

nânèbáin    tǎ-yauʔ-yauʔ = nè              twê = p̚h̄ò    hyî = t̚ǎ = lò = pé.  
 evening    one-CLF-CLF=COM              meet=for    exist=VS:RLS=ESS=FOC  
 bǎɖù = nè = myá = p̚aléin.              ʔá,              t̚í = p̚ì.  
 who=COM=or.something=wonder<sup>7</sup>.    INTER              know=VS:INC  
 miʔsǎtà tǎnàk<sup>h</sup>à = nè    twê = p̚h̄ò              c<sup>h</sup>éin = t<sup>h</sup>á = t̚à.  
 NAME=COM              meet=for              make.an.appointment=put.on=NC:RLS

ビルマ語は基本的に文脈などから復元可能な要素は（一部例外を除き）脱落可能である。

### 参考文献

欧文

Okell, John. 1969. “A Reference Grammar of Colloquial Burmese”, Oxford University Press: London.

和文

大西秀幸.2014.「日本語とビルマ語において原因・理由を表す助詞の表す意味範囲に関する対照」, 第22回ビルマ研究大会（上智大学, 2014年4月19日）.

<sup>7</sup> p̚aléin は非動詞述語文に現れる唯一の法（ムード）《自問》「～かしら？」を表す助詞。動詞要素ではない。



## ラワン語マトワン方言における情報構造と名詞述語文調査結果

大西 秀幸

## 1. はじめに

本稿はラワン語マトワン方言における情報構造と名詞述語文に関する調査結果を示すとともにマトワン方言の情報構造とコピュラ文と名詞述語文に関する基礎的な記述を行うことを目的とする。

本稿の構成は次の通りである。予備知識として、0では対象言語の概要、0では言語学的特徴、0では一次資料の概要について示す。0では特に本稿の内容に関する文法項目として「ラワン語の文」と「文末小辞」について概略する。0では表記上の注意について何点か触れておく。0では調査例文を調査協力者に訳してもらった結果を示す。0ではいくつかの調査項目について考察を行い、今後の課題をまとめる。

特に断りのない限り、本稿で示す例文、グロス、日本語訳、外国語文献の翻訳は筆者による。

## 1.1. ラワン語と対象方言について

ラワン語はミャンマー連邦共和国カチン州の北部に主に居住しているラワン人によって話されている言語である。Ethnologue<sup>1</sup>によると、ラワン語話者の人口は全体で 63,000 人であり、うちミャンマー連邦に居住する人口は 62,000 人であるとしている。系統的にはチベット＝ビルマ系言語 (Tibeto-Burman)、中央チベット＝ビルマ語支 (Central Tibeto-Burman) のうちヌン語群 (Nungish) に属する<sup>2</sup>。

Morse (1988) によるとラワン語はマトワン (Matwang)、ルンミ (Longmi)、タンサル (Tangsar)、キンパン (Kwinpang)、ダル (Daru) の 5 つの方言に大別することができる。本稿で対象とする方言は、カチン州のプータオ (Putao) 市周辺で話されているマトワン方言である。以下特に断りが無い限り、ラワン語とはマトワン方言を指す。

<sup>1</sup> <http://www.ethnologue.com/language/raw> (最終閲覧日 2015/10/23)

<sup>2</sup> ヌン語群に属する言語としては、中国雲南省で話される独龍語 (Drung) と中国の雲南省福貢県からミャンマーのカチン州にかけて話されるアノン語 (Anong) が知られている。独龍語については多・孫 (2009) に、アノン語については Sun & Liu (2009) に詳しい記述がある。ラワン語 (マトワン方言) に関しては、Morse (1965) や LaPolla (2000) に文法記述がある。

## 1.2. 文法特徴

ラワン語には大まかに (1) に示すような文法特徴が認められる。

### (1) ラワン語の文法特徴

- 音節構造：(C<sub>0</sub>)C<sub>1</sub>(C<sub>2</sub>)V(C<sub>3</sub>)/T
- 音素：/p, b, t, d, ts, dz, tɕ, dz, k, g, ʔ, φ\*, β\*, s, ɛ, h, m, n, ŋ, w, r, l, j, i, u, e, ə, o, a/\*を付した子音は外来語にしか現れない音
- 基本語順：SOV
- 語類：名詞類 (名詞 (普通名詞, 指示詞, 代名詞), 数詞), 動詞類 (自 / 他動詞), 副詞類, 小辞類 (格小辞, 文末小辞など)
- 名詞句構造：[ (指示詞=名詞)/(数詞=類別詞) ] (=格小辞)
- 動詞句構造：[否定辞=使役化-<動詞, 人称, 数><sup>3</sup>=助動詞-TAM]

動詞には、否定や TAM などの情報が接辞として付加され、動詞複合体 (verb complex) ともいえるかたまりを形成しうる。

## 1.3. 一次資料について

本稿でラワン語の例として挙げているものは特に断りのない限り、今回の調査に協力していただいたマトワン方言話者の発話である<sup>4</sup>。調査協力者のデータは (2) に示す通りである。

### (2) 調査協力者のデータ

名前： ダクムフォン氏 (Dakhum Phon)<sup>5</sup>  
性別： 男  
生年： 1969年  
出身地： プータオ市

調査は事前に用意した日本語調査例文<sup>6</sup>を協力者にラワン語訳してもらった形で行った。協力者は20年以上日本に住んでおり、日本語に堪能であるため、調査はすべて日本語を媒介にして行った。協力者が発話場面を想像しにくい例文に関しては、こちらで場面を設定し、

<sup>3</sup> <...>は屈折要素を表す。

<sup>4</sup> もちろん、解釈等を含め、表記やグロス、日本語訳に関してはすべて筆者の責任で行っており、本稿で挙げる例文についても筆者が責任を負っている。

<sup>5</sup> 以下、協力者と表記する。

<sup>6</sup> 協力者が訳しやすいよう、人名をラワン人名に事前に変えている。

それを説明しながら、協力者に場面を想像してもらった。その際にどのようなやり取りがあったかにも関わらず、本稿のできる限り、詳細に示したつもりである。

#### 1.4. 本稿の内容に関係するラワン語の文法

上述の類型論的特徴に加えて、本稿の内容に関連する文法事項についてここで説明する。

##### 1.4.1. ラワン語の文

ラワン語における文の唯一の必須要素は**述語**で、普通は文の最後に現れる。述語は動詞と述語標識小辞からなる**動詞述語**と、それ以外 (主に名詞) からなる**非動詞述語**とがある。動詞述語が構成する文を**動詞述語文**、非動詞述語が構成する文を**非動詞述語文**と呼ぶ。

##### ● 動詞文

動詞文の述語は「動詞+述語標識小辞」という構造を持つ。述語標識小辞は述語であることを示すと同時にテンスや動詞の自他をも示す。述語標識小辞には (3) に挙げる形式がある。

##### (3) 述語標識小辞

1. 形式	2. 機能	3. 本文中でのグロス
=ē	● 非過去の文であることを示す。	NPT
=ì	● 過去の文で、 <b>述語動詞が自動詞</b> であることを表す	INTRPT
=à	● 過去の文で、 <b>述語動詞が他動詞</b> であることを表す。	TRPT

非過去の文を (4) に、過去の自動詞文を (5) に、過去の他動詞文を (6) に挙げる。

(4) dzòntsè ədzēr =ē.

学生 走る=NPT

「学生が走る。」

(5) dzòntsè ədzēr =ì.

学生 走る=INTR.PT

「学生が走った。」

- (6) jā=pè=í                      ni?gūŋ=lòŋ                      zàm=à.  
 この=CL (MAN)=ERG    尻尾=CL (GENERAL)    捕まえる =TR.PT  
 「この男は尻尾を捕まえた。」

● 非動詞文

非動詞文とは動詞以外の要素が述語になる文である。非動詞文のほとんどは名詞述語文である。名詞述語文は、“N<sub>1</sub>+N<sub>2</sub>”「N<sub>1</sub>は N<sub>2</sub>だ。」のように名詞を並べることでつくることができる。(7)のように N<sub>1</sub>に主題化小辞がつくのが普通である。

- (7) àŋ=nū                      dzòntsè.  
 3SG=TOP    学生  
 「彼は学生(だ).」

● 名詞述語文とコピュラ文の違い

ラワン語にはコピュラ動詞述語からなるコピュラ文がある。(8)に実例を挙げる。

- (8) àŋ=nū                      dzòntsè                      í=ē.  
 3SG=TOP    学生                      COP=NPT  
 「彼は学生だ。」

名詞述語文とコピュラ文は「N<sub>1</sub>は N<sub>2</sub>だ」という意味を表せる点では共通しているものの、いくつかの点で違いが確認できる。例えば、名詞述語文には動詞接辞をつけることができないので、TAMなどの情報を文に付与することができない。(7')と(8')に実例を挙げる。

(7') 名詞述語文

- \*àŋ=nū                      mə-dzòntsè.  
 3SG=TOP    NEG-学生  
 (「意図した意味： 彼は学生ではない。」)

(8') コピュラ文

- àŋ=nū                      zòntsè                      mə-í=ē.  
 3SG=TOP    学生                      NEG-COP=NPT  
 「彼は学生ではない。」

また、今回の調査を通してイベントタイプによって、名詞述語文とコピュラ文の両方が

使える場面と、名詞述語文しか使えない場面があることが分かった。詳しくは[16]と[17]を参照されたい。

#### 1.4.2. 文末小辞

文末小辞 (SFP) は文末に現れ、主に話し手の発話内容に対する態度を表す。文末小辞のあとに、文末小辞以外の要素現れることは基本的にない<sup>7</sup>。(9) に実例を挙げる。

- (9)    nà     sānī   hōl-ŋ=ó.  
       1SG   昨日   着く-1SG=SFP  
       「私は昨日着いたよ。」

諾否疑問文は文末小辞を使って表される。(10) に実例を挙げる。

- (10)   nā=í        àŋ=səŋ        è-zī=mā?  
       2SG=ERG   3SG=ACC   N1-与える=Q  
       「あなたは (それを) 彼に与えるの？」

#### 1.5. 表記上の注意

● グロスはなるべく各要素の意味や機能が分かりやすくなるように付したが、当該の文における意味機能を一義的に示すのが難しいと判断した場合は、SFP や INTJ など統語的特徴に基づくグロスを付して、例文の後の説明で補足するようにしている。

● 1つの形式に機能が2つ以上認められる場合は、グロス欄で\_\_。(ピリオド) で区切って表記している。

例)    COP.NEG        コピュラ且つ否定を表す

● 類別小辞に関しては対応する指示物によって、形式が変わるため、グロスは CL (類別小辞の種類) といった形で付している。

例)    CL (MAN)        男に対応する類別詞であることを表す  
       CL (BOOK)     本に対応する類別詞であることを表す

<sup>7</sup> 2つ以上の文末小辞が文末に共起することもある。

● 方向接辞は移動がどの方向に向けて行われたかを表す接辞である。本稿で挙げた例文内では、地点に近づく移動（接続）と、離れる移動（離接）の接辞を用いている。それぞれ以下のようにグロスを付す。

例) DIR (CONJ) 接続の移動を表す

DIR (DISJ) 離接の移動を表す

● そのほか本稿で用いる略号については稿末の略号一覧を参照されたい。

## 2. 例文のラワン語訳

調査例文のラワン語訳を挙げ、説明をその下に挙げる。例文番号は調査例文の番号と対応させている。

### 2.1. 【対比焦点（主語）】

[1] səŋdón dī-daʔ=i=má?

PN 行く-DIR (CONJ)=INTR.PT=Q

「サンドンが行ったのか？」

mūí sínwál dī-daʔ=i.

COP.NEG PN 行く-DIR (CONJ)=INTR.PT

「サンドンが行ったんじゃない、シンワルが行ったんだ。」

主語の焦点化を明示する標識は現れない。質問に対する打消しの応答にはコピュラ文が用いられる。この場合、否定コピュラの *mūí* のみで答えるのが普通のようなものである<sup>8</sup>。コピュラの補語として、「サンドンが行ったの」を前につけても間違いではないが、協力者はくどい印象を受けるという。

### 2.2. 【WH焦点（主語）・WH応答焦点（主語）】

[2] kāgú dī-daʔ=i=lè?

誰 行く-DIR (CONJ)=INTR.PT=SFP

「誰が行ったの？」

---

<sup>8</sup> この点で否定の否定コピュラの *mūí* は打消しの返答に用いる形式と考えてもよさそうである。

səŋdónj      dī-daʔ=i.  
 PN            行く-DIR (CONJ)=INTR.PT  
 「サンドンが行ったんだよ。」

WH焦点とWH応答焦点となる要素の焦点化を明示する標識は現れない。この文では調査協力者に発話場面の説明を求められたため、「(毎年行われる祭りのために村から一人代表を送ることになっているのだが、今年は誰が行ったの?)」「サンドンが行ったんだよ。」という場面を設定して訳してもらった。

文末小辞の=leは上の立場のものから下の立場の者へ言い下すような少し高圧的な心情を表している。

協力者によるとこの場面での応答文は「行ったのは、サンドンだよ。」のような分裂文のほうがより自然に感じるということであった。

### 2.3. 【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】

[3]      səŋdónj=wāpè=nū              té              tē=pè              mūi=má?  
 PN=～のほう =TOP      さらに      大きい=CL (MAN)      COP.NEG =Q  
 「サンドンの方が大きいんじゃないの?」  
 mūi,              sínwál=wāpè              té              tē=ē.  
 COP.NEG      PN=～のほう              さらに      大きい=NPT  
 「いや、サンドンじゃなくて、シンワルの方が大きいんだよ。」

疑問文の方は「サンドンのほうが大きい人なんじゃないの?」という意識がなされた。応答文の方では、否定コピュラを使って前の内容を打ち消している。[1]と同様に、応答に現れる否定コピュラに補語を付け加えて、「サンドンの方が大きい男だというのは違う。」のように言っても間違いとはならないものの、くどいという印象を与えるようである。

### 2.4. 【文焦点 (自動詞文)】

[4]      pà      b̀un=ē?              何      起こる=NPT  
 [電話で] 「どうした(の)?」  
 á      əkət      mənóm=pè              tuʔ-daʔ=i.  
 INTJ      今              客=CL (MAN)              着く-DIR (CONJ)=INTR.PT  
 「うん、今、お客さんが来たんだ。」

電話越しに音が聞こえて、電話の向こうで何が起きているのかを聞くという場面を想定してもらった。文全体が焦点になっている文であるが、この場合も焦点化されていることを明示するような形式は現れない。

## 2.5. 【対比焦点（目的語）】

- [5] wē=pè                  còmǎ=í                  sàŋdón=sàŋ          ədùr-bú=à.  
 その=CL (MAN)      子ども=ERG      PN=ACC              殴る -PFV=TR.PT  
 wā=ē=lè.  
 言う=NPT=SFP  
 「あの子どもがサンドンを叩いたんだって!」  
 sàŋdón=sàŋ          mǎí,                  sínwál=sàŋ          ədùr-bú=à.  
 PN=ACC              COP.NEG              PN=ACC              殴る -PFV=TR.PT  
 「いや、サンドンじゃなくて、シンワルを叩いたんだよ。」

目的語の焦点化を明示する標識は現れない。そして質問に対する打消しの応答にはコピー文が用いられる。

## 2.6. 【対比焦点（目的語、特に「どっち」という対比的な疑問語の場合）】

- [6] mǎcè=wē              dǎŋgón=nəŋ              mǎcúŋ=wē              dǎŋgón              əl=ē=ló.  
 赤い=CNMLZ          袋=COMN              青い=CNMLZ          袋                  存在する=NPT=SFP  
 kālòŋ                  è-wǎn-ò=ni?  
 どっち                  N1-買う -TR.NPT=Q  
 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う（の）？」  
 mǎcúŋ=wē              dǎŋgón              wǎn=lǎmlaʔí.  
 青い=CNMLZ          袋                  買う=INT  
 「(私は) 青い袋を買うよ。」

対比的な疑問語であっても、焦点化していることを明示化する標識は現れない。なお「買う」の目的語にあたる「袋」は無生物であるので、対格では示されない<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> いわゆる differential object marking (DOM) (Bossong 1985 他)の特徴を見せている。

## 2.7. 【述語焦点】

- [7] səŋdón=nū pà bən=ē?  
 PN=TOP 何 起こる=NP  
 「サンドンはどうした？」
- səŋdón=nū gəə̀ə̀ŋ=kə̀ní bóŋ-dár=i.  
 PN=TOP 朝=ABL 出かける-PFV=INTR.PT  
 「サンドンは朝からどっかへでかけたよ。」

サンドンが家になくて、サンドンの身を案じているような場面を想定してもらった。この場合も焦点化されていることがわかるような標識はつかない。そして疑問文と応答文において焦点化されていない（つまり前提部にあたる）要素には主題化の小辞がつく。

## 2.8. 【WH焦点（目的語）・WH応答焦点（目的語）】

- [8] kágú=sə̀ŋ ə̀dùr-dár=à=ó?  
 誰=ACC 殴る-PFV=TR.PT=SFP  
 「誰を叩いたの？」
- ədè nə̀msə̀mpè=sə̀ŋ ə̀dùr-dár=à.  
 自分 弟=ACC 殴る-PFV=TR.PT  
 「自分の弟を叩いたんだ。」

疑問焦点が目的語にある場合も、焦点化を明示するような要素は現れない。

## 2.9. 【文焦点（他動詞文）】

- [9] pà bən=ē?  
 何 起こる=NP  
 「何があったの？」
- səŋdón=i ə̀dè nə̀msə̀mpè=sə̀ŋ ə̀dùr-dár=à.  
 PN=ERG 自分 弟=ACC 殴る-PFV=TR.PT  
 「サンドンは自分の弟を叩いたんだ。」

文焦点の例だが、やはり焦点化を明示する要素は現れない。一方で主題化小辞に着目すると、応答文のどの要素にも、主題化小辞をつけることはできない。

2.10. 【目的語主題化, 主題 (目的語) の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

- [10] wē=lòŋ                      mok=nū              kāsàŋ=í      ám=à=ó?  
 その=CL (GENERAL)      ケーキ=TOP      誰=ERG      食べる=TR.PT=SFP  
 「あのケーキ, どうした?」  
 sàŋdóŋ=í      ám-bú=à.  
 PN=ERG      食べる-PFV=TR.PT  
 「サンドンが食べちゃったよ.」

日本語例文に倣い「(昨日作っておいた) あのケーキはどうなった?」という場面を設定したが、「ケーキはどうなった?」が訳しづらいようだったので、「ケーキは誰が食べた?」という文を作ってもらった, 目的語が主題化される場合, SOV という基本語順が崩れ, 目的語が文の先頭に来る.

応答文において, 動作が「すでに~てしまった.」局面にあること, あるいは「(本当はよくないのについ) ~てしまった」という話し手の心情が完了の接辞-búによって表されている.

2.11. 【分裂文】

- [11] ñà=í              sōngānī              sēŋjǎŋ=kèní      wǎn-daʔ-ŋ=à=wē=nū  
 1SG=ERG      昨日              店=ABL              買う-DIR (CONJ) -1SG=TR.PT=CNMLZ=TOP  
 jā=lòŋ                      kārū=bok              í=ē.  
 この=CL (GENERAL)      本=CL (BOOK)      COP=NPT  
 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ.」

分裂文は節名詞化子によって名詞化された節に主題の小辞をつけて作る。「私が昨日お店から買って来たのはこの本」のような名詞述語文で言い換えることはできない.

2.12. 【措定文 主題(名詞述語文の主語)の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

- [12] wē=gú=nū                      sārā              í=ē.              jā=zòŋ              jǎŋ  
 その=CL (PERSON)=TOP      先生              COP=NPT              この=学校              ところ  
 dǎzaʔ-ei=wē                      əcəm=núŋ              í-bú=ē.  
 働く-REFL=CNMLZ              三=CL (YEAR)              COP-PFV=NPT.

「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

2文目の主語は、省略されているが、1文目の主語と同じである。つまり主題の継続性が確認できる。

### 2.13. 【倒置指定文】

- [13] ànpè=nū kū=gú í=ē.  
 父=TOP あの=CL (PERSON) COP=NPT  
 「彼のお父さんは、あの人だ。」

コピュラ文で言うことができる。主題化小辞がついた名詞句が先頭に現れる。

### 2.14. 【指定文】

- [14] kū=gú=nū ànpè í=ē.  
 あの=CL (PERSON)=TOP 父 COP=NPT  
 「あの人が彼のお父さんだ。」

「彼のお父さんは誰ですか？」という疑問文に対する答えではなく、彼のお父さんを紹介する中での文脈を想定して発話してもらった。倒置指定文の例と同じく主題化小辞がついた名詞句が文頭に現れる。

### 2.15. 【定義文】

- [15] mēpāŋnī wā=wē=nū nəpnī dāŋ=i=wē  
 明後日 言う=CNMLZ=TOP 明日 終わる=INTRPT=CNMLZ  
 mēpāŋ ənī=səŋ wā=ē.  
 後 日=ACC 言う=NPT  
 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

直訳すると「明後日というのは、明日が終わった次の日をいう。」となる。[15]の文をコピュラ文や名詞述語文で言い換えることはできない。主題化小辞のついた要素が定義される対象である。

## 2.16. 【ウナギ文】

[16a]  $\eta\grave{a}=n\bar{u}$            $k\bar{o}\phi\bar{i}$ .  
 1SG=TOP          コーヒー  
 「私はコーヒー。」

[16b]  $\eta\grave{a}=n\bar{u}$            $k\bar{o}\phi\bar{i}$            $e\grave{u}\eta=\bar{e} / a\eta-l\acute{o}mla\eta\acute{i}$ .  
 1SG=TOP          コーヒー          好む=NPT / 飲む-INT  
 「私はコーヒーが好きだ／を飲む。」

いわゆるウナギ文は、[16a] のような名詞述語文コピュラ文で言うことができない。この文をもしコピュラ文で言い換えると「私はコーヒーと同一あるいは同質のものだ。」という解釈になる。」[16b] のように「私はコーヒーを飲みたい」「私はコーヒーがいい」のような言い方も可能である。

## 2.17. 【逆行ウナギ文】

[17]  $k\bar{o}\phi\bar{i}=n\bar{u}$            $\eta\grave{a}$            $\grave{u}\eta=\bar{e}=l\acute{o}$ .  
 コーヒー=TOP          1SG          COP.1=NPT=SFP  
 「コーヒーは私だ。」

一方、逆行ウナギ文ではコピュラ文が使える。協力者によると、「コーヒー（を飲むのは）私だ。」という完全文が想起できるからだという。では [16] のようなウナギ文で「私（が飲みたいの）はコーヒーだ」のような完全文が想起できるかという質問に対しては、協力者は「できない」ということであった<sup>10</sup>。

## 2.18. 【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

[18]  $w\bar{e}=l\acute{o}\eta$                    $\grave{a}\eta\epsilon\acute{o}r$            $\acute{i}=n\bar{u}$            $t\acute{o}t=w\bar{e}$   
 その=CL (GENERAL)          新しい          COP=SEQ          厚い=CNMLZ  
 $k\bar{a}r\bar{u}=bok=n\bar{u}$                    $\epsilon\acute{p}\acute{u}=\bar{e}$ .  
 本=CL (BOOK)=TOP          高い=NPT  
 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」

<sup>10</sup> なぜできないかということについてはさらなる調査が必要であると考えている。

〔形容詞〕<sup>11</sup>述語は、「(値段が)高い」を表す動詞で表現される。並列は、継起の接続小辞を使って、動詞文と同様に行われる<sup>12</sup>。

## 2.19. 【意外性 (mirativity)】

- [19] á dzāmdwī bē-dár=i=é  
 INTJ 砂糖 無くなる-RPT=INTR.PT=SFP  
 [砂糖の入れ物を開けて] 「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

砂糖がなくなっていることに対して意外であるという話し手の心の動きは文末小辞の =é.によって表されている。

## 2.20. 【思い出し】

- [20] dūrùm, ti?gúgú=nəŋ əhūm=lóm í=wē, kāgú  
 午後 誰か=COM 会う=PURP COP=CNMLZ 誰  
 í-ám=i=é,  
 COP-PFV=INTR.PT=SFP  
 əkət=wā dədōm-dár-ŋ=à. səŋdōŋ í-dar=i.  
 今=~だけ 思い出す-RPT-1SG=TR.PT PN COP-RPT=INTR.PT  
 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！サンドンだったな。」

「会うはずだった (が思い出せない)」という話し手の心の動きが、1文目の末にある節名詞化子によって表されている。このように節名詞化子で終わる一種の名詞述語文は、ラワン語に散見される。

このような構文は、話し手の事象に対する確信度の高さを表している。思い出したことを発話する場合、過去の表現が用いられる。そのとき、述語標識小辞の過去と、近過去を表す接辞が必ず組み合わされて現れる。

<sup>11</sup> いわゆる形容詞的な意味を表出する語の類という意味で〔形容詞〕ということばを便宜上使っている。脚注 12でも触れたようにラワン語において〔形容詞〕を独立した語類として見なせる根拠はない。

<sup>12</sup> これらのことはラワン語で「形容詞」という形態統語的な振る舞いにおいて独立した語類をラワン語でたてる必要がないという根拠の一つになる。

### 3. 考察

#### 3.1. 焦点に関して

ラワン語はある要素に情報の焦点があることを積極的に標示する形式はない。

反対に前提となる情報であることを標示する主題標示が、焦点化されている要素には必ずつかないということが、焦点化されていないことの傍証になり得る（しかし、もちろん前提となっていないことと焦点化されていないことは同一視できないため、主題標示がなされないことが焦点化を標示しているとはいえない）。

今後の課題でも触れるが、言語によっては明示的な形式を持たない、あるいはイントネーションによってのみ区別される（特に焦点な）、というケースについては十分な考察ができなかったため、基本的な記述にとどまることになった。

#### 3.2. コピュラ文に関して

西山 (2003) の分類を援用すると、ラワン語のコピュラ文は【措定文】、【倒置指定文】、【指定文】に用いることができることが分かる。

一方で【定義文】だけは、コピュラ文を使うことができない。主題（名詞述語文の主語）の継続性、いわゆる *pro-drop* 言語の可能性の観点からみると、[12]の文を見るとわかるように、主題は文境界を越えて継続することができる。この点でラワン語は *pro-drop* 言語の特徴を有すると言える。

#### 3.3. ウナギ文に関して

ウナギ文と逆行ウナギ文の両方を作ることができる。しかし、ウナギ文は名詞述語文で、逆行ウナギ文はコピュラ文で現れるという点からわかるように、名詞述語文とコピュラ文には使い分けがある。時崎 (2002) による英語のウナギ文に関する指摘の観点からみると、[16]と[17]の例文から見るにラワン語でも補語が定であればウナギ文で言うことができるということはある。

しかし、補語の定不定に関して、詳しく調査をしていないため、「ウナギ文」で表現できるということが「補語が定であること」によるのか同課については、今後さらに詳しい調査を行っていく必要があるといえる。

#### 3.4. 形容詞的意味の語に関して

名詞述語文とコピュラ文の両方が存在するラワン語において外心構造をつくる機能をもつと考えられる形式は、コピュラではなく主題化小辞（トピックマーカ）である。ラワン語では、〔形容詞〕が名詞に後続し、内心構造を作る。たとえば[18]における、

[18'] kārū=bok=nū            əpú=ē.  
 本=CL (BOOK)=TOP      高い=NPT  
 「本は高い。」

という文は、過去の文にすると、

[18''] kārū=bok=nū            əpú.  
 本=CL (BOOK)=TOP      高い  
 「本は高かった。」

となる。さらにこの文を内心構造にしようとする、

[18'''] kārū=bok                əpú.  
 本=CL (BOOK)              高い  
 「高い本。」

となる。[18'']と[18''']の違いは主題化小辞があるか否かということだけである。つまり外心構造か内心構造かを区別するために、主題化小辞が機能していると考えられる。

### 3.5. 意外性に関して

起こった事象が話し手にとってどのような心の動きであったかは文末小辞によって表現される。[19]では、「あると思っていた(予想外にも)砂糖がない」という驚きが文末小辞=éによって表されている。

特に「意外性」や「思いだし」に関しては、文末小辞のみならず、テンス形式が大きな役割を果たすことがわかる。「砂糖がない」や「サンドンであることを思い出した」のは発話時点のはずなので、現在のテンス形式が用いられそうだが、既存の知識(あるいは予測)に反することを認識したときには必ず過去の述語標識小辞が用いられる。

### 3.6. 今後の課題

今回の調査は時間の限られた中での調査であったため、全体的にそれほど考察が深まらなかったということが最大の課題である。

以下に挙げる個別の課題を設定し、何回か調査をしていくつもりである。第一に、明示的な形式を持たない、アクセントや、音調などによる焦点化標示については、ほとんど調べることができなかった。

今後は、焦点化された要素に特殊な音象徴が付加されるか否かという観点から、焦点化されない場合と対照させながら、考察していく必要がある。

### 略号一覧

1	話し手人称	
2	聞き手人称	
3	第三者人称	
-	接辞境界	
=	接語境界	
.	文境界（ラワン語例文欄）	
/	グロスを複数つけるときの境界（グロス欄）	
?	疑問文境界	
,	文以外でポーズが置かれる境界	
*	話者によって不適格と判断された文	
ABL	ablative	起格
ACC	accusative	対格
CL	classifier	類別詞
CNMLZ	clausal-nominalizer	節名詞化子
COM	commutative	共格
CONJ	conjunctive	接続（ある地点へ向かう移動）
COP	copula	コピュラ
DIR	direction	方向
DISJ	disjunction	離接（ある地点から離れる移動）
ERG	ergative	能格
INT	intention	意図
INTJ	interjection	間投詞
INTR	intransitive	自動詞
N1	non-1st.person	一人称以外
NEG	negative	否定
NPT	non-past	非過去
PFV	perfective	完了
PN	proper noun	固有名詞
PT	past	過去
PURP	purpose	目的

Q	question	疑問
REFL	reflexive	再帰
RPT	recent past	近過去
SFP	sentence final particle	文小辞
SG	singular	単数
TOP	topic	主題
TR	transitive	他動詞

### 参考文献

- Bosson, Georg. 1985. *Empirische Universalienforschung. Differentielle Objektmarkierung in der neuirischen Sprachen*. Tübingen: Narr.
- 多吉, 孙宏开 (2009) 『独龙语的基本特点和方言土语概况』北京: 民族出版社.
- LaPolla, Randy J. (2000) Valency-changing derivations in Dulong-Rawang. *Changing valency: Case studies in transitivity*, ed. by R. M. W. Dixon & Alexandra Y. Aikhenvaid, 282-311. Cambridge: Cambridge University Press.
- Morse, Robert H. (1965) 'Syntactic frames for the Rvwang (Rawang) verb.' *Lingua* 15:338-369.
- Morse, Stephan A. (1989) Five Rawang dialects compared plus more. In D. Bradley, E. J. A. Henderson, and M. Mazaudon (eds.), *Prosodic analysis and Asian linguistics: To honour R K Sprigg*, pp. 237-250. *Pacific Linguistics C-104*. Canberra: Australia National University.
- 西山佑司 (2002) 「自然言語の二つの基本構文...コンピュータ文と存在文の意味をめぐって」『西洋精神史における言語観の諸相』 45-69.
- Sun, H., Liu, G, Li, F., Thurgood, E., & Thurgood, G (2009) *A grammar of Anong: Language death under intense contact*. Leiden: Brill.
- 時崎久夫 (2002) 「日英語のうなぎ文」『日本言語学会第124回大会(2002年6月15, 16日, 東京外国語大学)予稿集』 84-89.



## ラオ語の情報構造と名詞述語文調査例文

鈴木 玲子

## 1. はじめに

ラオ語の情報構造と名詞述語文について、調査シートに従って以下に言語データを示す。インフォーマントは、シースター・ホーラーヌパープ氏(女性)。1995年、ラオスの首都ビエンチャンに生まれ、同地で育った後、2015年10月より日本に在住している。

ラオ語文中の( )は、( )の語彙があってもなくても意味は同じ、ということを示す。〈 〉はない方がよい、という意味である。また、日本語に対応するラオ語語彙が複数ある場合は{.../.../...}とし、どの語彙を使ってもよい、ということを示す。ラオ語は個人差が著しい言語である。本データは、インフォーマントが日本語文に最も近く、自然でよく話す形であるとした文のみを挙げたが、構文が異なるラオ語文が複数個あり、いずれも使用許容度が同じである、という場合は文頭番号の後に a, b, c... を付す。また、日本語逐語訳の〈 〉は文法的機能を表す。日本語文頭の番号は、他言語と対照しやすいように、もとの調査シートと同じ番号を付しておく。音韻表記は鈴木(2006)に従う。

## 2. 例文調査

[1] (昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

1) húi?, nõoy máa wǎa?

[えっ][ノイ][来る][～の]

「えっ、ノイが来たの？」

2) boo, boo meen nõoy. dǎen (máa).

〈否定辞〉〈否定辞〉[正しい][ノイ][デーン][来る]

「いや、ノイじゃなくてデーンが来たんだ。」

対比焦点である「デーン」に、特にそのこと示すマーカ―はつかない。また、動詞「来る」はあってもなくても使用許容度は同じである。

[2] 3) meen phǎy máa?

[正しい][誰][来る]

「誰が来た？」

4) nôøy <máa> .  
[ノイ][来る]  
「ノイが来たよ。」

3)の WH 焦点である「誰」の前には、とりたて機能としての「mɛɛn」を置く。また、4)の WH 応答焦点である「ノイ」にはマーカ―は何もつかない。そしてその際、述語動詞の「来る」はない形の方がよい。

[3] (ノイとデーンの背について話している状況で)

5) nôøy jay kuwaa bɔɔ mɛɛn wǎa?  
[ノイ][大きい][より～]<否定辞>[正しい]<文末詞>  
「ノイの方が大きいんじゃないの？」

6) bɔɔ naʔ, bɔɔ mɛɛn nôøy, dɛɛŋ jay kuwaa.  
<否定辞><文末詞>, <否定辞>[正しい][ノイ][デーニ][大きい][より～]  
「いや、ノイじゃなくて、デーニの方が大きいんだよ。」

[4] [電話で]

7) míi nǎŋ bɔɔ ?  
[ある][何]<文末詞>  
「どうした (の) ?」

8) ʔəə, phóɔdii míi khèek máa  
[うん][ちょうど][ある][客][来る]  
「うん、今、お客さんが来たんだ。」

[5] 9) déknôøy nân tíi nôøy wǎa ?  
[子ども][あの][叩く][ノイ]<文末詞>  
「あの子供がノイを叩いたんだって!？」

10) bɔɔ naʔ, bɔɔ mɛɛn nôøy, dɛɛŋ (phún) náa.  
<否定辞><文末詞><否定辞>[正しい][ノイ][デーニ][あの]<文末詞>  
「いや、ノイじゃなくて、デーニを叩いたんだよ。」

10)では、対比焦点である「デーニ」の後ろにとりたて機能としての指示詞「phún」を入れてもよい。入れても入れなくても使用許容度は同じである。

[6] (目的語, 特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)

11) mii thǒŋ sǐ dǛɛŋ káp sǐ fāa, si? sǐuu tǔo dǎy?

[ある][袋][色][赤い][と][色][青い] <未然>[買う]<類別詞>[どの]

「赤い袋と青い袋があるけど, どっちを買う?」

12) <si? sǐuu thǒŋ> sǐ fāa

<未然>[買う][袋][色][青い]

「青色(袋を買うよ).」

12)では, 対比焦点である「青色」のみを答える形が最もよい. 次に「青い袋」, 「青い袋を買うつもり」という順である.

[7] (例えば, 朝少し遅く起きて来たノイの父親が, 姿の見えないノイについて母親に尋ねている場面で)

13) nǒoy dǛe?

[ノイ]<文末詞>

「ノイはどうした?」

14) ʔòok pǎy sǎy bú? tɛe sǎw phūn na?

[出る][行く][どこ]<文末詞>[~から][朝][あの]<文末詞>

「朝からどっかへでかけたよ。」

14)のように述語焦点の場合, 主語は言わない.

[8] 15) (dǛéknǒoy nǎn) tǐi pǎy?

[子ども][あの][叩く][誰]

「(あの子供は) 誰を叩いたの?」

16) (tǐi) nǒoŋsǎay khǒŋ tǔoʔǛɛŋ

[叩く][弟][~の][自分]

「自分の弟を叩いたんだ。」

[7]と同様に, 疑問文に「あの子供」があっても 16)の回答文では不要である. 「叩く」はあってもなくても使用許容度は同じである.

[9] (例えば、電話の向こうで子供の泣き声がかきたのを聞いての発話)

17) mǐi pǎŋ bǎo?

[ある][何]<文末詞>

「どうした (の) ?」

18) ʔǎə, nǒy tǐi nǒy sǎay (khǒŋ tǒoʔɛŋ)

[うん][ノイ][叩く][弟][の][自分]

「うん、ノイが (自分の) 弟を叩いたんだ。」

[8]は、「誰を」叩いたかに焦点があるので、WH 応答焦点では「弟」だけではなくて、「自分の」をつけて誰の弟かを明確に述べる必要があるが、[9]は、文全体に焦点があり、「弟」と言えば、常識的に考えてまず、自分の弟を指すので、誰の弟かを特に述べる必要はない。

[10] 19) khék nǎn dǛe?

[ケーキ][あの]<文末詞>

「あのケーキ、どうした?」

20) ʔǎo (ʔǎnnǎn) nǒy kǐn lǛew dé?

[ああ][あれ][ノイ][食べる]<完了><文末詞>

「ああ、(あれは) ノイが食べちゃったよ。」

20) では、目的語主題化の「ケーキ」は言わない。敢えて言う場合は、「ケーキ」の代わりに指示代名詞「あれ」を使う。

[11] 21) khǒy sǐtu máa tɛɛ hǎan mǐtuwǎannǐi mɛɛn pǐum nǐi

[私][買う][来る][から][店][昨日]<コンピュータ>[本][この]

「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」

[12] 22) phǐu nǎn {pǎn/mɛɛn} ʔǎacǎan, hetwǐak yuu hóonhǎan nǐi sǎam pǐi lǛew

[人][あの]<コンピュータ>[先生] [働く][で][学校][この][3][年]<完了>

「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

ラオ語の名詞述語文「<名詞句1>は<名詞句2>だ」は、「<名詞句1>は<名詞句2>に属している」という場合は「pǎn」を、「<名詞句1>、即ち<名詞句2>のことである」という場合は「mɛɛn」を使う。また、例22)後半の「この学校で～」文では、「あの先生」は言わない。

- [13] 23) phoo khǒng láaw meen phuu nân  
 [父][の][彼]<コピュラ><類別詞>[あの]  
 「彼のお父さんは、あの人だ。」

[12]と異なり「pěn」は使えない。

- [14] 24) phuu nân {pěn/meen} phoo khǒng láaw  
 <類別詞>[あの]<コピュラ>[父][の][彼]  
 「あの人が彼のお父さんだ。」

「pěn」「meen」のどちらを使用するかは、[12]で述べた話し手の発話意図に拠る。

- [15] 25a) mǔuuhǔuu hàn mǎaykhuwáam waa mǔuu tɔɔpǎy khǒng mǔuuʔuuum dáy  
 [あさって][その][意味である] <引用>[日][次][~の][明日] <文末詞>  
 25b) mǔuuhǔuu hàn mǎaythǔuŋ mǔuu tɔɔpǎy khǒng mǔuuʔuuum dáy  
 [あさって][その][意味である][日][次][~の][明日] <文末詞>

「(~という)意味である」という動詞表現「mǎaykhuwáam waa」あるいは「mǎaythǔuŋ」を使う。次のような名詞述語文を作って言えないこともない。

- 25c) mǔuuhǔuu hàn meen mǔuu tɔɔpǎy khǒng mǔuuʔuuum dáy  
 [あさって][その]<コピュラ>[日][次][~の][明日] <文末詞>  
 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

いずれの文も、「あさって」の後ろにとりたて機能の指示詞「hàn」を入れるという特徴がある。

- [16] (何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて)  
 26) khòy ʔǎw kǎafée  
 [私][要る][コーヒー]  
 「私はコーヒーが要る。」

他動詞「ʔǎw (要る)」を使う。日本語ではウナギ文が使えるが、ラオ語では具体的な動詞を使わなければならない。

[17] (注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに)

27) khòy

[私]

「(コーヒーは) 私だ。」

「私」という一語文が一番よい。次は[16]と同じ「khòy ʔăw kăafée (私はコーヒーが要る)」がよい。

[18] 28) púm may may năa năa hàn phéer

[本][新しい][新しい][厚い][厚い][その][高い]

「その新しくて厚い本は高い。」

「新しくて厚い」が「本」を修飾していることを明確にするために、「新しい」「厚い」を各々2回繰り返す。一語のみでも後ろに「その」があるので、1つの名詞句の塊と解釈できるが、2回繰り返す形を好む。また、「その」は強めに言って、その後は少しポーズを置いてから述語の「高い」を述べる。

[19] [砂糖の入れ物を開けて]

29) ʔăaw, nâmtăan mót lêew

[あっ][砂糖][無い]<完了>

「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

[20] 30) tǎnléer khúuu waa cá? phop phăy nô, mēen phăy kó?,

[午後][はずだ]<引用><未然>[会う][誰]<文末詞><コピュラ>[誰]<文末詞>

ʔôo mēen lêew! nôoy dáy nô?

[あっ][そうだ]<完了>[ノイ]<文末詞><文末詞>

「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！ ノイだったな。」

[19]の意外性も [20]の思い出しもいずれも動詞句の最後にその場面に至ったという意味の「lêew」を置く。

#### 参考文献

鈴木玲子. 2006. 「ラオ語の名詞句」『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』pp.119-153. 東南アジア諸言語研究会編, 慶應義塾大学言語文化研究所

## クメール語

上田 広美

アンケートに従って、以下に言語データを示す。発話の状況によってさまざまな表現があり得るが、以下では代表的な表現のみ<sup>1</sup>を挙げた。以下、本稿の表記は音韻表記で、坂本(1988)に従う。

- [1]      soophaat   mòok      ruuu  
           (人)<sup>2</sup>    来る      (末)  
           <ソパートが来たの?>
- mun mèen              soophaat   tèe      kuuu      sòmnaaj  
           (否)                      (人)      (末)      (コ)      (人)  
           <ソパートじゃない。ソムナーンだ>

一般疑問文には疑問を表す文末詞のいずれかを付加する。疑問を表す文末詞は、/ruuu/と/tèe/の2種類があり、その連続/ruuu tèe/も用いられる。意外性を表す疑問文には/ruuu/が付加される。/tèe/は、聞き手の予想を裏切る内容の文に付加されやすく、否定文の文末に頻出する。

- [2]      nèak naa   mòok  
           誰            来る  
           <誰が来たの?>
- soophaat   mòok  
           (人)            来る  
           <ソパートが来た>

疑問詞疑問文は文末詞を必要としない。

<sup>1</sup> クメール語データは、バン・ソバタナ氏にご提供いただいた。ご協力に深く感謝する。

<sup>2</sup> 逐語訳に以下の略号を用いる。(完)完了を表す、(関)名詞修飾節の始まりを表す、(コ)コピュラ、(末)文末詞、(否)否定詞、(人)人名。

[3] soophaat kpòh cèəŋ ruuu  
 (人) 高い より (末)  
 <ソパートの方が背が高いの？>  
 muun mèen tèe sòmnaaŋ kpòh cèəŋ  
 (否) (末) (人) 高い より  
 <いいえ、ソムナーンの方が背が高い>

[4] kaət ʔəj nuŋ  
 生じる 何 それ  
 <どうしたの？>  
 mèən pniəv mòək  
 ある 客 来る  
 <お客さんが来た>

口語では、疑問詞疑問文の文末に指示詞/nuŋ/が付加されることが多い。

[5] vèə vèəj soophaat  
 彼 叩く (人)  
 <あの子がソパートを叩いたの！？>  
 vèə muun mèen vèəj soophaat tèe  
 彼 (否) 叩く (人) (末)  
 <あの子はソパートを叩いたんじゃない>  
 vèə vèəj sòmnaaŋ  
 彼 叩く (人)  
 <あの子はソムナーンを叩いたんだ>

日本語の「その人」、「あの子」などは3人称代名詞で表される。一般に、人を表す名詞を指示詞で修飾すると非礼であると考えられる。3人称代名詞は、/kaət/と/vèə/があり、大人には男女を問わず/kaət/を、子どもや動物や物には/vèə/を用いる。

[6] mèən thəŋ krəəhəəm nuŋ thəŋ khiəv  
 ある 袋 赤い と 袋 青い  
 <赤い袋と青い袋がある>

jòk muoj naa  
 取る 1 どれ  
 <どっちを買う？>

knom jòk ʔaa khiəv  
 私 取る の 青い  
 <私は青いのを買う>

形容詞や指示詞や数詞に修飾される名詞の代用として/ʔaa/を用いることができる。ただし、所有関係を表す場合には用いることができない。

[7] soophaat təv naa  
 (人) 行く どれ  
 <ソパートはどこに行った？>  
 ʔot dəŋ vèə təv naa bat taŋ pii pròolum  
 (否) 知る 彼 行く どれ 消える から 早朝  
 <あの子は早朝からどこかに行った>

[8] vèə vèj nèək naa nuŋ  
 彼 叩く 誰 それ  
 <あの子は誰を叩いたの？>  
 vèə vèj pʔoon proh vèə  
 彼 叩く 弟 彼  
 <あの子は自分の弟を叩いた>

[9] kaət ʔəj nuŋ  
 生じる 何 それ  
 <どうしたの？>  
 soophaat vèj pʔoon proh vèə  
 (人) 叩く 弟 彼  
 <ソパートが弟を叩いた>

[10] nòm baaraŋ bat təv naa ʔoh haəj  
 ケーキ 消える 行く どれ 尽きる (完)  
 <ケーキ, どうした？>

soophaat nam ʔoh haəj  
 (人) 食べる 尽きる (完)  
 <ソパートが食べてしまった>

- [11] ʔaa muoj dael kɲom tɛɲ pii haan pii msəl məɲ  
 の 1 (関) 私 買う から 店 昨日  
 kuuu siəvphəv nih  
 (コ) 本 これ  
 <私が昨日お店から買って来たのはこの本だ>

名詞文には、/kuuu/と/cəə/とその連続の/kuuu cəə/が現れ得る。/kuuu/は「即ち」と言い換える場合に用いられ、前後の名詞を入れ替えることができる。口語では、コンピュータの位置にいずれの語も現れないことが多い。

- [12] kɔət cəə kruu bəŋriən  
 彼 (コ) 先生  
 <彼は先生だ>  
 kɔət tvəə kaa nəv saalaa nih bəj cnam haəj  
 彼 働く で 学校 これ 3 年 (完)  
 <彼はこの学校でもう3年働いている>

名詞文の/cəə/は属性を表し、前後の名詞を入れ替えることができない。代名詞や指示詞は常に主語となる。

- [13] ʔəvpòk kɔət kuuu cəə ʔom mnèək nuh  
 父 彼 (コ) 伯父 一人 それ  
 <彼のお父さんは、あの人だ>

- [14] ʔom mnèək nuh kuuu cəə ʔəvpòk kɔət  
 伯父 一人 それ (コ) 父 彼  
 <あの方が彼のお父さんだ>

- [15] khaan sʔæk kuuu cəə tɲaj bəntəp pii sʔæk  
 あさって (コ) 日 次 から 明日  
 <あさっては、あしたの次の日のことだ>

- [16] kɲom jòək kaafee  
私 取る コーヒー  
<私はコーヒーだ>
- [17] kɲom nèək hav kaafee  
私 人 呼ぶ コーヒー  
<私がコーヒーを頼んだ者だ>
- [18] siənpʰəv krah tməj nuh tlaj  
本 厚い 新しい それ 高い  
<その新しくて厚い本は高価だ>

形容詞「厚い」と「新しい」は入れ替えることができる。名詞修飾節に指示詞が含まれる場合には、指示詞は常に節末に位置する。

- [19] ʔəh skəw rəoliŋ  
尽きる 砂糖 全く  
<砂糖が無くなっている>
- [20] kɲom mən nat cuop cəə muoj nèək naa muoj  
私 ある 約束する 会う と 誰 1  
<誰かに会うはずだった>  
nèək naa nuŋ  
誰 それ  
<誰だったっけ>  
ʔoo nuək khəəŋ haəj cəə muoj soophaat  
ああ 想う 見える (完) と (人)  
<ああ、思い出した。ソパートだった>

#### 参考文献

坂本恭章. 1988. 「クメール語」, 『言語学大辞典第1巻世界言語編(上)』, pp. 1479-1505 三省堂.



## マレーシア語の焦点表現と名詞述語文\*

野元 裕樹, アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー

## 1. はじめに

本稿では、特集のアンケート項目に基づき、マレーシア語の焦点表現と名詞述語文について概観する。それぞれ第2節、第3節で扱う。アンケート項目のうち、これらの節で議論されないものは、第4節に収録する。特集アンケートでの例文番号は【 】に入れて示す。

本稿で示すデータは、マレーシア国内の地域方言の差を超えて使われる、マレーシア語の標準方言のものである。標準方言においては、書き言葉と話し言葉があり、2つの変種間の差は大きく、ダイグロシヤ状況を生んでいる。本稿のデータは基本的に話し言葉のものである。特に、もっぱら書き言葉で用い、話し言葉ではあまり用いない文については、その旨を示す。例文はアズヌール・アイシャが特集アンケートの日本語文に基づいて作った。また、文のイントネーションを示すピッチ曲線図もアズヌール・アイシャの発話に基づくものである。

## 2. 焦点表現

焦点 (focus) とは、直感的に言えば、文の意味のうち、聞き手の注意をそこに集めるために、話者が取り立てて提示している部分のことである。そのため、日本語学では「取り立て」と呼ばれたりする。例えば、健が直美と食事した、という一つの事態を考えよう。どの部分を取り立てるかによって、話者は様々な表現の中からふさわしいものを選択できる。直美に好意を抱いている、健の親友が健の裏切りとも取れる行為に失望して、この事実全体を取り立てて伝える場合の表現形式は、(A) (「どうしたの?」—)「健が直美と食事した (んだ)」だろう。この状況では、(B)「健は直美と食事した」は、伝えられる事態は同じだが、意味的に不適格となる。同じ状況でも、直美と食事したことがあるのが健だけで、自分は食事したことがない、というように、自分との対比で健を取り立てて伝える場合には、(B)が適格で(A)は不適格になる。いずれも、生じている事態は同じであるので、異なる表現形式が伝える意味の違いは、文の論理的意味 (真理条件) に関わるものではなく、その提示の仕方 (「情報のパッケージング」(Chafe 1976), 情報構造) に関わるものである。

---

\* 本研究は JSPS 科研費 26770135 の助成を受けたものである。ピッチ曲線図の作成にあたっては、マレーシア国民大学の Shirley Anak Langgau 氏の協力を得た。ここに感謝の意を記したい。

上の例に見て取れるように、焦点表現は疑問詞疑問文とその返答や対比の文脈で顕在化することが多い。何かを取り立てるには、その何かと同一範疇の取り立てられないものの存在が前提となるからである。疑問詞疑問文の意味は普通、その答えの候補 (alternative) となる命題の集合であると分析される (Hamblin 1973)。例えば、「誰が直美と食事したの？」という文の場合、前段落のミニ会話の話者を「聡」とすると、その意味は{聡が直美と食事した、健が直美と食事した、仁が直美と食事した、...}となる。疑問詞疑問文の答えは、その中の1つが真であることを明言する。対比も同様に、候補の集合が関与する意味現象である (Rooth 1992)。焦点となる部分以外(「背景 (background)」という)の特徴を満たし得る候補の集合があって、その中の特定の候補と他の候補が対比される。前段落の2つ目の事例では、健と話者はともに直美と食事をする可能性がある候補だが、当該の文により健が直美と食事をしたことが明言される。それにより、明言されていない、話者自身は直美と食事をしていないということが含意される。

以下、焦点となる部分の意味タイプごとに、マレーシア語での表現のされ方を見ていく。2.1-2.2節では焦点が項(=事態の参与者)の場合、2.3節では焦点が述語(=動作、状態、特徴)の場合、2.4節では焦点が命題(=平叙文が伝える意味内容)の場合を扱う。項焦点は、対比の効果が前面に出るもの(2.1節)と疑問詞疑問文とその返答(2.2節)に分け記述する。

## 2.1. 項焦点：対比

項を焦点とする場合、(1)のように、明示的な主名詞を伴わない、自由関係節 (yang ~) を主語とし、焦点となる項の名詞句が述語部分に来るような擬似分裂文が多用される。日本語で主語が焦点となる場合のほとんどが、述語を焦点とする擬似分裂文で表される(主語のまま焦点化される例は、(4c)を参照)。この構文は、日本語では「～なのは、NP<sub>焦点</sub>だ」という形式に相当する。述語部分には、さらに、肯定の焦点小辞 lah が生起することも多い<sup>1</sup>。(1b)は、(1a)の述語部分が前置したものである。

---

<sup>1</sup> 筆者の知る限り、最初に小辞 lah を焦点に関係するものとして記述したのは Mashudi (1981)である。Mashudiは他に、小辞 kah, tah, pun も焦点の形態素 (focus morpheme) と呼んでいる。Nomoto (2006)はさらに pula, juga も焦点小辞と呼んでいる。いずれも焦点との関連付けの根拠は、焦点前置 (focus fronting) という統語現象である。しかし、本稿で見ると、意味的にも焦点と密接な関連がある。

- (1) a. Yang saya beli di kedai semalam tu, buku ini(-lah).<sup>2</sup> [11]  
 REL 1SG buy at shop yesterday that book this-LAH  
 b. Buku ini(-lah) yang saya beli di kedai semalam tu.  
 book this-LAH REL 1SG buy at shop yesterday that  
 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」

明示的な対比を伴う、下の例でもやはり、(2a-b)のように、自由関係節による擬似分裂文を用いるのが、最も自然である。(2a)と(2b)の lah は、タイプが異なる。(2a)の lah は、述語である Razmi でなく、文全体に付加している談話小辞である。一方、(2b)の lah は上の(1)の lah と同様、述語部分に付加する肯定の焦点小辞である<sup>3</sup>。

- (2) Eh, Razak pun datang? [1]  
 oh Razak also come  
 a. Tak. Bukan Razak, Razmi yang datang-lah.  
 no not Razak Razmi REL come-LAH  
 b. Tak. Bukan Razak, Razmi(-lah) yang datang.  
 no not Razak Razmi-LAH REL come  
 c. #Tak. Bukan Razak, Razmi datang-lah.<sup>4</sup>  
 no not Razak Razmi come-LAH  
 d. ?Tak. Bukan Razak, Razmi(-lah) datang.  
 no not Razak Razmi-LAH come  
 「えっ、ラザクも来たの？—いや、ラザクじゃなくてラズミが来たんだ。」

(2c-d)のように、関係詞 yang による擬似分裂文構造を取らない場合、小辞 lah の種類により、容認性に違いが生じる。(2c)のように、談話小辞の lah をとる場合、この文脈では容認不可能である。一方、焦点小辞の lah を含む、(2d)は、yang がある場合に比べ、容認度が下がるものの、容認可能である。また、yang がない代わりに、焦点部である Razmi に続く

<sup>2</sup> 本稿で用いる略号は Leipzig Glossing Rules に従う。

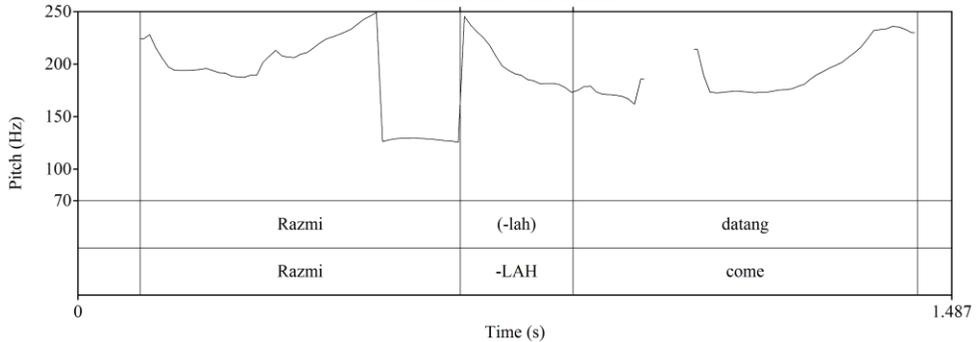
<sup>3</sup> 小辞 lah の機能については、Goddard (1994)が詳しい。

<sup>4</sup> 「#」は当該の文が統語的には文法的であるものの、意味的に不適格であることを示す。この文は、次のような対比を伴わず、Razmi が焦点化されない文脈では自然である。

- (i) Razmi tak datang ke?— Tak. Razmi datang-lah.  
 Razmi not come Q no Razmi come-LAH  
 「ラズミは来なかったの？—ううん。ラズミは来たよ。」

lah に下降調のイントネーションを伴わなければならない。

(3) (2d)のピッチ曲線図



(4)も明示的な対比を行う文である。しかし、上の(2)と違い、焦点構造の背景部分（「背景」の概念については第2節冒頭の説明を参照）が動詞句でなく、形容詞句である。(2)では容認度が低かった、(4c-d)のような、関係詞 yang による擬似分裂文構造を取らない形式が容認されるのは、このためであろう。

(4) Bukan-kah Razak punya lagi besar? 【3】

not-Q Razak POSS more big

- a. Tak. Bukan Razak, tapi Razmi punya yang lagi besar-lah.  
no not Razak but Razmi POSS REL more big-LAH
- b. Tak. Bukan Razak, tapi Razmi punya(-lah) yang lagi besar.  
no not Razak, but Razmi POSS-LAH REL more big.
- c. Tak. Bukan Razak, tapi Razmi punya lagi besar-lah.  
no not Razak but Razmi POSS more big-LAH
- d. Tak. Bukan Razak, tapi Razmi punya(-lah) lagi besar.  
no not Razak, but Razmi POSS-LAH more big.

「ラザクの方が大きいんじゃないの？—いや、ラザクじゃなくて、ラズミの方が大きいんだよ。」

(4c)と(4d)では、統語構造とイントネーションが異なる。談話小辞の lah を取る(4c)では、焦点部分の Razmi punya は主語であり、非述語部を特徴付ける、上昇調のイントネーションで読まれる。一方、焦点小辞の lah を取る(4d)では、焦点部分の Razmi punya は述語であり、上の(2d)と同様の下降調のイントネーションを伴う。いずれも Razmi punya が焦点であ

ることから、イントネーションの違いは焦点構造でなく、統語構造と相関していることが分かる。

(2)と(4)では、焦点部が擬似分裂文を用いなければ、主語の位置にあった。次の(5)–(6)は、焦点部が目的語の部分にある例である。この場合、(a)のような通常の平叙文でもよいし、(b)–(c)のような擬似分裂文でもよい。(c)で lah がいない場合には、やや長めのポーズが入る。このポーズはコンマにより表記されることもある。

- (5) Betul ke budak itu menampar Razak? 【5】  
 true Q kid that slap Razak  
 a. Tak. Bukan Razak. Budak itu menampar Razmi(-lah).  
 no not Razak kid that slap Razmi-LAH  
 b. Tak. Bukan Razak. Razmi(-lah) yang budak itu tampar.<sup>5</sup>  
 no not Razak Razmi-LAH REL kid that slap  
 c. Tak. Bukan Razak. Razmi(-lah) budak itu tampar.  
 no not Razak Razmi-LAH kid that slap  
 「あの子供がラザクを叩いたんだって!?—いや、ラザクじゃなくて、ラズミを叩いたんだよ。」

- (6) Ada beg warna merah dan beg warna biru. Tapi, nak beli yang mana (satu)? 【6】  
 be bag colour red and bag colour blue but want buy REL which one  
 a. Nak beli beg warna biru(-lah).  
 want buy bag colour blue-LAH  
 b. Beg warna biru(-lah) yang saya nak beli.  
 bag colour blue-LAH REL 1SG want buy  
 c. Beg warna biru(-lah) saya nak beli.  
 bag colour blue-LAH 1SG want buy  
 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う(の)? — (私は) 青い袋を買うよ。」

## 2.2. 項焦点：疑問詞疑問文とその返答

マレー語の疑問詞疑問文では、疑問詞が平叙文における項の生起位置と同じ位置に現れる、いわゆる元位置の wh- (wh- in situ) が普通である。疑問詞疑問文でも、焦点となる疑問詞が述語部分に生起する、擬似分裂文を用いることが多い。(7a)がその例である。疑問

<sup>5</sup> (5b–c)では、動詞が裸形の *tampar* で生起する。これは、*menampar* のように能動態標識 *meN-*が付加した動詞形はその目的語の移動を阻止するため、生起できないからである。

の焦点小辞 *kah* は, (7a)のように, 述語部分には生起できるが, (7b-c)のように, 主語に付加することはできない。(7d)では, 焦点となる疑問詞が主語である。

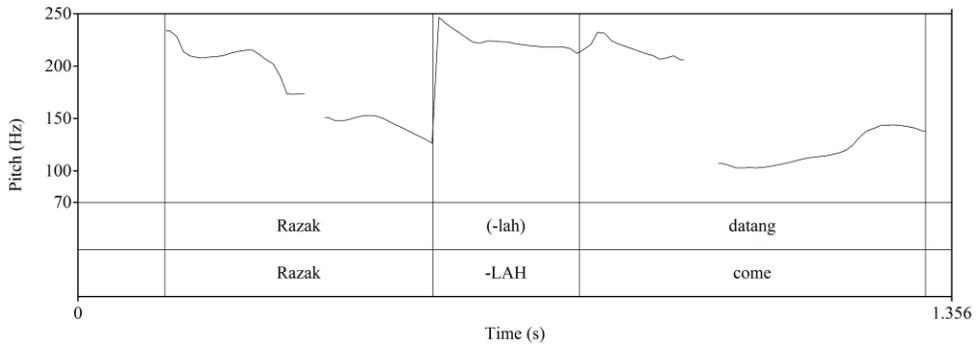
- (7) a. *Siapa(-kah) yang datang?* 【2】  
who-Q REL come  
b. \**Siapa yang datang-kah?*  
who REL come-Q  
c. \**Siapa-kah datang?*  
who-Q come  
d. *Siapa datang?*  
who come  
「誰が来た (の) ?」

(8)は, (7)に対する返答である。(8a-b)は中立的な返答である。疑問詞に対応する返答部の *Razak* が擬似分裂文の述語位置に生起する。

- (8) a. *Razak(-lah) yang datang.* 【2】  
Razak-LAH REL come  
b. *Razak yang datang-lah.*  
Razak REL come-LAH  
c. *Razak-lah datang.*  
Razak-LAH come  
d. #*Razak datang.*  
Razak come  
「ラザクが来たよ。」

一方, (8c)は, 聞き手もラザクのことを知っていることを話し手が知ってることを含意する。もし聞き手がラザクのことを知らずに(8c)が発せられた場合, 「ラザクって一体誰なの?」と問い返したくなるという。さらに, (8c)が返答として成立するには, 焦点部である *Razak* に続く *lah* に下降調のイントネーションが必要となる。これは同様の統語構造を持つ(2d)と同じである ((3)参照)。

## (9) (8c)のピッチ曲線図



(8d)は、Razak を焦点とする、(7)に対する返答としては不適切である。

(10)は、焦点部である疑問詞が目的語の例である。(10a)と(10c)は非分裂文、(10b)は擬分裂文である。疑問詞の統語的ステータスの面では、(10a-b)は元位置の wh-の文、(10c)は疑問詞が前置した文である。(10c)のような文は、文法的ではあるものの、元位置の wh-の文に比べ、実際の使用頻度は低い。

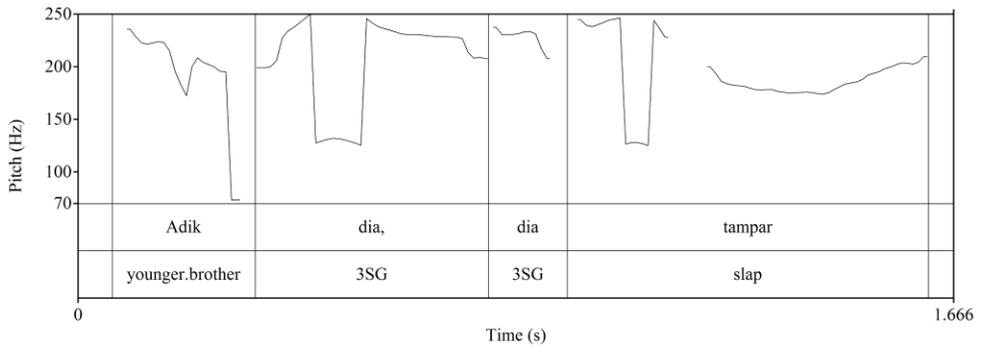
- (10) a. Dia tampar siapa? 【8】  
 3SG slap who  
 b. Siapa(-kah) yang dia tampar?  
 who-Q REL 3SG slap  
 c. Siapa(-kah) dia tampar?  
 who-Q 3SG slap  
 「彼は誰を叩いたの？」

(11)は、上の疑問文に対する返答である。各文の統語構造は、疑問文と対応している。

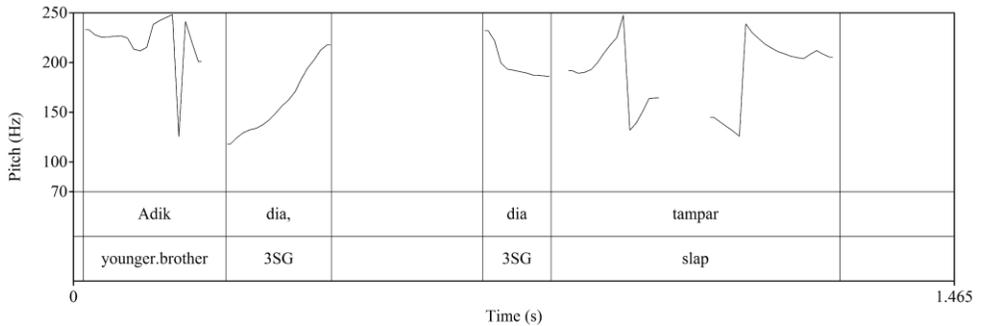
- (11) a. Dia tampar adik dia(-lah). 【8】  
 3SG slap youngersibling 3SG-LAH  
 b. Adik dia(-lah) yang dia tampar  
 youngersibling 3SG-LAH REL 3SG slap  
 c. Adik dia(-lah), dia tampar.  
 youngersibling 3SG-LAH 3SG slap  
 「彼は自分の弟を叩いたんだ。」



## (13) a. (11c)のピッチ曲線図 (adik dia は焦点)



## b. (12b)のピッチ曲線図 (adik dia は主題)



## 2.3. 述語焦点

(14)は、述語全体が焦点となる疑問詞疑問文とその返答である。疑問文と返答(14a)では、通常の平叙文の語順である。(14b)は、焦点部分である動詞句を前置したものである。その結果、述語+主語の倒置文となっている。このような構文は、マレーシア語の表現としては可能であるものの、アイシャ自身は用いない。年配者が好んで用いる印象がある。

(14) Razak tengah buat apa? 【7】

Razak PROG do what

a. Razak dari pagi lagi sudah keluar(-lah).

Razak from morning still already go.out-LAH

b. (\*)Dari pagi lagi sudah keluar(-lah) Razak.

from morning still already go.out-LAH Razak.

「ラザクはどうした？—ラザクは朝からどっかへでかけたよ。」

## 2.4. 命題焦点

命題が焦点となる場合は、特別な構文はなく、(15B)のように、通常の平叙文が用いられる。

(15) [電話で]

【9】

A: Apa yang berlaku?/ Apa dah jadi?  
what REL happen what already happen

B: Hmm, Razak tampar adik(-lah).  
hmm Razak slap younger.brother-LAH

「何があったの？—うん、ラザクが（自分の）弟を叩いたんだ。」

lah がある場合、B は A がラザクがいつも弟を叩くことを知っていると思っている。その結果、例えば、「聞かなくたって分かるでしょう？また、ラザクが弟を叩いたんですよ」のような意味になる。

焦点部分が出来を表す場合、(16b)のような単純な主語＋述語構文でなく、(16a)のような複雑存在文（complex existential sentence; Nomoto 2006）が用いられる。複雑存在文では、存在動詞 ada の後に存在する個体を表す名詞句とその名詞句を項とする述語が続く。

(16) [電話で]

【4】

Kenapa ni?  
why this

a. Hmm, ada tetamu datang(-lah).  
hmm be guest come-LAH

b. #Hmm, tetamu datang(-lah).  
hmm guest come-LAH

「どうしたの？—うん、今、お客さんが来たんだ。」

ちなみに、(16b)のような単純な主語＋述語構文は、例えば次のような文脈では自然である。

(17) A: Kenapa ni? Ada tetamu datang ke?  
why this be guest come Q

B: Hmm, tetamu datang.  
hmm guest come

「どうしたの？お客さんが来たの？—うん、今、お客さんが来たんだ。」

### 3. 名詞述語文

#### 3.1. コピュラ文

マレーシア語には, *adalah* と *ialah* という 2つのコピュラが存在する. ただし, 口語体では, これらのコピュラがなくても, たいてい文が成立する.

2つのコピュラの相違については, マレーシア国内では規範的・教育的な側面からしばしば言及される. 記述的な研究としては, 正保 (2003), Asmah (2009), Uzawa (2009), Yap (2011) などがある<sup>7</sup>. 2つのコピュラに関する筆者の理解は以下の通りである. 基本的には, *adalah* は主語の持つ特性 (property) を説明する. 一方, *ialah* は主語の指示対象と述語の指示対象が同一であることを表したり, 「～は何かと言うと」といったように, 主語が表す特性を持つ個体の正体を明かすときに用いられる. より専門的に述べるならば, A *adalah* B では, 意味的に A は述語 B の項である ( $[[B]]([A])$ ; 措定文 (predicational sentence)). それに対し, A *ialah* B では, A も B も項で *ialah* 自体が 2項の同一性を表す述語のように働く ( $[[A]] = [[B]]$ ; 同定文 (identificational sentence)) か, B が述語 A の項である ( $[[A]]([B])$ ; 指定文 (specificational sentence))<sup>8</sup>. そのため, *adalah* の後にはさまざまな統語範疇が観察されるのに対し, *ialah* の後に生起するのはもっぱら名詞句や文である<sup>9</sup>.

以下に見るように, 実際の使用実態は複雑である. これは名詞句が指示的にも非指示的にも解釈できることが多いことが主な理由である. 以下では, *adalah/ialah* の主語を A, *adalah/ialah* に続く部分を B と呼ぶ. 「述語」という用語は, 主語に対する述語 (文法上の述語) でなく, 項に対する述語 (意味上の述語) の意味で用いる. また, コピュラがある場合とない場合を比較するために, コピュラなしの場合を  $\emptyset$  で示す. 書かれる際には,  $\emptyset$  の位置にコンマが用いられることも多い.

<sup>7</sup> その他, Nomoto (2013a: 129) は, *adalah* が複数名詞の総称解釈を可能にすることを報告している. また, Moeljadi (2015) がマレーシア語と方言関係にあるインドネシア語のコピュラの使い分けについて論じている.

<sup>8</sup> この記述は, 2種類の *ialah* が存在することを意味する. この記述の不経済性を解決する手段の 1つは, A *ialah* B の A の解釈の際にタイプ転換 (Partee 1987) を想定することである. A が述語で B がその項である用法を基本とすると, A が個体を指示するような場合は, その個体と同一であることを表す述語「A であるもの」に転換される. 実際には, A の部分にはこの意味を持つ, 自由関係節 *yang* ~ が生起することが多い. タイプ転換は統語的にこの構文が許されない場合, すなわち「~」の部分が名詞句の場合に, 最後の手段として起こると考えられる. この分析が正しければ, *adalah* と *ialah* の本質的な違いは, 項と述語の登場順序ということになる.

<sup>9</sup> 規範的な記述では, 2つの意味関係の違いよりも, 「*ialah* の後は名詞句», 「*adalah* の後は名詞句以外」のように統語範疇により違いが強調されていることが多い (例えば, Nathesan (2004) など). 前者は間違いではないが, 後者は記述的に不適切である. この規範的規則は学校で教えられており, 意識的にそのように修正する話者も多いようである. その結果, *ialah* の過剰使用が生じる.

### 3.1.1. 措定文

(18)–(20)は、A が指示対象を持つ項で B が述語の例である。(18)では、冒頭の説明通り、*adalah* のみが容認される。

- (18) Buku yang baru dan tebal itu Ø/adalah/\*ialah mahal. 【18】  
book REL new and thick that Ø/ADALAH/IALAH expensive  
「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」

口語であれば、(19)のように、2文目の主語を言わなくても成立する。冒頭の説明によれば、このタイプの文では *ialah* は用いられないはずだが、(19)–(20)では容認される。*cikgu* と *orang Jepun* の解釈が *adalah* の後と *ialah* の後では異なる可能性がある。(20)では、*adalah* と *ialah* では用いる状況が異なる。紹介文中など、*ayah dia* 「彼のお父さん」が初出の場合には *ialah* がよい。それに対し、*Yang mana satu ayah dia?* 「彼のお父さんはどの人？」のような質問に対する返答など、*ayah dia* 「彼のお父さん」が所与 (*given*) の場合には *adalah* がよい。

- (19) Orang itu Ø/adalah/ialah cikgu. Sudah berkerja di sekolah ini 【12】  
person that Ø/ADALAH/IALAH teacher already work at school this  
selama tiga tahun.  
for three year  
「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

- (20) Ayah dia Ø/adalah/ialah orang Jepun.  
father 3SG Ø/ADALAH/IALAH person Japan  
「彼のお父さんは、日本人だ。」

### 3.1.2. 同定文

(21)は、A も B も指示対象を持つ項の例である。この場合も、*ayah dia* 「彼のお父さん」が初出の場合は *ialah*、所与の場合は *adalah* が自然である。

- (21) Ayah dia Ø/adalah/ialah orang itu. 【13】  
father 3SG Ø/ADALAH/IALAH person that  
「彼のお父さんは、あの人だ。」

冒頭の説明では、A も B も指示的な場合には *adalah* は用いられないはずである。しかし、*adalah* が用いられるのは、A が所与の場合、(21)で *adalah* を使った文は2つの指示対象の

同一性を述べているのではなく、ayah dia「彼のお父さん」についてその所在を説明する文だからである。Bの部分の orang itu「あの人」で意味的に重要なのは、修飾要素の直示表現 itu「あれ」であり、主要部 orang「人」は重要ではない。（この場合、orang「人」は ayah「お父さん」から含意され、自由関係節を使って yang itu「あそこにいるの」のようにも言える。）つまり、当該の文の意味は「彼のお父さんはあそこにいる（のだ）」とパラフレーズできる。

(22)は、(21)に基づいた倒置文である。

- (22) Orang itu(-lah) ayah dia. 【14】  
 person that-LAH father 3SG  
 「あの人が彼のお父さんだ。」

(23)は定義文である。adalah も ialah も可能である。(21)と同じようなことなのだろう。すなわち、ialah の場合は、lusa が指す日と hari selepas esok が指す日の同一性を述べることで、lusa を定義する。それに対し、adalah の場合は、B の名詞句のうち、A の lusa「あさって」により含意される hari「日」は無視され、修飾要素の selepas esok「明日の後の」だけが解釈されるような形になる。つまり、adalah を使う文の意味は、Lusa itu adalah selepas esok「あさってというのは明日の後だ」でパラフレーズできる。adalah 文は被定義項の持つ特性を述べることで、定義を行うというわけである。

- (23) Lusa itu Ø/adalah/ialah hari selepas esok. 【15】  
 day.after.tomorrow that Ø/ADALAH/IALAH day after tomorrow  
 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

ちなみに、lusa itu「あさってというのは」の itu は、「あの、その」という通常の指示詞の用法でなく、「(その)～というのは」のように、先行する名詞句の指示対象を発話行為参与者に何らかの関係があるものとして扱うことで、より主観的に述べる用法である。

以下の(24)–(25)は、A と B が同一人物の別名であるような例である<sup>10</sup>。Lat は、マレーシアの有名な漫画家で、Mohammad Nor Khalid は彼の実名である。Datuk は称号である。(24)のように、A がペンネーム、B が実名の場合、ialah のみが可能である。これは冒頭の説明通りである。それに対し、(25)のように、A が実名、B がペンネームの場合、ialah だけでなく adalah も容認される。adalah を用いる場合には、Lat は「ラットというペンネームを

<sup>10</sup> Higgins (1979)は、このタイプの文を同一性文 (identity sentence) と呼び、同定文 (identificational sentence) と区別する。

持つ」とか「(あの有名な漫画家の) ラットである」という述語として機能していると考えられる。

(24) Lat \*Ø/\*adalah/ialah Datuk Mohammad Nor Khalid.  
Lat Ø/ADALAH/IALAH Datuk Mohammad Nor Khalid.  
「ラットはダト・モハンマド・ノー・カリッドだ。」

(25) Datuk Mohammad Nor Khalid \*Ø/adalah/ialah Lat.  
Datuk Mohammad Nor Khalid Ø/ADALAH/IALAH Lat  
「ダト・モハンマド・ノー・カリッドがラットだ。」

これらの文で興味深いのは明示的なコピュラが義務的な点である。adalah/ialah のない文は、たとえ A と B の間にポーズがあっても不適合である。このようなケースがあるので、Øを単に adalah や ialah の省略と考えるべきではない<sup>11</sup>。

### 3.1.3. 指定文

(26)は、特性を表す名詞句が主語に来る例である。この場合、(26d)のように専用の yang ... tu 構文を用いる。

(26) a. #Orang Jepun ayah dia.  
person Japan father 3SG  
b. \*Orang Jepun adalah ayah dia.  
person Japan ADALAH father 3SG  
c. #Orang Jepun ialah ayah dia.  
person Japan IALAH father 3SG  
d. Yang orang Jepun tu ayah dia.  
YANG person Japan TU father 3SG  
「日本人 (なの) は、彼のお父さんだ。」

(26a)のように、単純に特性を表す部分を前に置いた文は、別の解釈であれば容認される。1つ目は、「彼のお父さんは日本人だ」という意味の倒置文としてである (cf. (22))。2つ目は、orang Jepun「日本人」が特性でなく個体を指し、文脈上特定されるある日本人が ayah dia

---

<sup>11</sup> 同様のことが、能動態標識 meNが生起しない能動文や、類別詞が生起しない数量名詞句についても言える (Nomoto 2013b)。

「彼のお父さん」と同一人物であることを表す文としてである。(26c)は, orang Jepun「日本人」が総称的に解釈され,「一般に日本人であれば,その人は彼のお父さんである」という,かなり特殊な解釈ならば容認可能である。

(26d)の yang ... tu 構文は口語体に特有な表現である。関係節の主名詞に音形を持った名詞句が生起せず,指示詞の(i)tuが「その」という指示性を失って,一つの構文となったものである。音形を持った主名詞と指示性を保った ituが生起する例は,(18)を参照されたい。

特性を表す部分が名詞以外の場合は, yang ... tu 構文のような特殊な構文でなく,通常の yang 自由関係節を用いることができる。

- (27) Yang penting ialah sokongan dan pengaruh yang di-curahkan-nya kepada  
 REL important IALAH support and influence REL PASS-put.in-3SG to  
 apa yang di-gerakkan oleh Tun Mahathir untuk menyingkirkan Najib.  
 what REL PASS-move by Tun (title) Mahathir to expel Najib  
 「重要なのは,ナジブを辞めさせるためにトゥン・マハティールが推進してきたこと  
 に対して彼(=アヌワル)が捧げてきた支持と影響力である。」  
 (<http://shahbudindotcom.blogspot.jp/2016/03/ketepikan-cerita2-lama-beban-semasa.html>,  
 アクセス日 2016/05/17)

形容詞句は述語として機能するものの,本来ならば主語位置に立つことができない。しかし,自由関係節により,その述語の意味をそのまま保ったまま,名詞句の一部として主語位置に生起することができるようになる(注8も参照)。

### 3.2. ウナギ文

いわゆるウナギ文では,主語に(統語上の)述語の表す特性が当てはまるという解釈に加え,語用論的に拡張された解釈が存在する。「私はウナギだ」を例にしよう。前者の解釈は,夏目漱石の『我輩は猫である』のごとく,ウナギである話者が自分の属性について述べる場合である。語用論的に拡張された解釈は,例えば,レストランなどで話者が注文したものがウナギであることを述べる場合である。この場合,「私はウナギだ」は「私{の/は}注文したものはウナギだ」や「私はウナギを注文した者だ」のようにパラフレーズできる<sup>12</sup>。

ウナギ文はマレー語でも可能である。ただし,語用論的に拡張された解釈では, adalah や ialah のようなコピュラは用いることができない。

<sup>12</sup> 西山(2003)は前者のパラフレーズに沿ったウナギ文の分析を提案している。

(28) [何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて]

【16】

Saya Ø/\*adalah/\*ialah kopi.

1SG Ø/ADALAH/IALAH coffee

「私はコーヒーだ。」

同じ状況では、以下のように言うこともできる。

(29) Saya punya, kopi.

1SG POSS coffee

「私のはコーヒーだ。」

(28)–(29)の語順を入れ替えたも可能で、それぞれ(30B), (31)のようになる。(30B)は逆行ウナギ文である。

(30) [注文した数人分のお茶が運ばれて来て]

【17】

A: Siapa yang pesan kopi?

who REL order coffee

B: Kopi (tu) Ø/\*adalah/\*ialah saya.

coffee (that) Ø/ADALAH/IALAH 1SG

「どなたがコーヒーですか？—コーヒーは私だ。」

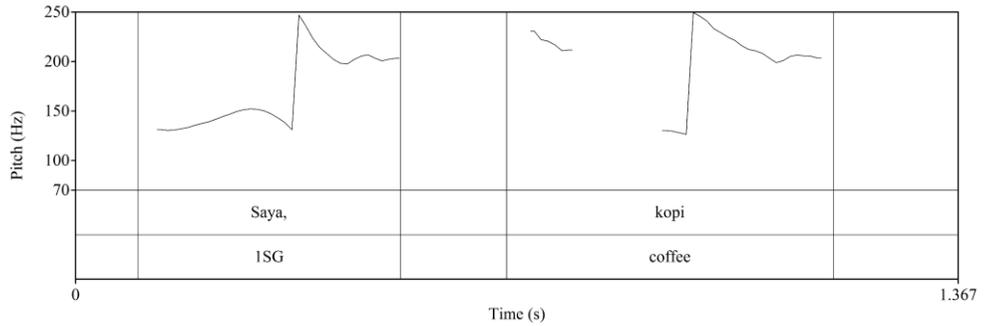
(31) Kopi (tu), saya punya.

coffee (that) 1SG POSS

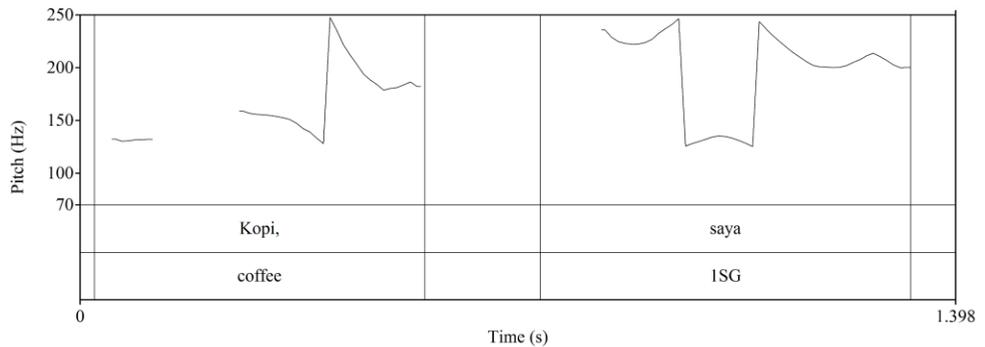
「コーヒーは私のだ。」

(30B)は、「コーヒーだ、私は」という倒置文ではない。これはイントネーションから分かる。述語のイントネーションは、(32a)の kopi のように、終わりから2音節目(ko)が高く、最終音節(pi)が低くなる。自然な会話では、(32a)のように、さらにその後に感情を表すうねりが入る。一方、(30B)の kopi はこのようなイントネーションではなく、むしろ(32a)の主語の saya と同じパターンになっている。

## (32) a. (28)のピッチ曲線図



## b. (30B)のピッチ曲線図



## 4. その他

アンケート項目の残り 2つは意外性 (*mirativity*) に関わるものである。話者の予測に反することを表すには、(33)のように、談話小辞の *lah* や *pula* (口語では *pulak*) を用いることができる。*lah* は、(34)のように、思い出しを表すのにも用いることができる。

## (33) [砂糖の入れ物を開けて]

【19】

- a. Hah, gula dah habis(-lah)!  
oh sugar already finish-LAH
- b. Hah, gula dah habis *pulak*!  
oh sugar already finish PULA  
「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

- (34) Petang ni, sepatutnya harus jumpa seseorang. Siapa ya... Aa, iya-lah! 【20】  
 evening this supposedly should meet someone who yes oh yes-LAH  
 Tanaka(-lah).  
 Tanaka-LAH  
 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！田中君だったな。」

#### 参考文献

- Asmah Haji Omar. 2009. *Nahu Melayu Mutakhir (Edisi Kelima)*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Chafe, Wallace L. 1976. Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics and point of view. In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*, 25–55. New York: Academic Press.
- Goddard, Cliff. 1994. The meaning of *lah*: Understanding “emphasis” in Malay (Bahasa Melayu). *Oceanic Linguistics* 33: 145–165.
- Hamblin, Charles. 1973. Questions in Montague grammar. *Foundations of Language* 1: 41–53.
- Higgins, Francis R. 1979. *The Pseudo-Cleft Construction in English*. Garland.
- Mashudi B. H. Kader. 1981. *The Syntax of Malay Interrogatives*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Moeljadi, David. 2015. Nominal predicate constructions in Indonesian. The 19th International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL 19)での発表論文.
- Nathesan, S. 2004. *Kata Bersinonim dalam Bahasa Melayu*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.
- Nomoto, Hiroki. 2006. *A Study on Complex Existential Sentences in Malay*. 東京外国語大学修士論文.
- Nomoto, Hiroki. 2013a. *Number in Classifier Languages*. ミネソタ大学博士論文.
- Nomoto, Hiroki. 2013b. On the optionality of grammatical markers: A case study of voice marking in Malay/Indonesian. In Alexander Adelaar (ed.) *Voice Variation in Austronesian Languages*, 123–145. Jakarta and Tokyo: Universitas Katolik Indonesia Atma Jaya and Tokyo University of Foreign Studies.
- Partee, Barbara H. 1987. Noun phrase interpretation and type-shifting principles. In Jeroen Groenendijk and Martin Stokhof (eds.) *Studies in Discourse Representation Theory and the Theory of Generalized Quantifiers*, 115–143. Dordrecht: Foris.
- Rooth, Mats. 1992. A theory of focus interpretation. *Natural Language Semantics* 1: 75–116.

- 正保勇. 2003. 「マレーシア語のコピュラ *Adalah* と *Ialah* に関する一考察」『東京外大 東南アジア学 8』, 1-18. 東京外国語大学.
- Uzawa, Hiroshi. 2009. A study on the pragmatic functions of *ialah* and *adalah* in Malay. In Yuji Kawaguchi, Makoto Minegishi and Jacques Durand (eds.) *Corpus Analysis and Variation in Linguistics*, 315-338. Amsterdam: John Benjamins.
- Yap, Ngee Thai. 2011. The structural status of *ialah* and *adalah* in Malay. In *Prosiding Persidangan Linguistik ASEAN (PLA) V (CD-ROM)*.



## インドネシア語の情報構造と名詞述語文

降幡 正志

## 1. はじめに

インドネシア語の情報構造について、Halim(1974) はイントネーションの担う役割に関して興味深い分析を行なっている<sup>1</sup>。同論の中で、Halim は文を構成する「ポーズグループ」(pause group) につき、文法カテゴリーに関わる基底的なピッチパターンの抽象的なモデルとして以下の4つを挙げている (Halim 1974:158)<sup>2</sup>。

- 2-31f 無標の題述 (unmarked comment)
- 2-32f 有標の題述 (marked comment)
- 2-33r 焦点化された主題 (focalized topic)
- 2-11f 焦点化されていない主題 (unfocalized topic)

主題 (topic) と題述 (comment) が1文中で1対1の対応をする場合、その語順によって以下の2つのパターンとなる<sup>3</sup>。

(00a)	2-33r	//	2-31f	#
	焦点化された主題		無標の題述	
(00b)	2-32f	//	2-11f	#
	有標の題述		焦点化されていない主題	

以下に、アンケートの項目にしたがって対応するインドネシア語の表現を示して説明を加えていくが、必要に応じて上述の Halim の説にも言及する<sup>4</sup>。

<sup>1</sup> Halim(1981) は Halim(1974) と同内容であり、Halim(1984) はそのインドネシア語訳である。また、Halim のイントネーション論を基にした論考として、崎山(1990)、降幡(2005, 2014)、Furihata(2006) などがある。

<sup>2</sup> 同モデルにおいて、ピッチの高さを3段階が分けられ、3が最も高く、1が最も低い。また r は上昇 (rising) を、f は下降 (falling) を意味している。

<sup>3</sup> 同モデル内の // はポーズグループの境界を、# は文末であることを示す。

<sup>4</sup> 本稿におけるインドネシア語データのチェックについては、Thathit Puspaning Gegana 氏 (東京外国語大学研究生) に協力を依頼した。同氏に感謝の意を表する次第である。

## 2. インドネシア語データ<sup>5</sup>

[1] 「えっ、一郎が来たの?」「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」【対比焦点(主語)】

(01a) Eh, Ichiro datang?

INTJ Ichiro come 「えっ、一郎が来たの?」

(01b) Bukan. Bukan Ichiro, tapi Jiro yang datang.

NEG NEG Ichiro but Jiro REL come

「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」

(01b') Bukan. Bukan Ichiro, tapi Jiro lah yang datang.

NEG NEG Ichiro but Jiro-LAH REL come

「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」

(01b'') Yang datang (itu) Jiro, bukan Ichiro.

REL come that Jiro NEG Ichiro 「来たのは次郎で、一郎じゃない。」

(01a) に対する応答として挙げた3例のうち、(01b)と(01b')は述語 *Jiro* 「次郎(だ)」が主語 *yang datang* 「来たの/来た人」に先行する語順である。Halim のモデルに基づくと、述語が「有標の題述」、主語が「焦点化されない主題」となり、(00b)のようにそれぞれ 2-32f, 2-11f のイントネーション型をとる。会話では、このようなイントネーション型を伴うことにより(01b)がごく自然な文として用いられる。一方、(01b')に見られる *-lah* は、述語(より正確には題述)であることを明示する接尾辞で、その使用は随意的であるが、このような文ではより書き言葉的であると感ぜられる<sup>6</sup>。

(01b'')は主語 *yang datang (itu)* - 述語 *Ichiro*, あるいは Halim にしたがえば「焦点化された主題-無標の題述」の語順であり、(00a)のイントネーション型をとるといえる。

<sup>5</sup> 本稿における文例は正書法に基づいて表記する。なお、文例中の斜線(/)はその前後の語が入れ替え可能であることを、また括弧内の語は省略可能であることを示す。

<sup>6</sup> Sneddon, et al.(2010) は、*-lah* について「従来“述語マーカ―”(predicative marker) および“前景化マーカ―”(foreground marker) と呼ばれてきた」と紹介し、その用法につき解説を行なっている。Cole, et al.(2005) は *-lah* を「焦点マーカ―」(focus marker) と見なしている。なお本稿では、*-lah* に対するグロスを斜字体を用いて *-LAH* としておく。

[2] 「誰が来た (の) ?」「一郎が来たよ。」【WH 焦点 (主語)・WH 応答焦点 (主語)】

(02a) Siapa yang datang?  
 who REL come 「誰が来たの?」

(02a') Yang datang siapa?  
 REL come who 「来たのは誰?」

(02a'') Siapa saja yang datang?  
 who just REL come 「誰が来たの?」

(02a) では「来たの/来た人」が主語、疑問詞「誰」が述語となるため、主語に対して関係詞 *yang* を用いることが必須となる。なお、(02a') は (02a) と同じ意味であるが「主語－述語」の語順となっている。

(02a'') のように疑問詞が *saja* を伴うと、「該当する答えを列挙してほしい」といったニュアンスを表す。

(02b) Ichiro yang datang.  
 Ichiro REL come 「一郎が来たよ。」

(02b) は「一郎だ、来たのは」つまり「述語－主語」の語順であり、ここでも関係詞 *yang* は必須となる。

[3] 「一郎の方が大きいんじゃないの?」「いや、一郎じゃなくて、次郎の方が大きいんだよ。」【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】

(03a) Ichiro lebih tinggi, kan?  
 Ichiro more tall PTCL 「一郎 (の方) が背が高いんじゃない?」

(03b) Tidak. Jiro lebih tinggi Daripada Ichiro.  
 NEG Jiro more tall Than Ichiro  
 「いや、次郎 (の方) が一郎より背が高いよ。」

(03b') ? Jiro yang lebih tinggi. Bukan Ichiro.  
 Jiro REL more tall NEG Ichiro

(03a) に対する応答として、協力者によると (03b) が自然であるとのことであった。協力者の発音を観察すると、主語の *Jiro* が「有標の題述」、述語の *lebih tinggi* が「焦点化されない題述」のようなイントネーション、すなわち (00b) のように聞こえた。

「より背が高いのは次郎だ」すなわち (03b') のような文は可能かどうか尋ねたところ、このケースでは (03b) に比べて自然さに欠けるとの回答を得た。

[4] 【電話で】「どうした (の) ?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

【文焦点 (自動詞文)】

(04a) Ada apa?

exist what 「何があったの？」

(04a') Kenapa?

do.what 「どうしたの？」

(04b) Eh, ada tamu nih. 「あつ、客がいるんだ。」

INTJ exist guest PTCL

(04b') Eh, itu, ada tamu. 「あつ、その、客がいるんだ。」

INTJ that exist guest

(04b'') Oh, barusan ada tamu. 「あつ、たった今客が来たんだ。」

INTJ just.now exist guest

(04a) や (04a') に対する応答として、(04b) ~ (04b'') が例として得られた。単に「客がいる／客が来た」というよりも、(04b) のように近場を指す文末詞 *nih* などを用いたり、(04b') のように「ほら、その」といったニュアンスで指示詞 *itu* を用いたりするほうが会話では自然である。(04b'') は *barusan* を用いてより説明的になっていると考えられる。

[5] 「あの子供が一郎を叩いたんだって!?!」「いや、一郎じゃなくて、次郎を叩いたんだよ。」  
【対比焦点（目的語）】

(05a) Katanya, anak itu memukul Ichiro, ya.<sup>7</sup>  
it.is.said child that *MEN*-hit Ichiro PTCL

「あの子供が一郎を叩いたんだってね。」

(05a') Saya dengar anak itu memukul Ichiro, ya.  
1SG hear child that *MEN*-hit Ichiro PTCL

「あの子供が一郎を叩いたって聞いたよ。」

(05b) Tidak. Dia memukul Jiro, bukan Ichiro.  
NEG 3SG *MEN*-hit Jiro NEG Ichiro

「いや、彼（女）は次郎を叩いたんだ、一郎じゃなくて」

(05b') Tidak. Yang dipukul anak itu Jiro, bukan Ichiro.  
NEG REL *DI*-hit child that Jiro NEG Ichiro

「いや、その子供が叩いたのは次郎で、一郎じゃないよ」

(05b'') Yang dia pukul (itu) Jiro, Bukan Ichiro.  
REL 3SG hit that Jiro NEG Ichiro

「彼（女）の叩いたのは次郎だよ、一郎じゃなくて」

(05b''') Yang dipukul (itu) Jiro, bukan Ichiro.  
REL *DI*-hit that Jiro NEG Ichiro

「叩かれたのは次郎で、一郎じゃないよ」

(05a) や (05a') に対する応答として2通りの方法がある。まず1つは (05b) のように前に述べられた文と同じ語順をとるものである。ただし、「主語－述語」の構造と「主題－題述」の構造にずれが生じる。この場合、*Dia memukul // Jiro #* のようなイントネーション型、

<sup>7</sup> *memukul* 「叩く」は接頭辞 *meN-* プラス他動詞語幹 *pukul* の語構成となっている。接頭辞 *meN-* は対応する主語が動作主であるという文法関係を表す。また、以後に現れる *dipukul* は対応する主語が被動作主であるという文法関係を示す接頭辞 *di-* を伴っている。本稿では、*meN-* と *di-* に対するグロスとして、斜字体を用いて *MEN-* および *DI-* としておく。

すなわち主題が *Dia memukul* 「彼が叩いた (のは)」, それに対する題述が *Jiro* 「次郎 (だ)」となる。

もう 1 つは, (05b') ~ (05b'') のように *yang* を用いて「その子供/彼 (女) が叩いたのは」あるいは「叩かれたのは」と関係節化した部分を主語とし, それに対し述語として「次郎だ」と述べる方法である。

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど, どっちを買う (の) ?」「(私は) 青い袋を買うよ。」  
【対比焦点 (目的語, 特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)】

(06a) Ada kantong merah dan kantong biru, nih. Kamu mau beli yang mana?  
exist bag red and bag blue PTCL 2SG will buy REL which  
「赤い袋と青い袋があるよ. 君はどっちを買う?」

(06b) Aku beli kantong yang biru.  
1SG buy bag REL blue 「僕は青い (方の) 袋を買うよ。」

(06b') Aku beli yang biru.  
1SG buy REL blue 「僕は青い方を買うよ。」

(06b'') Yang biru saja.  
REL blue just 「青い方にしておくよ。」

(06a) に対する応答として, (06b) では「青い袋」と述べる際に *yang* を用いる. これは, *yang* に他者との対比における選択的な用法があるため, *kantong yang biru* は「袋で, 青い (方の) もの」といった句となっている.

文脈上明らかであれば, 特に会話では *yang* 関係節の先行詞を述べないことが多い. (06b') では「袋」のことを述べていることは明白で, 単に *yang biru* 「青い (方の) もの」と言うだけで十分である.

また会話では, (06b'') のように *saja* を伴うこともよくあり, ここでは「~にしておくよ」といったニュアンスを表す.

[7] 「一郎はどうした?」「一郎は朝からどっかへでかけたよ。」【述語焦点】

(07a) Ichiro ke mana?  
Ichiro to where 「一郎はどこへ行った?」

(07a') Ichiro di mana?

Ichiro at where 「一郎はどこにいる？」

(07b) Dia / Ichiro sudah pergi sejak pagi.

3SG Ichiro PERF go since morning

「彼／一郎は朝からもう出掛けているよ。」

(07b') Sudah pergi pagi-pagi tadi.

PERF go early.this.morning 「今朝早くからもう出掛けているよ。」

日本語では姿の見えない一郎について「どうした？」と尋ねられるが、インドネシア語ではむしろ「どこに行った？」(07a)あるいは「どこにいる？」(07a')のように所在を尋ねる方が自然である。

そのような質問により話題が「一郎」であることは明白であり、会話では(07b')のように発話に主語のないこともよくある。

[8] 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

【WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)】

(08a) Anak itu memukul siapa?

child that MEN-hit who 「あの子供は誰を叩いたの?」

(08b) Anak itu memukul adiknya sendiri.

child that MEN-hit younger.sibling-3SG Self

「あの子は自分の弟／妹を叩いたんだ。」

(08b') Dia memukul adiknya sendiri.

3SG MEN-hit younger.sibling-3SG self

「彼 (女) は自分の弟／妹を叩いたんだ。」

(08b'') Memukul adiknya sendiri.

MEN-hit younger.sibling-3SG self

「自分の弟／妹を叩いたんだ。」

インドネシア語は、主語の場合を除いて疑問詞は基本的に当該の位置に用いる。(08a)では、他動詞 *memukul* の目的語の位置にそのまま疑問詞 *siapa* 「誰」が現れている。それに対する応答も、(08b) ~ (08b'') の *adiknya sendiri* 「彼 (女) 自身の弟／妹」のように基本

的に同じ位置に現れる。なお、(08b'') は (07b') と同様に、話題（主題）が「その子供」であることが明白なため、会話として主語のない発話となっている。

[9] [電話で]「どうした(の)?」「うん、一郎が(自分の)弟を叩いたんだ。」  
【文焦点(他動詞文)】

(09a) Eh, kenapa?  
INTJ do.what 「おや、どうしたの?」

(09a') Ada apa?  
exist what 「何があったの?」

(09b) Itu..., Ichiro memukul adiknya.  
that Ichiro MEN-hit younger.sibling-3SG  
「それがね、一郎が弟/妹を叩いたんだ。」

(09a) や (09a') に対して、文のみで応答するよりも、(09b) の *itu* のように何らかの要素でまず言い始める方が会話として自然である。

[10] 「あのケーキ、どうした?」「ああ、(あれは)一郎が食べちゃったよ。」  
【目的語主題化、主題(目的語)の継続性 いわゆる **pro-drop** 言語の可能性】

(10a) Kuenya kenapa?  
cake-DET do.what 「(例の)ケーキはどうした?」

(10b) Ah, kuenya dimakan (oleh) Ichiro.  
INTJ cake-DET DI-eat by Ichiro 「あ、ケーキは一郎が食べたよ。」

(10b') Ah, dimakan (sama) Ichiro.  
INTJ DI-eat by Ichiro 「あ、一郎が食べたよ。」

(10a) に対する応答として、(10b) では主語 *kuenya* をそのまま述べている。フォーマルな文体では主語と述語を揃えることが要求される。なお、*oleh* は接頭辞 *di-* を伴う(すなわち対応する主語が被動作主である)他動詞において動作主を導く前置詞だが、*oleh* を用いずに動作主を直接続けることもできる。

(07b') や (08b'') のところでも述べたが、会話では文脈上明らかな場合に主語を述べないことがよくある。(10b') もその例である。なお会話では、*oleh* の代わりに前置詞として *sama* がよく用いられる。

[11] 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」【分裂文】

(11) Yang saya beli di toko kemarin Adalah Buku ini.  
REL 1SG buy at store yesterday COP Book this  
「私が昨日お店で買ったのはこの本だ。」

(11') Yang saya beli di toko kemarin (itu) Buku ini.  
REL 1SG buy at store yesterday That Book this  
「私が昨日お店で買ったのはこの本だ。」

(11'') Buku ini yang saya beli di toko kemarin.  
book this REL 1SG buy at store yesterday  
「この本だ、私が昨日お店で買ったのは。」

(11''') Buku inilah yang saya beli di Toko kemarin.  
book this-LAH REL 1SG buy at Store yesterday  
「この本だ、私が昨日お店で買ったのは。」

*yang* に導かれる関係節は先行詞を伴わずに用いることが可能である。(11) は、コンピュータを用いているが、これはフォーマルな文体と捉えられる。会話では (11') のようにコンピュータを用いないこともよくあるが、「焦点化された主題—無標の題述」というイントネーション型によって区別が可能である。あるいは、指示代名詞 *itu* を用いることにより、その部分が句の境界となることがわかる<sup>8</sup>。

(11'') および (11''') は述語が主語に先行する語順となっており、「有標の題述—焦点化されていない主題」のイントネーション型となる。特に (11''') は、(01b') と同様に接尾辞 *-lah* を伴っている。

<sup>8</sup> 指示代名詞 *ini* 「これ」、*itu* 「それ／あれ」は句内で最も後ろに現れるという統語上の制約があるため、用いられた場合にはそこが句の境界となる。

[12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

【指定文：主題（名詞述語文の主語）の継続性】

(12) Orang itu seorang guru. Sudah tiga tahun mengajar di sekolah ini.  
person that one teacher PERF three year *meN*-teach at school this  
「あの人は先生だ。この学校でもう3年教えている。」

(12') Orang itu adalah seorang guru. Dia sudah tiga tahun mengajar  
person that COP one teacher 3SG PERF three year *meN*-teach  
di sekolah ini.  
at school this 「あの人は先生だ。彼（女）はこの学校でもう3年教えている。」

会話あるいは特定の文体では、複数の文にわたって話題（主題）が継続することがありうる。(12) は *orang itu* 「あの人」が後続する文で省略されても主題として継続していることがわかる。なお、フォーマルな文体では、(12') のように *Copula adalah* を用いたり、主題が継続している場合でも主語を述べることが要求される。

[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」【倒置指定文】

(13) Ayahnya (adalah) pria/orang yang itu.  
father-3SG COP man/person REL that  
「彼（女）のお父さんは、あの男性/人だ。」

(13') Ayahnya (adalah) yang itu.  
father-3SG COP REL that 「彼（女）のお父さんは、あの人だ。」

(06b), (06b') でも述べたが、関係詞 *yang* は選択的用法をあわせ持つ。(13), (13') では、複数いる人物との対比の中でどの人物かを選択するため、(*pria/orang*) *yang itu* のように *yang* を用いることになる。

[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」【指定文】

(14) Orang/Pria itulah ayahnya.  
person/man that-LAH father-3SG 「あの人が彼（女）のお父さんだ。」

(14') Orang / Pria itu, ayahnya.

person / man that father-3SG 「あの人が彼（女）のお父さんだ。」

「あの人が彼のお父さんだ」といった表現は、インドネシア語では「あの人だ、彼のお父さんは」すなわち「述語－主語」の語順の文が対応することになる。(14), (14')はいずれも (00b) すなわち「有標の題述－焦点化されていない主題」のイントネーションを伴ってこのような意味を伝えることになる。

[15] 「あさってってというのはね、あしたの次の日のことだよ。」【定義文】

(15) Lusa itu Adalah hari sesudah besok.

day.after.tomorrow that COP day after Tomorrow

「明後日（というの）は、明日の次の日だ。」

指示代名詞 *itu* は「それ（その）、あれ（あの）」のように前出の事物を指し示すだけでなく、「～というものは」すなわち定義する際の対象を表す用法もあり、(15) のような文では *itu* が必要となる。

[16] 「私はコーヒーだ。」【ウナギ文】

(16) Saya, kopi.

1SG coffee 「私はコーヒーだ。」

(16') Kalau saya, kopi.

if 1SG coffee 「私はコーヒーだ。」

いわゆる「ウナギ文」は、インドネシア語ではよく用いられる。(16) のような文では、(00a) すなわち「焦点化された主題－無標の題述」のイントネーションを伴う。

また、条件を表す接続詞 *kalau* 「もし、～ならば」は、会話においてその導く節がしばしば主題 (topic) であることを示す。(16') の *kalau saya* は「私は、私について言えば」といった表現である。

[17] 「コーヒーは私だ。」【逆行ウナギ文】

(17) Saya.  
1SG 「私だ。」

(17') Kopi, saya.  
coffee 1SG 「コーヒーは、私だ。」

「コーヒーは誰ですか？」といった問に対して「私である」ことを伝える場合、最も自然なのは (17) である。

「コーヒーは私だ」という日本語の表現に対応して、(17') も可能である。ただし、これまで述べてきた Halim によるイントネーション型の 2 つのモデル、すなわち (00a) や (00b) とは異なるようで、協力者の発話を観察したところでは、kopi の部分が「焦点化された主題」(2-33r), saya が「焦点化されていない主題」(2-11f) のように聞こえた。このようなパターンに関する分析は、今後さらなる検討が必要である。

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

(18) Buku yang baru dan tebal itu mahal.  
book REL new and thick that expensive 「その新しくて厚い本は高価だ。」

「新しい」と「厚い」のように複数の修飾語が並列的に 1 つの名詞を修飾する場合、(18) のように関係詞 yang を用いて述べなければならない。なお、主語「その新しくて厚い本（は）」の句末の itu は指示詞であると同時に、(11') で述べたように句の境界となることを示す。

[19] 「あっ、砂糖が無くなっているよ！」【意外性 (mirativity)】

(19) Ah, gulanya (sudah) habis!  
INTJ sugar-DET PERF all.gone 「あっ、砂糖が無くなっている！」

(19') Ah, habis gulanya!  
INTJ all.gone sugar-DET 「あっ、砂糖が無くなっている！」

(19”) Ah, gulanya habis, nih / lho.

INTJ sugar-DET all.gone PTCL 「あつ、砂糖が無くなっているよ！」

(19) と (19”) は主語と述語の語順が入れ替わっているが、いずれにしても主語の *gula* 「砂糖」が本来あるべきと想定されるため、文脈指示を表す *-nya* が必要となる。他人に「砂糖が無くなっている」ことを伝達する際には、(19”) のように *nih* や *lho* などの文末詞を伴う。

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あつ、そうだ！田中君だったな。」  
【思い出し】

(20) Nanti siang saya harus ketemu seseorang, tapi siapa ya...?

later daytime 1SG must meet someone but who PTCL

O ya! Si Tanaka.

INTJ yes TTL Tanaka

「今日の昼に誰かに会わなければならないが、誰だろうか…？あ、そうだ！田中君だ。」

「田中君だったな」の部分は、(20) のように単に “Si Tanaka.” 「田中君 (だ)」と述べることができる。あるいは、“Ketemu (si) Tanaka.” 「田中君と会う (んだ)」と言うこともある。

### 略語

1SG	1st person singular	NEG	negative
2SG	2nd person singular	PERF	perfective
3SG	3rd person singular	PTCL	particle
COP	copula	REL	relative
DET	determiner	TTL	title
INTJ	interjection		

## 参考文献

- Cole, Peter, Gabriella Hermon and Yassir Nasanius Tjung. 2005. "How Irregular is WH in Situ in Indonesian?" *Studies in Language*, 29:3. pp.553-581.
- 降幡正志. 2005. 「インドネシア語 ada 存在文のイントネーションに関する一考察」, 『東京外大東南アジア学』第 10 巻. 東京外国語大学外国語学部東南アジア課程研究室. pp.32-51.
- FURIHATA, Masashi. 2006. "An Acoustic Study on Intonation of Nominal Sentences in Indonesian", in Kawaguchi, Y., Ivan Fonagy and Tsunekazu Moriguchi (eds.), *Prosody and Syntax -- Cross-linguistic Perspectives -- (Usage-Based Linguistic Informatics 3)*. Amsterdam: John Benjamins. pp.303-325.
- 降幡正志. 2014. 「インドネシア語名詞文の超分節特性に関する考察」, 『東京外大東南アジア学』第 19 巻. 東京外国語大学外国語学部東南アジア課程研究室. pp.86-101.
- 崎山理. 1990. 「日本語とインドネシア語のアクセントとイントネーション」, 杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育』第 3 巻: 日本語の音声・音韻 (下). 明治書院.
- Sneddon, J. N., et al. 2010. *Indonesian: A Comprehensive Grammar*. 2nd edition. London: Routledge.
- Halim, Amran. 1974. *Intonation in Relation to Syntax in Bahasa Indonesia*. Jakarta: Djambatan.
- , 1981. *Intonation in Relation to Syntax in Indonesian*. Canberra: Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, The Australian National University. Pasific Linguistics D 36. Materials in Languages of Indonesia 5.
- , 1984. *Intonasi dalam Hubungannya dengan Sintaksis Bahasa Indonesia*. Translated by Tony S. Rachmadie from Halim(1974). Jakarta: Djambatan.

## 中国語

加藤 晴子

中国語における「名詞述語文」について、アンケート<sup>1</sup>に従い、見ていくことにする。主に、中国語の「コピュラ」「是」の現れ方を見る<sup>2</sup>。

## 1. 焦点に関する例文

“是”は後ろの要素を焦点化する働きを持つ。

- [1] (例えば、昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

「えっ、小張が来たの?」「いや、小張じゃなくて小李が来たんだ。」

【対比焦点(主語)】

“咦，是 小张 来了 吗?” “不，不 是 小张 来了，  
えっ [繫辞] 小張 来る [実現] [疑問] [否定] [否定] [繫辞] 小張 来る [実現]  
是 小李 来 了。”  
[繫辞] 小李 来る [実現]

応答文の「小張じゃなくて」に対応する箇所の動詞を省略することはできない。

質問文、応答文ともに、“是”を使わずに、次のように言うことも可能。

“咦，小张 来了 吗?” “不，小张 没 来，小李 来了。”  
えっ 小張 来る [実現] [疑問] [否定] 小張 [未実現] 来る 小李 来る [実現]  
「えっ、小張が来たの?」「いや、小張は来なかった、小李が来た。」

- [2] 「誰が来たの?」「小張が来たよ。」【WH焦点(主語)・WH応答焦点(主語)】

“谁 来 了?” “小张 来 了。”  
だれ 来る [実現] 小張 来る [実現]

質問文、応答文ともに、“是”を使い、次のように言うことも可能。

<sup>1</sup> アンケートへの回答は、本学非常勤講師の飯島啓子さんと、蘇紅さんをお願いした。ここに感謝の意を表す。ただし、本稿の内容に誤りがあれば、それは筆者の責任に帰するものである。

<sup>2</sup> 回答で得られた中国語の文がもとの例文と表現上で大きく異なる場合、中国語文に対する直訳も付した。

“是 谁 来 了？” “是 小 张 来 了。”

[繫辞] だれ 来る [実現] [繫辞] 小張 来る [実現]

[3] (小張と小李の背について話している状況で)

「小張の方が大きいんじゃないの？」

「いや、小張じゃなくて、小李の方が大きいんだよ。」

【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】

“不 是 小 张 高 吗？”

[否定] [繫辞] 小張 高い [疑問]

“不 是 小 张 (高)， 是 小 李 高。”

[否定] [繫辞] 小張 高い [繫辞] 小 李 高い

この場合、応答文冒頭に“不，”などをつけるのは不自然。

[4] (電話で)

「どうしたの？」 「うん、お客さんが来たんだ。」 【文焦点 (自動詞文)】

“怎么 了？” “没什么， 家里<sup>3</sup> 来 了 位 客人。”

どのよう [実現] 何でもない 家に 来る [実現] [助数] 客

応答文は“是”を使い、次のように言うことも可能であるが、説明的な感じ、場合によっては、追及に対する弁解であるような感じがするという。

“怎么 了？” “没什么， 是 家里 来 了 位 客人。”

どのよう [実現] 何でもない [繫辞] 家に 来る [実現] [助数] 客

[5] 「あの子供が小張を叩いたんだって!？」

「いや、小張じゃなくて、小李を叩いたんだよ。」 【対比焦点 (目的語)】

“那个 孩子 打 了 小 张？”

あの 子供 叩く [実現] 小張

“不 是， 没 打 小 张， 打 了 小 李。”

[否定] [繫辞] [未実現] 叩く 小張 叩く [実現] 小 李

質問文に疑問を表す“吗？”を使うことは不可とされた。また、応答文は、「小張じゃなくて」に対応する箇所動詞を省略することはできない。ただし、次のように、“是”を

---

<sup>3</sup> もとの例文にはないが、ここに必要な要素として加えられた。

使い、分裂文で言うほうがより自然である。

“那个 孩子 打 了 小张？”

あの 子供 叩く [実現] 小張

“不， 他 打 的 不 是 小张， 是 小李。”

[否定] 彼 叩く [の] [否定] [繫辞] 小張 [繫辞] 小李

「いや、彼が叩いたのは小張じゃなくて、小李だよ。」

この場合、応答文冒頭の“不，”＝相手の認識内容の否定は，“没有，”＝出来事の実現の否定として応答することも可能である。

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買うの？」

「(私は) 青い袋を買うよ。」

【対比焦点(目的語、特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)】

“有 红 袋儿 和 蓝 袋儿， 你 买 哪个？”

ある 赤い 袋 と 青い 袋 あなた 買う どれ

“我 买 蓝 袋儿。”

私 買う 青い 袋

質問文、応答文ともに、“是”を使い、分裂文で言うことも可能であるが、未実現であることを示すには、次のように、[願望]や[意志]を表す助動詞“要”を加える必要がある。

“有 红 袋儿 和 蓝 袋儿， 你 要 买 的 是 哪个？”

ある 赤い 袋 と 青い 袋 あなた [意志] 買う [の] [繫辞] どれ

“我 要 买 的 是 蓝 袋儿。”

私 [意志] 買う [の] [繫辞] 青い 袋

「赤い袋と青い袋があるけど、あなたが買うのはどっち？」

「私が買うのは青い袋だよ。」

[7] (例えば、朝少し遅く起きて来た小張の父親が、姿の见えない小紅について母親に尋ねている場面で)

「小紅はどうした？」「小紅は朝からどっかへでかけたよ。」【述語焦点】

“小紅 呢？” “小紅 一大早 就 出去 了。”

小紅 [確認] 小紅 朝早く [もう] でかける [実現]

質問文を“小紅怎么了？”とすると、小紅の様子(具合が悪そう、慌てている、など)を実際に見て質問していることになる。

[8] 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

【WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)】

“那个 孩子 打 了 谁?” “他 打 了 他 弟弟。”

あの 子供 叩く [実現] だれ 彼 叩く [実現] 彼の 弟

質問文, 応答文ともに, “是” を使い, 分裂文で言うことも可能であるが, 説明的な感じがするという。

“那个 孩子 打 的 是 谁?” “那个 孩子 打 的 是 他 弟弟。”

あの 子供 叩く [の] [繫辞] だれ あの 子供 叩く [の] [繫辞] 彼の 弟

[9] (例えば, 電話の向こうで子供の泣き声がかきたのを聞いての発話)

「どうしたの?」「うん, 小張が自分の弟を叩いたんだ。」【文焦点 (他動詞文)】

“怎么 了?” “没什么, 是 小张 打 了 他 弟弟。”

どのよう [実現] 何でもない [繫辞] 小張 叩く [実現] 彼の 弟

質問文は“是”を使わずに, 次のように文末に[回想]を表す“来着”を使うことも可能。

“怎么 了?” “小张 打 他 弟弟 来着。”

どのよう [実現] 小張 叩く 彼の 弟 [回想]

[10] 「あのケーキ, どうした?」「ああ, あれは小張が食べちゃったよ。」

【目的語主題化, 主題 (目的語) の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

“那个 蛋糕 呢?” “啊, 那个 蛋糕 小张 吃 了。”

あの ケーキ [確認] ああ あの ケーキ 小張 食べる [実現]

質問文を“那个蛋糕怎么了? とすると, 実際にはないことを確認したうえで, それが大きな問題になると考えて質問していることになる。また, 応答文の“那个蛋糕”は省略しにくくようである。

[11] 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」【分裂文】

我 昨天 从 商店 买 回来 的 书 是 这本。

私 昨日 から 店 買う 帰る [の] 本 [繫辞] この [助数]

## 2. 各種のコピュラ文

[12] 「あの人は先生だ. この学校でもう3年働いている.’」

【措定文 主題 (名詞述語文の主語) の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

那个人 是 老师, 他 在 这个 学校 已经 工作 了 3 年 了<sup>4</sup>。

あの 人 [繫辞] 先生 彼 で この 学校 すでに 働く [実現] 3年 [実現]

後続文の人称代名詞“他”は省略しにくいようである。

[13] 「彼のお父さんは, あの人だ.’」【倒置指定文】

他 父亲 是 那个人。

彼(の) 父親 [繫辞] あの 人

[14] 「あの人が彼のお父さんだ.’」【指定文】

那个人 是 他 父亲。

あの 人 [繫辞] 彼(の) 父親

[13]と[14]とは, 単に“是”の前後を入れ替えるのみであるが, 発音する際は, いずれも“那个人”のほうを強めに発音する。[14]は“他父亲”のほうを強めに発音すると, 「あの人は彼のお父さんだ.’」に相当する言い方となる。

[15] 「あさってってというのはね, あしたの次の日のことだよ.’」【定義文】

后天 就 是 明天 的 明天。

あさって [まさに] [繫辞] あした [の] あした

次のように言うことも可能。

后天 呀, 是 说 明天 的 明天。

あさって [説明] [繫辞] いう あした [の] あした

あさってはね, あしたのあしたをいうんだよ。

---

<sup>4</sup> 中国語文法では, “了”について, 動詞に直接後接し[動作の完了]を表すものと, 文末について[事態の変化]を表すものとを, それぞれ“了1”“了2”として区別するが, 本稿では, 一律に[実現]を表すものとして扱う。

[16] (何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて)

「私はコーヒーだ。」【ウナギ文】

“我 来 杯 咖啡。”

私 注文する [助数] コーヒー

「私はコーヒーだ。」の直訳“我是咖啡。”は不可。

[17] (注文した数人分の飲み物が運ばれて来て)

「どなたがコーヒーですか?」「コーヒーは私だ。」【逆行ウナギ文】

“哪 位 (要) 的 咖啡?” “我 (要) 的 咖啡。”

どれ [助数] (頼む) [の] コーヒー 私 (頼む) [の] コーヒー

「どなたがコーヒーを頼んだのですか。」「私がコーヒーを頼んだのです。」

質問文、応答文ともに、“是”を使い、次のように言うことも可能であるが、説明的な感じがするという。

“是 哪 位 (要) 的 咖啡?” “是 我 (要) 的 咖啡。”

[繫辞] どれ [助数] (頼む) [の] コーヒー [繫辞] 私 (頼む) [の] コーヒー

2種の訳のいずれも、「誰の(誰が頼んだ)コーヒーか。」「私の(私が頼んだ)コーヒーだ。」に相当する表現であるとも考えられる。つまり、“(是) 我要的咖啡”について見ると、以下の2つの可能性がありうる<sup>5</sup>。

私がコーヒーを頼んだのだ 私頼んだコーヒーだ

両者はイントネーションなどにおいても違いはなく、曖昧さを有する。

さらに、文頭に“这[これ]”を置き、“这是哪位(要)的咖啡?[これは誰の(誰が頼んだ)コーヒーか]”“这是我(要)的咖啡。[これは私の(私が頼んだ)コーヒーだ]”とすることもできるが、使う場面としては、多数の飲み物が並んでいる中で、何らかの理由により、わざわざ1つを取り上げて尋ねるようなことが想定されるという。

---

<sup>5</sup> “是”は口語ではしばしば省略され、省略された“我要的咖啡”ならばさらに「私はコーヒーを頼んだのだ(省略前の“是”の置き場所は“我”の後)」「私が頼んだのはコーヒーだ(省略前の“是”の置き場所は“的”の後)」も表しうる(朱 1961)。

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

那 本 又 新 又 厚 的 书 （价钱）很 贵。  
 その [助数] [重複] 新しい [重複] 厚い [の] 本 （値段） [程度] 高い

「新しい」と「厚い」の「本」に対する関わり方を変え、次のように言うことも可能。

那 本 厚 厚 的 新 书 （价钱）很 贵。  
 その [助数] 分厚い 新刊書 （値段） [程度] 高い

「その分厚い新刊書は（値段が）高い。」

“厚厚的”は「分厚い」に相当して「本」の様態を描写し<sup>6</sup>，“新书”は「新刊本」に相当して，“新”は「本」の属性を示す。この場合、必ず、様態、属性の順に並べられる。

また、2種の訳いずれにも現れているように、中国語の形容詞述語文においては“很”などの[程度]を表す副詞が必須とされ、それがないと対比や分類の意味を持つとされるが、風間 2012 はこれを「コンピュータというべきものに近づいている」としている。[程度]を表す副詞の前に“是”を置き，“（价钱）是很贵（的）”とすることもできるが、この時“是”は強く発音され、「確かに～だ」というニュアンスを表す。

### 3. 意外性に関する例文

[19] （砂糖の入れ物を開けて）

「あっ、砂糖が無くなっているよ！」【意外性（mirativity）】  
 “啊，白糖 没 了！”  
 あっ 砂糖 ない [実現]

「砂糖がなくなった」という事実を淡々と伝える文との違いは、感嘆詞の“啊”と、高低差を拡大したイントネーションのみである。

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！ 小張だったな。」

【思い出し】

“我 下午 好像 约 了 人 见面。 是 谁 来着？”  
 私 午後 のようだ 約束する [実現] 人 会う [繫辭] だれ [回想]  
 想起来 了， 是 小张 啊！”  
 想起する [実現] [繫辭] 小張 [説明]

<sup>6</sup> “厚厚的”の“的”は、形容詞の語尾とされ、名詞相当句を構成する[の]とは異なる。

## 参考文献

- 風間伸次郎.2012.「コピュラ文の諸相」, 影山太郎・沈力(編)『日中理論言語学の新展望 2 意味と構文』, 東京:くろしお出版, pp.85-106.
- 吕叔湘主编.1999.《现代汉语八百词(增订本)》, 北京:商务印书馆, pp.496-503
- 朱德熙.1961.〈说“的”〉,《中国语文》1961-12(朱德熙.1985.《现代汉语语法研究》, 北京:商务印书馆, pp.67-103 再録) .

## 朝鮮語の情報構造と名詞述語文

黒島規史, 崔 正熙

## 1. はじめに

本稿では、特集「情報構造と名詞述語文」のアンケートに沿って、朝鮮語の例文を提示し、それに適宜補足説明を加える。

朝鮮語のデータを提示するに先立って、朝鮮語の情報構造に関して簡単に述べる。Lambrecht (1994: 6) によれば、情報構造に関わるカテゴリーに、前提と主張 (presupposition and assertion), 同定可能性と活性化 (identifiability and activation), そして主題と焦点 (topic and focus) がある。朝鮮語でこれらに関わるのは主題や対比を表す *-un/nun* と主格の *-i/ka* であろう。朝鮮語の *-un/nun* と日本語の「ハ」、*-i/ka* と「ガ」には共通点も多いが、先行研究で度々言及されているように次のような相違点もある。

이것이 무엇입니까?

ikes-i mwues-i-pnikka?

これ-NOM なに-COP-INTRR.POL

「これは (\*が) なんですか?」

【田窪行則 (1990: 840), 例文 (20) にハングル表記とグロスを加え、一部転写と日本語訳を改める】

田窪行則 (1990: 840) は「韓国語では *un/nun* (=ハ) を使えるのは、実際に話題に出てくるか、世間で話題になっているもの、現在の状況から問題となる要素が推測できるもの、また一般知識のように、明白に前提知識となっているものに限られる」としたうえで、上の例文のような事実から日本語では、それが初出のものであっても、相手の知っている要素はすでに導入してあるものとして「は」でマークできると述べている。井上優 (2012: 684) はさらに、日本語と朝鮮語は上のような例において「どのタイミングで事物を既知扱いできるか」が異なるだけでなく、「どのタイミングで事態を過去扱いできるか」も異なると指摘している。後者について井上優 (2012: 683) は次のような例を挙げている。

(待っていたバスが来るのが見えた。バスが来るのを見ながら)

a. 来た.

b. 온다. / #왔다. (来る. / 来た. )

o-nta. / #w(<o)-ass-ta.

来る-DEC.NPST 来る-PST-DEC

【井上優 (2012: 683), 例文 (43) にラテン文字転写とグロスを加えて引用する】

このように日本語と朝鮮語はどのタイミングで出来事を既知、あるいは過去のものとして既出にできるかが異なるのである。井上優 (2012) で述べるように、このような現象は両言語のさまざまな特徴に関わっていると考えられ、これらも含めて朝鮮語の情報構造を考えることが重要になるかもしれない。

また、「ハ」と *-un/nun*, 「ガ」と *-i/ka* だけでなく、無助詞の場合も考慮に入れる必要があるが、朝鮮語についての無助詞の研究に金智賢 (2009) がある。

## 2. 朝鮮語データ

朝鮮語の情報構造と名詞述語文について見ていく。例文の朝鮮語はハングル表記と Yale 式ラテン文字転写にグロスを付して提示する。アンケートの日本語例文を朝鮮語で表したときに日本語とは違う表現を用いる場合、グロスの下にさらに「」を加え日本語訳を示す。

### 【対比焦点 (主語)】

- (1) 「えっ、一郎が来たの?」「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」

“뉘, 이치로가 왔었다고?”

mwe, ichilo-ka w(< o)-assoss-ta-ko?

INTJ 一郎-NOM 来る-PLPF-QUOT-CVB

“아니, 이치로가 아니라 지로가 왔었다고.”

ani, ichilo-ka anila cilo-ka w(< o)-assoss-ta-ko.

いや 一郎-NOM NCOP.CVB 次郎-NOM 来る-PLPF-QUOT-CVB

アンケートでは「(例えば、昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)」という状況が設定されていたため、朝鮮語例文は引用形を用いて確認を表すことになる。ここで、対比される主語は主格でマークされている。

### 【WH 焦点 (主語)・WH 応答焦点 (主語)】

- (2) 「誰が来た (の)?」「一郎が来たよ。」

“누가 왔어?”

nwuka w(< o)-ass-e?

誰.NOM 来る-PST-INTRR

“이치로가 왔어.”

ichilo-ka w(< o)-ass-e.

一郎-NOM 来る-PST-DEC

WH 焦点 (主語), WH 応答焦点 (主語) はともに主格でマークされる. *nwuka* (誰が, 誰か) は疑問と不定の形態が同一であり, 前者の場合は *nwuka* に強勢が置かれ, 文は一続きに発音される.

【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】

(3) 「一郎の方が大きいんじゃないの?」「いや, 一郎じゃなくて, 次郎の方が大きいんだよ.」

“이치로가 더 큰 거 아냐?”

*ichilo-ka te khu-n kea anya?*

一郎-NOM より 大きい-ADN こと NCOP.INTRR

“아니, 이치로가 아니라 지로가 더 커.”

*ani, ichilo-ka anila cilo-ka te khe.*

いや 一郎-NOM NCOP.CVB 次郎-NOM より 大きい.DEC

形容詞述語の場合も同様に焦点は主格でマークされる. 朝鮮語では日本語のように「～の方が」を直訳することはできず, 「～がより」と表す必要がある.

【文焦点 (自動詞文)】

(4) [電話で] 「どうした (の) ?」「うん, 今, お客さんが来たんだ.」

“왜 그래? 무슨 일 있어?”

*way kulay? mwusun il iss-e?*

なぜ そうだ.INTRR なんの 事 ある-INTRR

「どうしたの? なにかあったの?」

“응, 지금 손님이 왔거든.”

*ung, cikum sonnim-i w(<o)-ass-ketun.*

うん 今 お客-NOM 来る-PST-REAS

アンケート例文の「どうした (の) ?」は朝鮮語で直訳はできず, 様々な訳が考えられるが, ここでは2番目の発話をする人が, 電話相手以外に話しかけた, あるいは物音を立てた等の場合を想定して朝鮮語例文を提示する. 応答の朝鮮語例文では聞き手が未知であることを想定して理由や根拠を提示する *-ketun* が用いられている.

【対比焦点（目的語）】

- (5) 「あの子供が一郎を叩いたんだって!？」 「いや, 一郎じゃなくて, 次郎を叩いたんだよ。」

“저 아이가 이치로를 때렸다고?”

ce ai-ka ichilo-lul ttayly(< i)-ess-ta-ko?  
あの 子供-NOM 一郎-ACC 叩く-PST-QUOT-CVB

“아니, 이치로가 아니라 지로를 때렸다고.”

ani, ichilo-ka anila cilo-lul ttayly(< i)-ess-ta-ko.  
いや 一郎-NOM NCOP.CVB 次郎-ACC 叩く-PST-QUOT-CVB

目的語の対比焦点である「次郎」は, 朝鮮語でも日本語と同じく対格でマークされる.

【対比焦点（目的語, 特に「どっち」という対比的な疑問語の場合）】

- (6) 「赤い袋と青い袋があるけど, どっちを買う (の) ?」 「(私は) 青い袋を買うよ。」  
“빨간 봉지하고 파란 봉지가 있는데 어느 쪽을 살래?”

ppalka-n pongci-hako phala-n pongci-ka iss-nuntey enu ccok-ul sal-lay?  
赤い-ADN 袋-COM 青い-ADN 袋-NOM ある-CVB どの ほう-ACC 買う-VOL

“(난) 파란 봉지를 살래.”

(na-n) phala-n pongci-lul sal-lay.  
わたし-TOP 青い-ADN 袋-ACC 買う-VOL

(5) と同じく目的語の対比焦点は対格でマークされる. 日本語では応答で「青い方を買うよ」とも言えるが, 朝鮮語ではやはり (3) のところで見たように「~の方を」と言うと不自然になる.

【述語焦点】

- (7) 「一郎はどうした?」 「一郎は朝からどっかへでかけたよ。」

“이치로는 왜 안 보여?”

ichilo-nun way an poy(< i)-e?  
一郎-TOP なぜ NEG 見える-INTRR

「一郎はどうした? (lit. 一郎はなぜ見えないんだ?)」

“이치로는 아침부터 어디 갔어.”

ichilo-nun achim-pwuthe eti ka-ss-e.  
一郎-TOP 朝-から どこか 行く -PST-DEC

(4)と同様に「どうした?」を朝鮮語で直訳することはできず、より具体的に聞き手に尋ねなければならない。アンケートでは「(例えば、朝少し遅く起きて来た一郎の父親が、姿の見えない一郎について母親に尋ねている場面で)」となっていたので、朝鮮語は「一郎はどうした? (lit. 一郎はなぜ見えない?)」として提示する。焦点から外れる「一郎」は主題標識でマークされている。

【WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)】

(8) 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

“저 아이가 누구를 때렸어?”

(ce ai-ka) nwukwu-lul ttayly(<i)-ess-e?  
あの 子供-NOM 誰-ACC 叩く -PST-INTRR

“저 아이가 자기 남동생을 때렸어.”

(ce ai-ka) caki namtongsayng-ul ttayly(<i)-ess-e.  
あの 子供-NOM 自分 弟-ACC 叩く -PST-DEC

WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語) は日本語と同じく対格でマークされる。日本語例文「(あの子供は)」の部分は、朝鮮語の場合、特に対比の意味でなければ主題ではなく主格としてマークされる。

【文焦点 (他動詞文)】

(9) [電話で] 「どうした (の) ?」「うん、一郎が (自分の) 弟を叩いたんだ。」

“무슨 일이야?”

mwusun il-i-ya?  
なんの 事-COP-INTRR

「どうした? (lit. なんのことだ?)」

“응, 이치로가 (자기) 남동생을 때렸어.”

ung ichilo-ka (caki) namtongsayng-ul ttayly(< i)-ess-e.  
うん 一郎-NOM 自分 弟-ACC 叩く -PST-DEC

アンケートでは「(例えば, 電話の向こうで子供の泣き声起きたのを聞いての発話)」という状況を与えられている. 聞き手の周りの状況について尋ねる場合, *mwusun iliya?* (どうした? (lit. なんのこただ?)) と言うことができる. 応答の文では, 日本語と同じく「一郎」は主格, 「弟」は対格でマークされている.

【目的語主題化, 主題(目的語)の継続性 いわゆる *pro-drop* 言語の可能性】

(10) 「あのケーキ, どうした?」「ああ, (あれは) 一郎が食べちゃったよ。」

“그 케이크 어떻게 했어?”

ku kheyikhu ettehkey hay-ss-e?

その ケーキ どう する-PST-INTRR

“아, (그건) 이치로가 먹어 버렸어.”

a (kuke-n) ichilo-ka mek-e pely(< i)-ess-e.

INTJ それ-TOP 一郎-NOM 食べる-CVB する-PST-DEC

特に対比的な意味でない場合, 朝鮮語も日本語と同じように「あのケーキ」は無助詞が自然であり, また, 応答の文においても主題化された目的語は現れなくてもよい. 対比の場合, 質問の方は *ku kheyikhu-nun* (その ケーキ-TOP) のように主題のマーカを付け, 応答の方でも *kuke-n* (それ-TOP) のように指示代名詞に主題のマーカを付けるのが自然である.

【分裂文】

(11) 「私が昨日お店から買って来たのはこのリンゴだ。」

내가 어제 가게에서 사 온 것은 이 사과이다.

nay-ka ecey kakey-eyse sa on kes-un

わたし-NOM 昨日 店-LOC 買う.CVB 来る-ADN.PST もの-TOP

i sakwa-i-ta.

この りんご-COP-DEC

分裂文を作る際には, 日本語では「ノ」を用いるが, 朝鮮語では *kes* (こと, もの) を用いる. 日本語例文に対応する朝鮮語は, 日本語のそれと類似した構造を見せているが, 分裂文において焦点となる名詞句が有情物である場合はぞんざいな印象を与えるようになり, *salam* (人) を用いる方が自然である.

내가 어제 만난 ?것/사람은 이치로이다.

nay-ka            ecey    manna-n            ?kes/salam-un    ichilo-i-ta.

わたし-NOM    昨日    会う-ADN.PST    もの/人-TOP    一郎-COP-DEC

「わたしが昨日会ったの(人)は一郎だ」

日本語の「ノ」に比べ、朝鮮語の kes (こと, もの) はモノ的意味を強く残しているためだと考えられる。

【措定文 主題(名詞述語文の主語)の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

(12) 「あの人は先生だ. この学校でもう3年働いている。」

저 사람은 선생(님)이다.

ce    salam-un    sensayng(nim)-i-ta.

あの 人-TOP    先生-COP-DEC

이 학교에서 벌써 3년째 일하고 있다.

i    hakkyo-eyse    pelsse    3-nyen-ccay    ilha-ko            iss-ta.

この 学校-LOC    もう    3年-目    仕事する-CVB    いる-DEC

措定文は、朝鮮語においても日本語と同じようにコピュラ -ita を用いた名詞述語文で表れる。また措定文「AハBダ」の主題マーカー「ハ」は朝鮮語では -un/nun だけでなく主格助詞 -i/ka で表すこともできる。この場合、-i/ka は「排他的焦点」ではなく、特定の指示項を発話に導入する「提示的焦点」を表すものになる。

朝鮮語では -ita の品詞をめぐる様々な議論があり、学校文法では「叙述格助詞」とされているが、独立した用言のひとつとして「指定詞」とする説もある。この説では、-ita が「A i/ka B ita」という形式で「AがBである」ことを「指定」する機能をするとしており、(12) の場合は、AがBという「属性」を持つことを「指定」する文と言える(属性指定<sup>1</sup>)。

<sup>1</sup> Choy Wunghwan (2005: 256) では「A i/ka B ita」または「A un/nun B ita」の形式で表れる「ita」構文における先行名詞 A と B の関係は「同一性」または「対象に対する属性」であると述べており、Nam kilim (2004: 31) では -ita の基本的な語彙意味は「同一性指定」と「属性指定」であるとしている。本稿ではこれらの先行研究に従い、コピュラ -ita の機能を①「同一性指定」と②「属性指定」の二つに分けることとする。一方、na-n khephi-i-ta (私はコーヒーだ) のような、いわゆるウナギ文については、Nam kilim (2004: 197) は

なお、例文 (10) で目的語の省略が可能であったように、主題（主語）についても後続文に同一主題（主語）を参照する場合、これは現れなくてもよい。

#### 【倒置指定文】

(13) 「彼のお父さんは、あの人だ。」

그의 아버지는 저 사람이다.

ku-uy apeci-nun ce salam-i-ta.

彼-GEN 父-TOP あの 人-COP-DEC

朝鮮語の倒置指定文も同じくコピュラ *-ita* を用いた「A un/nun B ita」で表れる。朝鮮語では「倒置指定文」「指定文」「倒置同定文」「同定文」で用いられるコピュラ *-ita* はいずれも A と B が「同一」であることを「指定」する機能をすると考えられる（同一性指定）。また、(13) の朝鮮語文は日本語と同様に「彼のお父さんは誰か」という問いへの呼応文として用いられる。

#### 【指定文】

(14) 「あの人がある彼のお父さんだ。」

저 사람이 그의 아버지이다.

ce salam-i ku-uy apeci-i-ta.

あの 人-NOM 彼-GEN 父-COP-DEC

指定文は朝鮮語の *-ita* 構文の典型的な例であり、主格助詞 *-i/ka* を用いた「A i/ka B ita」で表れる。また、これは「誰が彼のお父さんか」という問いへの呼応文であり、この場合、主格助詞 *-i/ka* は「排他的焦点」を表すものになる。

---

「同一性指定」や「属性指定」というよりは一定のコンテキストの中で話し手と聞き手が共通的に認識している余剰情報に関連した「指定」であり、この場合の「指定」の意味は「要求、確言、命令、提案…」のような発話内行為 (illocutionary act) と密接な関係があるとしている。nayngcangko-nun samseng-i-ta (冷蔵庫はサムスンだ) や (yeksi) emeni-nun emeni-i-ta (やはり) お母さんはお母さんだ) のような文もこのような枠内で語用論的にアプローチする必要があると考えられる。

【定義文】

(15) 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

a. 모레란 말이지, 내일의 다음 날을 말하는 거야.

moley-lan mal-i-ci nayil-uy taum nal-ul malha-nun ke-(i)-ya.  
あさって-とは言葉-COP-CVB 明日-GEN 次 日-ACC 言う-ADN.PRS こと-(COP)-DEC

定義文における述部「B ノコトダ」は朝鮮語で対応する表現である B-i-n kes-i-ta (B-COP-ADN こと-COP-DEC) では表すことができず, (15a) B-ul/lul malha-nun kes-i-ta (B ヲイウノダ) で表すことができる. (15b) A-lan B-ul/lul malha-ta (A トハB ヲイウ), (15c) A-un/nun B-i-ta (A ハB ダ) のように表すこともできる.

b. 모레란 내일의 다음 날을 말한다.

moley-lan nayil-uy taum nal-ul malha-nta.  
あさって-とは 明日-GEN 次の 日-ACC 言う-DEC.NPST

c. 모레는 내일의 다음 날이다.

moley-nun nayil-uy taum nal-i-ta.  
あさって-TOP 明日-GEN 次の 日-COP-DEC

【ウナギ文】

(16) [何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて] 「私はコーヒーだ。」<sup>2</sup>

a. “난 커피.” / b. “전 커피요.”

na-n khephi. / ce-n khephi-yo.  
わたし-TOP コーヒー わたし-TOP コーヒー-POL

c. “난 커피야.” / d. “전 커피예요.”

na-n khephi-(i)-ya. / ce-n khephi-yeyyo.  
わたし-TOP コーヒー-(COP)-DEC わたし-TOP コーヒー-COP.DEC.POL

朝鮮語においてもウナギ文の「A ハ B ダ」はコピュラ -ita を用いた「A un/nun B ita」で

<sup>2</sup> 「私はコーヒーだ」を逐語訳すると na-n khephi-i-ta (わたし-TOP コーヒー-COP-DEC) になるが、実際の談話において注文を聞かれた場面ではこのような文はほとんど使われないと考えられる。ただし、注文をするためにカウンターに向かう友達や目下の人に対して、「私はコーヒーだよ。忘れないでね。」と念を押す場面では使うことができる。この場合、語尾は上昇調の抑揚になる。

表すことができるが、文のニュアンスは日本語のそれとやや異なると言える。(16) のような場面において、店員に対してではなく一緒にいる友達や目下に対しての発言ならば (16a) の「わたしはコーヒー」のように名詞止めで表すことができる。あるいは店員に丁寧に話す場合は (16b) のようにコピュラ *-ita* を付けず、丁寧さを表すマーカー *-yo/iyo* を直接つけた文が最も自然と言える。

(16c), (16d) のようにコピュラ *-ita* を用いた場合は、日本語とは異なり、「わたしはいつも／今日もコーヒーだ」のように習慣や反復を表す文になり、同場面においてこのような発話をするとう「わたしはいつもコーヒーだ、だからわざわざ言わなくてもわかるでしょ？」または「わたしは言うまでもなく今日もコーヒーです」というニュアンスを含む文になる。

朝鮮語のウナギ文は「習慣」や「反復」の意味を表す次のような副詞表現と一緒に用いられるとより自然な文になる。hangsang (いつも), onulto (今日も), myail (毎日), acikto (未だに), yecenhi (依然として), または「A モ B ダ」のように補助詞 *-to* (-も) が用いられる場合が多い (16e, f)。特に「B」に動作性のある名詞が来る場合はこのような傾向はより強くなる (16g, h)。そのため、「習慣」や「反復」のような意味を含まない場合は、名詞述語文ではなく動詞文で表す必要がある。

e. \*저는 걱정이예요.

ce-nun kekceng-i-eyyo.  
わたし-TOP 心配-COP-DEC.POL  
「わたしは心配です」

f. 저도 걱정이예요.

ce-to kekceng-i-eyyo.  
わたし-も 心配-COP-DEC.POL  
「わたしも心配です」

g. \*아버지는 산책이예요.

apeci-nun sanchayk-i-eyyo.  
お父さん-TOP 散歩-COP-DEC.POL  
「お父さんは散歩です」

h. 아버지는 오늘도 산책이예요.

apeci-nun onul-to sanchayk-i-eyyo.  
お父さん-TOP 今日-も 散歩-COP-DEC.POL  
「お父さんは今日も散歩です」

### 【逆行ウナギ文】

(17) [注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに]  
「コーヒーは私だ。」

a. “어느 분이 커피세요?”

enu pun-i khephi-(i)-seyyo?  
どの 方-NOM コーヒー-(COP)-HON.INTRR.POL  
「どの方がコーヒーですか？」

b. “저요.”

ce-yo.

わたし-POL

「わたしです」

c. “커피는 저예요.”

khephi-nun ce-yeyyo.

コーヒー-TOP わたし-COP.POL

「コーヒーはわたしです」

(17a) のような問いに対しては (16b) と同様にコピュラ *-ita* を用いずに、丁寧さを表すマーカーである *-yo/iyo* を一人称代名詞に直接つけた (17b) のような文が最も自然と言える。ただし、「どなたがコーヒーですか？」という問いが、店員の発話ではなく、一緒に喫茶店に来た人のものであれば、(17c) のように「A ハ B ダ」文で表すことができる。この場合「ハ」に当たる *-nun* は主題ではなく対比を表すマーカーになる。つまり、「紅茶やジュースではなくて、コーヒーはわたしだ」という意味を表すということである。

【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

(18) 「その重くて厚い本は (値段が) 高い。」

그 무겁고 두꺼운 책은 (가격이) 비싸다.

ku mwukep-ko twukkewu-n chayk-un (kakyek-i) pissa-ta.

その 重い-CVB 厚い-ADN 本-TOP 価格-NOM 高い-DEC

アンケートの例文は「その新しくて厚い本は (値段が) 高い。」であったが、「新しくて」を朝鮮語に直訳すると不自然になるため、ここでは「重くて」に変更した。

【意外性 (mirativity)】

(19) [砂糖の入れ物を開けて] 「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

“어, 설탕이 없네.”

e selthang-i eps-ney.

INTJ 砂糖-NOM ない-ADM

「意外性」は主に詠嘆や気付きなどの意味がある終止形語尾の *-ney* が表すと考えられる。この例では存在詞 *eps-* (ない) を日本語例文の「テイル」形のようにアスペクト形式を用いて表すことはできない。他の動詞の場合であっても、下の例文のように朝鮮語は状

態変化の知覚に関しては過去形を用いて表すのが普通である。

“어, 커피가 떨어졌네.”

e, khephi-ka ttelecy(< i)-ess-ney.

INTJ コーヒー-NOM 落ちる-PST-ADM

「あ、コーヒーが切れてる」

また、李姫子・李鍾禧 (2010: 176)<sup>3</sup> ではここで用いられた終止形語尾 *-ney* と似た意味を持つ終止形語尾 *-kwun (kwuna)* について、後者は過去の事柄を現在の時点で新たに気付いたときにも用いられるが、前者は用いられないと指摘している。さらに、李姫子・李鍾禧 (2010: 699-700)<sup>4</sup> は次の (20) で用いられている終止形語尾 *-ci* と *-kwun (kwuna)* についての違いも指摘しており、前者は話し手が‘既に知っている’事柄を述べるときに用いられるのに対し、後者は話し手が‘はじめて知った’事柄を述べるときに用いられる、と述べている。朝鮮語における情報構造のあり方を考える際、このような各終止形語尾の情報構造に関わる意味の違いを把握することが重要である。

#### 【思い出し】

(20) 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あつ、そうだ！田中君だったな。」

오후에 누구 만나기로 했지? 누구였더라? 아, 맞다! 다나카 군이었지?

ohwu-ey nwukwu manna-ki-lo hay-ss-ci? nwukwu-y(< i)-ess-tela?

午後-DAT 誰 会う-NMLZ-INST する-PST-ASS 誰-COP-PST-WIT

a, mac-ta! tanakha kwun-i-ess-ci?

INTJ 合う-DEC 田中 君-COP-PST-ASS

「思い出し」には確言を表す終止形語尾 *-ci* が用いられる。聞き手が知っていることを前提に述べたり、そのことを確認したりする意味の他に、主に独り言で既定の事柄を確認する用法があるが、ここでは後者の用法である。過去形になるのは日本語と同様である。日本語例文の「誰だったっけ。」のところで用いられている *-tela* は目撃法ともいわれるが、ここでは話者の体験、目撃したことに基づいて回想する用法であるといえる。

<sup>3</sup> 翻訳元の I Huyca, I Conghuy (2006) では p.127.

<sup>4</sup> 翻訳元の I Huyca, I Conghuy (2006) では p.462.

略号一覧

ACC	accusative	対格	N	non-	非-
ADM	admirative	詠嘆	NCOP	negative copula	指定詞 (否定形)
ADN	adnominal	連体形	NEG	negative	否定
ASS	assertive	確言	NMLZ	nominalizer	名詞化
COM	comitative	共同格	NOM	nominative	主格
COP	copula	指定詞	PLPF	pluperfect	大過去
CVB	converb	副動詞	POL	polite	丁寧
DAT	dative-locative	与位格	PRS	present	現在
DEC	declarative	陳述	PST	past	過去
GEN	genitive	属格	QUOT	quotative	引用
HON	honorific	尊敬	REAS	reason	理由提示
INST	instrumental	具格	TOP	topic	主題
INTJ	interjection	間投詞	VOL	volitive	意志
INTRR	interrogative	疑問	WIT	witness	目撃
LOC	locative	位格			

参考文献

朝鮮語で書かれたもの

- Choy Wunghwan.2005. “Kwuke muncanguy hyengseng wenli yenkwu” [国語の文の形成原理の研究] , Seoul: Yeklak.
- I Huyca, I Conghuy.2006. “Hankwuke haksup haksupcayong emi/cosa sacen” [韓国語学習 学習者用 語尾・助詞辞典] , Seoul: Hankwukmwunhwasu. (李姫子・李鍾禧.2010.『韓国語文法語尾・助詞辞典』五十嵐孔一・申悠琳訳, 東京: スリーエーネットワーク.)
- Nam kilim.2004. “hyentay kwuke ‘ita’ kwumwun yenkwu” [現代国語 ‘ita’ 構文研究] , Seoul: Hankwukmwunhwasu.

日本語で書かれたもの

- 井上優. 2012. 「事態の叙述様式と文法現象——日本語から見た韓国語——」, 野間秀樹編『韓国語教育論講座』第2巻, 東京: くろしお出版, pp. 667-689.
- 金智賢. 2009. 「現代韓国語の談話における無助詞について——主語名詞を中心に——」, 『朝鮮学報』第210輯, 朝鮮学会, pp. 37-84.
- 田窪行則. 1990. 「対話における知識管理について——対話モデルからみた日本語の特性

——」, 『アジアの諸言語と一般言語学』, 東京 : 三省堂, pp.837-845.

英語で書かれたもの

Lambrecht, Knud. 1994. *Information structure and sentence form: Topic, focus and the mental representations of discourse referents*, Cambridge: Cambridge University Press.

## モンゴル語

山田 洋平

## 1. はじめに

モンゴル語はモンゴル諸語に属する言語で、主としてモンゴル国と中国は内モンゴル地域に話者が分布している。本稿ではモンゴル国のウブルハンガイ出身の女性の話者と中華人民共和国内モンゴル自治区通遼市出身の男性の話者（いずれも 1980 年代生まれで調査例文を理解する日本語力を有する）に調査協力を依頼しデータを集めた。以下では前者を Xal. (ハルハ方言)、後者を Xor. (ホルチン方言) としてデータを示す。Xal. にはモンゴル国で行われている正書法を付したが、その転写と Xor. の音素表記は共通の文字を用いて対応関係を分かりやすくした。

母音は /a, e, i, o, u, ö, ü/ でそれぞれ対応する長母音 /aa, ee, ii, oo, uu, öö, üü/ がある。/e/ は Xor. において [ɤ], /ee/ は口蓋子音の後で [e:], その他の環境で [ɤ:] として実現する。/o, u, ö, ü/ はそれぞれ [ɔ, o, ɐ, u] である。また Xor. において /a, o/ はそれぞれ口蓋子音の前で [æ, œ] として実現する。

子音は /b, t, d, g[g~ɣ]; z, c[ts], s, x; ʃ[dʒ], ʧ[ʧ], ʂ[ʂ]; m, n[n~ŋ]; l[l~ʎ], r[r~ɾ], j, w/ を立てる。/w/ は /b/ の異音であるが、Xal. の正書法での区別を反映して別の文字で転写している。Xor. でもこれにならう。

## 2. データ

[1] 「えっ、バートルが来たの?」 「いや、バートルじゃなくてドルジが来たんだ。」 (昨日のパーティに珍しく来た人について話している)

Xal. “Хөөх, Баатар ирээ юу?” “Үгүй ээ, Баатар бишээ, Дорж ирсэн.”

xööx	baatar	iree jüü	ügüj ee	baatar	bišee	дорj	irsen
xööx	baatar	ir-AA=UU	ügüj=AA	baatar	biš=AA	дорj	ir-sAn
INT	PN	to.come-IMP=Q	no=EMP	PN	NEG=EMP	PN	to.come-PERF

Xor. “e, baatar irsnüü?” “ügüi, baatar ireegüi, dorjii irjee”

e	baatar	ir-sAn=UU	ügüi	baatar	ir-AA-güi	дорjii	ir-jee
INT	PN	to.come-PERF=Q	no	PN	to.come-IMP-NEG	PN	to.come-PST

[2] 「誰が来たの?」 「ドルジが来たよ。」

Xal. “Хэн ирсэн бэ?” “Дорж ирсэн и дээ.”

xen irsen be                      dorj irsen š dee  
xen ir-sAn=be                      dorj ir-sAn=š=dAA  
who to.come-PERF=Q    PN    to.come-PERF=PTCL=PTCL

Xor. “xen irsii” “dorjii irjee”

xen ir-sAn=ii                      dorjii ir-jee  
who to.come-PERF=Q    PN    to.come-PST

[3] 「バータルの方が大きいんじゃないの?」 「いや、バータルじゃなくて、ドルジの方が大きいんだよ。」 (身長について話している)

Xal. “Баатар том биетэй биш гэж үү?” “Үгүй ээ, Баатар биш, Дорж том биетэй и дээ.”

baatar tom    bijetej            biš    geј үү                      үгүй ee    baatar    biš    dorj tom  
baatar tom    bije-tAj            biš    ge-ј=UU                      үгүй=ee    baatar    biš    dorj tom  
PN    big    body-PROP    NEG to.say-PST=Q    no=EMP    PN    NEG PN    big  
bijetej š dee  
bije-tAj=š=dAA  
body-PROP=PTCL=PTCL

Xor. “baatar tom bišüü?” “үгүйе, баатар том бише, доржii томоо”

baatar tom biš=UU    үгүйе    baatar tom biš=AA    dorjii tom=AA  
PN    big    NEG=Q    no    PN    big    NEG=PTCL    PN    big=PTCL

[4] [電話で] 「どうしたの?」 「うん、今、お客さんが来たんだ。」

Xal. “Яасан?” “Аан, сая зочин ирсэн шүү”

yaasan                      aan saja            zočin irsen šüü  
yaa-sAn                      aan saja            zočin ir-sAn=šüü  
to.do.what-PERF    INT    just.now    guest    to.come-PERF=PTCL

Xor. “yaasii” “nn, одоо јочин иreed байнаа”

yaa-sAn=ii                      nn    одоо    јочин    ir-AAd            bai-nA=AA  
to.do.what-PERF=Q    INT    now    guest    to.come-ANT    COP-NPST=PTCL

[5] 「あの子供がバータルを叩いたんだって!？」 「いや、バータルじゃなくて、ドルジを叩いたんだよ。」

Xal. “Тэр хүүхэд Баатарыг зодсон гэсэн үү?” “Үгүй ээ, Баатар биш Дорж зодсон ш дээ”

ter	xüüxed	baatariig	zodson	gesen	üü	ügüj ee	baatar	biš	dorj
ter	xüüxed	baatar-IIg	zod-sAn	ge-sAn=UU	ügüj=ee	baatar	biš	dorj	
that	child	PN-ACC	to.hit-PERF	to.say-PERF-Q	no=PTCL	PN	NEG	PN	

zodson š dee  
zod-sAn=š=dAA  
to.hit-PERF=PTCL=PTCL

人名 dorj には対格の標示が期待されるが、得られた回答は無標の形であった。

Xor. “ter xüüxed baatar čoxoj genüü?” “ügüii, baatarii čoxoogüii, dorjügii čoxjee”

ter	xüüxed	baatar	čox-ǰ	ge-nA=UU	ügüii=AA	baatar-ii	čox-AA-güii
that	child	PN	to.hit-PST	to.say-NPST=Q	no=PTCL	PN-ACC	to.hit-IMP-NEG

dorjii-ii čox-jee  
PN-ACC to.hit-PST

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買うの？」 「(私は)青い袋を買うよ。」

Xal. “Улаан, цэнхэр 2 уут байна, алийг нь авах уу?” “Хөхийг нь авъя”

ulaan	cenxer	хоуор	uut	bajna	alijg nj	awax uu	xöxijg nj
ulaan	cenxer	хоуор	uut	baj-nA	al-IIg=nj	aw-x=UU	xöx-IIg=nj
red	blue	two	bag	to.be-NPST	which-ACC=3	to.take-FUT=Q	blue-ACC=3

aw'ja  
aw-jA  
to.take-VOL

Xor. “ulaan üngtee bogč bolood xüx üngtee bogč binaa, alini awiibee?” “xüx üngteegii awijaa”

ulaan	üng-tee	bogč	bol-AAAd	xüx	üngtee	bogč
red	color-PROP	bag	to.become-ANT	blue	color-PROP	bag

bai-nA=AA ali-n aw-ii=bee xüx üng-tee-ii aw-jA=AA  
to.be-NPST=PTCL which-3 to.take-FUT=Q blue color-PROP-ACC to.take-VOL=PTCL

[7] 「バータルはどうした?」 「バータルは朝からどっかへでかけたよ。」 (例えば, 朝少し遅く起きて来たバータルの父親が, 姿の見えないバータルについて母親に尋ねている場面で)

Xal. “Баатар яасын?” (or “Хаачсын?”) “Баатар өглөө л нэг тийшээ гарсан и дээ”

baatar	yaasiin	(xaačsiin)	baatar	öglöö l	neg	tijšee
baatar	yaa-sAn=IIn	(xaač-sAn=IIn)	baatar	öglöö=l	neg	tijšee
PN	to.do.what-PERF=Q	to.go.where-PERF=Q	PN	morning=EMP	one	yonder

garsan š dee  
gar-sAn=š=dAA  
to.go.out-PERF=PTCL=PTCL

Xor. “baatar yagsii?” “baatar ürlüü bosood, xaa očsnii medexgii”

baatar	yag-sAn=ii	baatar	ürlüü	bos-AAAd	xaa	očsnii
PN	to.do.what-PERF=Q	PN	morning	to.get.up-ANT	where	to.go-PERF-ACC

med-x-güi  
to.know-FUT-NEG

[8] 「(あの子供は)誰を叩いたの?」 「(あの子供は)自分の弟を叩いたんだ。」

Xal. “Хэнийг зодсын?” “Өөрийнхээ дүүг зодсон”

xenijg	zodsiin	öörjnxee	düüg	zodson
xen-IIg	zod-sAn-IIIn	öör-IIIn-AA	düü-g	zod-sAn
who-ACC	to.hit-PERF-Q	own-GEN-REF	younger.sibling-ACC	to.hit-PERF

Xor. “ter xüüxed xenii čoxson genüü?” “ter xüüxed weeriin diüügeen čoxjee”

ter	xüüxed	xen-ii	čox-sAn	ge-n=UU	ter	xüüxed	weeriin
that	child	who-ACC	to.hit-PERF	to.say-NPST=Q	that	child	own-GEN

düü-AAAn                      čox-žee  
younger.sinling-REF      to.hit-PST

[9] [電話で] 「どうしたの?」 「うん, バータルが(自分の)弟を叩いたんだ。」 (例えば, 電話の向こうで子供の泣き声が聞こえての発話)

Xal. “Яасын?” “Аан, Баатар л дүүгээ зодоод”

yaasiin	aan	baatar l	düügee	zodood
yaa-sAn-IIIn	aan	baatar=l	düü-AA	zod-AAAd
to.do.what-PERF-Q	INT	PN=EMP	younger.sibling-REF	to.hit-ANT

「叩いたんだ」に相当する部分が「叩いてから」と言いさしになっている。

Xor. “yaasii” “aa, baatar ter diüigeen coxoogood uixalj baina”

yaa-sAn-ii aa baatar ter diüi-AAAn coxoo-AAAd uixal-j  
 to.do.what-PERF-Q INT PN that younger.sibling-REF to.hit-ANT to.cry-SIM  
 bai-n=AA  
 to.be-NPST=PTCL

[10] 「あのケーキ、どうした?」 「ああ、(あれは)バータルが食べちゃったよ。」

Xal. “Тэр бялуу яасын?” “Аа тэрүү, Баатар л идчихсэн ии дээ”

ter bjaluu yaasiin aa terüü baatar l idčixsen š dee  
 ter bjaluu yaa-sAn-IlIn aa ter=UU baatar=l id-čix-sAn=š=dAA  
 that cake to.do.what-PERF-Q INT that=Q PN=EMP to.eat-PFV-PERF=PTCL=PTCL

Xor. “ter boorsog yagsnuu” “aa, baatar idečikjee”

ter boorsog yag-sAn-UU aa baatar id-čik-jee  
 that cake to.do.what-PERF-Q INT PN to.eat-PFV-PST

[11] 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」

Xal. Миний өчигдөр дэлгүүрээс авсан ном энэ байна.

minij öčigdör delgüürees awsan nom ene bajna  
 minij öčigdör delgüür-AAs aw-sAn nom ene baj-nA  
 1SG.GEN yesterday shop-ABL to.take-PERF book this COP-NPST

Xor. бii үчигдeр delgüürees ene номii худалдај awčirjee.

bii үчигдeр delgüür-AAs ene ном-ii худалд-ј awčir-jee  
 1SG yesterday shop-ABL this book-ACC to.sell-SIM to.bring-PST

[1]~[8] より、モンゴル語には焦点を表すような明示的な形式は存在しない。ただし、[1][5]に見られるような対比焦点については、その直後に下がり調子の来るイントネーションによってこれが示されているようでもある。また [6]に見られるような選択的な疑問語に応答する場合には Xal. において三人称所属 nj が付される。対格接辞は DOM で用いられることが知られているが、[6] Xor. のような目的語焦点を表すのにも用いられる可能性がある。なお [8][9] では diüü「弟」という語が長母音終わりであり再帰所属接辞が後続するという環境下で対格接辞の有無が判別できない。

[11] のような分裂文は、日本語に全く対応するような構文 (ex. *öcigdör aw-san=nj ene nom* {yesterday to.take-perf=3 this bool} 「昨日買ったのはこの本」) を作例して許容度を問えば容認される。しかし調査票のような日本語を提示しても自然なモンゴル語として分裂文的な回答は得られなかった。

[12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

Xal. *Тэр хүн багш. Энэ сургуульд багшлаад 3 жил болж байна.*

ter xün bagš ene surguuljd bagšlaad gurwan jil bolj  
 ter xün bagš ene surguulj-d bagšl-AAAd gurwan jil bol-ǰ  
 that person teacher this school-DAT to.teach-ANT three year to.become-SIM  
 bajna  
 baj-nA  
 to.be-NPST

Xor. *ter nek xün bol bagšaa, ene surguuld gurwan jil aǰil xiiǰ байна*

ter nek xün bol bagš=AA ene surguul-d gurwan jil aǰil  
 that one person COND teacher =PTCL this school-DAT three year work  
 xii-ǰ bai-nA-AA  
 to.do-SIM to.be-NPST-PTCL

[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」

Xal. *Түүний аав тэр хүн*

tüünij aaw ter xün  
 tüünij aaw ter xün  
 that.GEN father that person

Xor. *tend baix ter xün bol ternii aawnaa / ter nek xün bol ternii aawn*

tend bai-x ter xün bol ter-ii aaw-n=AA / ter nek xün  
 there to.be-FUT that person COND that-GEN father-3=PTCL that one person  
 bol ter-ii aaw-n  
 COND that-GEN father-3

Xor. は日本語調査票から期待される訳が得られなかったが (次の [14] に似る) これは Xor. において倒置指定文が許容されにくいことを表すものか。

[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」

Xal. *Tэр хүн түүний аав.*

ter	xün	tüünij	aaw
ter	xün	tüünij	aaw
that	person	that.GEN	father

Xor. *ter xün bol ternii aawn*

ter	xün	bol	ter-ii	aaw-n
that	person	COND	that.GEN	father-3

[15] 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

Xal. *Нөгөөдөр гэдэг чинь байна и дээ, маргаашийн дараах өдөр байхгүй юу.*

nögöödör	gedeg činj	bajna š dee	margaašijn	daraax
nögöödör	ge-dAg-činj	baj-nA=š=dAA	margaaš-IlIn	daraax
day.after.tomorrow	to.say-HBT-2SG	COP-NPST=PTCL=PTCL	tomorrow-GEN	next
ödör	bajxgüj juu			
ödör	baj-x-güj=UU			
day	COP-FUT-NEG=Q			

Xor. *niigüüder gedeg boloo margaašnee daraačin üder imoo*

nügüüder	ge-dAg	boloo	margaaš-nee	daraačin	üder=imoo
day.after.tomorrow	to.say-HBT-2SG	COND	tomorrow-GEN	next	day=PTCL

モンゴル語におけるコピュラ文は基本的に2つの名詞項を並べることでこれを表し、コピュラ動詞としては時制などが有標の場合にのみ存在動詞 *baj* が用いられるという。[15] Xal. で用いられるコピュラは「～ではないか」という否定疑問の形式であるゆえに用いられているとも、定義文であるゆえに用いられているとも考えられる。

Xor. は [12]~[15] において主語が *bol* でマークされているが、条件「なら」に由来するこの形式が名詞述語文の主語を表すものとして使用されている可能性がある。[15] の定義文ではいずれも *ge-deg* {*to.say-HBT*} 「と言う」が主語を取り立てている。また [13][14] Xor. に見られる三人称所属 *nj* は、「彼の」という純粋な三人称所属の意味を表しているとも考えられる一方で、指定文における名詞述語を明示する機能を担っているように見える。

[16] [何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて]「私はコーヒーだ。」

Xal. *Би кофе.*

bi kofje  
bi kofje  
1SG coffee

Xor. *bii kaafei awnaa*

bii kaafei aw-nA=AA  
1SG coffee to.take-NPST=PTCL

[17] [注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか?」との問いに]「コーヒーは私だ。」

Xal. “*Хэн кофе авах вэ?*” “*кофе юу? Би би.*”

xen kofje awax we kofje yuu bi bi  
xen kofje aw-x=we kofje=UU bi bi  
who coffee to.take-FUT=Q coffee=Q 1SG 1SG

Xor. “*xen kaafei awsan bee*” “*aa, kaafeigii bii awjee*”

xen kaafei aw-sAn=bee aa kaafei-ii bii aw-jee  
who coffee to.take-PERF=Q INT coffee-ACC 1SG to.take-PST

[16] Xal. のようなウナギ文らしい例は使用され、またそれを逆にした *kofje bi* {coffee 1SG}「コーヒーは私だ」も容認されるという。ただしいずれも *aw-’ja* {to.take-VOL}「もらおう」のような語が省略されたものであるという。いずれの場合もコピュラ動詞 *baj* などを用いることはできない。

なお [17] Xor. では目的語の主題化 (cf. [10]) が起こっており、「コーヒー」が旧情報であることを示すのに対格接辞が用いられているとみられる。

[18] 「その新しくて厚い本は(値段が)高い。」

Xal. *Тэр шинэ, зузаан ном үнэтэй.*

ter šine zuzaan nom ünetej  
ter šine zuzaan nom üine-tAj  
that new thick book cost-PROP

Xor. *ter nek šine deereen jujaan nomn üntee*

ter	nek	šine	deer-AA	jujaan	nom-n	ün-tee
that	one	new	on-REF	thick	book-3	cost-PROP

Xor. では修飾構造の連続を断つために三人称所属の形式が使用されている。

[19] [砂糖の入れ物を開けて] 「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

Xal. “Өө, элсэн чихэр дуусчихсан байна и дээ”

öö	elсен	čixer	duusčixsan	bajna	š	dee
öö	elсен+čixer		duus-čix-sAn	baj-nA=š=dAA		
INT	sugar		to.finish-PFV-PERF	to.be-NPST=PTCL=PTCL		

Xor. “aa, čagaan šixer üguilee bolj байна”

aa	čagaan+šixer	ügui=lee	bol-ј	bai-nA=AA
INT	sugar	no=become	to.become-SIM	to.be-NPST=PTCL

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！ ドルジだったな。」

Xal. “Үдээс хойш хэн нэгэнтэй уулзах л ёстой байсьм даа. Хэн билээ дээ. Аан нээрээ тийм. Дорж байсан байна и дээ.”

üdees	хојš	xen	negenteј	uulzax l	jostoj	bajsiim daa		
üd-AAs	хојš	xen	negen-tAj	uulz-x=l	jos-tAj	baj-sAn=jum=daa		
noon-ABL	after	who	one-COM	to.meet-FUT=EMP	due-PROP	COP-PERF=PTCL=PTCL		
xen	bilee dee	aan	neeree	tijm	dorј	bajсан	bajna š	dee
xen	bilee=dAA	aan	neeree	tijm	dorј	baj-sAn	baj-nA=š=dAA	
who	Q=PTCL	INT	true	so	PN	COP-PERF	COP-NPST=PTCL=PTCL	

Xor. *üdeen hoin neg xünteec üčiren geed bajj bollee, xen boloo, aa tiim tiim, dorјii dorјii šdee*

üd-iin	hoin	neg	xün-tee	üčir-nA	ge-AA	Ad	bai-ј
noon-GEN	after	one	person-COM	to.meet-NPST	to.say-ANT	COP-SIM	
bol-lee	xen	boloo	aa	tiim	tiim	dorјii	dorјii=š=dAA
to.become-pst	who	Q	INT	so	so	PN	PN=PTCL=PTCL

=š=dAA という終助詞 (の組み合わせ) が意外性や思い出しの意を担っているようにも見えるが、とくに Xal. においては [2][3][5][7][10][19] などにおいても当該要素は広く用いられており、その機能についてはさらなる検討を要する。

#### 略号一覧

-	suffix boundary	DAT	dative-locative	PFV	perfective
=	clitic boundary	EMP	emphasis	PN	proper name
1	first person	FUT	future	PROP	proprietive
3	third person possessive	GEN	genitive	PST	past
ABL	ablative	HBT	habitual	PTCL	particle
ACC	accusative	IMP	imperfect	Q	question
ANT	anterior	INT	interjection	REF	reflexive
COM	comitative	NEG	negative	SG	singular
COND	conditional	NPST	non-past	SIM	simultaneous
COP	copula	PERF	perfect	VOL	volative

## ダグール語

山田 洋平

## 1. はじめに

ダグール語はモンゴル諸語に属する言語で、チチハル方言、ブトハ方言、ハイラル方言、新疆方言の4方言からなる。新疆ウイグル自治区塔城に分布する新疆方言を除く3方言は中国の東北部に話者が分布している。本稿ではチチハル方言について黒竜江省チチハル市メイリス地区の女性(1939年生まれ)に、ブトハ方言につき内モンゴル自治区フルンボイル市ニルゲ鎮の男性(1956年生まれ)に、ハイラル方言につき内モンゴル自治区フルンボイル市モホルト村の女性(1925年生まれ)に調査協力を依頼しデータを集めた。チチハル方言とブトハ方言は漢語から、ハイラル方言は日本語から訳出していただいた。以下、チチハル方言をQ、ブトハ方言をB、ハイラル方言をHとして順に示す。訳出は自由訳とし、3種類の方言の間に見られる異なりは、語彙の違いを除くと方言差というよりも個人差によるものが大きい可能性を指摘しておく。

ダグール語の音素目録は以下の通り。母音は短母音 /a, e[ə], i, o, u/ とそれぞれに対応する長母音 /aa, ee[ə:], ii, oo, uu/ があるほか、いくつかの下降二重母音が認められる。/ie/ は [e:] または [ie] として実現する。子音は /p, t, k, b, d, g; m, n[n~ŋ]; s, h; š, č, j; l, r; y, w/ とそれぞれに対応する口蓋化子音(子音の後に /l/ をおいて示す)と円唇化子音(同じく /u/ で示す)がある。

形態素を示す場合に大文字でAAと記した部分は母音調和による aa, oo, ee, ie といった異形態があることを意味する。

## 2. データ

[1] 「えっ、紅さんが来たの?」「いや、紅さんじゃなくて麗さんが来たんだ。」(昨日のパーティに珍しく来た人について話している)

诶? 小红来了? 不是小红, 是小丽来了。(例如, 人们在谈论昨天的聚会上来的稀客)

Q: *šiaohon irsenšie? – šiaohon bišen, šiaolii irse.*

Šiaohon	ir-sen=š=yee	šiaohon	bišen	šiaolii	ir-sen
PN	to.come-PERF=2SG=Q	PN	NEG	PN	to.come-PERF

B: *šiaohon irsen? – šiaohon bišen, šiaolii.*

Šiaohon	ir-sen	šiaohon	bišen	šiaolii
PN	to.come-PERF	PN	NEG	PN

H: *šiaohon irsen aasenye?* – *bišen, šiaolii irsen aasen.*

Šiaohon	ir-sen	aa-sen=yee	bišen	šiaolii	ir-sen	aa-sen
PN	to.come-PERF	COP-PERF=Q	NEG	PN	to.come-PERF	COP-PERF

ダグール語はいずれの方言においても主語を表す明示的な格形式は無く、また主題や焦点を示す義務的な要素も無い。

Q では二人称の述語形式が出ているが、疑問を表す小辞と融合して人称の意を逸したものか。[3] ではこうした人称との融合は起こっていない。

[2] 「誰が来たの?」「紅さんが来たよ。」  
谁来了? 小红来了。

Q: *anii irsen?* – *šiaohon irse.*

anii	ir-sen	šiaohon	ir-sen
who	to.come-PERF	PN	to.come-PERF

B: *anii irsen?* – *šiaohon irsen.*

anii	ir-sen	šiaohon	ir-sen
who	to.come-PERF	PN	to.come-PERF

H: *ken irsen?* – *šiaohon irsen.*

ken	ir-sen	šiaohon	ir-sen
who	to.come-PERF	PN	to.come-PERF

[3] 「紅さんの方が大きいんじゃないの?」「いや、紅さんじゃなくて、麗さんの方が大きいんだよ。」(身長について話している)

不是小红高一些吗? 不是, 是小丽高一些。(谈论小红和小丽的个子高矮)

Q: *šiaohonnii biyin unner bišenye?* – *šiaohon bišen, šiaolii unner.*

šiaohon-ii	biy-in	unner	bišen=yee	šiaohon	bišen	šiaolii	unner
PN-GA	body-3SG	high	NEG=Q	PN	NEG	PN	high

B: *šiaohon hunner bišenye?* – *šiaohon hunner bišen, šiaolii hunner.*

šiaohon	hunner	bišen=yee	šiaohon	hunnur	bišen	šiaolii	hunnur
PN	high	NEG=Q	PN	high	NEG	PN	high

H: *šiaohon under bišinye?* – *bišin, šiaoliyini under.*

šiaohon	undur	bišin=yee	bišin	šiaolii-ini	undur
PN	high	NEG=Q	NEG	PN-3SG	high

対比の焦点も Q, B においては特別の要素は用いられていない。しかし H では三人称所属の -ini が焦点化の機能を担っているようである。

[4] [電話で]「どうしたの?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

(打电话) 怎么了? 嗯, 家里来了客人。

Q: *nyamar baittee? – maanii gertmaan kuu irse.*

nyamar	bait-tee	maanii	geri-d-maan	kuu	ir-sen
how	occasion-PROP	1PL.EXC.GEN	home-DAT-1PL.EXC	person	to.come-PERF

B: *her šiisen? – ee gerdmini aniakee irsen.*

her	ši-sen	ee	geri-d-mini	aniakee	ir-sen
how	to.do-PERF	INT	home-DAT-1SG	neighbor	to.come-PERF

H: *yoo bolj aawei? – edkee aniekee kuu irsen.*

yoo	bol-j	aa-wei	edkee	aniekee	kuu	ir-sen
what	to.become-SIM	COP-NPST	just.now	neighbor	person	to.come-PERF

[5] 「あの子供が紅さんを叩いたんだって!?!」「いや、紅さんじゃなくて、麗さんを叩いたんだよ。」

听说那个孩子打了小红? /听说那个孩子把小红打了? 打的不是小红, 是小丽。

Q: *ter kuu šiaohonii tabise. – tabisnii šiaohon bišee, šiaolii tabirte.*

ter	kuu	šiaohon-ii	tab-sen	tabi-sen-ii	šiaohon	bišen	šiaolii
that	person	PN-GA	to.hit-PERF	to.hit-PERF-GA	PN	NEG	PN

tabi-rt-sen  
to.hit-PASS-PERF

B: *sonstenmini ter kek šiaohonii tarksen. – tarksnini šiaohon bišen, šiaolii.*

sons-sen-mini	ter	kek	šiaohon-ii	tark-sen	tark-sen-iii	šiaohon
to.hear-PERF-1SG	that	child	PN-GA	to.hit-PERF	to.hit-PERF-3SG	PN

bišen šiaolii  
NEG PN

H: *ter keuk šiaohonii tarhsen aasenyee? – šiaohonii bišin, šiaoliiyii tarhsen aasen.*

ter	keuk	šiaohon-ii	tarh-sen	aa-sen=yee	šiaohon-ii	bišin	šiaolii-ii
that	child	PN-GA	to.hit-PERF	COP-PERF=Q	PN-GA	NEG	PN-GA

tarh-sen aa-sen  
to.hit-PERF COP-PERF

Q では *šiaolii* を主語とする受け身文が用いられている。B では「叩いたのは紅さんではない、麗さんだ」という形の分裂文が用いられ、元の文「紅さんを叩く」での目的語に当たる語（「紅さん」「麗さん」）は属対格接辞が付されない形であらわれている。

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買うの？」 「(私は)青い袋を買うよ。」  
有红色的和蓝色的袋子，你买哪个？ 我买蓝色的袋子。

Q: *hulaan bao bei, širaan bao bei. aliiikine aobšie? – bii širaan ĵustiine awbei.*

hulaan bao bei širaan bao bei aliiik-in aw-bei=š=yee bii širaan  
red bag exist blue bag exist which-3SG to.take-NPST=2SG=Q 1SG blue  
ĵus-tii-in aw-bei  
color-PROP-3SG to.take-NPST

B: *ene hulaan ĵustee širaan ĵustee taiz bee, alini aobšie? – bii širaanini awwei.*

ene hulaan ĵus-tee širaan ĵus-tee taiz bee ali-ini  
this red color-PROP blue color-PROP bag exist which-3SG  
aw-bei=š=yee bii širaan-ini aw-wei  
to.take-NPST=2SG=Q 1SG blue-3SG to.take-NPST.1SG

H: *ulaanini boloor širaanini alini awbeišie? – bii širaanini awyaa kee gelĵawei.*

ulaan-ini bol-AAr širaan-ini ali-ini aw-bei=š=yee bii  
red-3SG to.become-ANT blue-3SG which-3SG to.take-NPST=2SG=Q 1SG  
širaan-ini aw-yaa kee gel-ĵ aa-bei  
blue-3SG to.take-VOL PTCL to.say-SIM COP-NPST

選択を表す疑問語には三人称所属の要素が付され（さらに文末には極性疑問文に用いられる疑問マーカー =yee が付され）、回答にも三人称所属が付されている。

[7] 「紅はどうした？」 「紅は朝からどっかへでかけたよ。」（例えば、朝少し遅く起きて来た紅さんの父親が、姿の見えない紅さんについて母親に尋ねている場面で）  
小红呢？ 小红早上就出门了。（比平时起来稍微晚一些的小红的父亲，因为没看到小红而询问母亲）

Q: *šiaohon haane ište? – šiaohon ert bosoo garĵyawse.*

šiaohon haane iš-sen šiaohon ert bos-AA gar-ĵ  
PN where to.go-PERF PN morning to.get.up-ANT to.go.out-SIM

yaw-sen  
to.go-PERF

B: *šiaohon?* – *šiaohon banne bosoo gaqir yaw-sen.*

šiaohon	šiaohon	banne	bos-AA	gaqir-∅	yaw-sen
PN	PN	morning	to.get.up-ANT	to.go.out-SIM	to.go-PERF

H: *šiaohon yoo kijj aawei?* – *šiaohon ert bosoor haanabur ič-sen.*

šiaohon	yoo	kijj	aa-bei	šiaohon	ert	bos-AAr	haanabur
PN	what	to.do-SIM	COP-NPST	PN	morning	to.get.up-ANT	anywhere

ič-sen  
to.go-PERF

B の *gaqir-∅* は動詞の語幹が単独で現れているように見えるが、後続の動詞と継起のようなつながりがあり、副動詞 *-j* が脱落したものであると解釈した。

[8] 「(あの子供は)誰を叩いたの?」 「(あの子供は)自分の弟を叩いたんだ。」  
那个孩子打谁了? 那个孩子打了他自己的弟弟。

Q: *ter kekuu kenii tabise?* – *weerii deuyee tabise.*

ter	kekuu	ken-ii	tabi-sen	weeri-ii	deu-AA	tabi-sen
that	child	who-GA	to.hit-PERF	self-GA	younger.sibling-REF	to.hit-PERF

B: *ter kek henii tarksen?* – *ter kek weer deuyee tarksen.*

ter	kek	hen-ii	tark-sen	ter	kek	weer	deu-AA	tark-sen
that	child	who-GA	to.hit-PERF	that	child	self	younger.sibling-REF	to.hit-PERF

H: *ter keuk kenii tarhsen?* – *weerii deuyee tarhsen.*

ter	keuk	ken-ii	tarh-sen	weeri-ii	deu-AA	tarh-sen
that	child	who-GA	to.hit-PERF	self-GA	younger.sibling-REF	to.hit-PERF

[2] と [8] より、Q, B においては「誰」にあたる疑問語が主語になる場合 *anii* とその他のこうになる場合 *ken* (B: *hen*) とで別の形式が用いられることがわかる。H ではこうした使い分けは無いようである。*ken* についてはモンゴル諸語に対応する語が広く見られるが、*anii* については来源不明である。

[9] [電話で]「どうしたの?」「うん、紅さんが(自分の)弟を叩いたんだ。」(例えば、電話の向こうで子供の泣き声が聞こえての発話)

(打电话)怎么了? 小红打她弟弟了。(在电话的另一头听到了孩子的哭声做出的询问)

Q: *ker kiisen? – šiaohon weerii deuyee tabise.*

ker kii-sen      šiaohon    weer-ii    deu-AA                    tabi-sen  
 how to.do-PERF    PN            self-GA    younger.sibling-REF    to.hit-PERF

B: *her šiisen? – šiaohon weer deuyee tarksen.*

her šii-sen      šiaohon    weer    deu-AA                    tark-sen  
 how to.do-PERF    PN            self    younger.sibling-REF    to.hit-PERF

H: *yoo bolj aawei? – šiaohon noon deuyee tarh-sen.*

yoo bol-j                    aa-bei      šiaohon    noon    deu-AA                    tarh-sen  
 what to.become-SIM    COP-NPST    PN            boy    younger.sibling-REF    to.hit-PERF

[10] 「あのケーキ、どうした?」「ああ、(あれは)紅さんが食べちゃったよ。」  
 那块蛋糕呢? 啊, 那块蛋糕让小红吃了。

Q: *ter dangao=ne - ter dangaoyi šiaohon idte.*

ter dangao=ne      ter    dangao-ii    šiaohon    id-sen  
 that cake=PTCL    that    cake-GA    PN            to.eat-PERF

B: *ter dangao=ne - šiaohon idten.*

ter dangao=ne      šiaohon    id-sen  
 that    cake=PTCL    PN            to.eat-PERF

H: *ter šingeetii utum ker ugui bolsen? – oo, šiaohon idsen kee.*

ter šingeetii      utum    ker    ugui    bol-sen                    oo    šiaohon    id-sen=kee  
 that    cream-PROP    cake    how    no    to.become-PERF    INT    PN            to.eat-PERF=PTCL

目的語を主題とする場合、Qに見られるように対格接辞を付して文頭に置くという方法が取られ、B、Hのように目的語項が落ちるということもよく起こる。また「あのケーキは?」という表現についてQ:[nə], B:[ne]のような要素が用いられている。ここでは漢語の「呢」を借用した要素であると解釈した。

- [11] 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」  
我昨天从店里买回来的是这本书。

Qa: *bii uš udur şandienneer ene bitegii awj ačirsenmaa.*

bii uš+udur şandien-AAr ene biteg-ii aw-ĵ ačir-sen=bi=aa  
1SG yesterday shop-AI this book-GA to.take-SIM to.bring-PERF=1SG=PTCL

Qb: *bii uš udur şandienneer awj ačirsem utkaa bitegmin.*

bii uš+udur şandien-AAr aw-ĵ aqir-sen-min utkaa biteg-min  
1SG yesterday shop-AI to.take-SIM to.bring-PERF-1SG namely book-1SG

Ba: *bii udeš şuudienneer en bitegii awj ačirsem.*

bii udeš şuudien-AAr en biteg-ii aw-ĵ ačir-sen=bi  
1SG yesterday book.store-AI this bool-GA to.take-SIM to.bring-PERF=1SG

Bb: *bii udeš şuudienneer awj ačirsen bitegmin.*

bii udeš şuudien-AAr aw-ĵ ačir-sen biteg-min  
1SG yesterday book.store-AI to.take-SIM to.bring-PERF book-1SG

Ha: *bii udiš udur gyaayaas ene bitegii awsanbie.*

bii udiš+udur gyaa-AAs ene biteg-ii aw-san=bie  
1SG yesterday street-ABL this bool-GA to.take-PERF=1SG

Hb: *bii udiš udur gyaayaas awsen bitegmini ene bedee.*

bii udiš+udur gyaa-AAs aw-sen biteg-mini ene bedee  
1SG yesterday street-ABL to.take-PERF book-1SG this PTCL

分裂文の可否を問うものであるが、いずれの方言においてもまずそれぞれ a に示したような非分裂文の回答が得られた。そこで筆者が意図的にこれを分裂文に直したうえでその容認度を問うた際に得られた回答が b である。b においても必ずしも意図した回答が得られていない可能性がある。Bb は awj ačirsen 「買った」 bitegmin 「私の本」の間に外心構造を示すような要素が無く、「買った本」のような連体構造を成しているだけのようにも見える。他方 Hb では「買った本はこれだ」という表現になっている。また、Qb に見られる utkaa はフィラーのようによく使用されるものであるが、分裂文における非焦点を示す要素であるとして解釈することもできそうである。

なお、目的語に焦点が当たる分裂文は [5]Q, B にも見られる。いずれも動詞 (完了形動詞接辞) の後ろに人称所属が付されている。この人称所属が外心構造を示しているようである。

[12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

那个人是老师。在这所学校已经工作了三年了。

Q: *ter seb, en šuetand gonzuolee guarban hoon bolle.*

ter seb en šuetan-d gonzuo-lee guarban hoon bol-sen  
that teacher this school-DAT work-since three year to.become-PERF

B: *ter huu šuetan seb. enne seb saojie gualban hoon bollen.*

ter huu šuetan seb enne seb saojie gualban hoon bol-sen  
that person school teacher here teacher to.sit-SIM three year to.become-PERF

H: *ter kuu bags bedee. ene šuetand bas guarban oon biteg jaaŋawei*

ter kuu bags bedee ene šuetan-d bas guarban oon biteg  
that person teacher PTCL this school-DAT also three year book  
jaa-ŋ+aa-wei  
to.teach-SIM+COP-NPST

[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」

他的爸爸是那个人。

Q: *ter kekii ečigin utaa ter kuu.*

ter kek-ii ečig-in utaa ter kuu  
that child-GA father-3SG namely that person

B: *inii ačayini ter huu.*

in-ii ačaa-ini ter huu  
3SG-GA father-3SG that person

H: *ene kuuyii baawaayini ter kuu bedee.*

ene kuu-ii baawaa-ini ter kuu bedee  
that person-GA father-3SG that person PTCL

[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」

那个人是他的爸爸。

Q: *ter kuu utkaa ene kekii ečigin.*

ter kuu utkaa ene kek-ii ečig-in  
that person namely this child-GA father-3SG

B: *ter huu inii ačaa-yini.*

ter huu in-ii ačaa-ini  
that person 3SG-GA father-3SG

H: *tend aaĵ aag kuu ene keukii baawaa-yini bedee.*

tend aa-ĵ aa-g kuu ene keuk-ii baawaa-ini bedee  
there to.be-SIM COP-FUT person this child-GA father-3SG PTCL

[13][14]とも Q では *utkaa~utaa* が用いられ、名詞述語文の主語と述語を結び付けているようである。いずれも「彼のお父さん」に人称所属が付されている。

[15] 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」  
所谓的后天就是明天的明天。

Q: *laayue-nii hoonii maden sarin.*

laayue-in hoon-ii maden sar-in  
december-3SG year-GA last month-3SG

B: *čaaĵ uderini utkai buni uderii buni udrini.*

čaaĵ uder-ini utkai buni uder-ii buni uder-ini  
day.after.tomorrow day-3SG namely tomorrow day-GA tomorrow day-3SG

H: *čaaĵ gelgšini (aagaasaa) buni udrii dagii uderini bedee.*

čaaĵ gel-g-šini (aa-AAs-AA) buni uder-ii dagii  
day.after.tomorrow to.say-FUT-2SG COP-COND-REF tomorrow day-GA next  
uder-ini bedee  
day-3SG PTCL

Q では意図した例文を得られなかったため、「12月は年の最後の月だ」という例文に差し替えた。

ここでは B において *utkai* (Q: *utkaa~utaa*) が用いられている。H では *gelg* 「という」が用いられ、随意で *aagaasaa* 「ならば」を用いてもよいという。Q, B, H いずれも主語述語両方に人称所属が付されている。H の主語にのみ二人称所属が付され、それ以外は三人称所属が付されている。

[16] [何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて]「私はコーヒーだ。」  
(在咖啡厅, 几个人被问到需要点些什么) 我要咖啡。

Q: *bii kaafei awbbe.*

bii kaafei aw-bei=be  
1SG coffee to.take-NPST=1SG

B: *bii kaafei awwei.*

bii kaafei aw-wei  
1SG coffee to.take-NPST.1SG

H: *bii kaafei ooyaa.*

bii kaafei oo-yaa  
1SG coffee to.drink-VOL

[17] [注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか?」との問いに]「コーヒーは私だ。」

(点好的饮料被端来, 针对 咖啡是哪位的?/哪位点的是咖啡? 这一提问) 咖啡是我的。

Q: (*ene kaafei anii awbei laa?*) *bii awbbe.*

(ene kaafei anii awbei=laa) bii aw-bei=be  
this coffee who to.take-NPST=PTCL 1sg to.take-NPST=1SG

B: *kaafei miniig.*

kaafei miniig  
coffee mine

H: (*ene kaafeiyini ken awsen aasen?*) *kaafei (aagaasaa) bii awsenbie. / kaafei minii awsenmini.*

(ene kaafei-ini ken aw-sen aa-sen?) kaafei (aa-aas-aa) bii  
this coffee-3SG who to.take-PERF COP-PERF coffee COP-COND-REF 1SG  
aw-sen=bie / kaafei minii aw-sen-mini  
to.take-PERF=1SG coffee 1SG.GEN to.take-PERF-1SG

[16][17]Q, B, H いずれにおいてもいわゆるウナギ文は得られなかった。

- [18] 「その新しくて厚い本は(値段が)高い。」  
那本又新又厚的书很贵。

Qa: *ten biteg hai šinken gačirsen jojaan biteg aidug kattoo.*

ten biteg hai šinken gačir-sen jojaan biteg aidug kattoo  
that book also new to.go.out-PERF thick book very expensive

Qb: *ter šinken jojaan biteg aidug kattoo.*

ter šinken jojaan biteg aidug kattoo  
that new thick book very expensive

B: *ter šinken jojaan biteg anii kattoo.*

ter šinken jojaan biteg anii kattoo  
that new thick book very expensive

Ha: *ter šinken gačirsen jojaan bitegii hudaayini hatoo.*

ter šinken gačir-sen jojaan biteg-ii hudaayini hatoo  
that new to.go.out-PERF thick book-GA price-3SG expensive

Hb: *ter šinken gačirsen jojaan biteg aagaasaa hatoo hudaatee.*

ter šinken gačir-sen jojaan biteg aa-AAAs-AA hatoo hudaayini  
that new to.go.out-PERF thick book COP-COND-REF expensive price-PROP

- [19] [砂糖の入れ物を開けて] 「あつ、砂糖が無くなっているよ!」  
(打开装砂糖的盒子) 啊, 砂糖已经用完了!

Q: *satanin akuu jarj barsen. / uw bolle.*

satan-in akuu jar-j barsen / uw bol-sen  
sugar-3SG all to.use-SIM to.finish-PERF no to.become-PERF

B: *oo ene baitang uwei bollen.*

oo ene baitang uwei bol-sen  
INT this sugar all to.become-PERF

H: *erie, satan ugei bolsen kee.*

erie satan ugei bol-sen kee  
INT sugar no to.become-PERF PTCL

[20] 「午後，誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あつ，そうだ！ 紅さんだったな。」  
我下午应该是要和谁见面的。是谁来着？啊，对了，是小红。

Q: *bii udii huanaa kenii aorii-bei elee aasen daa, aa šiaohonnii aoliibe elii aasenmaa.*

bii	ud-ii	huanaa	ken-ii	aorii-bei	el-AA	aa-sen	dAA
1SG	noon-GA	after	who-GA	to.meet-NPST	to.say-ANT	COP-PERF	PTCL
aa	šiaohon-ii	aolii-bei	el-ǰ	aa-sen=be-AA			
INT	PN-GA	to.meet-NPST	to.say-SIM	COP-PERF=1SG=PTCL			

B: *bii uder huaine hentee wačirbei ellen aasen aayijbei? aa šiaohon.*

bii	uder	huaine	hen-tee	wačir-bei	el-sen	aa-sen	aa-yi-ǰ
1SG	day	after	who-COM	to.meet-NPST	to.say-PERF	COP-PERF	COP-PROG-SIM
aa-bei	aa	šiaohon.					
COP-NPST	INT	PN					

H: *ene udees huaine kentii aorǰig aasenbie, aa šiaohon aasen bedee.*

ene	ud-AAs	huaine	ken-tii	aorǰ-g	aa-sen=bie	aa	šiaohon
this	noon-ABL	after	who-COM	to.meet-FUT	COP-PERF=1SG	INT	PN
aa-sen	bedee						
COP-PERF	PTCL						

#### 略号一覧

-	suffix boundary	DAT	dative-locative	PFV	perfective
=	clitic boundary	EMP	emphasis	PL	plural
1	first person	EXC	exclude	PN	proper noun
2	second person	FUT	future	PROG	progressive
3	third person	GA	genitive-accusative	PROP	propriative
ABL	ablative	GEN	genitive	PST	past
ACC	accusative	HBT	habitual	PTCL	particle
AI	ablative-instrumental	INT	interjection	Q	question
ANT	anterior	NEG	negative	REF	reflexive
COM	comitative	NPST	non-past	SG	singular
COND	conditional	PASS	passive	SIM	simultaneous
COP	copula	PERF	perfect	VOL	volitional

## ソロン語

風間 伸次郎

ソロン語は中国内蒙古自治区のホロンバイル地方に主に分布するツングース語族の言語で、その話者であるソロン人たちの主たる生業は遊牧である。中国では鄂温克 (èwēnkè) 語 (エウエンク語) の一方言とされている。ツングース諸語の中では、言語・文化の両面でモンゴル語の影響を強く受けた言語のひとつである。コンサルタントは 1957 年生まれ的女性で、2016 年 3 月にハイラル (海拉尔) にて調査を行った。媒介言語には漢語を使用した。使用した漢語の文は [ ] 内に示した。漢語の調査例文は 1988 年黒龍江省生まれの漢語母語話者に日本語から翻訳していただいた。ここに記して御礼申し上げたい。査読の先生からも貴重なコメントをいただいております。本稿がきちんとしたものに推敲できたことを深く感謝したい。なお斜字体は漢語からの借用語であることを示し、その表記はピンインによるものとする。

[1] 「えっ、シャオホン (もしくは、紅ちゃん (以下も同様)) が来たの?」「いや、シャオホンじゃなくてシャオリーが来たんだ。」【対比焦点 (主語)】 (例えば、昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話)

[A: 「诶? 小红来了?」 B: 「不是小红, 是小丽来了。」]

“ai,            xiaohong            əmə-səə=gi?”  
EXCLA        PN                    come-PTCP.PERF=Q

“xiaohong            əntu,            xiaoli            əmə-səə.”  
PN                    different            PN                    come-PTCP.PERF

焦点の部分はプロミネンスを伴って発音される。例えばこの例[1]では、*xiaoli* の発音がプロミネンスを伴って発音された。このことは以下の文でも基本的に同様である。

[2] 「誰が来た (の)?」「シャオホンが来たよ。」【WH 焦点 (主語)・WH 応答焦点 (主語)】

[A: 「谁来了?」 B: 「小红来了。」]

“awuu            əmə-səə?”            “xiaohong            əmə-səə.”  
who                    come-PTCP.PERF        PN                    come-PTCP.PERF

[3] 「シャオホンの方が大きいんじゃないの?」「いや, シャオホンじゃなくて, シャオリーの方が大きいんだよ。」【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】(シャオホンとシャオリーの背について話している状況で)

[A: 「不是小红高一些吗?」 B: 「不是, 是小丽高一些。」]

“*xiaohong* *gudda-slaa* *əntu=gi?*” “*əntu,* *xiaoli* *gudda-slaa.*”  
 pn tall-COMPR different=Q different PN tall-COMPR

[4] [電話で]「どうした(の)?」「うん, 今, お客さんが来たんだ。」【文焦点(自動詞文)】

[(打电话) A: 「怎么了?」 B: 「嗯, 家里来了客人。」]

“*ittoo-soo?*” “*juu-ddu* *aiłm* *əmə-səə.*”  
 what.happen-PTCP.PERF home-DAT visitor come-PTCP.PERF

[5] 「あの子供がシャオホンを叩いたんだって!」「いや, シャオホンじゃなくて, シャオリーを叩いたんだよ。」【对比焦点(目的語)】

[A: 「听说那个孩子打了小红? /听说那个孩子把小红打了?」 B: 「打的不是小红, 是小丽。」]

“*dooldi-d-du,* *tajjaa* *uril,*  
*hear-PTCP.IMPF-DAT* *that* *child*

*xiaohong(-bə)* { *mandaa-saa=gi?* / *mandaa-saa* *gun-ən=gi?* }”  
 PN-ACC hit-PTCP.PERF=Q hit-PTCP.PERF say-PTCP.IMPF=Q

*xiaohong-bə* *ə-səə* *mandaa-saa,* *xiaoli-wə* *mandaa-saa.*  
 PN-ACC NEG-PTCP.PERF hit-PTCP.PERF PN-ACC hit-PTCP.PERF

本稿のテーマには直接関連しないが, 例冒頭の *dooldi-d-du hear-PTCP.IMPF-DAT* の部分は, 漢語の表現からの直訳によって生じたものと思われる. なお () 内の要素 (ここでは *-bə*) は任意の要素である. 実際の録音時には, 言い直した際に発話された. { / } に示した表現も, やはり二様に発話されたものである.

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う（の）?」「(私は) 青い袋を買うよ。」【対比焦点（目的語，特に「どっち」という対比的な疑問語の場合）】

[A : 「有红色的和蓝色的袋子，你买哪个？」 B : 「我买蓝色的袋子。」]

“olarin            oočči        xux uŋgu-si    tukku        bi-sin,  
red                and            blue color-PROP bag            be-PTCP.IMPF

sii    ijjəə-wə-n        ga-da-ndɪ?”  
you    which-ACC-3SG    take-IND.PRS-2SG

“bii xux uŋgu-si    tukku-wə-n        ga-da-m=ee.”  
I    blue color-PROP bag-ACC-3SG        take-IND.PRS-1SG=EMP

[7] 「シャオホンはどうした?」「シャオホンは朝からどっかへでかけたよ。」【述語焦点（例えば，朝少し遅く起きて来たシャオホンの父親が，姿の見えないシャオホンについて母親に尋ねている場面で）】

[A : 「小红呢?」 B : 「小红早上就出门了。」]

“xiaohong    iləə            nin-čəə?”  
PN            where            go-PTCP.PERF

“xiaohong        əddə-lii            juu-či        ul-čəə.”  
PN                morning-PROL        go.out-SEQ    leave-PTCP.PERF

漢語の「小红呢?」のように，主題だけで文とすることは難しいのか，*iləə nin-čəə*「どこへ行った」のような述語が補われている．使用した漢語の調査例文に「どっかへ」の語句もなかったので，A : 「シャオホンはどこに行った?」 B : 「シャオホンは朝から出かけて行ったよ」のような文が得られた．

[8] 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

【WH焦点（目的語）・WH応答焦点（目的語）】

[A : 「那个孩子打谁了?」 B : 「那个孩子打了他自己的弟弟。」]

“tan uril    awu-wa    mandaa-saa?”  
that child who-ACC    hit-PTCP.PERF

“tan        uril        məən-ii            nəxum-bi            mandaa-saa.”  
that        child        oneself-GEN        younger.brother-REF.SG    hit-PTCP.PERF

[9] [電話で]「どうした(の)?」「うん, シャオホンが(自分の)弟を叩いたんだ。」  
 【文焦点(他動詞文)】(例えば, 電話の向こうで子供の泣き声起きたのを聞いての発話  
 [(打电话) A:「怎么了?」 B:「小红打她弟弟了。】

“ittoo-soo?”                      “xiaohong                      naxum-bi                      mandaa-saa.”  
 what.happen-PTCP.PERF                      PN                      younger.brother-REF.SG                      hit-PTCP.PERF

[10] 「あのケーキ, どうした?」「ああ, (あれは) シャオホンが食べちゃったよ。」

【目的語主題化, 主題(目的語)の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

[A:「那块蛋糕呢?」 B:「啊, 那块蛋糕让小红吃了。】

“tan                      əwəən                      ittoo-soo?”  
 that                      cake                      what.happen-PTCP.PERF

“aa,                      tajjaa                      əwəəm-bə                      xiaohong-də                      ji-kkəən-č-u.”  
 EXCLA                      that                      cake-ACC                      PN-DAT                      eat-CAUS-PTCP.PERF-1SG

ここでも漢語の「那块蛋糕呢?」に対して, ittoo-soo「どうした」という述語が補われているのが観察される. 主題となった əwəən「ケーキ」は応答文では文頭に移動されている. 「あの」に当たる語には tan と tajjaa の両方が使われるが, 話者によれば両者に違いはないという. 問いの文の tan は「あの」の意で用いられているが, 対格接辞は用いられなかった.

なお, 「シャオホンが食べちゃったよ」の応答文に当たる文が, 「シャオホンに食べさせたよ」のような使役文となっているが, これは媒介言語の漢語の表現からの影響によるものと考えられる.

[11] 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」【分裂文】

[我昨天从店里买回来的是这本书。]

(a)    bii                      tiinugu                      bitgii-nii                      bəgə-txi                      unii-m                      əmuu-s-u  
          I                      yesterday                      book-GEN                      place-ABL                      trade-SIM                      bring-PTCP.PERF-1SG

əjjəə                      dəbtər.  
 this                      book

(b)    tiinugu                      minii                      bitgii-nii                      bəgə-txi                      unii-m                      əmuu-səə-nin  
          yesterday                      my                      book-GEN                      place-ABL                      trade-SIM                      bring-PTCP.PERF-3SG

əjjəə dəbtər.  
this book

(a) が先に発話された文で、少ししてから次に (b) の文が発話された。(a) は単なる動詞述語文であるが、焦点である目的語が文末、それも述語の後に現れている。他方、(b) は形動詞の名詞用法を用いた分裂文(名詞述語文)である。tiinugu minii bitgii-nii bogu-txu unii-m əmuu-səə-nin「昨日私がお店から買って来たの」の部分は、1人称の人物が意味上の主語であるが、主語は属格形であり、興味深いことに形動詞につく人称は3人称の形になっている。この3人称の人称接辞は、モンゴル語における3人称をあらわすマーカーの *n'* 同様、主題のマーカーとして機能している可能性が考えられる。

[12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」【措定文 主題(名詞述語文の主語)の継続性 いわゆる *pro-drop* 言語の可能性】

[那个人是老师。在这所学校已经工作了三年了。]

tajjaa bəjə=si baksɪ.  
that person=TOP teacher

əjjəə sɔŋʊʊl-du baksɪ-laa-čči ilan anee oo-soo.  
this school-DAT teacher-VBLZ-SEQ three year become-PTCP.PERF

主題標示要素とグロスをつけた =sɪ / =si は漢語の「是」shǐ<sup>4</sup> と音形が似ているが、地理的には遠いがソロン語と同じく I 群の言語(池上(1989)などを参照されたい)であるエウェン語などに類似の音形・機能の =si, etc. が認められるので、漢語からの借用と決めつけることはできない。

漢語をなぞっているためかもしれないが、2番目の文で主題である主語は明示的に表現されていない。この言語では明示的に表現しなくともよいことが確認できる。

本特集のテーマとは直接関係ないが、2番目の文で baksɪ-laa-「先生をする」のような出名動詞が用いられていることが興味深い。媒介言語である漢語の文の構成とも異なっているので、漢語の影響によるものでもない。この言語における名詞からの動詞化接辞 -laa の生産力を示している現象とみることができるだろう。

[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」【倒置指定文】

[他的爸爸是那个人。]

tajjaa-nɪ abaa-nɪ { tajjaa / tɔɪ } bəjə.  
that-GEN father-3SG that / that person

この言語は肯定現在であれば、特にコピュラを必要としない。

[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」【指定文】

[那个人是其他的爸爸。]

tari	bəjə=sɪ	tajjaa-nɪ	abaa-nm.
that	person=TOP	that-GEN	father-3SG

[15] 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」【定義文】

[所谓的后天就是明天的明天。]

tɪmɪnčɪ	bi-kki	tɪmaas m-ɪ	tɪmaas m.
the.day.after.tomorrow	be-COND	tomorrow-GEN	tomorrow

主題を示す要素に **bi-kki: be-COND** が現れているが、一般に他のツングース諸語にはこのような要素が見られないので、これはモンゴル語からの影響によって生じたものと考えたい。モンゴル語では **bol-bol: become-COND** に由来する **bol** という小詞が用いられる。このような要素に関しては、風間 (2003: 285) も参照されたい。このような条件形式に由来する主題提示の形式が、定義文によく用いられるものであるのか、はなお不明である。今後さらに研究を進める必要があると考える。

[16] [何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて]「私はコーヒーだ。」【ウナギ文】

[（在咖啡厅，几个人被问到需要点些什么）我要咖啡。]

“bii	kafei-wa-n	gada-m=ee.”
I	coffee-ACC-3SG	take-IND.PRS.1SG=EMP

“*bii	kafei.”
I	coffee

目的語である **kafei-wa-n** が 3 人称の人称接辞をとっていることが注目される。その理由は不明であるが、ここでは「(店のメニューの) コーヒー (-その)」という解釈を提案しておく。コンサルタントによればウナギ文は成立しないという。

[17] [注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに]  
「コーヒーは私だ。」【逆行ウナギ文】

[(点好的饮料被端来, 针对 咖啡是哪位的?/哪位点的是咖啡? 这一提问) 咖啡是我的。]

“*kafei-nin*            *minii.*”  
coffee-3SG            my

“\**kafei(-nin)*        *bii.*”  
coffee(-3SG)        I

ここでも逆行ウナギ文は成立しない。

[11] でみたように、3人称の人称接辞 *-nin* / *-nin* は主題標示要素として機能している可能性がある。この文では属格の人称代名詞がいわば物主代名詞のように機能している点も注目されるが、単に主要部名詞が省略されているという解釈もできるかもしれない。そのように解釈すると、この例はこのような場合にも主要部名詞が省略できるということを示す例ということになる。

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

[那本又新又厚的书很贵。]

(a)    *tari*    *dəbtər*        *naan*        *ikkixin*        *naan* *dɪram,*  
          that book        also        new            also thick

*əjjə* *dəbtər,*        *unə-si=ə.*  
this book            price-PROP=EMP

(b)    *tari*    *ikkixin=murtəən*        *dɪram*        *dəbtər*        *unə-si=ə.*  
          that new=and            thick        book            price-PROP=EMP

先に発話したのが (a) の文で、少ししてから次に (b) の文が提示された。=*murtəən* は管見の限り先行研究に記述がない。試しにいろいろな形容詞に変えて訊き直してみたが、=*murtəən* はどの形容詞にも同じ形で接続可能なようであった。音声的には前の語に従属しているかのような発音で続けて発話されていた。したがってここでは付属語と判断することにする。母音調和による異形態も観察されなかった。ただこの要素に関しては今後さらに研究を必要とする。

[19] [砂糖の入れ物を開けて]「あっ、砂糖が無くなっているよ!」【意外性 (mirativity)】  
 [(打开装砂糖的盒子) 啊, 砂糖已经用完了!]

a,	shatang-ba	xokko	xərgələə-m	man-čaa.
EXCLA	sugar-ACC	all	use-SIM	finish-PTCP.PERF

特に意外性を示す文に特徴的な要素は現れなかった.

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ. 誰だったっけ. あっ、そうだ! シャオホンだったな.」【思い出し】

[我下午应该是要和谁见面的. 是谁来着? 啊, 对了, 是小红.]

“bii	inən	dolm-tixi-n	amasixi,	awuu-ji	baxa-ldii-mi?
I	day	middle-ABL-3SG	after	who-INS	meet-RECIP-IND.PRS.1SG
awuu	bi-səə	bikkəə?	a,	juxi-saa,	
who	be-PTCP.PERF	PST	EXCLA	correspond-PTCP.PERF	
xiaohong-ji	baxa-ldii-r	bi-s-u	sitə.”		
PN-INS	meet-RECIP-PTCP.IMPF	be-PTCP.IMPF-1SG	EMP		

単に PST 「過去」とグロスで示した要素 *bikkəə* の機能に関しては、まだ十分明らかではない。もっぱら文末に現れ、その前の位置には形動詞、特に完了形動詞、もしくは[名詞-恒常的所有]をとって現れるようである。機能的には、(ずっと)以前の話など、現在と切り離された過去を示す際によく用いられているようだ。おそらく *bi:be* に接辞 *-kkəə* のついたものと分析されるべきだが、他の動詞に *-kkəə* のついた例がほとんど見出されないため、現時点では分析が難しい。なおこの要素に関して、査読者の方から貴重な情報をいただいた。忘れないためにも、また読者のためにもここに記しておく。モンゴル語ではこのような「自問」(～だっけ?)の問いの場合に、条件小詞 *bol* と同じ形式の *bol* が文末で用いられるという(査読者の方はこれを一種の「言いさし」と考えているという)。ソロン語も同様に条件形 *bi-kki* に似た形式が現れているので、査読者からの御教示にあったように、条件形 *bi-kki* に何らかの要素が付加されてできた形式かもしれない。

*xiaohong-ji baxa-ldii-r bi-s-u sitə.*の文では、【思い出し】は未完了形動詞+ *bi:be* の完了形動詞によって表現されている。これは、この言語でも日本語同様、【思い出し】が完了/過去などの形式によって表現することを示している点で非常に興味深い。

略号・記号

1, 2, 3: 1 <sup>st</sup> person, 2 <sup>nd</sup> person, 3 <sup>rd</sup> person	PN: proper noun 固有名詞
ABL: ablative 奪格	PROL: prolativ 沿格
ACC: accusative 対格	PROP: propriative 恒常的所有
CAUS: causative 使役	PRS: present 現在
COMPR: comparative 比較級	PST: past 過去
COND: conditional 条件	PTCP: participle 形動詞
DAT: dative 与格	Q: question particle 疑問小辞
EMP: emphasis 強調	RECIP: reciprocal 相互態
EXCLA: exclamation 感嘆詞	REF: reflexive 再帰
GEN: genitive 属格	SG: singular 単数
IMPF: imperfect 未完了	SEQ: sequential 先行 (副動詞)
IND: indicative mood 直説法	SIM: simultaneous 同時 (副動詞)
INS: instrumental 道具格	TOP: topic marker 主題標示
NEG: negative verb 否定動詞	VBLZ: verbalizer 動詞化
PERF: perfect 完了	

参考文献

- 池上二良 . 1989. 「ツングース諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 世界言語編』 第 1 卷. 1058-1083. 東京: 三省堂.
- 風間伸次郎. 2003. 「アルタイ諸言語の 3 グループ (チュルク・モンゴル・ツングース) 及び朝鮮語. 日本語の文法は本当に似ているのか—対照文法の試み」 アレキサンダー・ボビン・長田俊樹 (共編). 『日本語系統論の現在』 日文研叢書 31: 249-340. 京都: 国際日本文化研究センター.



## ナーナイ語

風間 伸次郎

ナーナイ語はツングース諸語の 1 つである。ツングース諸語は、類型的にみて日本語にもよく似たタイプの言語で、もっぱら接尾辞による膠着型言語である。語順は **Head-final**, つまり **SOV** で修飾語-被修飾語の順序をとる。以下は基本的に **IPA** をベースにした音素表記によるが、一音素一文字の原則などの理由から、次のような独自の音素表記も用いている:  $\check{c}[\text{t}\check{c}], j[\text{d}\check{z}], \check{n}[\text{n}]$ 。ロシア語からの近年の借用語と思われるものは斜字体で示している。

コンサルタントは 1938 年ナイヒン村生まれの女性である。調査はロシア語を媒介言語にして行った。日本語文の下の [ ] 内に使用したロシア語文を示す。ロシア語の調査例文は、1990 年ウラジオストック生まれの話者の方においてお願いして日本語から作成していただいた。なお調査例文の固有名詞は現在のナーナイにとって一般的なものに適宜差し替えた。

なおこの言語の文法の概略に関して、より詳しくは風間 (2010) も参照されたい。

[1] 「えっ、サーシャが来たの?」「いや、サーシャじゃなくてコーリャが来たんだ。」【対比焦点 (主語)】(例えば、昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

[Э, Саша пришёл? - Нет, это не Саша, это Коля пришёл.]

*Sasha*      j̄j̄u-xə-ni.

PN            come.back-PTCP.PERF-3SG

abaa,            t̄ai    *Sasha*            bi-əsi,            *Kolja*            j̄j̄u-xə-ni.  
no            that    PN            be-NEG.IMP    PN            come.back-PTCP.PERF-3SG

特に対比焦点を示す明示的な形式は現れなかった。ただし、コンサルタントはロシア語の形式に対してかなり忠実に訳そうとする傾向があり、媒介言語のロシア語の影響を強く受けていることを考慮する必要がある。このことは以下の全ての例文においても同様である。なお音声的には対比の焦点である「コーリャ」の部分にプロミネンスがかかっている。

なお疑問の文の述語 *j̄j̄u-xə-ni* も、答えの述語の *bi-əsi* も、ともに形動詞であって定動詞 (直説法) ではない。この言語では基本的に 3 人称の述語には定動詞形は使われない (意外性を示す場合を除く、風間 (2010: 240-241) も参照されたい)。

[2] 「誰が来た (の) ?」「サーシャが来たよ。」【WH焦点 (主語)・WH応答焦点 (主語)】

[Кто пришёл? - Саша.]

ui	ji-či-ni?	Sasha	(ji-či-ni).
who	come-PTCP.PERF-3SG	PN	come-PTCP.PERF-3SG

このような場合に応答焦点の名詞のみで答えることも可能であることが分かる。

[3] 「サーシャの方が大きいんじゃないの?」「いや、サーシャじゃなくて、コーリヤの方が大きいんだよ。」【YesNo疑問・形容詞述語応答焦点】(サーシャとコーリヤの背について話している状況で)

[Разве Саша не выше? - Нет, Коля выше Саша.]

Sasha	gogda-laa	bi-əsi?	
PN	tall-COMPR	be-NEG.IMPF	
abaa,	Kolja	gogda-laa	bi-i.
no	PN	tall-COMPR	be-PTCP.IMPF

このような比較級の形容詞が用いられる場合、コピュラ (bi-i) が必要とされるようだ。

[4] [電話で]「どうした (の) ?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」【文焦点 (自動詞文)】

[По телефону: Что случилось? - Эм, только что пришёл посетитель.]

хат	o-či-ni.	nar	ji-či-ni.
what	become-PTCP.PERF-3SG	person	come-PTCP.PERF-3SG

より特定性の低い人物、背景化したい人物を示す時に、多くこの nar 「人」が用いられる。

[5] 「あの子供がコーリヤを叩いたんだって!?!」「いや、コーリヤじゃなくて、サーシャを叩いたんだよ。」【対比焦点 (目的語)】

[Этот ребёнок побил Колю?! - Нет, он побил не Колю, а Сашу.]

tai	naonjokaan	Kolja-wa	toikaaj-ki-ni?
that	boy	PN-ACC	hit-PTCP.PERF-3SG

abaa,        ŋoani        *Kolja*-wa    əčia        toikaan-da,  
no            (s)he        PN-ACC        NEGPERF    hit-INF

*Sasha*-wa    toikaan-ki-ni.  
PN-ACC        hit-PTCP.PERF-3SG

ちなみにこのような過去の否定文で用いられる əčia は、もはや人称等で変化する力をもち、否定の小詞として扱われている。他のツングースを見れば、これがかつての否定動詞の一つの変化形に遡ることがわかる。

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う (の) ?」「(私は) 青い袋を買うよ。」【対比焦点 (目的語, 特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)】

[Пакеты есть и красные и синие, ты какой возьмёшь? - Я возьму синий.]

səəgʲən    i        ŋoŋɡran    paketa-sal        bi-i,  
red        and    blue        bag-PL            be-PTCP.IMPF

sii    { xawoi-wa /    xooni        { bi-i-wə        / bi-i        boiko-ko-wa } }  
you    which-ACC/    how            be-PTCP.IMPF-ACC / be-PTCP.IMPF    color-PROP-ACC

gələ-i-si?  
want-PTCP.IMPF-2SG

mii    ŋoŋɡram-ba        gələ-i-ji.  
I        blue-ACC            want-PTCP.IMPF-1SG

答えの文に見られるように、形容詞「青い」がそのまま目的語となる場合には対格が必須である。なおツングース諸語をはじめアルタイ諸言語では形容詞意味の語は形態的にほとんど名詞と同じようにふるまう。

[7] 「サーシャはどうした?」「サーシャは朝からどっかへでかけたよ。」【述語焦点】(例えば、朝少し遅く起きて来たサーシャの父親が、姿の見えないサーシャについて母親に尋ねている場面で)

[Где Саша? - Он куда-то ушёл ещё утром.]

*Sasha*        xai-do        bi-i-ni?  
PN            what-DAT    be-PTCP.IMPF-3SG

ňoamɪ	čimɪ	ərdə	xaosɪ	ənə-xə-ni=us.
(s)he	morning	early	where.to	go-PTCP.IMP-3SG=Q

文末の疑問表示の付属語 =os / =us は、一般的な疑問文の標識ではなく、自問自答などを示す。ここでは他者に向かった発話に現れているが、やはり話し手がそのことについての情報を把握していないことを示している。ナーナイ語の付属語に関しては、風間 (2007a) も参照されたい。

[8] 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

【WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)】

[Кого побил этот ребёнок? - Он побил своего младшего брата.]

əi	piktə	ui-wə	toikaŋ-ki-ni?
this	child	who-ACC	hit-PTCP.PERF-3SG

ňoamɪ	nəu-ji	toikaŋ-ki-ni.
(s)he	younger.brother-REF.SG	hit-PTCP.PERF-3SG

[9] [電話で]「どうした (の) ?」「うん、サーシャが (自分の) 弟を叩いたんだ。」

【文焦点 (他動詞文)】(例えば、電話の向こうで子供の泣き声起きたのを聞いての発話)

[По телефону: Что случилось? - Эм, Саша побил своего младшего брата.]

xaɪ	o-čɪ-ni?
what	become-PTCP.PERF-3SG

<i>Sasha</i>	(mənə)	nəu-ji	toikaŋ-ki-ni.
PN	oneself	younger.brother-REF.SG	hit-PTCP.PERF-3SG

疑問文の o-čɪ-ni はもっぱらこの形をとる。

[10] 「あのケーキ、どうした?」「ああ、(あれは) 一郎が食べちゃったよ。」

【目的語主題化, 主題 (目的語) の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

[Что случилось с тем тортом? - А, его съел Саша.]

{	xaosɪ	ənə-xə-ni,	/	xoonɪ	ta-xa-ni, }
	where.to	go-PTCP.PERF-3SG	/	how	do-PTCP.PERF-3SG

əi-du      bi-čin      *torto?*  
 this-DAT    be-PTCP.PERF    cake

čawa      *Sasha*      sia-xa-ni.  
 that.ACC    PN            eat-PTCP.PERF-3SG

特集のテーマとは関係のない問題だが、無生物である *torto* 「ケーキ」に ənə-「行く」を用いていることは興味深い。日本語でも、「カギが見当たらないわ、どこへ行っちゃったのかしら」などと言う。ロシア語の文とは全く違う表現になっているので、ロシア語の影響でもない。この場合、ロシア語に沿った表現はむしろこの言語では難しいと思われる。日本語の「どうした？」に近い表現も可能である。ロシア語とは違い、что「何」ではなく、*torto* 「ケーキ」が主語になっている点も日本語と同じである。ただし語順は主題であり主語でもあるケーキを後置し、疑問詞を含む述語を前に持って来ている。これはロシア語の影響であるとも考えられよう。答えの文では、旧情報の *torto* 「ケーキ」は文頭に現れ、焦点である主語は動詞の直前位置に現れている。

[11] 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」【分裂文】

[Я вчера в магазине купил эту книгу.]

(a)    mii    əi    darsa-wa    čisəniə    *magazin-do*    ga-čim-bi.  
       I    this    book-ACC    yesterday    shop-DAT            take-PTCP.PERF-1SG

(b)    čisəniə    mii    *magazin-do*    ga-čim-bi(=tani),            əi    darsa.  
       yesterday    I    shop-DAT            take-PTCP.PERF-1SG=TOP            this    book

(a) は最初にコンサルタントが答えた文であり、(b) は筆者が作例しコンサルタントが問題ない、と判断した文である。(a) は単純な動詞文であり、(b) は形動詞節を主語にした名詞述語文、いわゆる分裂文である。グロスで主題標示とした =tani / =tani はあってもなくてもよいとのことであった。=tani / =tani は日本語のハほど頻繁には現れないが、主題／対比の機能を持ち、日本語のハにも似た性格を示す (風間 (2007a) も参照されたい)。

(a) の文において、焦点となっている əi darsawa 「この本を」はプロミネンスを伴って発話される。位置は動詞直前の位置ではなく、主語の次の位置に現れた。ロシア語の文を見る限り (ロシア語では焦点／新情報は文末に来るため)、このことはロシア語の影響とは考えられない。(b) のように現在・肯定の場合、この言語ではコピュラは用いられない。

なお媒介言語のロシア語の文は、そもそも分裂文にはなっていない。ロシア語では豊富な語形変化が自由な語順を可能にしているため、プロミネンスも併用することにより、分

裂文を作る必要がなく、上記のような単純な構造の文によって英語の分裂文が示すような情報構造を示すことができるのだと考えられる。

[12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」【措定文 主題（名詞述語文の主語）の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

[Тот человек - учитель. Он работает в этой школе уже 3 года.]

əi nai aloosimʲɪ.  
this person teacher

ŋoanɪ əi shkola-do ɪlan {aɪɾanɪ-a / aɪɾanɪ-do }jɔbo-i-nɪ.  
(s)he this school-DAT three year-ACC / year-DAT work-PTCP.IMP.IMP.3SG

上述したようにこの言語は現在・肯定ではコピュラを用いない。前の文の主題を継承する場合には、代名詞 ŋoanɪ を用いている。ただし、この代名詞の使用は、ロシア語からの影響によって拡張されてきたものと考えられ、以前はこの代名詞は排外的3人称 (obviative) を示すものであった (風間 (2007b) を参照されたい)。

[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」【倒置指定文】

[Его отец - вон тот человек.]

ŋoanɪ amɪ-nɪ təi nai.  
(s)he father-3SG that person

[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」【指定文】

[Тот человек - его отец.]

təi nai ŋoanɪ amɪ-nɪ.  
that person (s)he father-3SG

[15] 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」【定義文】

[Послезавтра - это следующий день после завтрашнего.]

čɪmana čɪa-la-nɪ, čɪmana čɪa-la-nɪ bi-i ini-du.  
tomorrow next-LOC-3SG tomorrow next-LOC-3SG be-PTCP.IMP.IMP. day-DAT

結論から言うと、少なくともこの言語の定義文を調査するためには、このアンケートの文そのものがあまり良くなかったかもしれない。この言語では、「明後日」のことを一次語に拠らず、「明日の次の日 (に)」のように表現する。したがって上記の文を訳そうとする

と、「明日の次の日は明日の次の日だ」のようになってしまいが、実際に得られた上記の文はまさにそのような文である。なかなか理解してもらえず、苦勞した末にこの文を得たが、この言語の定義文のデータとするには残念ながらあまり有効なものとは思われない。練り直したアンケート例文による再度の定義文の聞き出しは今後の課題としたい。

[16] [何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて]「私はコーヒーだ。」【ウナギ文】

["Мне кофе."]

(a)	mindu	koŋe.	(b)	mii	koŋe.
	I.DAT	coffee		I	coffee

(a) はロシア語の直訳というべき文になっている。そこで確認したところ、(b) のような文 (すなわちウナギ文) も問題なく言えるという。

[17] [注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに]「コーヒーは私だ。」【逆行ウナギ文】

["Кому кофе?" "Мне, пожалуйста."]

{	ui-du	koŋe?	/	ui	koŋe? }
	who-DAT	coffee	/	who	coffee

{	əi	koŋe)	mindu.	/	koŋe	mii	gələ-i-ji. }
	this	coffee	I.DAT	/	coffee	I	take-PTCP.IMP.F.1SG

*koŋe	mii.
coffee	I

[16] とは異なり、この[17] では逆行うなぎ文は言えないという。原因はよくわからないが、人称代名詞の主格の形式が、コピュラ文の補語の位置に現れることが難しいのかもしれない。さらに今後の研究を要する。他方、əi koŋe mindu. の応答文では、人称代名詞の与格形はコピュラ文の補語の位置に現れている。もう一つの応答文 koŋe mii gələ-i-ji. では、OSVの語順になっており (すなわち旧情報である目的語が文頭に移動しているとみることができる)、対格接辞がついていないことも興味深い。

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

[Эта новая толстая книга дорогая.]

əi	sikun,	daar	daɾsa	{	xoda-ni	/	tama-ni	}	maŋga.
this	new	big	book		price-3SG	/	price-3SG		hard

ツングース諸語は一般に日本語のトにあたるような（名詞・形容詞の）並列の要素が用いられない。

[19] [砂糖の入れ物を開けて]「あっ、砂糖が無くなっているよ！」【意外性 (mirativity)】

[открыв сахарницу: "О, сахара совсем нет!"]

{	əi=kuči	/	əi	alro-do	}	sɪata	abaa	bi-əsi=kəə.
	this=EMP	/	this	dish-DAT		sugar	nothing	be-NEGIMPF =EMP

bi-əsi=kəə は、いわば日本語における「～ではないか／～じゃないか」のような構成の表現であり、このような意外性の状況で用いられることは納得できる。

=koči / =kuči もまさしくこのような意外性の状況を表現するのに用いられる形式であるのかもしれない。風間 (2007a) では、コーパスより得られた 13,456 例の付属語のうち、=koči / =kuči はたった 3 例しか得られなかったため、それ以上の考察を行わなかった。今回風間 (2000, 2001, 2002, 2005, 2006, 2007c) のテキストを用いてあらためて検索してみたところ、8 例得られたが、全例とも感嘆文とみてよい文であった。そのうち疑問詞を伴う反語の例が 4 例あった。興味深いことに 1 例は上記の bi-əsi=kəə と共起していた。

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！田中君だったな。」【思い出し】

[Я должен был встретиться с кем-то после полудня. Что же это. А, вспомнил! С Сашой.]

mii	obeda	xoʃi-očia-ni	ui-ji=nuu	baači-mča-ji.
I	lunch	finish-TEMP.COND-3SG	who-INS=Q	meet-SUBJ-1SG
əi	xai	(ʃaka)?	ʃooŋgo-xam-bi!,	Sasha-ʃi.
this	what	thing	remember-PTCP.PERF-1SG	PN-INS

-mča / -mčə は仮定法と呼ばれている形式で、もっぱら反実仮定の条件文の主節の動詞に用いられるものとされてきた。しかし上記の文はこれに当てはまらない（反実仮定の文ではない）。（他の言語でもある現象であると思われるが）日本語でも上記のような【思いだし】の文「午後、誰かに会うはずだったたなあ。誰だったたっけ。あっ、そうだ！田中君だっ

たな。」で過去のことでないのに過去形が用いられるが、反実仮想でもやはり過去形が用いられる（例えば「お金があつたら、あの車を買うのになあ」、ただし日本語で過去形が現れるのは従属節の方であるが）。英語の助動詞における過去形が temporal distance を表すといわれていることも上記の思い出しでの過去形と似た現象であると考えられる（査読者の御教示による）。-mča / -mčə の -ča / -čə の部分は被動形動詞 -ča / -čə と関係があり、-m の部分は欲求の形式 -mosi / -musi 「～したい」の -mo / -mu と起源的に関連がある可能性がある（-si / -siの方は状態動詞の未完了形動詞形と同一起源、風間 (2010) も参照されたい）。もしそうだとすれば、このような「誰かに会いたかった、誰かに会うはずだった」のような意味を実現されるのに用いられることも説明がつく。

#### 付記

末筆になるが、丁寧に elicitation につきあって答えて下さったコンサルタントの L. T. Kile 氏に深く感謝申し上げたい。忙しい中、査読をして下さり筆者の拙い誤謬の指摘や貴重なコメントを下さった匿名の査読の先生にも深くお礼申し上げたい。

#### 略号・記号

1, 2, 3: 1 <sup>st</sup> person, 2 <sup>nd</sup> person, 3 <sup>rd</sup> person	PL: plural 複数
ACC: accusative 対格	PN: proper noun 固有名詞
COMPR: comparative 比較級	PROP: proprietive 恒常的所有
DAT: dative 与格	PTCP: participle 形動詞
IMPF: imperfective 未完了	REF: reflexive 再帰
IND: indicative mood 直説法	SG: singular 単数
INF: infinitive 不定形	SIM: simultaneous converb 同時 (副動詞)
INS: instrumental case 道具格	TEMP.COND: temporal-conditional converb 時間的条件 (副動詞)
LOC: locative case 処格	SUBJ: subjunctive mood 接続法
NEG: negative 否定	
PERF: perfective 完了	

#### 参考文献

風間伸次郎. 2000. 『ナーナイの民話と伝説 5』 ツングース言語文化論集 14. 東京：東京外国語大学

- 風間伸次郎. 2001. 『ナーナイの民話と伝説 6』 ツングース言語文化論集 15. 文部省特定領域研究(A) 環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書. A2-005. 吹田：大阪学院大学
- 風間伸次郎. 2002. 『ナーナイの民話と伝説 7』 ツングース言語文化論集 18. 文部省特定領域研究(A) 環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書. A2-020. 吹田：大阪学院大学
- 風間伸次郎. 2005. 『ナーナイの民話と伝説 8』 ツングース言語文化論集 27. 千葉：千葉大学
- 風間伸次郎. 2006. 『ナーナイの民話と伝説 9』 ツングース言語文化論集 32. 千葉：千葉大学
- 風間伸次郎. 2007a. 「ナーナイ語とウデヘ語の付属語について」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(編)『アジア・アフリカの言語と言語学 2』 49-83.
- 風間伸次郎. 2007b. 「ツングース諸語の三人称代名詞について」大東文化大学語学教育研究所(編)『語学教育フォーラム』 13: 173-184.
- 風間伸次郎. 2007c. 『ナーナイの民話と伝説10』 ツングース言語文化論集36. 札幌：北海道大学大学院文学研究科
- 風間伸次郎. 2010. 『ナーナイの民話と伝説 12』 ツングース言語文化論集 48. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

## グイ語<sup>1</sup>

中川 裕

### はじめに

この報告では、2015年12月16日語研定例研究会で配布された「不定表現／情報構造調査例文」に基づき収集した資料を提示する。資料収集は2016年1月1日～2日にボツワナ共和国ハンシー県で実施した<sup>2</sup>。今回の特集で用いられている調査票の最終版(2016年2月16日配布)は、私の資料収集には間に合わなかったため、本報告には最終版で新たに加わった調査項目の回答が欠落している。

この資料欠落以外にも本報告には他の言語に関する報告にはない問題点がある。それは、私の資料収集がグイ語だけを用いた単言語面談調査によることに起因する。グイ語社会では、グイ語の良い話者である中年以上の世代は圧倒的にグイ語単言語話者が多く、私の言語調査は1992年の第1回調査以来ずっと英語やツワナ語の媒介言語を用いず、グイ語を使って行っている。日本語で用意された調査例文の中には、そのグイ語訳が私には容易でないものも含まれた。したがって、面談では、調査票の日本語で書かれた調査例文の文脈(および暫定的グイ語訳案)を私が母語話者にグイ語で示して解説し、グイ語訳文を修正してもらったり、より相応しい表現に置き換えてもらったり、どうしても目指す表現が見つからない場合は、やや異なる文脈で得られる表現を記録したり、という試行錯誤のやり取りを行い、その結果を記録した。調査時間が限られていたこともあり、このようなやり取りの過程で誤解が生じ、調査票の意図に沿わない資料が記録されている可能性がある。従って、今回の特集の他の言語の資料に比べてグイ語資料は信頼性が十分とは言えない。

本報告は、分析は今後の課題として、以上に述べた暫定的収集による例文に語釈と訳を付した資料を提示する。

### 資料

以下の(1)-(20)の通し番号は、調査例文最終版のそれに対応する。使われている略号の意味は次の通り。3: 3rd person, acc: accusative, conj: conjunction, cop: copula, du: dual, f: feminine, gen: genitive, hest: hesternal, hod: hodiernal, intj: interjection, ipfv: imperfective, m: masculine, nom: nominative, pst: past, Q: polar question marker, quot: quotative, refl: reflexive,

<sup>1</sup> コエ・クワディ語族南西カラハリ・コエ語派ガナ語群。ボツワナ共和国ハンシー県・クエネング県で話される。推定話者数は約800人。

<sup>2</sup> 科研費基盤研究B(課題番号:25300029)。

- (1) 「高田が来たの?」「いや高田じゃなくて二郎が来たんだ。」

Takada=m-m kì àà

Takada=3.f.sg.nom-Q hod.pst come

‘Did Takada come (today)?’

ĩĩ?ĩ, cúá Takada=bì kì àà, Jiro=bì jã àà

intj, not Takada=3.m.sg.nom hod.pst come, Jiro=3.m.sg.nom cnj come

‘No, Takada did not come, but Jiro came.’

- (2) 「誰が来たの?」「二郎が来たよ。」

máã=bì kì àà

Who=3.m.sg.nom hod.pst come

‘Who came today?’

Jiro=bì kì àà

Jiro=3.m.sg.nom hod.pst come.

‘Jiro came.’

- Cf. Jiro=m lúi-kĩ=bì kì àà

Jiro=3.m.sg.gen one-focus=3.m.sg.nom hod.pst come

‘Only Jiro came today.’

- (3) 「高田の方が大きいんじゃないの?」「いや、高田じゃなくて、二郎の方が大きいんだ。」

Takada=m-m Jiro=m kà !áo

Takada=3.m.sg.gen-Q Jiro=3.m.sg.gen than tall

‘Is Takada taller than Jiro?’

ĩĩ?ĩ, Jiro=bì Takada=m kà !áo

intj, Jiro=3.m.sg.nom Takada=3.m.sg.gen than tall

‘No, Jiro is taller than Takada.’

- Cf. ĩĩ?ĩ, Takada-ɣà=tsèrà kà Jiro=bì !áo

intj, Takada-associative=3.m.du.gen than Jiro=3.m.sg.nom tall

‘No, Jiro is taller between Takada and Jiro.’

- (4) 「(電話で) どうしたの?」「うん今お客さんが来たんだ。」

ĩĩɣò=sì ts’áũ-sì

what=3.f.sg.nom make-refl

‘What’s happened?’

k<sup>h</sup>óè=bì ɲĩ àà  
 person=3.m.sg.nom just.now come  
 ‘A man just came.’

Cf. lqχ’áè-kò=bì ɲĩ àà  
 visit-person=3.m.sg.nom just.now come  
 ‘A visitor just came.’

(5) 文脈 「あの子供が二郎を叩いたのか？」 「いや、二郎じゃなくて高田を叩いた。」

?ā=m lúá=m-m kì Jiro=mà lqχ’ám  
 that=3.m.sg.gen child=3.m.sg.gen-Q hod.pst Jiro=3.m.sg.acc hit  
 ‘Did that boy hit Jiro (today)?’  
 iĩ?ĩ, ?àbì kì cúá Jiro=mà lqχ’ám jā Takada=mà lqχ’ám.  
 no, he hod.pst not Jiro=3.m.sg.acc hit but Takada=3.m.sg.acc hit  
 ‘No, he didn’t hit Jiro but hit Takada.’

(6) (7) No data.

(8) 「(あの子供は) 誰を叩いたの？」 「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

?ā=m lúá=bì kì máã=mà lqχ’ám  
 that=3.m.sg.gen child=3.m.sg.nom hod.pst who=3.m.sg.acc hit  
 ‘Whom did that boy hit?’  
 ?àbì kì ?àm jibāχò(-kĩ)=mà lqχ’ám.  
 he hod.pst his brother(-focus)=3.m.sg.acc hit.  
 ‘He hit his brother.’

Cf. ?àbì kì ?àm kà jibāsi=mà lqχ’ám.  
 he hod.pst his of brother=3.m.sg.acc hit  
 ‘He hit his brother.’

(9) 「(電話で) どうしたの？」 「うん、二郎が (自分の) 弟を叩いたんだ。」

iĩχò=sì ts’áũ-sì  
 what=3.f.sg.nom make-refl  
 ‘What happened?’  
 Jiro=bì ?àm jibōχò=mà lqχ’ám  
 Jiro=3.m.sg.nom his brother=3.m.sg.acc hit

‘Jiro has hit his brother.’

- (10) 「あのケーキどうした?」「ああ、(あれは) 二郎が食べちゃったよ。」

tsi qχ’ō máã cà ?ā=sì páré=sà hī

you pst how imitative that=3.f.sg.gen cake=3.f.sg.acc do

‘How did you do with the cake?’

Jiro=bì qχ’ō ?ēsà #?úú.

Jiro=3.m.sg.nom pst it.f.sg.acc eat

‘Jiro ate it.’

- (11) 「私が昨日店から買ってきたのはこのオレンジだ。」

ŋlì glúà kà cíā c<sup>h</sup>ū ?ā bentere=sì wà l?áì jã àà=sà ?à

this orange which me hest.pst that shop=3.f.sg.gen in buy and come=3.f.sg.acc cop

‘This is the orange which I bought in that shop.’

- Cf. cìrè c<sup>h</sup>ū ŋlì=sì glúà=sà ?ā bentere=sì wà l?áì jã àà

I hest.pst this=3.f.sg.gen orange=3.f.sg.acc that shop=3.f.sg.gen in buy and come

‘I bought this orange at that shop and came back yesterday.’

- Cf. ŋlì glúà=sà ?à

this orange=3.f.sg.acc cop

‘This is an orange.’

- (12) 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

?ā=m k<sup>h</sup>óè=bì títsèrà jã ŋlì=sì kúlè=sì wà ŋ!ūnā kúrī=dzì kà tséé

that=3.m.sg.gen person=3.m.sg.nom teacher cnj this=3.f.sg.gen school=3.f.sg.gen in

three year=3.f.pl.gen for work

‘That person is a teacher and works at this school for three years.’

- (13) No data

- (14) 「あの人が彼女のお父さんだ (尋ねられない文脈で「あれが彼女の父」という).」

?áā=m k<sup>h</sup>óè=bì ?ī, ?ēsì kà lūū=mà

that=3.m.sg.gen person=3.m.sg.nom cop, her.gen of parent=3.m.sg.acc

‘(It) is that man, her father.’

- Cf. máã ?ēsì kà lūū=mà ?à

which her.gen of parent=3.m.sg.acc cop

‘Which one is her father?’

(15) 「明後日とは明日の次の日のことだ。」

a. lhúú-lám cà míí=sì cì !?úū-jì=m̄n lám=m̄n ήórōʔò-jì=m̄n lám=mà ὴlàē  
 after.tomorrow-day quot say=3.f.sg.nom ipfv tomorrow-for=3.m.sg.gen  
 day=3.m.sg.gen back-for day=3.m.sg.acc mean

‘Saying “lhúú-lám” means the day for tomorrow’s back.’

b. lhúú-lám=bi !?úū-jì=m̄n lám=m̄n ήórōʔò-jì=mà (?à)  
 after.tomorrow-day=3.m.sg.nom tomorrow-for=3.m.sg.gen day=3.m.sg.gen  
 back-for=3.m.sg.gen acc (cop)

‘lhúú-lám is the day for tomorrow’s back.’

(17) (注文した数人分のコーヒーが運ばれてきて) 「どなたがお茶ですか?」「お茶は私だ」

máã téè=m̄n-jì=mà ?à  
 who tea=3.m.sg.gen-for=3.m.sg.gen acc cop  
 ‘Who is for coffee? (Who will have coffee?)’

Cf. ὴlíí cía-kī=dà ?à  
 this me-focus=me cop  
 ‘Here it’s me.’

(18) 「その新しくて厚い本は (値段が) 高い」

?ā ʔáǰǰà kà qábā ?à g#íí=sì dúrú  
 that book which new cop thick==3.f.sg.nom expensive  
 ‘This/that new thick book is expensive.’

ʔáǰǰà kà ?ā qábā ?à g#íí=sì dúrú  
 book which that new cop thick=3.f.sg.nom expensive  
 ‘This/that new thick book is expensive.’

Cf. ὴlí=sì ʔáǰǰà=sì dúrú  
 this=3.f.sg.gen paper=3.f.sg.nom expensive  
 ‘This book is expensive.’

Cf. ʔáǰǰà kà ὴlí=sì dúrú  
 book which this=3.f.sg.nom expensive  
 ‘This book is expensive.’

Cf. ὴlí ʔáǰǰà kà ʔgíí=sì dúrú  
 this book which thick=3.f.sg.nom expensive  
 ‘This book which is thick is expensive.’

Cf.       ʔā ʔχájǎ kà qábā=sì dúrí  
          \*qábā sì ʔχájǎ kà g#ī sì duru.  
          \*ŋì sì ʔχájǎ kà g#ī sì duru.

(19)文脈：入れ物に砂糖を入れておいた。開けると砂糖がない。

- a.       mènā súúkùrì=sì háā-cèè  
          intj sugar=3.f.sg.nom exist-not  
          ‘Oh there is no sugar!’
- b.       ŋlà̀m súúkùrì=sì háā-cèè  
          intj sugar=3.f.sg.nom exist-not

(20) No data.

## 《執筆者一覧》

- 風間伸次郎 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授  
秋廣尚恵 東京外国語大学大学院総合国際学研究院講師  
川上茂信 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授  
チャビ・アラストゥルエイ  
東京外国語大学特任講師  
成田 節 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授  
坂田晴奈 フェリス女学院大学非常勤講師  
大島 一 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員,  
本学非常勤講師  
奥 真裕 東京外国語大学大学院博士後期課程  
長渡陽一 東京外国語大学大学院総合国際学研究院特別研究員, 本学非常勤講師  
吉枝聡子 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授  
萬宮健策 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授  
トゥザ ライン 東京外国語大学大学院博士後期課程  
岡野賢二 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授  
大西秀幸 東京外国語大学大学院博士後期課程  
鈴木玲子 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授  
上田広美 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授  
野元裕樹 東京外国語大学大学院総合国際学研究院講師  
アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー  
マレーシア国民大学社会科学人文学部語学教師  
降幡正志 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授  
加藤晴子 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授  
黒島規史 東京外国語大学大学院博士後期課程  
崔 正熙 東京外国語大学大学院博士後期課程  
山田洋平 東京外国語大学大学院博士後期課程  
中川 裕 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

(掲載順)

# Journal of the Institute of Language Research

---

No. 21

2016

---

## Articles

On the phonetic correspondence of \*-ks- in Tungusic languages ..... Shinjiro Kazama 1

## Special Issue : “Information structure and nominal predicate sentences”

Foreword ..... Shinjiro Kazama 17

### Data

French ..... Hisae Akihiro 45

Spanish ..... Shigenobu Kawakami, Txabi Alastruey 59

German ..... Takashi Narita 67

Finnish ..... Haruna Sakata 77

Hungarian ..... Hajime Oshima 91

Turkmen ..... Masahiro Oku 101

Arabic ..... Yoichi Nagato 107

Persian ..... Satoko Yoshie 117

Urdu ..... Kensaku Mamiya 125

Burmese ..... Thuzar Hlaing, Kenji Okano 133

Rawang ..... Hideyuki Onishi 141

Lao ..... Reiko Suzuki 159

Khmer ..... Hiromi Ueda 165

Malay ..... Hiroki Nomoto, Aznur Aisyah Abdullah 171

Indonesian ..... Masashi Furihata 191

Chinese ..... Haruko Kato 205

Korean ..... Norifumi Kuroshima, Jeonghee Choi 213

Mongolian ..... Yohei Yamada 227

Dagur ..... Yohei Yamada 237

Solon ..... Shinjiro Kazama 249

Nanay ..... Shinjiro Kazama 259

Gui ..... Hiroshi Nakagawa 269

**Research Activities** ..... 275

Journal  
of  
the Institute of Language Research

21

2016

The Institute of Language Research  
Tokyo University of Foreign Studies